福岡市博多区

比 恵 遺 跡

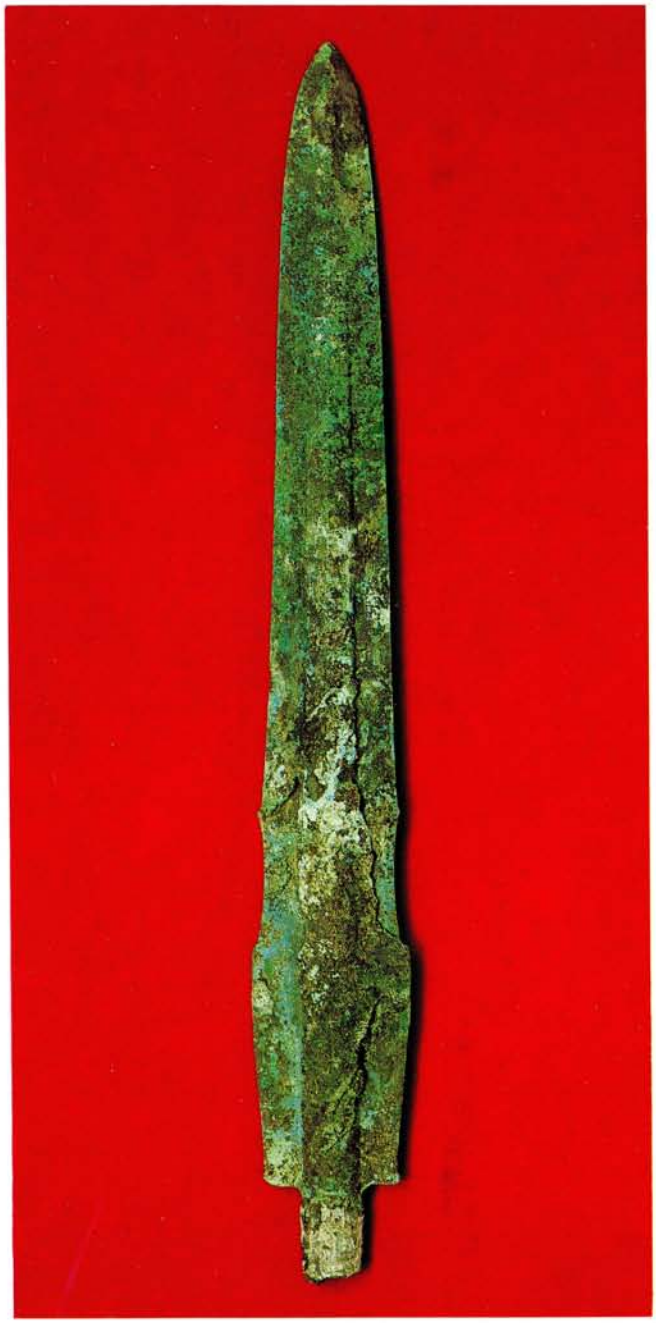
— 第６次調査・遺物編 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集

1986

福 岡 市 教 育 委 員 会

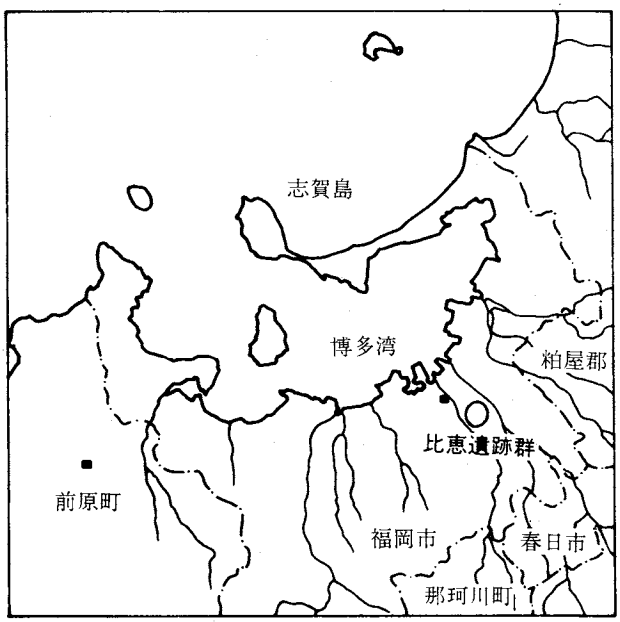
巻頭図版



SK28甕棺副葬銅剣

比恵遺跡

— 第6次調査・遺物編 —



遺跡登録番号　8228

遺跡略号　HIE

1986

福岡市教育委員会

序　文

九州の門戸博多駅の南方にひろがる那珂丘陵では近来都市化に伴う老朽家屋の建替え・高層化が急速に進み、これに従って消滅をまぬがれない遺跡も数多くあります。

本書は昭和57年5月から9月まで発掘調査を実施した比恵遺跡の出土遺物調査報告であります。今回報告では膨大な出土品の全部を収録することは困難なところですが、この報告が埋蔵文化財への更なる御理解と学術的にも有効に活用でき得れば幸甚に存じます。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　佐藤善郎

例　言

□本報告書は1982年5月～9月に発掘調査を実施した市営小林町第1住宅の建替えに伴う福岡市博多区比恵遺跡群の第6次発掘調査報告（遺物編）である。

□遺構は呼称を記号化し、甕棺墓→SK、土壙→SX、竪穴住居址→SC、掘立柱建物→SB、井戸址→SE、土壙→SH、溝→SDとしたが、第1号古墳はこのまま呼んだ。

□遺物の実測は、浜石哲也、横山邦継が中心に行ない、他に林田憲三（中村学園短期大学）、岩本陽児（九州大学）、田中稿二（明治大学）、棚田昭仁（別府大学）、宮原晋一（奈良県教育委員会）、赤司善彦（九州歴史資料館）、岡部裕俊（前原町教育委員会）、山口譲治（福岡市教育委員会）の協力を得た。また製図の一部は村上かをりが行なった。

□遺物の撮影は井戸址、土壙のものを浜石・林田、甕棺ほかを白石公高氏によった。

□本書の執筆は井戸址、土壙を浜石がおこない、他は横山が分担した。ただし、井戸址・土壙の土製品・石器・木器・鉄製品の項は山口が行なった。

□本書の編集は浜石との協議のもとに横山が行なった。

本文目次

1　はじめに……1
2　これまでの調査と第6次調査概要……1
3　出土遺物……3
(1)　甕棺……3
(2)　土壙墓出土遺物……36
(3)　竪穴住居址出土遺物……37
(4)　掘立柱建物出土遺物……40
(5)　井戸址出土遺物……43
(6)　土壙出土遺物……95
(7)　溝状遺構出土遺物……99
(8)　方形周溝遺構出土遺物……101
(9)　第1号古墳出土遺物……102
4　おわりに……111

図版目次

PL. 1　甕棺墓地全景　上(東から)
　　下(北から)
PL. 2　井戸址全景(南から)
　　ＳＸ03土壙墓(西から)
PL. 3　ＳＸ01・02甕棺
　　1　ＳＫ01甕棺上棺
　　2　ＳＫ01甕棺下棺
　　3　ＳＫ02甕棺上棺
　　4　ＳＫ02甕棺下棺
PL. 4　ＳＫ５・８・９・10甕棺
　　1　ＳＫ05甕棺上棺
　　2　ＳＫ08甕棺下棺
　　3　ＳＫ09甕棺上棺
　　4　ＳＫ10甕棺
PL. 5　ＳＫ12・13・14甕棺
　　1　ＳＫ12甕棺
　　2　ＳＫ13甕棺下棺
　　3　ＳＫ14甕棺
PL. 6　ＳＫ18・20・21甕棺
　　1　ＳＫ18甕棺下棺
　　2　ＳＫ20甕棺
　　3　ＳＫ21甕棺下棺
PL. 7　ＳＫ22・27甕棺
　　1　ＳＫ22甕棺上棺
　　2　ＳＫ22甕棺下棺
　　3　ＳＫ27甕棺
PL. 8　ＳＫ25・28・29甕棺
　　1　ＳＫ25甕棺下棺
　　2　ＳＫ29甕棺
　　3　ＳＫ28甕棺上棺

4　ＳＫ28甕棺下棺
PL. 9　ＳＫ30・36・37甕棺
1　ＳＫ30甕棺
2　ＳＫ36甕棺下棺
3　ＳＫ37甕棺(単棺)
PL. 10　ＳＫ40・41甕棺
1　ＳＫ40甕棺上棺
2　ＳＫ40甕棺下棺
3　ＳＫ41甕棺
PL. 11　ＳＫ42・43甕棺
1　ＳＫ43甕棺上棺
2　ＳＫ43甕棺下棺
3　ＳＫ42甕棺
PL. 12　第１号古墳出土土器ほか
PL. 13　第１号古墳出土土器
PL. 14　第１号古墳出土石器・土製品・玉類
PL. 15　井戸址出土土器Ⅰ
PL. 16　井戸址出土土器Ⅱ
PL. 17　井戸址出土土器Ⅲ
PL. 18　井戸址出土土器Ⅳ
PL. 19　井戸址出土土器Ⅴ
PL. 20　井戸址出土土器Ⅵ
PL. 21　井戸址出土土器Ⅶ
PL. 22　井戸址出土土器Ⅷ
PL. 23　井戸址出土土器Ⅸ
PL. 24　井戸址出土土器Ⅹ
PL. 25　井戸址出土土器Ⅺ
PL. 26　井戸址出土土器Ⅻ
PL. 27　井戸址出土土器Ⅷ
PL. 28　井戸址出土木器Ⅰ
PL. 29　井戸址出土木器Ⅱ
PL. 30　井戸址出土木器Ⅲ

挿図目次

Fig. 1　比恵・遺跡群第６次調査遺構全体図(1/200)（折込み）
Fig. 2　ＳＫ01甕棺実測図(1/12)…… 4
Fig. 3　ＳＫ02甕棺実測図(1/12)…… 5
Fig. 4　ＳＫ05甕棺実測図(1/12)…… 6
Fig. 5　ＳＫ07・08甕棺実測図(1/12)…… 7
Fig. 6　ＳＫ09甕棺実測図(1/12)…… 8
Fig. 7　ＳＫ10・12甕棺実測図(1/12)…… 9
Fig. 8　ＳＫ13甕棺実測図(1/12)……10
Fig. 9　ＳＫ14・15・16甕棺実測図(1/12)……11
Fig. 10　ＳＫ17甕棺実測図(1/12)……12
Fig. 11　ＳＫ18甕棺実測図(1/12)……13
Fig. 12　ＳＫ20甕棺実測図(1/12)……14
Fig. 13　ＳＫ21甕棺実測図(1/12)……15
Fig. 14　ＳＫ22甕棺実測図(1/12)……16
Fig. 15　ＳＫ23甕棺実測図(1/12)……17
Fig. 16　ＳＫ25甕棺実測図(1/12)……18
Fig. 17　ＳＫ28甕棺実測図(1/12)……19
Fig. 18　ＳＫ29・30甕棺実測図(1/12)……20
Fig. 19　ＳＫ31甕棺実測図(1/12)……21
Fig. 20　ＳＫ32・33甕棺実測図(1/12)……22
Fig. 21　ＳＫ34・36甕棺実測図(1/12)……23
Fig. 22　ＳＫ37甕棺実測図(1/12)……24
Fig. 23　ＳＫ35甕棺実測図(1/12)……25
Fig. 24　ＳＫ39・40甕棺実測図(1/12)……26
Fig. 25　ＳＫ41・42甕棺実測図(1/12)……27
Fig. 26　ＳＫ43甕棺実測図(1/12)……29
Fig. 27　ＳＫ44甕棺実測図(1/12)……30
Fig. 28　ＳＫ03・04甕棺実測図(1/6)……31
Fig. 29　ＳＫ06甕棺実測図(1/6)……32
Fig. 30　ＳＫ26・27甕棺実測図(1/6)……33

Fig. 31　ＳＫ28出土銅剣実測図(1/2) ……34
Fig. 32　土壙出土遺物実測図(1/4) ……36
Fig. 33　出土玉類実測図(1/1) ……37
Fig. 34　竪穴住居址出土遺物実測図(1/4、1/2)……39
Fig. 35　掘立柱建物出土遺物実測図(1/4) ……41
Fig. 36　井戸址分布図(1/400) ……43
Fig. 37　ＳＥ01・02・03出土土器実測図(1/4) ……44
Fig. 38　ＳＥ04出土土器実測図Ⅰ(1/4) ……45
Fig. 39　ＳＥ04出土土器実測図Ⅱ(1/4) ……46
Fig. 40　ＳＥ05・06出土土器実測図(1/4) ……48
Fig. 41　ＳＥ07出土土器実測図(1/4) ……49
Fig. 42　ＳＥ09出土土器実測図(1/4) ……50
Fig. 43　ＳＥ10出土土器実測図(1/4) ……51
Fig. 44　ＳＥ12・14出土土器実測図(1/4) ……52
Fig. 45　ＳＥ16出土土器実測図(1/4) ……54
Fig. 46　ＳＥ17出土土器実測図Ⅰ(1/4) ……55
Fig. 47　ＳＥ17出土土器実測図　Ⅱ(1/4) ……57
Fig. 48　ＳＥ17出土土器実測図　Ⅲ(1/4) ……58
Fig. 49　ＳＥ18・19出土土器実測図(1/4) ……59
Fig. 50　ＳＥ20出土土器実測図Ⅰ(1/4) ……60
Fig. 51　ＳＥ20出土土器実測図Ⅱ(1/4) ……61
Fig. 52　ＳＥ21・22出土土器実測図(1/4) ……63
Fig. 53　ＳＥ23・25・26・27・28出土土器実測図(1/4) ……65
Fig. 54　ＳＥ29・30出土土器実測図(1/4) ……66
Fig. 55　ＳＥ31出土土器実測図(1/4) ……68
Fig. 56　ＳＥ32・33・34出土土器実測図(1/4) ……69
Fig. 57　ＳＥ35・36出土土器実測図(1/4) ……71
Fig. 58　ＳＥ37・38出土土器実測図(1/4) ……73
Fig. 59　ＳＥ39・40出土土器実測図(1/4) ……75
Fig. 60　ＳＥ42出土土器実測図(1/4) ……76
Fig. 61　ＳＥ43・44出土土器実測図(1/4) ……77
Fig. 62　ＳＥ45出土土器実測図(1/4) ……78
Fig. 63　ＳＥ46出土土器実測図Ⅰ(1/4) ……80

Fig. 64　ＳＥ46出土土器実測図II (1/4) ……81
Fig. 65　ＳＥ47・48出土土器実測図(1/4) ……82
Fig. 66　ＳＥ49出土土器実測図(1/4) ……83
Fig. 67　ＳＥ50出土土器実測図(1/4) ……84
Fig. 68　井戸址出土土製品・石器実測図(1/2、1/4)……85
Fig. 69　井戸址出土木器実測図Ⅰ(1/4) ……86
Fig. 70　井戸址出土木器実測図II (1/4) ……87
Fig. 71　井戸址出土木器実測図III (1/4) ……88
Fig. 72　井戸址出土木器実測図Ⅳ(1/4) ……90
Fig. 73　井戸址出土木器実測図Ⅴ(1/8) ……91
Fig. 74　井戸址出土木器実測図Ⅵ(1/4) ……92
Fig. 75　ＳＨ05・10・11出土土器実測図(1/4) ……96
Fig. 76　ＳＨ12・14・15出土土器実測図(1/4) ……97
Fig. 77　土壙出土土器製品・石器・石器鉄器実測図(1/4) ……98
Fig. 78　溝状遺構出土遺物実測図(1/4)……100
Fig. 79　方形周溝遺構出土遺物実測図(1/4)……101
Fig. 80　第１号古墳出土遺物実測図１(1/4)……103
Fig. 81　第１号古墳出土遺物実測図２(1/4)……104
Fig. 82　第１号古墳出土遺物実測図３(1/2)……107
Fig. 83　第１号古墳出土遺物実測図４(1/2)……108
Fig. 84　第１号古墳出土遺物実測図５(1/4)……109

表目次

Tab.1　甕棺墓一覧表……35
Tab.2　第６次調査出土木製品一覧表……93
Tab.3　井戸址一覧表……94

1．は　じ　め　に

1982年5～9月にかけて発掘調査を実施した比恵遺跡群第6次調査は1983年の報告書（福岡市博多区「比恵遺跡」－第6次調査・遺構編－、『福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集』福岡市教育委員会　1983年）の刊行後に出土遺物の詳細調査に這入り、今回の遺物編追加となった。調査は以下の構成でおこなった。

調査担当　浜石哲也、横山邦継

調査補助　林田憲三・岩本陽児・池田裕司・尹　煥(九州大学)、田中稿二(明治大学)、棚田昭仁・高橋健治(別府大学)、中登志之・白石公高（写真）

整理補助　稲吉尚子、河鍋光子、北村信子、木村絹子、取違ムツ子、野邑久子、野村弥生、山崎恵美子、雪吉良子（1982年度)、小倉隆、栗田雅之、小森佐和子（1985年）

2．これまでの調査と第6次調査概要

第1次調査（1934～35年、鏡山猛氏等による）

比恵地区の土地区画整理事業に伴っての調査である。検出された主要な遺構は『環溝住居址』4基（第1～4号）以上、弥生時代中期甕棺墓12基などである。このうち第1環溝は一辺30*m*程度の長方形をなし、内部には時期的に重複のある竪穴5基や井戸址2基、土壙などがあり、溝外北側に6基の甕棺墓が検出され、弥生時代集落と墓地の在り方のパターンとして長く意識されることになった（註)。

（註）鏡山猛「原始日本民族の集落形式」　『日本諸学振興委員会研究報告第11篇』1940年
鏡山猛「日本原始集落の研究」　『歴史第16巻2号』1940年
鏡山猛「北九州の古代遺跡－墳墓・集落・都城－」『日本歴史新書』至文堂1956年
鏡山猛「環溝住居址小論（一～四)」『史淵67・68・74・78』九州大学 1956～1959年
福岡市役所「福岡」 1950年

第2次調査（1952年、森貞次郎氏等による）

市営小林町第1住宅の建設進行に伴って調査された。主要な検出遺構は環溝遺構1基、土壙3基、柱穴群および甕棺墓地（中期後半～後期初頭に至る18基以上）である。環溝は1辺10*m*をはかり、北側にブリッジをもつ。溝中から弥生中期中頃以降の土器類が多量に出土したが、土師器類は含まれなかった。第2次調査成果は当時の記録類を第6次調査報告書遺構編に抄録した（註)。

（註）「比恵遺跡－第6次調査・遺構編－」　『福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集』1983年

第3次調査（1966年、地元研究者中原志外顕氏らによる）

県道博多駅－竹下線拡幅工事に伴う調査である。調査は断続的に行われ、縄文時代晩期終末

～弥生時代前期の袋状貯蔵穴８基、中期甕棺墓２基、溝遺構などが確認された。袋状貯蔵穴のうち１・３・４・６・７・８号では遺存は良くないが、夜臼式土器と板付Ⅰ式土器の共存が知られた（註）。

（註）筑紫野古代史研究会『見捨てられた春住遺跡』『筑紫野史学研究会会報第２集』1972年

第４次調査（1979～80年調査）

那珂丘陵北端部にあり、丘陵部で弥生時代前期～中期貯蔵穴６基、中期後半甕棺墓地（土器祭祀を伴う12基）と古墳時代前～中期の溝遺構を検出した。また調査区西側は谷部となり、泥炭質土層から弥生前期の農具類が多く出土した（註）。

（註）吉岡完祐「瑞穂・福岡市比恵台地遺跡」日本住宅公団1980年

第５次調査（1981年・市教育委員会調査）

第６次調査区の西側約70mの地点にあたり、検出遺構は弥生時代中期～古墳時代前期に至る竪穴住居址42軒、弥生時代掘立柱建物23棟以上、弥生中期後半代井戸址３基などである。

第６次調査（1982年5月6日～9月5日、約3000m²、市教育委員会調査）

対象地は旧市営住宅建設に伴う諸施設による撹乱や旧水田化事業による削平が多大であった。主要検出遺構は西端部南北方向に弥生時代中期前葉～後期初頭甕棺墓44基・土壙墓７基（ＳＸ01～07）からなる墓地と生活遺構である。生活遺構は弥生時代中期後半～古墳時代前期に亘り、竪穴住居址９軒（ＳＣ01～09）、掘立柱建物22棟（ＳＢ01～22）、井戸址50基（ＳＥ01～50）、土壙15基（ＳＨ01～15）、溝状遺構9条（ＳＤ01～08, ＳＸ08）などである。このうち中期前葉にあたるＳＫ28甕棺墓には国産絹布を巻いた細形銅剣１振の副葬があった。また井戸址・掘立柱建物群は調査区東側に集中して分布し（Fig８・１）、時期的には井戸址が弥生時代後期を中心として、掘立柱建物群はこれより若干下る時期の所産である。遺物では住居址・柱穴埋土内よりガラス小玉・碧玉製管玉類が出土し、特にガラス小玉類は鎔滓と考えられるコバルト・ブルー色の小塊があり、集落内生産の可能性が高い。また井戸址での多量の一括土器群や第１号古墳周溝下層での古式土師器は特記される。

比恵遺跡群では第６次調査後ひきつづいて周辺の調査が継続されている。第７次調査（1983年、市教委調査・市営小林町第２住宅建替え）、第８次調査（1984年１月～４月、市教委調査、民間企業社宅建設）が行なわれ、特に第８次調査では弥生～室町時代の各時期に亘る遺構が検出されている。弥生時代では前期貯蔵穴（11基）・中期初頭～後葉甕棺墓（13基）・中期末～後期後葉住居址（７軒）・井戸（31基）である。また古墳時代では各期の竪穴住居址・井戸址・掘立柱建物群がある。また古墳時代集落廃絶後から７世紀後葉までの間存続した倉庫群（３×３間建物５棟東西並列・布掘り総柱建物２棟）と柵状遺構があって遺構上一般集落と趣きを異にするところから「那津官家」と関連する性格が考えられている（註）。

（註）「比恵遺跡－第８次調査概要－」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第116集』1985年

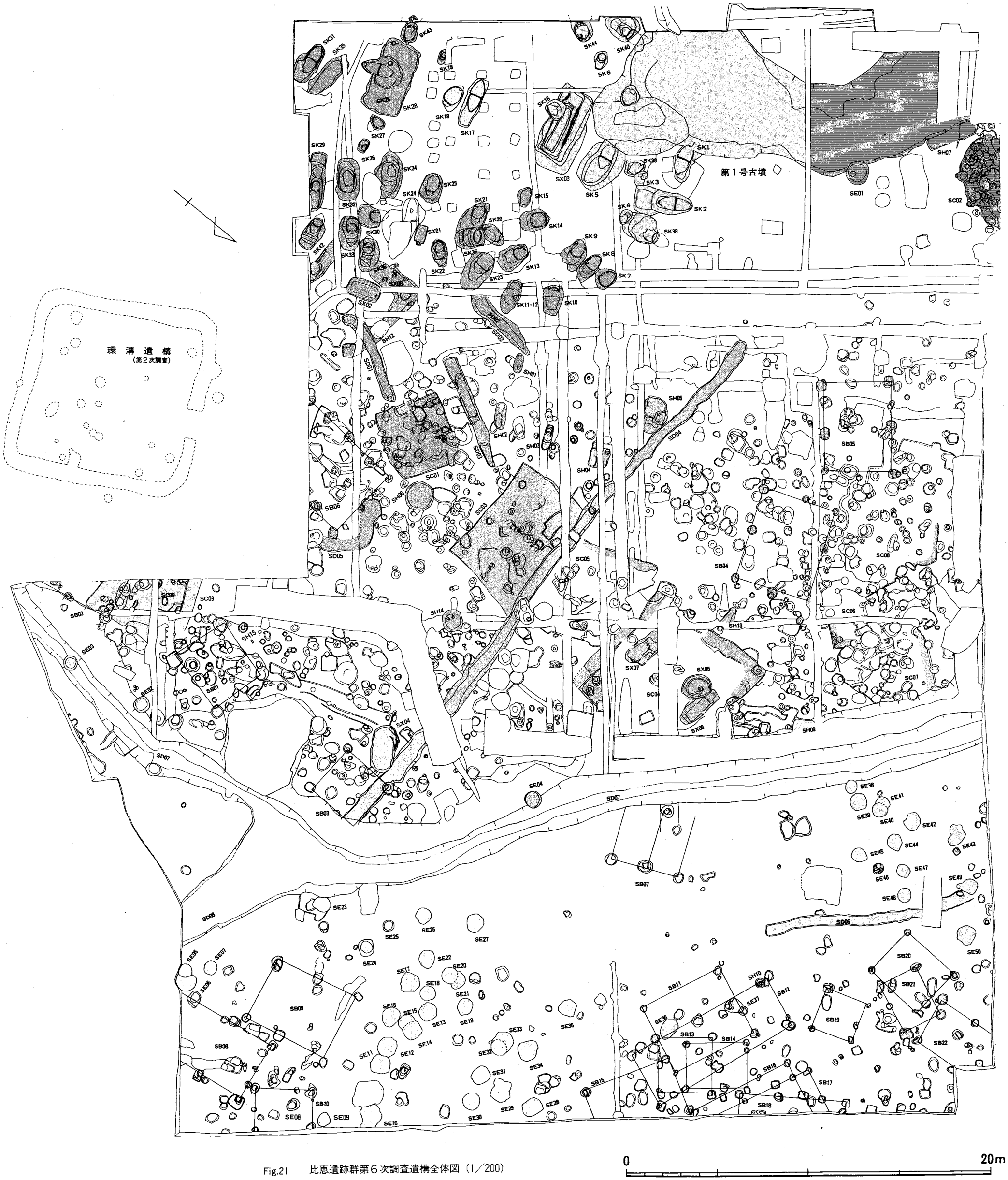


Fig.21　比恵遺跡群第６次調査遺構全体図（1／200）

3.出　土　遺　物

前述の様に第6次調査で検出された遺構群は主として弥生時代中期前葉～古墳時代前期に及ぶが、以下では紙面の都合上可能な限り各遺構の時期決定の資料となる土器を中心としてこれに共伴する生活遺物、また殆ど消滅して旧状をとどめず、本来全面を覆っていたと考えられる弥生時代遺構に伴うと諸々の遺物について個別の説明を加えることとする。

(1)　甕棺 (Fig. 2～31、PL.　1・3～11)

甕棺は近代的削平のみならず古墳時代の撹乱によっても非常な破壊をこうむっている。以下では各個別の甕棺について特徴をのべるが墓壙埋土出土の土器類については割愛した。

ＳＫ01甕棺（Fig. 2 ,PL. 3）

調査区北端部に位置し、第1号古墳周溝によって上甕下部が破壊を受けている。

甕棺墓は上・下棺ともに大型甕を使用した接口式甕棺である。

下甕は胴部下半がよくしまり、底部は外端部が張出しあげ底となる。胴部には中位に2条の低い三角突帯を付し、これ以上は直立気味である。口縁部は「T」字形をなし内方に向って傾斜する。口縁端部は内唇が発達し、強く張出す。外口径67.7cm、内口径64cm、胴部突帯径60cm、底部径12cm、器高87cmをはかる。器色淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。

上甕は底部を欠くが、下甕と同様の形態をとる。口縁内唇部の発達がつよく、口縁上端面は緩く内弯気味に上がる。胴部は中位よりやや上った位置に2条の低い三角突帯を付し、これ以上は直立気味となる。器面調整は胴部外面で突帯部を狭んで上・下ともに荒い縦刷毛目調整を施し、他は内面・口縁部ともにナデ調整が残る。外口径75.8cm、内口径61.4cm、胴部突帯径67.3cmをはかる。内外面ともに暗褐色を呈し、胎土精良にして密、焼成は非常に良好である。

ＳＫ02甕棺（Fig. 3、PL.　3）

ＳＫ01甕棺墓の東側に隣接し、後世の破壊によって棺の半分を失っているが、上・下棺ともに大型の甕を使用した接口式甕棺である。

下甕は胴部中位以上がほぼ直立し、口縁は外端部の発達がいちじるしく、内方へは殆ど張出さない。口縁上端面はやや内傾気味である。胴部に鋭く低い三角突帯1条を付し、底部は変化なくすぼまる。底部は緩やかなあげ底となる。外口径69.4cm、内口径59cm、胴部突帯径58.5cm、器高91cmをはかる。器色暗褐色を呈し、胎土密、焼成は堅緻である。

上甕は胴部中位より直立気味に立あがり、口縁下で若干しまる。口縁は上端面平坦をなし、口唇は内外面ともに短くおさめる。胴部中位に一条の「M」字形突帯を付し、これ以下は細くしまる。底部は肉厚で緩いあげ底となる。外口径67cm、内口径57.6cm、胴部突帯径60cm、器高

92cmをはかる。器色暗褐色を呈し、胎土はやや粗、焼成堅緻である。

ＳＫ05甕棺（Fig.４、PL. ４）

ＳＫ01甕棺墓の南側に隣接し、第１号古墳周溝によって下棺底部を欠失する。棺には下棺に大型甕、上棺に同口径の鉢形土器を使用する接口式甕棺である。

下棺は口縁部内口唇が発達し、突出する。外口唇の張出しは弱く、胴部は中位よりやや上部で口縁と同口径となり口縁に向って緩くしまる。胴部中位よりやや下った位置に低い２条の三角突帯を付す。外口径65cm、内口径54cm、胴部突帯径58cmをはかる。器色暗褐色を呈し、外面に黒色顔料の付着がみられる。また胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。

上棺は大型鉢で口縁が内外に発達した「T」字形をなし、口縁下に２条の鋭く、低い三角突帯を付す。胴部中位以下で急速にしまり、あげ底の底部へつながる。外口径73cm、内口径64cm、器高58cmをはかる。外面淡黄褐色を呈し、胎土に粗砂の混入多い。焼成は堅緻である。

ＳＫ07甕棺（Fig.５）

墓地東端部近くに位置する単式甕棺である。蓋に相当すると考えられる素材は無く、木製であった可能性が高い。

棺は胴部卵形をなし、口縁部近くはしまり、胴部は突帯部以上で内傾

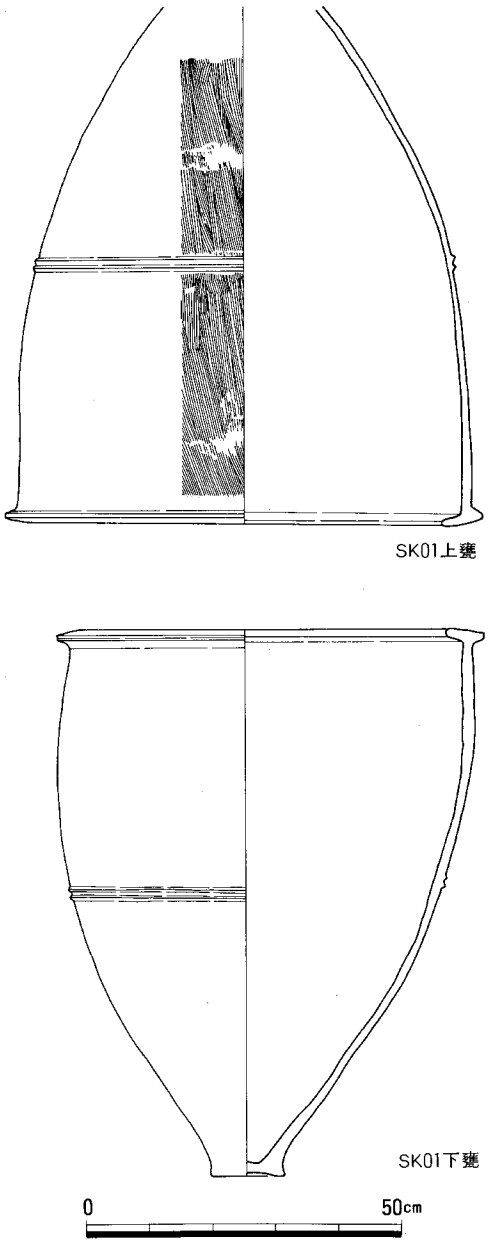


Fig.２　SK01甕棺実測図（1／12）

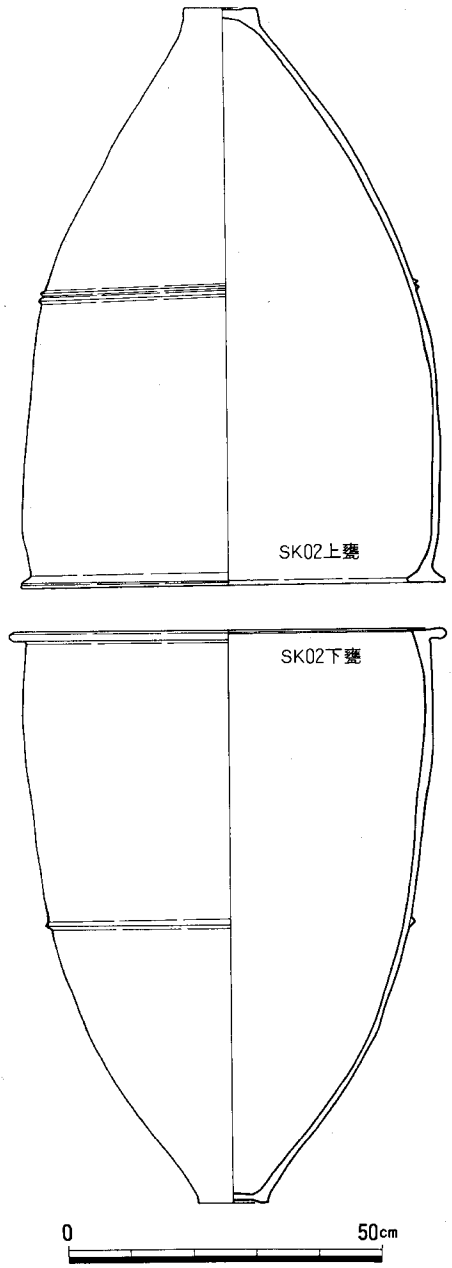


Fig.3　SK02甕棺実測図（1/12）

化する。口縁部は非常に稜角的なつくりで口縁外唇がよく伸びる。口縁直下に非常に低い「コ」字形突帯１条を付す。また胴部中位に２条の「コ」字形突帯を付すが、突帯は何れも下垂気味でしっかりしたつくりである。底部端付近はやや肥厚し、緩やかなあげ底となる。体部の粘土接合単位は15～20cm程となり、器壁の厚さも１cm程度で整一性がある。内外面ともに器面の磨滅がみられるが、ナデ調整が何れにものこる。外口径66cm、内口径53cm、胴部突帯72.5cm、器高98.5cmをはかる。器色は外面上半部に大黒斑を残し、他は暗褐色を呈し、一部に黒色顔料の付着がみられる。胎土は粗砂の混入多く、焼成は堅緻である。

ＳＫ08甕棺（Fig.５、PL.　４）

ＳＫ07甕棺の南側に隣接する接口式甕棺である。下棺に大型甕、上棺に中型甕を使用する。

下甕は胴部が卵形を呈し、口縁下でしまる。口縁部は内傾して緩い「く」字形口縁をなし、口縁直下に低い三角突帯１条を付す。胴部中位に断面「コ」字形突帯を付し、器壁は底部付近と同様にこの部位で1.5～1.7cmと厚い。底部は器厚薄く、平底をなす。また底部中心よりやや外れた位置に外方からの二次穿孔がある。外口径60.5cm、内口径48.2cm、胴部突帯径67.3cm、器高96.4cmをはかる。器色は内外面ともに暗褐色を呈し、胴部突帯を挟んで上・下に大黒斑がのこる。胎土は粗砂の混入多く、焼成はやや軟質である。

上甕は削平のため底部を欠くが、口縁内

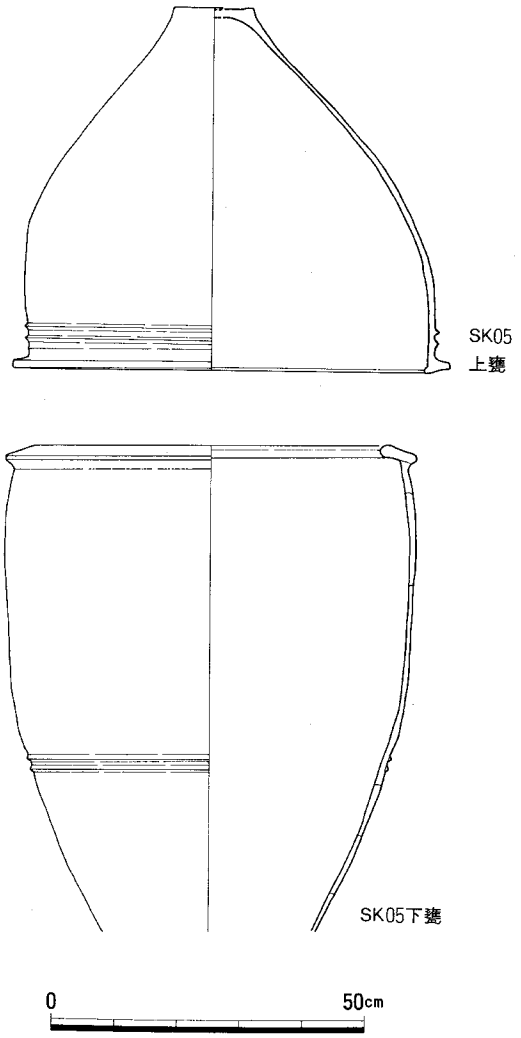
弯気味に外方に開き、直下に低い三角突帯１条を付す。器面調整は突帯部以下に荒い縦刷毛目調整を残し、他は内外面ともにナデである。外口径45cm、内口径36cm、胴部最大径48cmをはかる。器面暗赤褐色を呈し、胴部中位に黒斑がのこる。胎土に粗砂を多く含み、焼成は軟質である。

ＳＫ09甕棺（Fig.６、PL. ４）

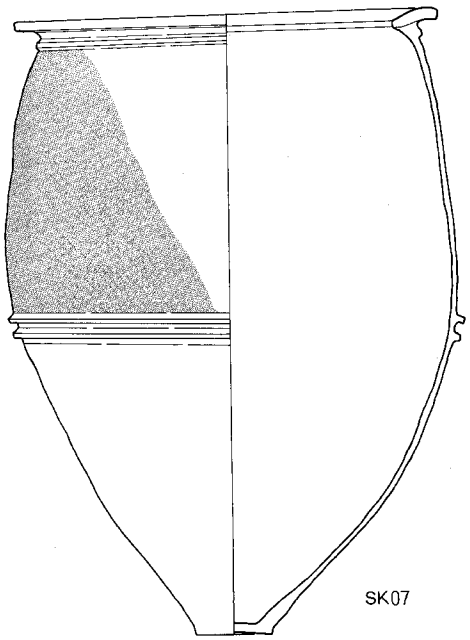
ＳＫ08甕棺の南側に隣接する覆口式甕棺である。下棺に大型甕、上棺に中型甕を使用する。

下甕は胴部⅓以下を欠失するが、卵形をなし、口縁部下はしまる。口縁は外唇部が肥厚し、内傾する。口縁直下に低い「コ」字形突帯１条を付す。胴部突帯はほぼ中位にあり、低い端正なつくりの「コ」字形突帯２条をめぐらす。器壁はほぼ0.8cm程度に均一的であり、全体に整美な感じをうける。外口径71.5cm、内口径57.6cm、胴部突帯径83cmをはかる。器面調整は口縁外面の横ナデを除いて他は不定方向のナデがのこる。胎土は密で、焼成は堅緻である。

上甕もまた底部を欠失する。胴部は口縁直下でよくしまり、口縁下20cm程度のところで最大径となりこれ以下急速にすぼまっていく。口縁部は肥厚して、上端面は平坦である。口縁よりやや下った位置に低い「コ」字形突帯１条を付す。また胴部中位よりやや下に端部の丸い三角突帯２条をめぐらす。



F.g.4　SK05甕棺実測図（1／12）



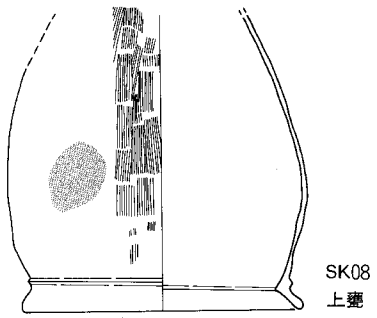
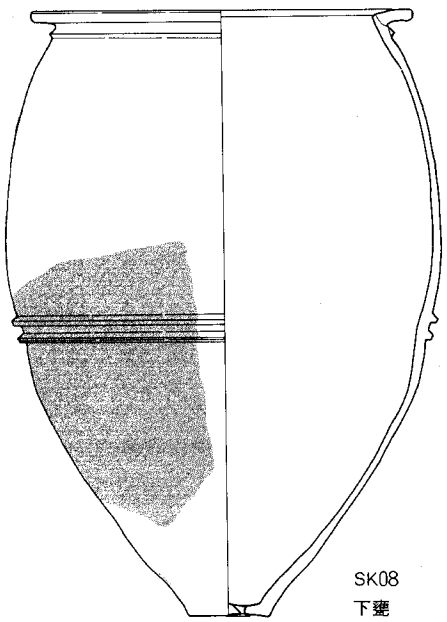


Fig.5　SK07・08甕棺実測図（1／12）



器面調整は不定方向のナデが胴部外面に残る。外口径61cm、内口径46.6cm、胴部最大径66cm、胴部突帯径64cmをはかる。器色暗褐色を呈し胴部上半に大黒斑がのこる。胎土は密、焼成やや軟質である。

ＳＫ10甕棺（Fig.7、PL. 4）

ＳＫ09甕棺の東側、墓地東端に位置する単式甕棺であるが、口縁端部付近は近代の溝掘削による撹乱があり、複棺である可能性も残している。棺は中型甕を使用する。

甕は胴部中位以上で緩やかに立あがり、口縁下でややしまる。口縁上端部はやや内傾し、外口唇の発達がつよい。また内唇は小さく尖る。胴部中位に端正な高い「コ」字形突帯２条を付す。底部は肥厚し、平底で外面中央が緩くくぼむ。内・外面ともにナデ調整がのこる。外口径65.7cm、内口径54.6cm、胴部突帯径61.5cm、底径11cm、器高81cmをはかる。器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

ＳＫ12甕棺（Fig.7、PL. 5）

ＳＫ10甕棺の南側に隣接する単式甕棺

である。近代の溝掘削によって口縁部を欠失する。また墓壙中に小児棺ＳＫ11が営まれている。棺には大型甕を使用する。

甕は胴部が中位以上で若干内傾気味に直立し、中位よりややあがった位置に比較的高い２条の「コ」字形突帯を付す。器壁は１～1.2cm程度と均一で整美な感じをうける。底部付近は肥厚し、緩やかなあげ底となる。器表は剝落して荒れが著しい。器色淡褐色を呈し、胎土に粗砂の混入が多い。焼成堅緻である。

ＳＫ13甕棺（Fig.８、PL. ５）

ＳＫ12甕棺の西側に隣接する接口式甕棺である。削平によって上甕底部を欠失するが、下棺に大型甕、上棺に中型甕を使用する。

下甕は胴部中位以上が内傾気味に立あがり、口縁下でしまる。口縁部は外口唇が強く張出し、上端部が内傾して断面「く」字形を呈する。また内口唇は鋭く尖る。口縁部直下に鋭く、低い三角突帯を付す。また胴部中位に２条の「コ」字形突帯をめぐらす。器面は荒れているが、胴部には不定方向のナデが残る。外口径64.5cm、内口径48cm、胴部突帯径72cm、底部径12cm、器高95.5cmをはかる。器色は胴部突帯を挟んで上・下に帯状の黒斑がある以外は暗赤褐色を呈する。胎土密、焼成は堅緻である。

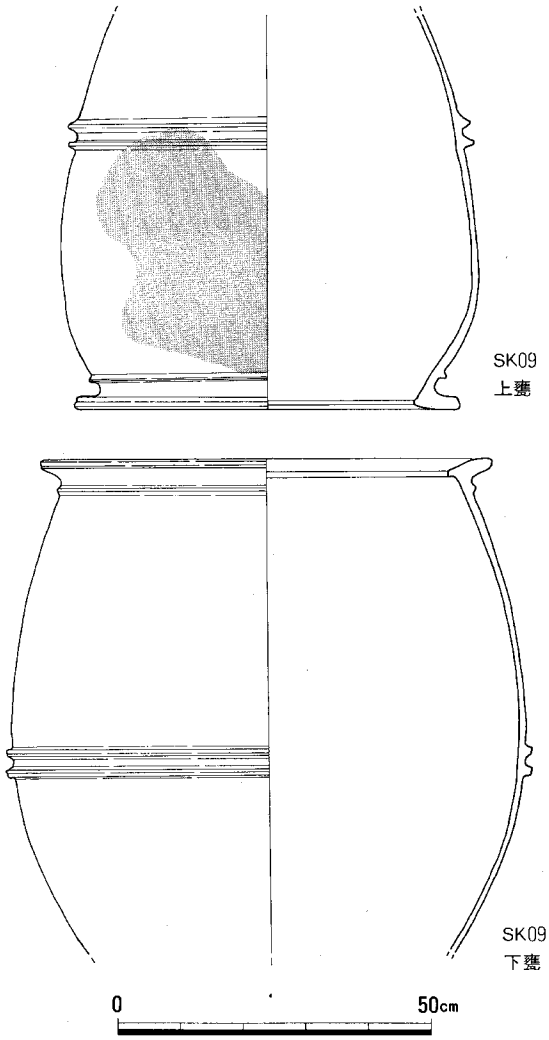


Fig.6　SK09甕棺実測図（1／12）

上甕は底部を欠くが、胴部中位は最大径とする中型甕で口縁はよくしまる。口縁部は外口唇の張出しが強く、端部は下方にたれる。口縁よりやや下った位置に1条の三角突帯を、また胴部最大径より下に2条の三角突帯をめぐらす。外口径53cm、胴部最大57cm、同突帯径57cmをはかる。器色は暗赤褐色を呈し、胎土は非常に密、焼成堅緻である。

ＳＫ14甕棺（Fig. 9、PL. 5）

ＳＫ13西側に隣接する単式甕棺である。棺に大型甕を使用する。

甕は全体に胴部の膨みが強く、口縁部は肥厚し著しく内傾化し「く」字形に屈曲する。口縁部内唇は鋭く尖る。口縁直下に低い三角突帯1条を付す。また胴部中位よりやや下った位置に2条の「コ」字形突帯をめぐらす。器壁は厚さ1.6～1cmと変化に富み、底部付近は非常に厚く、小さい平底となる。器表は磨滅が著しいが、胴部中位以下内外面に細かい縦刷毛目調整を残す。外口径67.4cm、内口径62cm、胴部最大径71cm、底部径12.4cm、器高100.2cmをはかる。器色淡黄褐色を呈し、胎土密、焼成は堅緻である。

ＳＫ15甕棺（Fig. 9）

ＳＫ14甕棺の西側に近接する残存の悪い甕棺で単式と考えられる。棺には大型甕を使用する。

甕は底部を欠く。胴部中位よりやや下った位置に2条の三角突帯を付し、胴部の膨みは弱い。口縁部は「T」字形をなし、上端部中央はくぼむ。口縁部内唇が

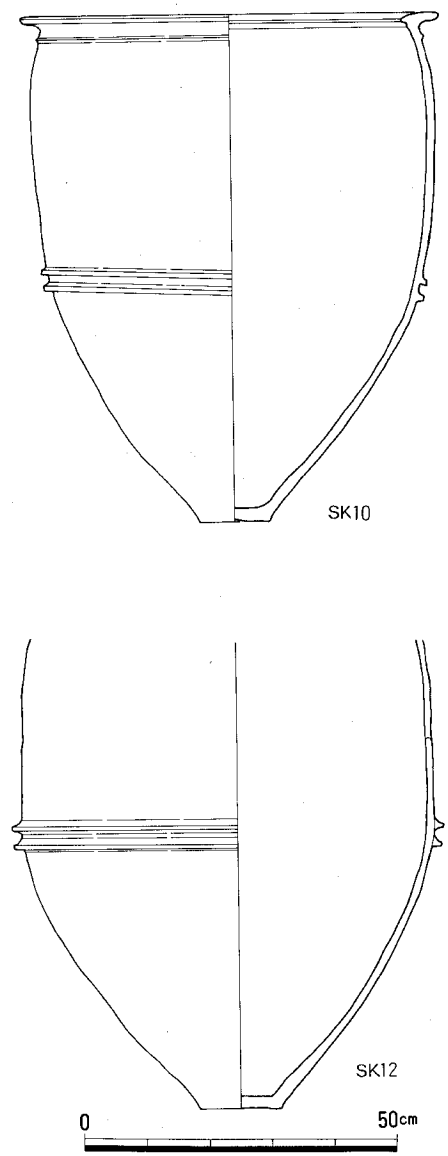


Fig. 7　SK10・12甕棺実測図（1／12）

隆起し、外口唇の発達は強く外方へ長くのびる。胴上部に二次的穿孔がみられる。外口径60cm、内口径52cm、胴部突帯径61.2cmをはかる。器色は淡赤褐色を呈し、内外面ともに黒色顔料が付着する。胎土は粗砂の混入多く、焼成はやや軟質である。

ＳＫ16甕棺（Fig. 9）

調査区北辺にあるＳＸ03土壙墓（木棺）上に営まれた甕棺で削平によって口縁部を失う。棺は大型甕を使用する。

甕は胴部中位の膨みの弱い卵形をなす。胴部中位よりやや上部に２条の高い三角突帯をめぐらす。全体に薄手の均一なつくりである。器面は荒れが著しいが胴部外面突帯部以下に細かい縦刷毛目調整が残る。胴部突帯径56cm、底部径11cm器色淡黄褐色を呈し、突帯部下に大黒斑がみられる。胎土は粗砂を多く含み、焼成はやや軟質である。

ＳＫ17甕棺（Fig.10）

調査区内墓地中央に位置する接口式甕棺で上・下棺ともに大型甕を使用する。

下甕は口縁部を最大径とする大型甕で、全体に細身の感じをうける。胴部中位以上はやや内傾気味に立あがる。口縁部は内外ともに端部の張出しがつよく、上端面は外方に傾斜する。胴部中位には鋭い２条の三角突帯をめぐらす。器面は荒れが著しく調整は不明である。外口径61cm、内口径48cm、胴部突帯径47cm、底部12cm、器高95cmをは

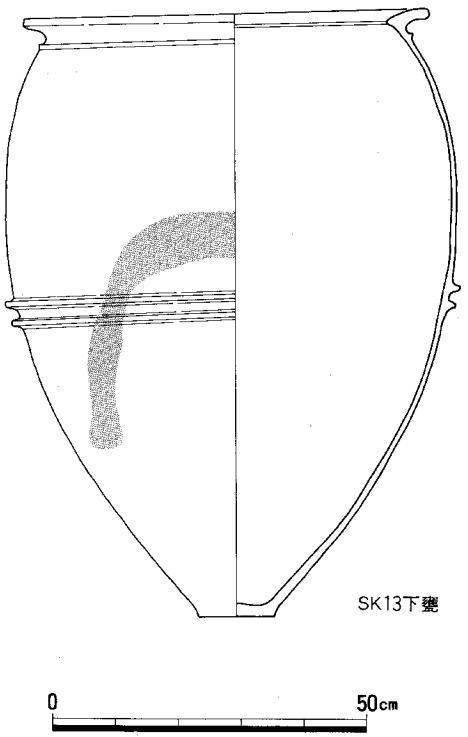


Fig.8　SK13甕棺実測図（1／12）

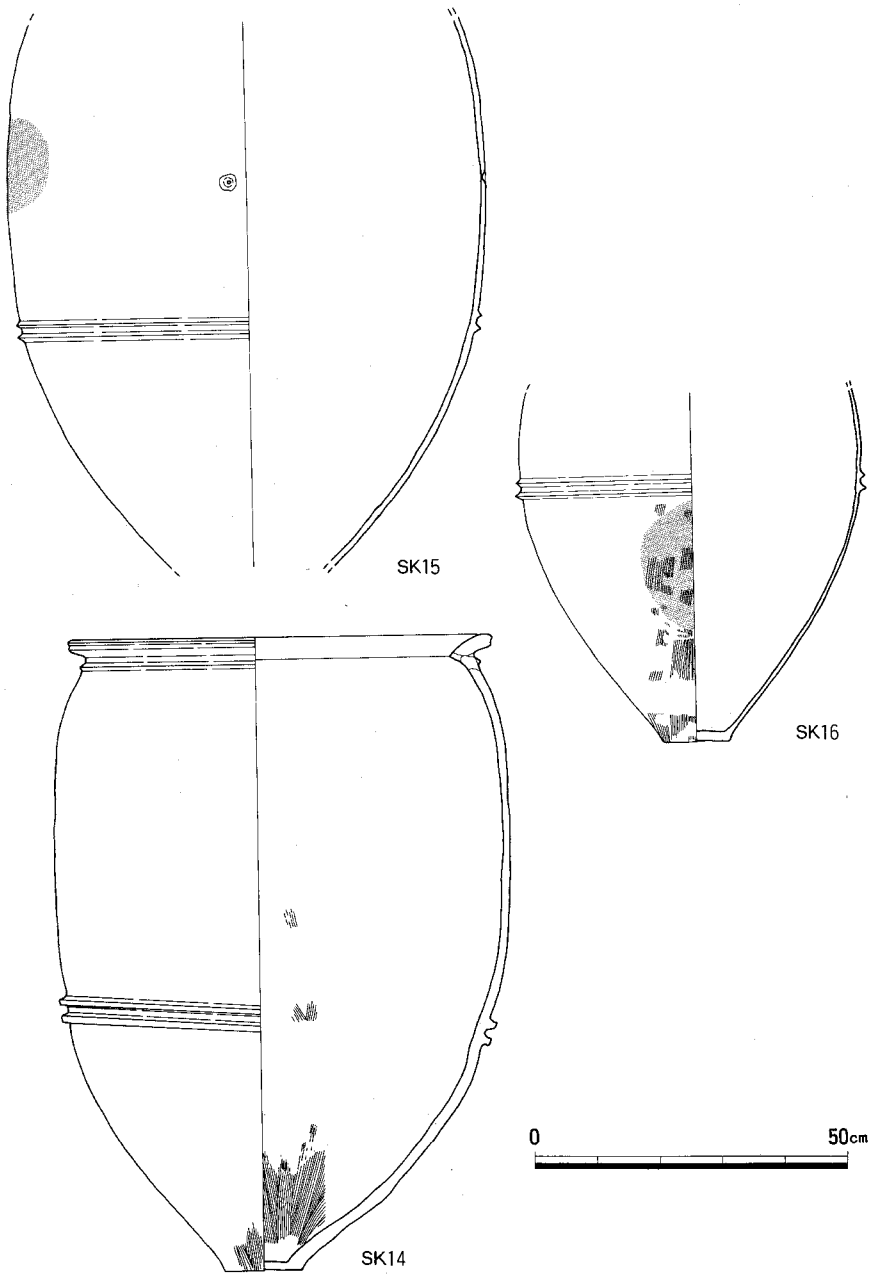


Fig.9　SK14・15・16甕棺実測図（1／12）

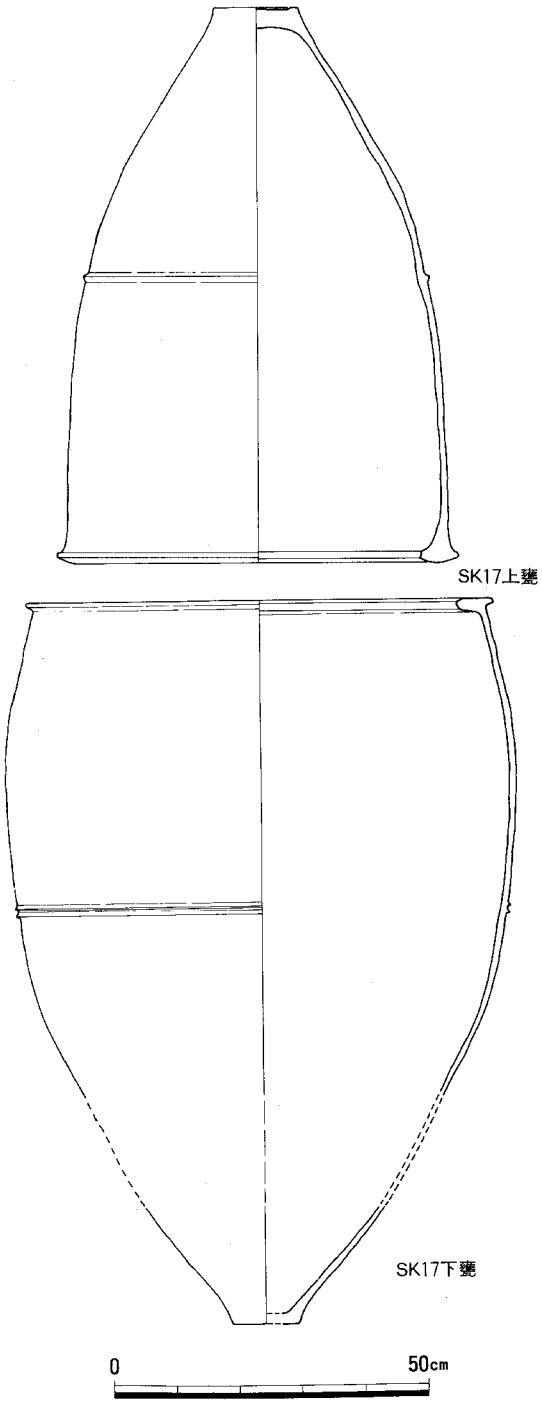


Fig.10　SK17甕棺実測図（1／12）

かる。器色は暗赤褐色を呈し、胎土はやや粗、焼成堅緻である。

上甕は胴部突帯以上がほぼ垂直に立あがる大型甕である。口縁部は非常に肉厚で上端部中央が隆起する。内外口唇部の発達は弱く、張出しは小さい。胴部中位よりやや下った位置に鋭い三角突帯１条をめぐらす。底部は非常に肉厚であげ底をなす。器面調整は口縁部・突帯部に横ナデを施す以外は不定方向のナデである。外口径63.3cm、内口径51.2cm、胴部突帯径54.5cm、底部径13.3cm、器高88.3cmをはかる。器色は暗赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

ＳＫ18甕棺（Fig.11、PL. 6）

ＳＫ17甕棺の南側に近接する接口式甕棺で、削平のため上棺の遺存が殆どないが、下棺に大型甕、上棺に大型鉢と考えられる土器を使用している。

下棺は胴部突帯以上が垂直に立あがり、内外に良く発達した口縁部は「T」字形を呈し外方にたれる。口縁下に１条の三角突帯を付し、胴部中位よりやや上った位置に２条の突帯をめぐらす。胴部突帯は上部のものが断面三角形をなし、下部のものは「コ」字形となる。また胴部は突帯以下で急速にすぼまる。外口径82.3cm、内口径58cm、胴部突帯77.5cm、底部径14.2cm、器高114.5cmをはかる。器色は淡黄色を呈し、胎土は精良にして密、焼成はやや軟質である。

上棺は口縁端部の内外方への発達の弱い肥厚する口縁部をもち、直下に一条の

三角突帯をめぐらす。器形的には下棺と同口径の鉢形土器と考えられる。

ＳＫ20甕棺（Fig.12、PL. 6）

墓地東縁に位置し、SK21･37甕棺と重複関係にある。近代の削平によって口縁部の殆どを欠失する。出土状況から単式甕棺と考えられる。大型甕を使用する。

甕は胴部が砲弾形を呈し、胴部中位以上でも殆ど内傾化することなく直線的に立あがる。また中位以下でもそれほど急速にすぼまることなく、緩やかに底部へとつながる。口縁部は内口唇が非常に発達して長くのびるとともに外方へ傾斜する。口縁よりやや下った位置に断面「M」字形をなす突帯１条を付す。また胴部中位には端正なやや下垂気味の「コ」字形突帯２条をめぐらす。器壁は中位付近がやや肥厚するのを別とすれば全体に均一なつくりで、底部もまた薄手で平底をなす。器表は荒れが著しく調整は不明である。外口径66cm、内口径50cm、胴部突帯径56.5cm、底部径13.5cm、器高97.4cmをはかる。器色は暗赤褐色を呈し、胴部上部に黒斑を有する。胎土には砂粒の混入が非常に多く、焼成はやや軟質である。

ＳＫ21甕棺（Fig.13、PL. 6）

墓地東縁部にあってSK37甕棺と重複するが切り合いの前後関係は不明である。下棺に大型甕、上棺に中型甕を使用する接口式甕棺である。

下甕は全体ら胴部の膨らみの強い大型甕で、胴部上位はよくしまる。口縁は外縁部が稜角的で上端部は内傾する。口縁直下には鋭い１条の三角突帯を付す。また胴部中位よりやや

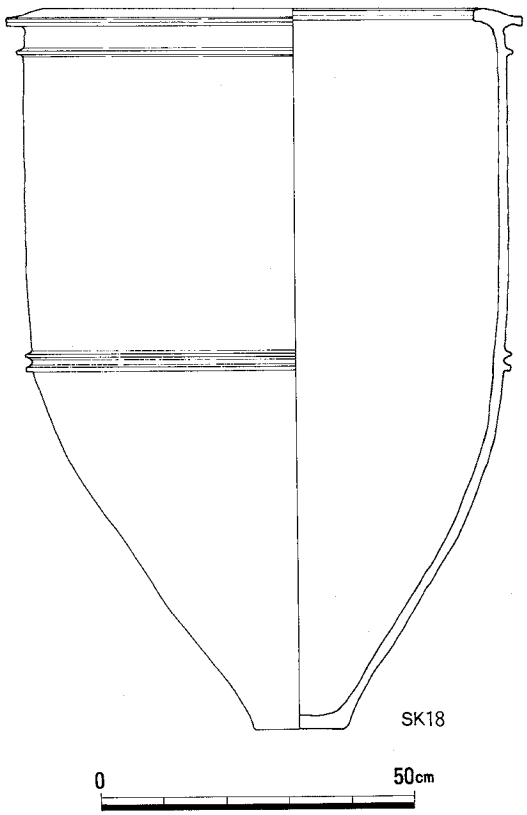


Fig.11　SK18甕棺実測図（1／12）

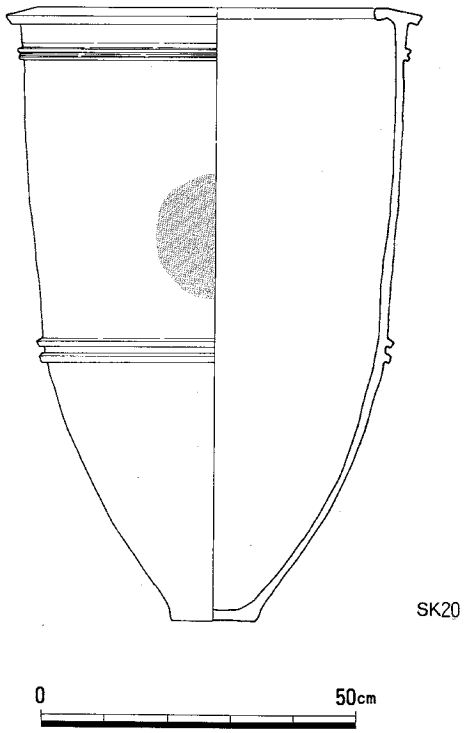


Fig.12　SK20甕棺実測図（1／12）

上った位置に端正な「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部はほぼ胴部厚と同一の器厚を有し、平底となる。器壁は胴部で１～1.2cmをはかり全体につくりは丁寧である。器面調整は磨滅がいちじるしいが、胴部内外面に不定方向のナデが残る。外口径62cm、内口径56cm、胴部突帯径69.5cm、底部径12.4cm、器高93.5cmをはかる。器色は暗赤褐色を呈し、胎土に石英細砂の混入多くやや粗、焼成は堅緻である。

上甕は中型甕の胴部中位よりやや上った位置以上を打欠いている。残存する胴部には突帯部分なく、口縁に向ってしまる器形となる。胴部からの復原では口縁端部は内弯気味に外反し、口縁直下に一条の三角突帯を付す形態となる可能性が高い。器表は磨滅が著しく調整は不詳である。胴部最大径52cm、底部径10cm、残存器高50cmをはかる。器色は赤褐色を呈し、胎土に粗砂の混入多い。焼成は軟質である。

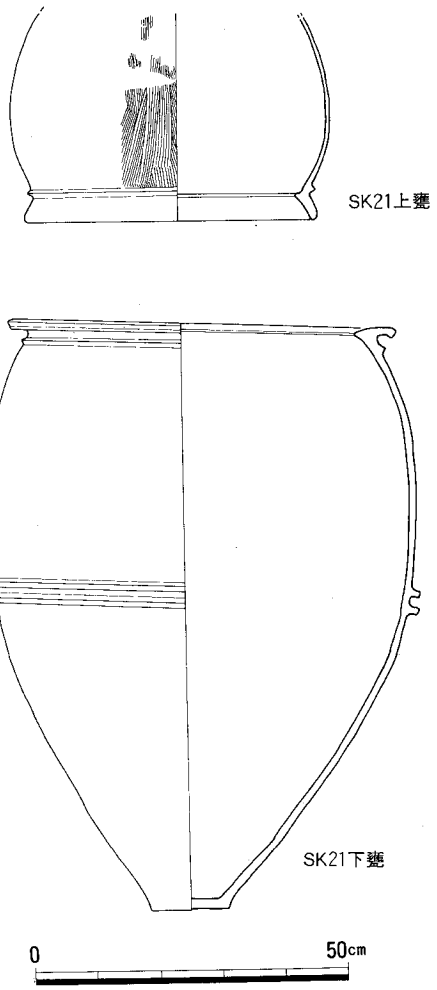


Fig.13　SK21甕棺実測図（1／12）

ＳＫ22甕棺（Fig,14、PL. 7）

ＳＫ21甕棺の東側に隣接する呑口式甕棺である。近世の削平によって上棺の底部を失なっている。下棺に中型甕、上棺にはこれよりやや小型の甕を使用している。

下甕はよくしまり、口縁部は屈曲して断面「く」字形を呈する。端部は何れも稜角的である。口縁直下に低い１条の「コ」字形突帯を付す。またほぼ胴部中位にやや下むきの「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部は緩やかなあげ底をなす。器壁はほぼ１cm程度に均一であり、全体的に整っている。器面は剥離、荒れが著しいが、外面胴部突帯上下に細かい縦刷毛目調整をのこし、内面はナデ調整となる。外口径48.8cm、内口径39cm、胴部突帯径59.5cm、底部径10.7cm、器高79.2cmをはかる、器色は暗褐色を呈し、胎土は精良にして密、焼成堅緻である。

上甕は胴部最大径部が高い位置にあり、

上端部はよくしまり、口縁部は内弯気味に外反する。口縁は肥厚し、外面直下に低い鋭い三角突帯１条を付する。内面は中央部が緩く窪み、下端部は鋭く突出する。器面調整は器面の荒れが著しいが、外面口縁下突帯部以上は横ナデ調整を施す。内面は口縁部横ナデ、これ以下はナデ調整による。外口径42cm、内口径33cm、胴部最大径51cmをはかる。器色は外面暗褐色、内面暗赤褐色を呈し、胎土は石英粗砂の混入多く粗である。焼成軟質である。

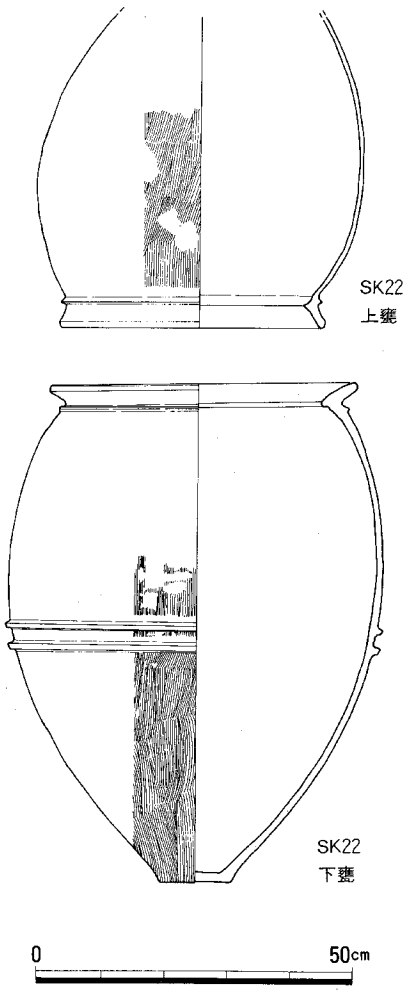


Fig.14　SK22甕棺実測図（1／12）

ＳＫ23甕棺（Fig,15）

ＳＫ22甕棺北側に隣接する接口式甕棺である。近世の上部撹乱で上・下棺ともに底部、口縁の殆どを欠失する。棺は上棺に大型の鉢形土器、下棺に大型甕を使用する。

下棺は胴部の膨みが非常に強い大型甕である。口縁部は口唇の発達が顕著で、内・外方へ突出する。口縁外唇はやや垂れ、直下に「コ」字形突帯１条を付す。胴部は上記の様に中位以上の膨みが顕著である。胴部突帯は中位よりやや上った位置に高い、上向きの「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部は外口径94cm、内口径78cm、胴部最大径89cm、胴部突帯径83cm、底部径を呈し、胎土精良にして密、焼成堅緻である。

上棺は口縁部径に比べて身丈のつづまった鉢で、口縁端部の発達は良好である。口縁直下に高い１条の三角突帯を付す。器壁は全体に厚く均一的である。外口径79cm、内口径64cm、底部径14.5cm、器高50cmをはかる器色は淡赤褐色を呈し、突帯部以下は大黒斑となる。胎土に石英粗砂の混入多く、焼成は堅緻である。

ＳＫ25甕棺（Fig,16、PL.　8）

ＳＫ24甕棺に隣接する接口式甕棺である。

上棺に中型・下棺に大型甕を使用する。上棺の殆どを近代の削平によって欠失する。

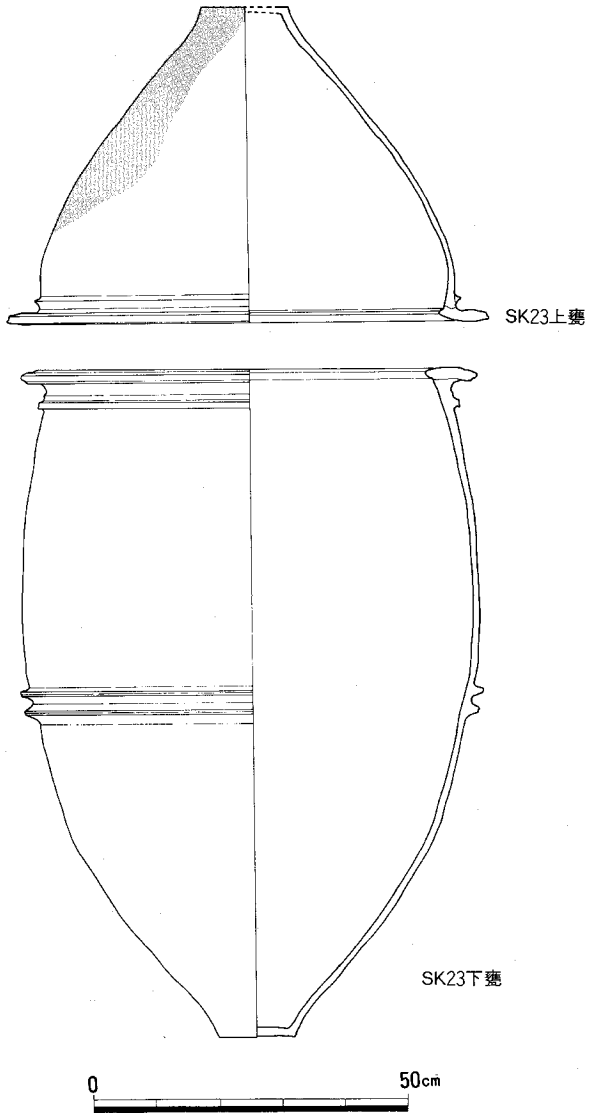


Fig.15　SK23甕棺実測図（1/12）

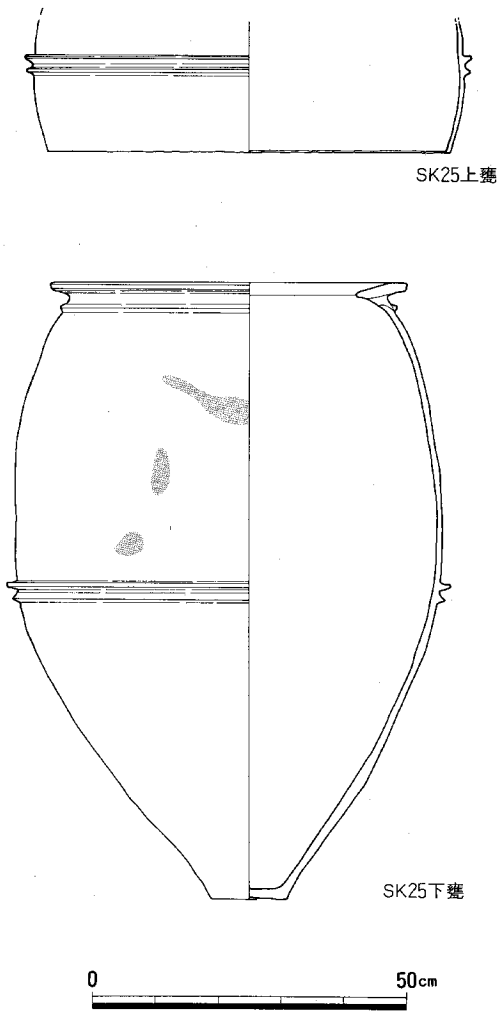


Fig.16　SK25甕棺実測図（1／12）

下棺は全体に胴部の膨みが大きく、最大径部が中位にある大型甕である。中位以上は胴部やや内傾し、口縁部に従ってしまる。口縁部は外口唇が肥厚し、やや上端部が内傾する。口縁直下に一条の「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部平底をなし、非常に安定感のある形態である。外口径71cm、内口径56cm、胴部突帯径78cm、底部径14.50cm、器高98cmをはかる。器色は淡褐色を呈し、胎土は密、焼成堅緻である。

上甕は胴部突帯以上を打欠いた中型甕である。胴部中位に三角突帯２条をめぐらす。器色赤褐色を呈し、胎土に砂粒の混入多し。焼成堅緻である。

ＳＫ28甕棺（Fig,17、PL. ８）

調査区南端近くに位置し、大型墓壙を伴う接口式甕棺である。上・下棺ともに大型甕を使用する。なお下棺より細形銅剣１振が出土した。

下甕は胴部膨みの少ない大型甕で胴部中位以上はほぼ直線的に立ちあがる。口縁部は内口唇の発達が良好で内側へ突出する。また上端部は外方に傾斜する。またほぼ胴部中位に非常に低い三角突帯１条をめぐらす。低部は外面中央が窪み、あげ底となる。外口径62cm、内口径48.5cm、胴部突帯径58.5cm器高87cmをはかる。器壁は胴部がほぼ1cm程度であり、粘土接合痕の幅はほぼ10cmをはかる。

器色暗赤褐～暗褐色を呈し、胴部突帯以下に大黒斑がみられる。胎土に石英細砂の混入が多く密、焼成は堅緻である。

上甕は底部を欠失するが下甕と同様に口縁部内唇の発達が良好である。口縁下には突帯なく、胴部中位に１条の低い三角突帯をめぐらす。突帯以下は急激に膨みを減じてすぼまる。外口径59～60cm、内口径49cm、胴部突帯径59.3cm、推定器高87～88cmをはかる。器色は黄～暗黄褐色を呈し、胎土に石英粗砂の混入多い。焼成堅緻である。

ＳＫ29甕棺（Fig18、PL. 8）

調査区南端に位置する、近代撹乱によって現在では下棺のみしか残さないが墓壙規模と甕棺埋置角度から本来は中型甕を上・下棺とも使用する甕棺であった可能性が強い。

下棺は口縁部が「く」字形に屈曲する中型甕である。口縁外端部は丸味をもち、内面屈曲部は鋭く尖って稜をなす。口縁下に１条の三角突帯を付す。また胴部は全体に膨みがつよく、中位よりやや上った位置に低い「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部は内面中央が隆起し、緩いあげ底となる。外口径52cm、内口径43cm、胴部突帯径52.5cm、底部径11.3cm、器高65.7cmをはかる。器色は淡褐色を呈し、胴部突帯および口縁内面に黒斑がみられる。胎土に石英粗砂の混入多く密、焼成は堅緻である。

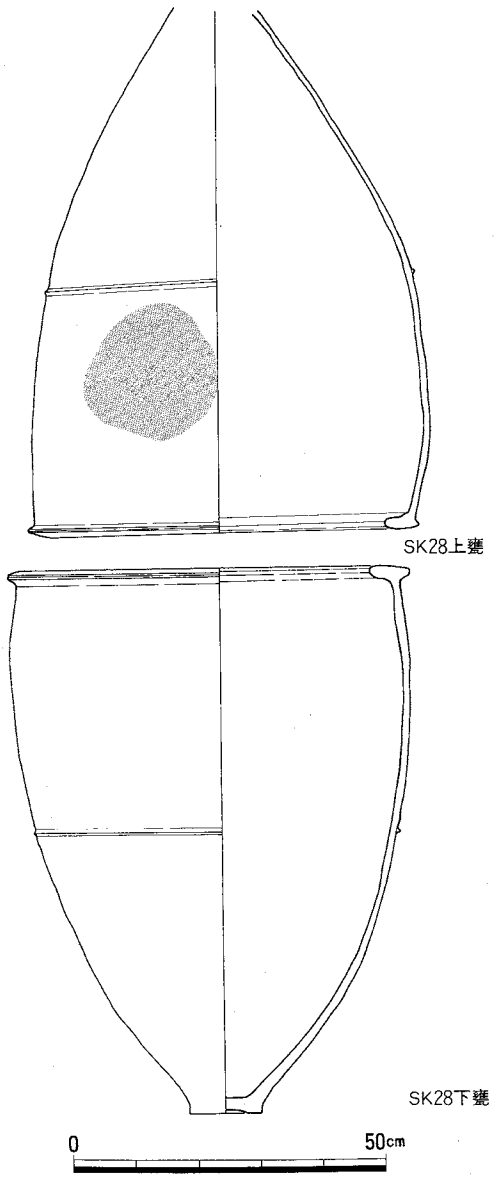


Fig.17　SK28甕棺実測図（1/12）

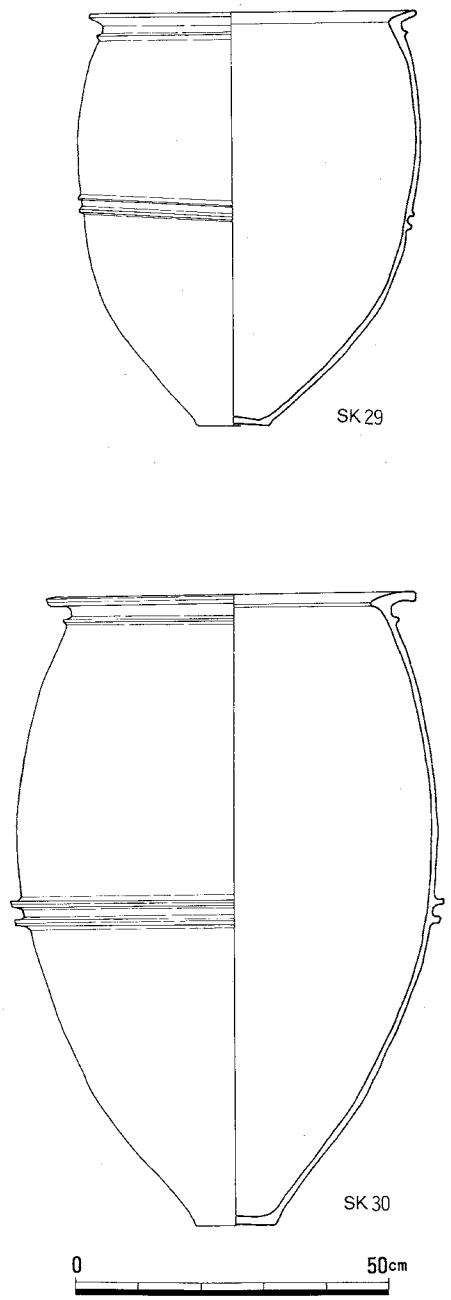


Fig.18　SK29・30甕棺墓実測図（1／12）

ＳＫ30甕棺(Fig.18、PL. 9)

調査区南東部に位置する単式甕棺である。

棺は胴部中位が最大径となる大型甕である。胴部は上・下端に従ってすぼまり卵形をなす。口縁部は外口唇がよく発達し外方に伸び、上端部は内傾して「く」字形となる。口縁直下に１条の低い「コ」字形突帯および胴部中位には２条の比較的高い「コ」字形突帯をめぐらす。胴部突帯は下帯が太く、やや低い形態をなす。また底部は平底をなし、大きく安定感がある。器面調整は内外面にナデが残る。外口径58.5cm、内口径44cm、胴部突帯径68cm、底部径12.7cm、器高105cmをはかる。器色淡褐色を呈し、胎土に細砂の混入が非常に多い。焼成堅緻である。

ＳＫ31甕棺（Fig.19)

調査区南西隅に位置し、ＳＫ28甕棺と隣接する接口式甕棺である。棺は上・下ともに大型の甕を使用する。上・下棺ともに削平による影響で体部の半分近くを失っている。

下甕は口径が大きく、胴下半部もしまりの少ない形態をもつ大型甕である。口縁は内口唇の発達が著しく、また肥厚し、上端部は外方へ少しく傾斜する。

胴部のほぼ中位に断面「M」字形をなす突帯１条をめぐらす。底部は重量感のある胴部に比較して目立って大形ではないが器形全体は安定したものである。器面調整は口縁部内外面と胴部突帯上下に横ナデ、これ以外はナデが残る。外口径71.6cm、内口径59cm、胴部最大径71.3cm、胴部突帯径66.4cm、底部径12.3cm、器高84.2cmをはかる。器色は外面暗黄褐色、内面暗褐色を呈し内面の一部に黒色顔料の痕跡が残る。胎土には細・粗砂の混入が多い。焼成は堅緻である。

上甕は下甕に比較してやや小型の甕を使用する。胴部は中位よりやや上った位置を最大径として内傾気味に立あがる。胴部下半もまた下甕に比してしまりが良い。口縁部は内口唇の発達が良好で内方にやや肥厚して突出する。また上端面は外方へ傾斜する。胴部中位よりやや下った位置に三角突帯２条をめぐらす。外口径56.5、内口径46cm、胴部突帯径56.5cm、底部径11.0cm、器高78cmをはかる。器色暗黄褐色を呈し、胎土に粗砂の混入多い。焼成堅緻である。

ＳＫ32甕棺（Fig.20）

調査区南端に位置する甕棺で、著しい撹乱のため下棺のみが残る。

棺は胴部が部分的に膨張、収縮を操り返す大型の甕で胴部中位以上から内傾気味に立あがり、口縁部はよくしまる。口縁部は外口唇の発達が良好で、上端部は内傾して断面「く」字形を呈する。口縁直下に１条の低い三角突帯を付す。また胴部中位よりやや上った位置に２条の高い「コ」字形突

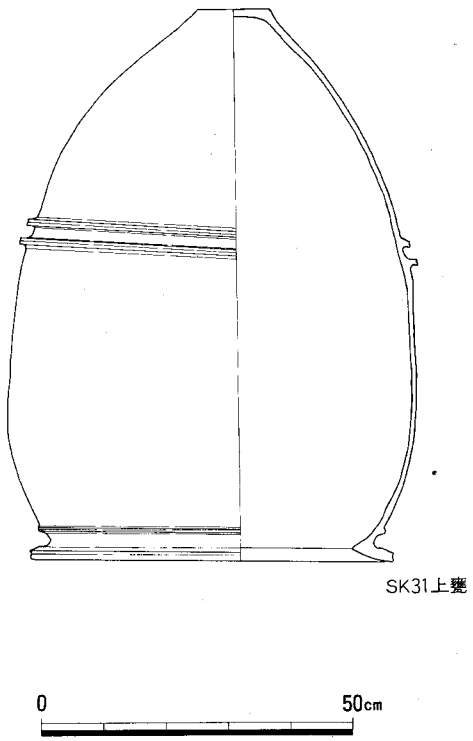


Fig.19　SK31甕棺実測図（1/12）

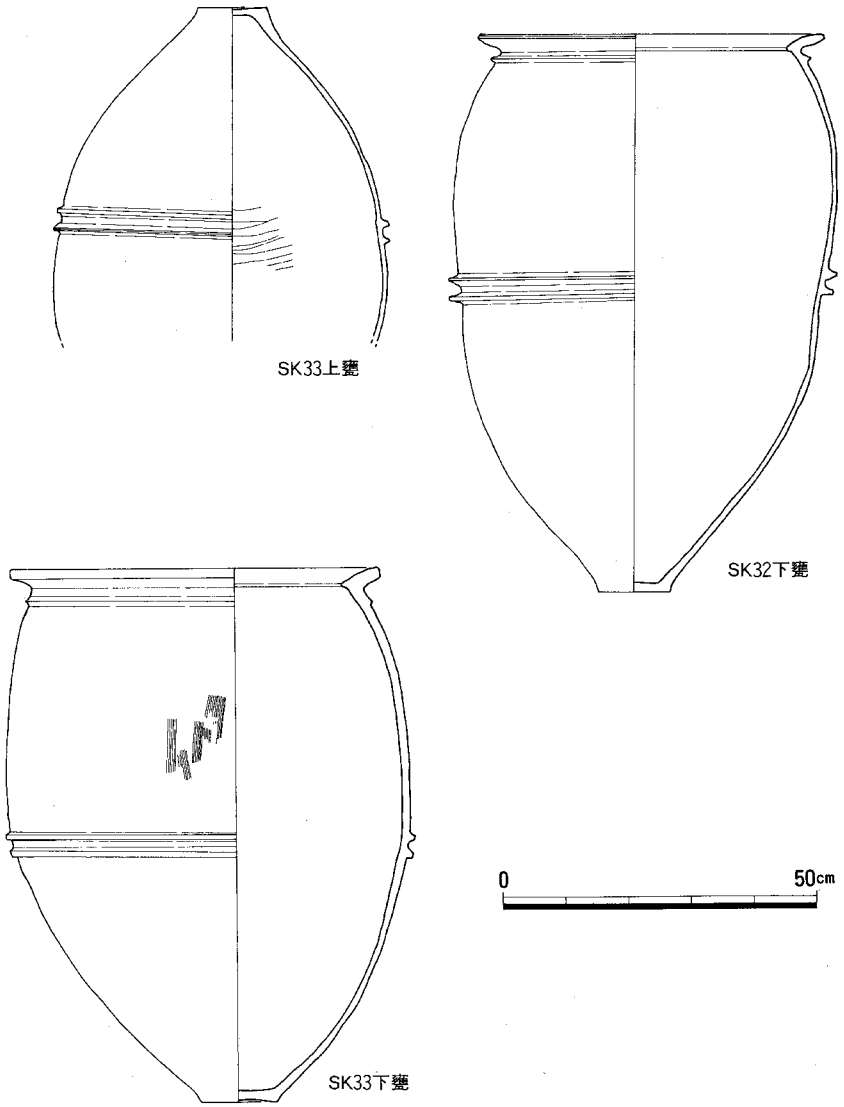


Fig.20　SK32・33甕棺実測図（1／12）

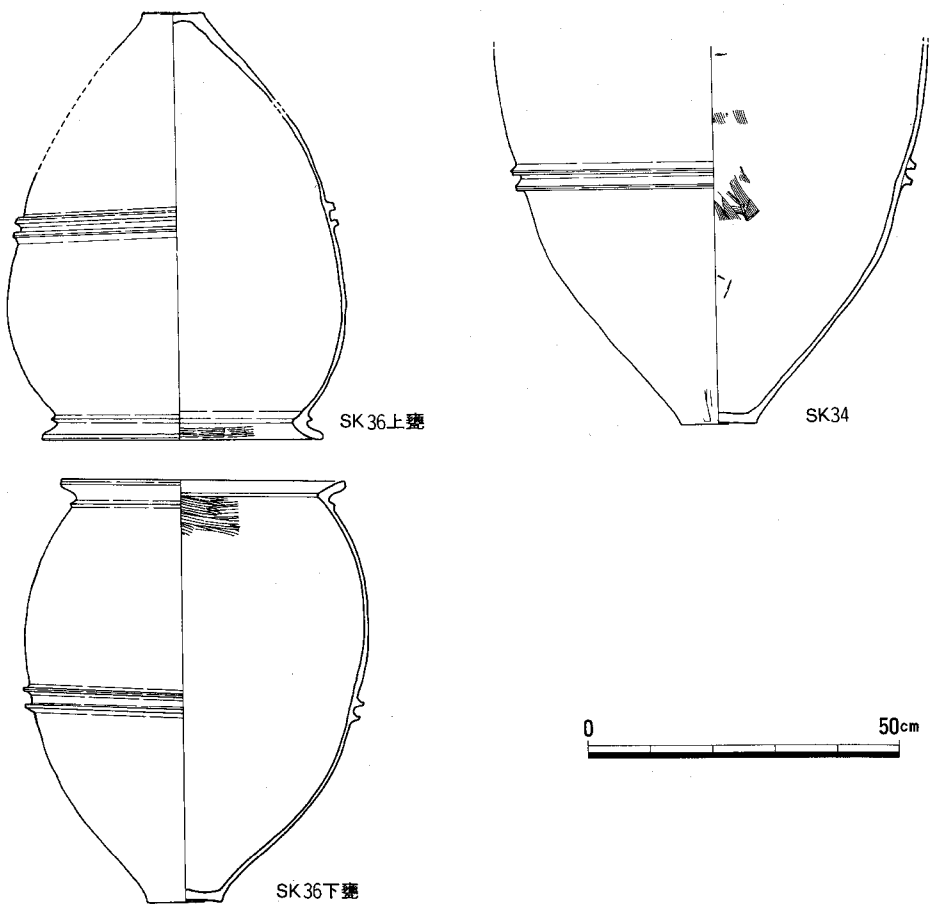


Fig.21　SK34・36甕棺実測図（1／12）

帯をめぐらす。器面調整は口縁内外面に横ナデが残り、他はナデである。外口径55cm、内口径46cm、胴部最大径60.8cm、胴部突帯径61cm、底部径11.3cm、器高88.8cmをはかる。器色淡赤褐色を呈し、胴部上・下半ともに大黒斑が多い。胎土精良にして密、焼成堅緻である。

ＳＫ33甕棺（Fig.20）

調査区南東部隅に位置する覆口式甕棺である。下棺に大型甕、上棺に中型甕打欠きのものを使用する。

下甕は全体に肉厚なつくりである。卵形をなす胴部は中位以上で内傾してよくしまり、口縁は肥厚して屈曲の強い「く」字形をなす。口縁端部は稜角的で直下に非常に低い三角突帯１条

を付す。また胴部中位には端部がやや丸味をもつ「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部はややあげ底となる。器面調整は外面胴部上半に細い縦刷毛目調整を残し、また口縁部内外面に横ナデを施している。他はナデである。外口径58.4cm、内口径46.5cm、胴部突帯径64.7cm、底部径12cm、器高85cmをはかる。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

上甕は口縁部打欠きである。ほぼ胴部中位を最大径とし上・下にすぼまる中型甕で、２条の低い「コ」字形突帯を付す。器面調整は荒れのため内面中央に横ヘラナデを残すのみである。胴部突帯径53.3cm、底部径11.0cm、残存高53.5cmをはかる。器色明褐色で器表の外面と内面上半部に黒色顔料が残る。胎土密、焼成堅緻である。

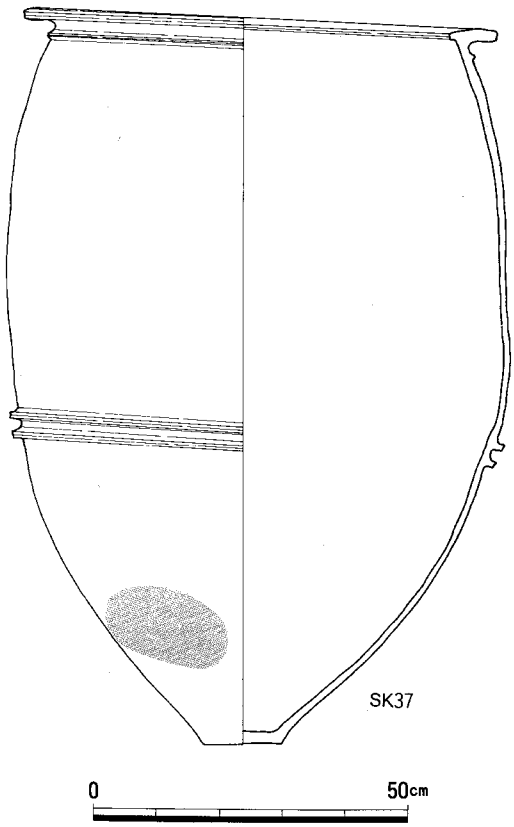


Fig.22　SK37甕棺実測図（1／12）

ＳＫ34甕棺（Fig.21）

ＳＫ32甕棺の北側に位置する甕棺で近代の撹乱により胴上半の約半分を欠失する。

棺は胴中位よりやや下った位置に下向きの「コ」字形突帯２条をめぐらす。器壁はほぼ８mm程の均一に仕あげられる。器面調整は外面突帯部横ナデ、これ以外は幅２cm程度の縦ヘラナデ、内面は細かい刷毛目調整後にナデを施す。胴部突帯径64.5cm、底部径12cm、残存器高60cmをはかる。器色灰褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

ＳＫ36甕棺（Fig.21、PL. 9）

調査区南東部隅に位置する接口式甕棺である。上・下棺ともに中型甕を使用する。

下甕は胴部の膨みが大きく、口縁部は強く屈曲して「く」字形をなす。口縁直下に低い三角突帯１条を付す。器壁の整一性に乏しく、胴部中位突帯は特に肥厚する。胴部下半もしまりが緩やかである。

底部は肥厚して内面が隆起し、ややあげ底となる。器面調整は口縁内外面横ナデで、胴部内面に斜めの荒い刷毛目調整を残し、他はナデである。外口径45cm、内口径43.6cm、胴部突帯径54cm、底径11.8cm、器高67.2cmをはかる。器色暗赤褐色を呈し、胴下半に黒斑がある。胎土密、焼成堅緻である。

上甕は下甕と同様に口縁部が「く」字形に強く屈曲する中型甕である。口縁下に1条の三角突帯を付す。胴部は下半部がよくしまり、中位には2条の「コ」字形突帯をめぐらす。器面調整は口縁外面横ナデで内面に荒い横刷毛目を残す。また胴部外面下半は縦刷毛目調整後ナデを施す。外口径45cm、内口径36cm、胴部突帯径51.5cm、底部径9.5cm、器高68cmをはかる。器色淡黄灰～淡赤褐色を呈し、胎土に細砂の混入が多い。焼成はやや軟質である。

ＳＫ37甕棺（Fig.22、PL. 9）

墓地東端部に位置する大型の単式甕棺である。墓壙状態から木蓋使用が考えられる。

棺は非常に大型の甕で、口縁外唇部の発達が良好である。口縁上端部は僅に内傾する。また口縁直下に低い三角突帯1条を付す。また胴部は中位突帯部以上が緩く内傾気味に立あがる。胴部突帯はやや下向きである。底部外面はやや窪む。器面調整は口縁、胴部突帯部で横ナデを施す。外口径75cm、内口径59.5cm、胴部突帯径78cm、底部径12.3cm、器高11.6cm

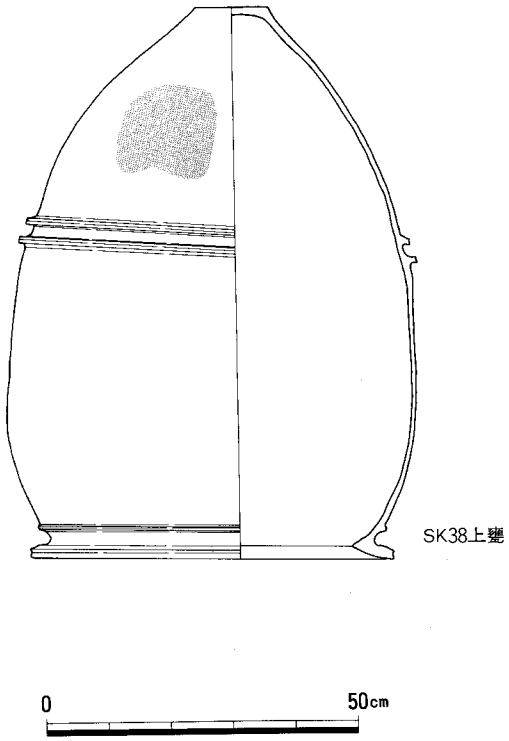


Fig.23　SK38甕棺実測図（1／12）

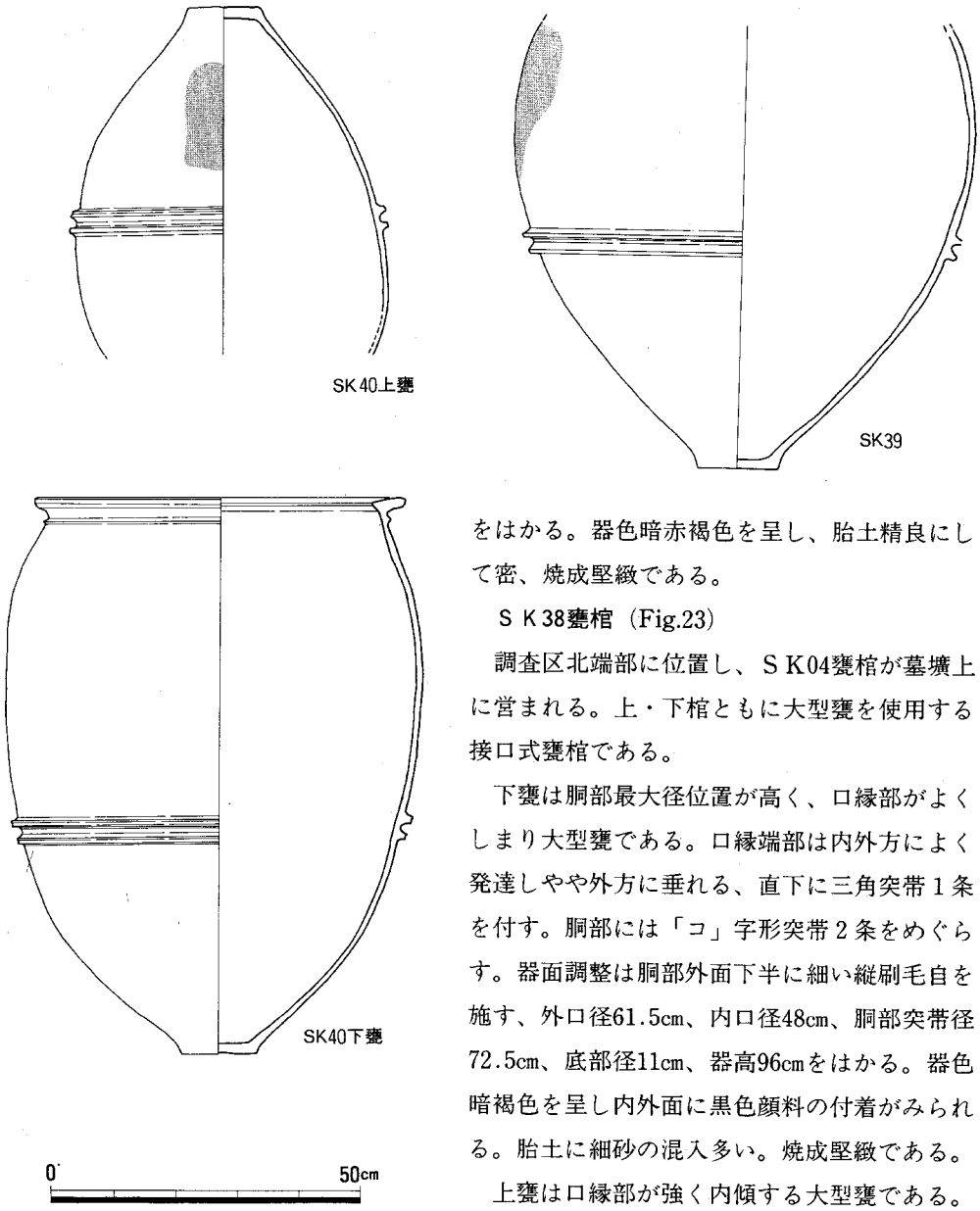


Fig.24　SK39・40甕棺実測図（1／12）

をはかる。器色暗赤褐色を呈し、胎土精良にして密、焼成堅緻である。

ＳＫ38甕棺（Fig.23）

調査区北端部に位置し、ＳＫ04甕棺が墓壙上に営まれる。上・下棺ともに大型甕を使用する接口式甕棺である。

下甕は胴部最大径位置が高く、口縁部がよくしまり大型甕である。口縁端部は内外方によく発達しやや外方に垂れる、直下に三角突帯１条を付す。胴部には「コ」字形突帯２条をめぐらす。器面調整は胴部外面下半に細い縦刷毛目を施す、外口径61.5cm、内口径48cm、胴部突帯径72.5cm、底部径11cm、器高96cmをはかる。器色暗褐色を呈し内外面に黒色顔料の付着がみられる。胎土に細砂の混入多い。焼成堅緻である。

上甕は口縁部が強く内傾する大型甕である。内面端部は鋭く尖る。体部中央よりやや下った位置に２条の高い「コ」字形突帯をめぐらす。外口径58cm、内口径46cm、胴部突帯径64.5cm、残存高80cmをはかる。器色暗褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

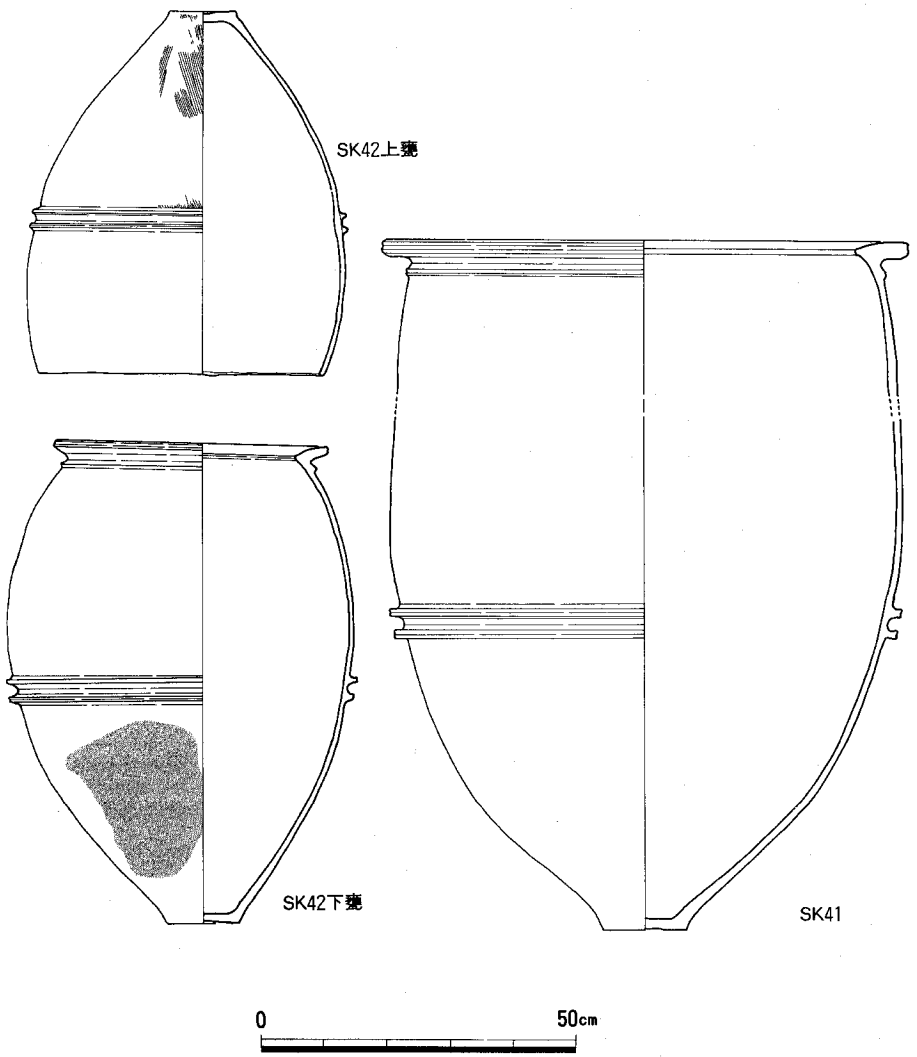


Fig.25　SK41・42甕棺実測図（1／12）

ＳＫ39甕棺（Fig.24）

墓地北端部に位置し、近代の削平によって胴部上端、口縁部を失う。胴部最大径は胴上半部にあり、突帯は中位よりやや下にあって「コ」字形突帯２条をめぐらす。底部は安定した平底をなす。器面調整は器表の荒れが著しいが突帯部横ナデ、他はナデによる。胴部最大径73.5cm、胴部突帯71.3cm、底部径13cm、残存器高72cmをはかる。器色淡褐～暗赤褐色を呈し、胎土に粗砂を多く混入。焼成軟質である。

ＳＫ40甕棺（Fig.24、PL. 10）

調査区西端中央に位置する接口甕棺である。上棺に中型甕の打欠きおよび下棺に大型甕を使用する。

下甕は全体的に胴部のしまりの少ない大型甕で口縁部近くで緩く内傾する。口縁は比較的短く、「く」字形を呈する。口縁直下に１条の三角突帯を付し、胴部中位よりやや下部に「コ」字形突帯２条をめぐせらす。器面調整は突帯部に横ナデを残す、外口径59.6cm、内口径49cm、胴部突帯64.7cm、底部径12cm、器高90.2cm、をはかる。器色淡色赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

上甕は胴部中位よりやや下った位置に２条の「コ」字形突帯をめぐらす中型甕である。器面調整は突帯部の強い横ナデ以外は全て不定方向のナデによる。胴部最大径49.8cm、胴部突帯径51.5cm、底部径12cm、残存高56.5cmをはかる。器色は淡赤褐色を呈し，胴部下半に黒斑が残る。胎土は細砂を含み密、焼成は堅緻である。

ＳＫ41甕棺（Fig.25、PL10）

調査区北端に位置し、第１号古墳周溝およびＳＨ15土壙による破壊を蒙っている

棺は胴部中位に「コ」字形突帯２条をめぐらす大型甕で、肥厚する口縁は端部が外方によく発達し、やや内傾する。口縁直下に１条の「M」字形突帯を付す。全体的に安定感のある甕棺である。器面調整は口縁･突帯部横ナデで他はナデである。。外口径53.5cm、67cm、胴部突帯径81.5cm、底部径13.3cm、推定器高109.4cmをはかる。器色淡黄褐色を呈し、胎土粗砂の混入多い。焼成はやや軟質である。

ＳＫ42甕棺（Fig.25、PL. 11）

調査区南端部に位置する覆口式甕棺である。上・下棺は何れも中型の甕を使用し、上棺は口縁部打欠きである。

下甕は胴部上半部の内傾化がいちじるしく、口縁部は強く屈折して「く」字形を呈する。口縁端部は外方に伸び、直下に三角突帯１条を付す。また胴部中位にやや上向きの「コ」字形突帯２条をめぐらす。胴部突帯以下はよくしまり、底部は外面が剝落するが平底をなす。器面調整は突帯および口縁部に横ナデを施す以外は全てナデ調整による。外口径43.5cm、内口径32.3cm、胴部突帯径55.5cm、底部径11.3cm、器高76.2cmをはかる。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼

部堅緻である。

上甕は胴部中位に２条の「コ」字形突帯をめぐらす中型甕である。胴部突帯以上は内傾化し、胴部下半はよくしまる。底部は中央部が緩くくぼむ。器面調整は荒れのため不明な部分が多く、胴部突帯以下に荒い縦刷毛目を残し、内面はナデによる調整である。胴部突帯径50.1cm、底部径10.5cm、残存高57.9cm、をはかる。器色赤褐色を呈し、胎土に石英細砂の混入多い。焼成はやや軟質である。

ＳＫ43甕棺（Fig.26、PL. 11）

調査区南西端に位置し、ＳＫ28甕棺墓壙に近接する接口式甕棺である。上・下棺ともに大型の甕を使用する。

下甕は胴部突帯以上がほぼ垂直に立ちあがり、口縁部付近でやや外方に開く大型甕である。口縁部は内唇を欠失するが、全体に肥厚し、外唇は下方に垂れる。口縁下に１条の「コ」字形突帯を付す。また胴部突帯は中位よりやや下った位置にM字形に近い突帯２条をめぐらす。底部付近は急激に膨みを減じる。器面調整は内外面の口縁および突帯部に横ナデを施す以外はナデによる。外口径84cm、内口径74cm以下、胴部突帯径68cm、底部径11cm（計測値）、器高95.5cm（計測値）をはかる。器色暗赤褐

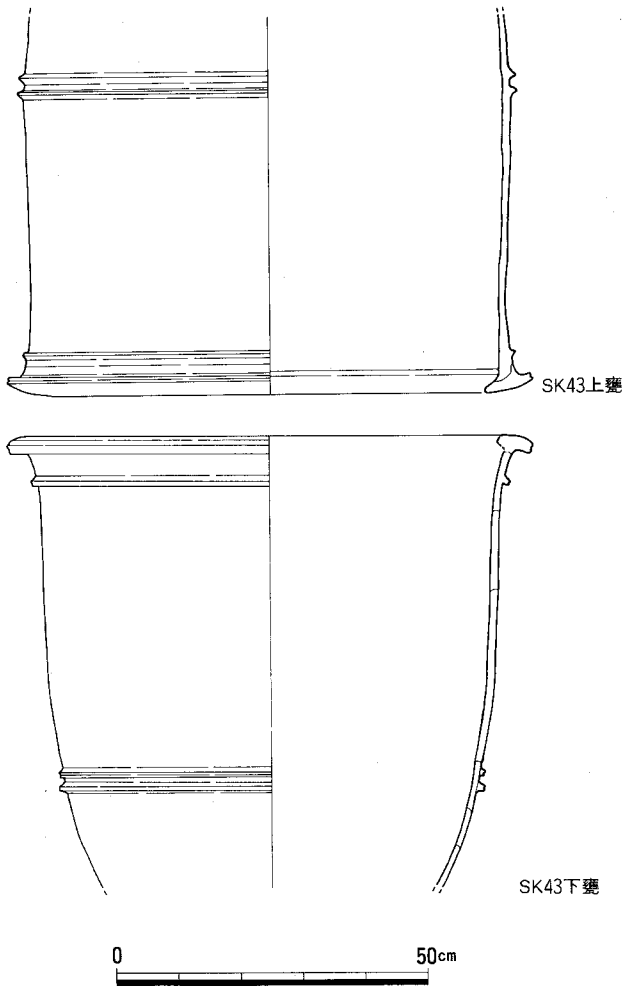


Fig.26　SK43棺実測図（1／12）

色を呈し、部分的に黒色顔料の付着がみられる。胎土精良にして密、焼成堅緻である。

上甕は胴部中位からほぼ垂直に立あがる大型甕である。口縁部付近は器壁が肥厚し、口縁端部は内外唇とも発達が良好である。口縁上端部は外方へ傾斜する。口縁下に1条の三角突帯を付し、胴部中位には2条の三角突帯をめぐらす。器面調整は口縁部・突帯部で横ナデ、他はナデを施す。外口径83.8cm、内口径68.4cm、胴部突帯径79.8cm残存器高60cmをはかる。器色暗褐色を呈し、胎土精良にして密、焼成堅緻である。

ＳＫ44甕棺（Fig.27、PL. 11）

墓地北西端部に位置し、ＳＫ40甕棺に近接する。墓壙上部は近代の削平によってかなり失われている。単棺の可能性がある。

棺は胴部突帯が中位よりかなり下った位置にある大型棺である。胴部はこれ以上でやや内傾気味に立あがる。口縁部は非常に肥厚し、外口唇端部は丸身をもち、内傾して「く」字形をなす。口縁直下に低い「コ」字形突帯1条を付す。また胴部突帯は2条で、やや下垂気味の「コ」字形をなす。底部は肥厚し、外面はやや窪み、緩いあげ底をなす。外口径58cm、内口径46cm、胴部突帯径65.5cm、底部径12cm、器高97cmをはかる。器色は暗赤褐～黄褐色を呈し、胎土に粗砂の混入多く粗、焼成は堅緻である。

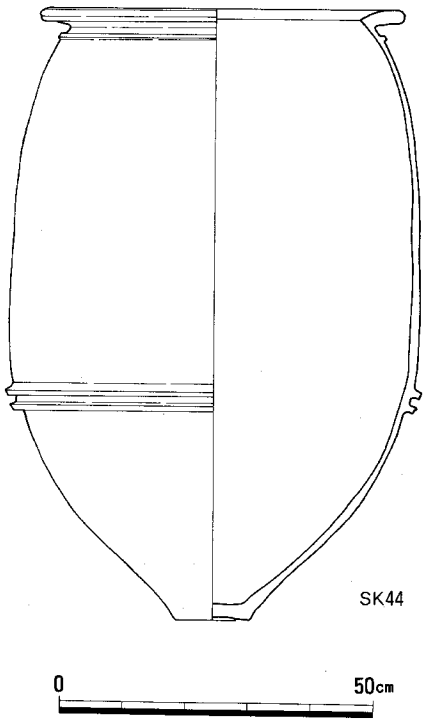


Fig.27　SK44甕棺実測図（1/12）

小児棺（Fig.28～30）

小児用と考えられる小型棺は７基（ＳＫ03・04・06・11・19・26・27）である。

ＳＫ03甕棺（Fig.28）　出土時の底部を見出し難く、同上半部を残す。口縁部は短く、直線的に外方に開く。口縁直下に１条の低い三角突帯を付す。器調整は口縁内外面に横ナデを施し、他は磨滅のため不祥である。外口径51cm、内口径42.4cm、残存高20.7cmをはかる。器色内外面ともに暗赤褐色を呈し、胎土粗、焼成は軟質である。

ＳＫ04甕棺（Fig.29）　近代の削平によって胴部中位以上を欠失する。残存する胴部は細身で底部からほぼ直線的に胴上部へ膨らむ。器面調整は内外面ともに剝落が著しいが、ナデである。

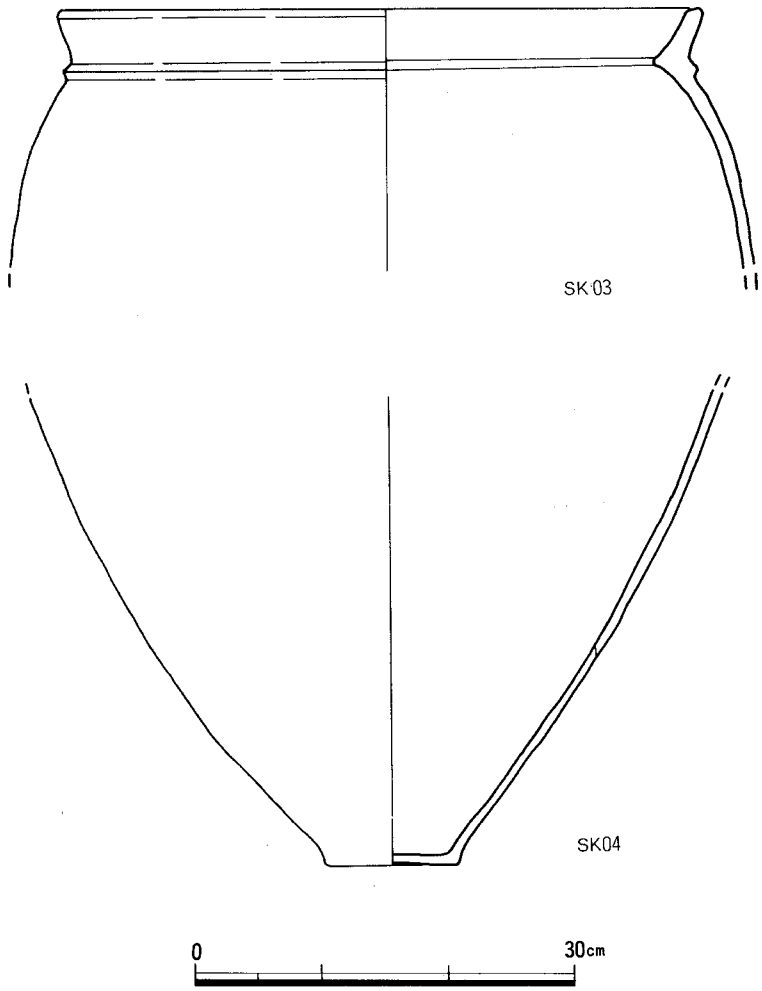


Fig.28　SK03・04甕棺実測図（1／6）

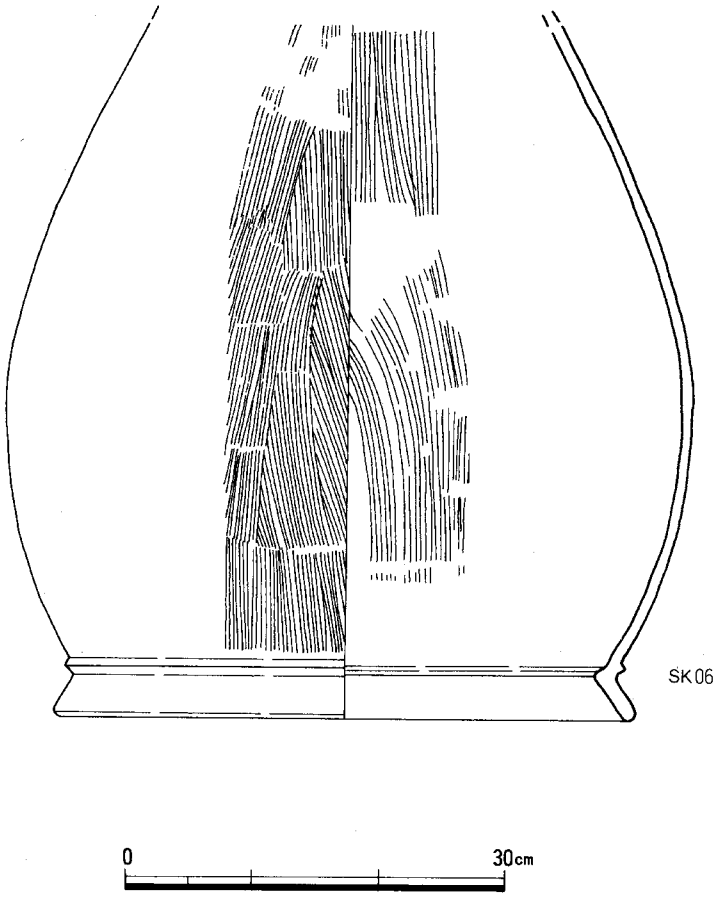


Fig29　SK06甕棺実測図（1／6）

底部径10.7cm、残存高37.2cmをはかる。器色内外面ともに赤褐色を呈し、胎土粗、焼成は軟質である。

ＳＫ06甕棺(Fig.29)　通常の倒置棺と様相を異にするが、甕口縁を倒立状態にして墓壙床面より40cm程上がった位置に埋置されている。棺は胴部最大径が上位にあり、これから内傾し、しまった位置に直線的に外方におれる「く」字形口縁を付す。口縁は短く、直下に1条の三角突帯をめぐらす。器面調整は口縁内外面横ナデ、胴部内面上部にナデ調整を施す以外はこれ以前の荒い縦刷毛目調整を残す。外口径45.8cm、内口径40cm、胴部最大径54.2cm、残存高54.8cmをはかる。器色は暗赤褐色を呈し、胎土粗、焼成軟質である。

ＳＫ11甕棺　中期後半ＳＫ12甕棺墓壙中に営まれたが後世の削平により胴部の一部しか残存しなかった。

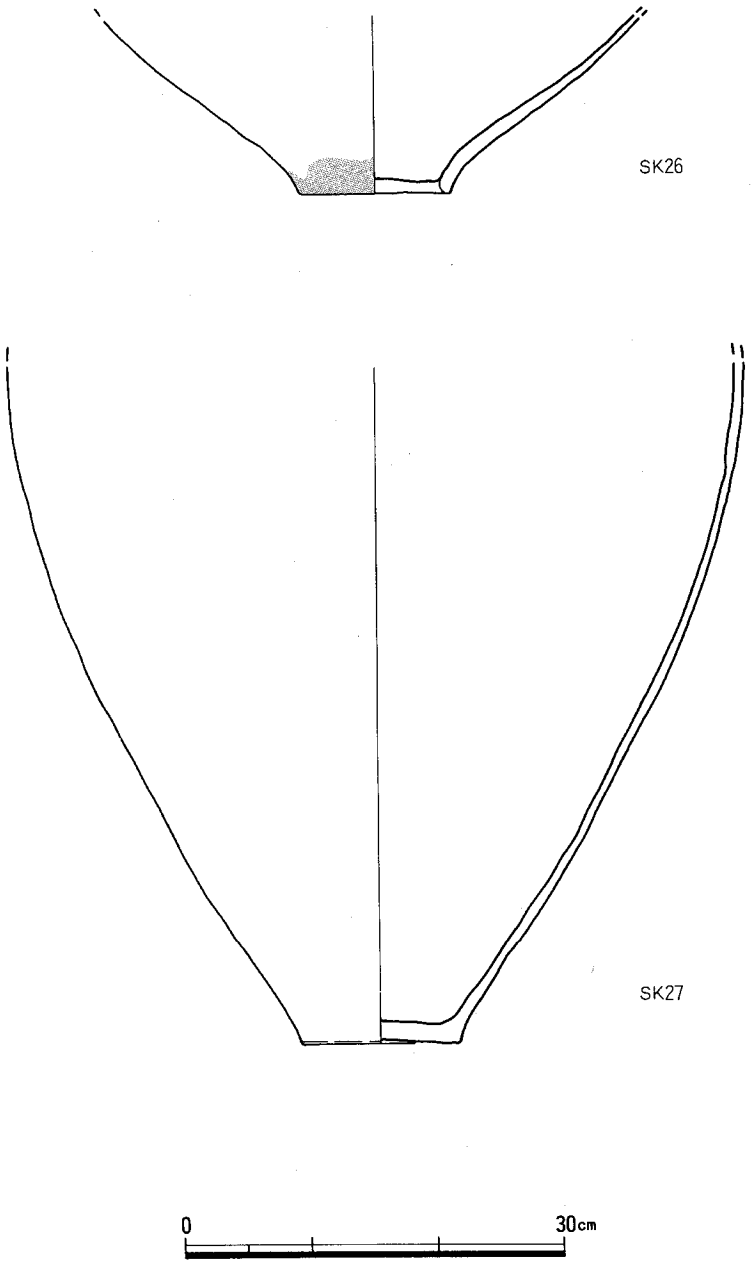


Fig.30　SK26・27甕棺実測図（1／6）

ＳＫ19甕棺　調査区西端部に位置し、上・下棺ともに小型の甕を使用する接口式甕棺であるが調査時の酷暑による乾燥で器面の剝落が著しく、図に供し得ない。時期的に中期前半か。

ＳＫ26甕棺（Fig.30）　調査区南端近くに位置する小児甕棺である。上棺は不明であるが下棺に壺形土器を使用する。壺は胴上半部を欠失するが、胴部の膨みは強く底部付近は良くしまる。器面調整は剝落のため不明である。底部径11.8、残存高14cmをはかる。

ＳＫ27甕棺（Fig.30、PL.7）　ＳＫ28甕棺の東側に隣接する甕棺で小児棺とし得るか明確ではない。棺は底部から膨らみ少なく、ほぼ直線的に立ちあがる胴部を有する中型甕である。底部は緩いあげ底となる、器面調整は内外面ともに不定方向のナデである。底部径12.5cm、残存高53.6cmをはかる。器色暗褐色を呈し、胎土やや粗、焼成やや軟質である。

甕棺出土遺物（Fig.31、巻頭図版）

第６次調査甕棺墓44基のうち棺内に副葬された遺物をもつのはＳＫ28甕棺のみである。

ＳＫ28甕棺に副葬された銅剣はほぼ完形である。剣身は鋒より刳方下部まで背に研出しによる明瞭な鎬を有し、これ以下は背部に鎬が及ばない。また刳方以下の両側辺にも緩く研ぎをかける。刳方上部・関両端部は研出しによって棘状に突出する。剣の法量は全長30.35cm、刳方部長3.3cm（幅員は上部突出部で3.4cm、中央部で3.25cm、下部で3.8cmをはかる）、茎長2.1cmはかる。また関部幅3.4cmであり、刳方下部が最も幅ひろい。重量204ｇである。更に出土時剣身の裏面には幅7～8mm程度の絹布が巻かれており、国産品の可能性が高い。また茎にも殆ど撚りのかからない絹が付着している。

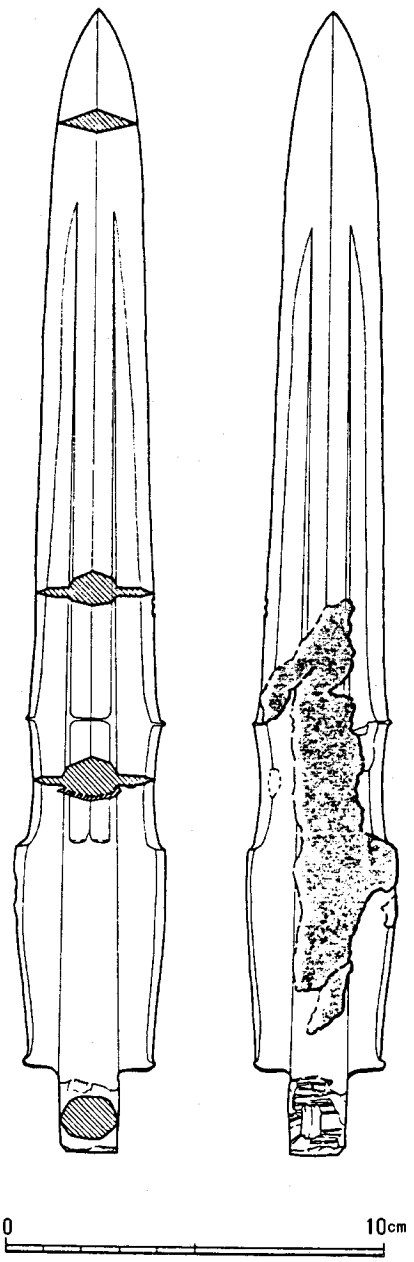


Fig.31　SK28出土銅剣実測図（1／2）

SK No.	挿図 図版 番号	合口型式	器形 上	器形 下	埋置 方位	埋置 角度	時期	備考
01	Fig. 2 PL. 3	接口式	甕	甕	N-66.5° -E	9°	中期前葉	
02	Fig. 3 PL. 3	〃	〃	〃	N-30.5° -W	0°	中期前葉	
03	Fig.28	?			N-82° -W	?	中期末	
04	Fig.28	?			N-116° -E	26°	中期末	
05	Fig. 4 PL. 4	接口式	鉢	甕	N-78° -E	3.5°	中期中葉	
06	Fig.29	単棺				76°	中期末	倒置棺？
07	Fig. 5	〃			N-112° -E	34°	中期末	
08	Fig. 5 PL. 4	接口式	甕	甕	N-89.5° -E	21°	中期末	
09	Fig. 6 PL. 4	覆口式	甕	甕	N-80.5° -E	31°	中期後葉	
10	Fig. 7 PL. 4	単棺			N-51° -E	37.5	中期後葉	
11		?			?	?		
12	Fig. 7 PL. 5	単棺			N-78.5° -E	26.5°	中期後葉	
13	Fig. 8 PL. 5	接口式	甕	甕	N-118° -E	36°	中期後葉	
14	Fig. 9 PL. 5	単棺			N-131.5°-E	31°	中期末	
15	Fig. 9	単棺(?)			N-78° -E	—	中期前葉？	
16	Fig. 9	?			N-3.5° -W		中期後葉	
17	Fig.10	接口式	甕	甕	N-67° -E	3.5°	中期前葉	
18	Fig.11 PL. 6	〃	鉢	甕	N-95° -E	29°	中期後葉	
19		〃	甕	甕	N-75° -E	?		
20	Fig.12 PL. 6	単棺(?)			N-5° -W	29°	中期後葉	
21	Fig.13 PL. 6	接口式	甕	甕	N-77° -E	36°	中期末	
22	Fig.14 PL. 7	呑口式(?)	甕	甕	N-36° -E	39°	中期末	
23	Fig.15	接口式	鉢	甕	N-96.5° -E	28.5°	中期中葉	
24		接口式(?)			N-52.5° -E	?	中期末	
25	Fig.16 PL. 8	接口式	甕	甕	N-74° -E	34°	中期後葉	
26	Fig.30	?			N-73° -E	53°		
27	Fig.30	?			N-9° -E	42°	後期初頭	
28	Fig.17 PL. 8	接口式	甕	甕	N-18.5°-W	0.5°	中期前葉	細形銅剣副葬
29	Fig.18 PL. 8	?			N-53° -E	45°	中期末	
30	Fig.18 PL. 9	単棺			N-128.5°-E	29°	中期末	
31	Fig.19	接口式	甕	甕	N-88.5° -E	7.5°	中期前葉	
32	Fig.20	?			N-56.5° -E	26°	中期末	
33	Fig.20	覆口式	甕(?)	甕	N-62.5° -E	46°	中期末	
34	Fig.21	?			N-58° -E	44°	中期末？	
35		?			——	?	?	墓壙のみ
36	Fig.21 PL. 9	接口式	甕	甕	N-59° -E	40°	後期初頭	
37	Fig.22 PL. 9	単棺			N-32° -W	37°	中期後葉	
38	Fig.23	接口式	甕	甕	N-9° -W	34°	中期後葉	
39	Fig.24	単棺(?)			N-130.5°-E	40°	中期後葉？	
40	Fig.24 PL.10	接口式	鉢(?)	甕	N-1.5°-W	21°	中期後葉	
41	Fig.25 PL.10	単棺(?)			N-91.5° -W	40°	中期後葉	
42	Fig.25 PL.11	覆口式	甕	甕	N-83° -E	30°	中期末	
43	Fig.26 PL.11	接口式	甕	甕	N-110.5°-W	39.5°	中期中葉	
44	Fig.27 PL.11	単棺(?)			N-127° -E	24°	中期末	

Tab. 1　甕棺墓一覧表

（２） 土壙墓出土遺物

土壙墓とした７基（ＳＸ01～07）のうち２基（ＳＸ02・03）は明らかに木棺痕跡が認められるが、他は詳にできない。また出土遺物は殆ど埋土内のもので明らかな副葬遺物は少ない。

ＳＸ01土壙墓（Fig.32・１）・１は口縁「く」字形をなす甕で、内外面ナデで赤褐色を呈する。他に弥生中期後半代甕、大型甕破片、丹塗り壺・高坏片および投弾など35点が出土した。

ＳＸ02土壙墓（Fig.32・２・３）、２は小型鉢で内外面ナデ調整を施し、器色淡赤褐色を呈する。３は端部が肥厚する器台で外面縦刷毛目・内面ヘラナデで端部を横ナデする。器色暗褐色を呈する。他に中期後半代の甕・壺破片が出土した。

ＳＸ03土壙墓（Fig.32・４・５、PL.２）墓壙上に中期後半甕棺墓ＳＫ16がありこれ以前の所産である。４は小さな平坦口縁を有する甕、５は頸部に１条の三角突帯を付す壺である。何れも弥生中期初頭の特徴を有する。更に他の出土々器には甕・蓋・鉢破片などがあって同時期の遺物で占められる。

ＳＸ04土壙墓（Fig.32・６・７・10、PL.12）６は口縁端部がやや肥厚する甕か。７は内外面ともに細かい刷毛目・ナデ調整を加えた土器で壺か。10は球状の胴部に短く、やや外開気味の口縁を有する小型壺である。器面赤褐色を呈し、口縁部横ナデ、胴部ヘラナデで、底部外端面には指オサエが残る。外底部には木葉痕がある。口径5.9cm、底径4.8cm、器高7.3cmである。

ＳＸ06土壙墓（Fig.32・８・９）　８は口縁端部が外方に開く甕か。器面赤褐色を呈し、内外面ナデ調整を施す。９は内外面に刷毛目調整を施す壺である。胴部上半には指おさえが残る。器色淡褐色を呈し、外面丹塗りか。他にも中期後半代と判断できる土器片が出土している。

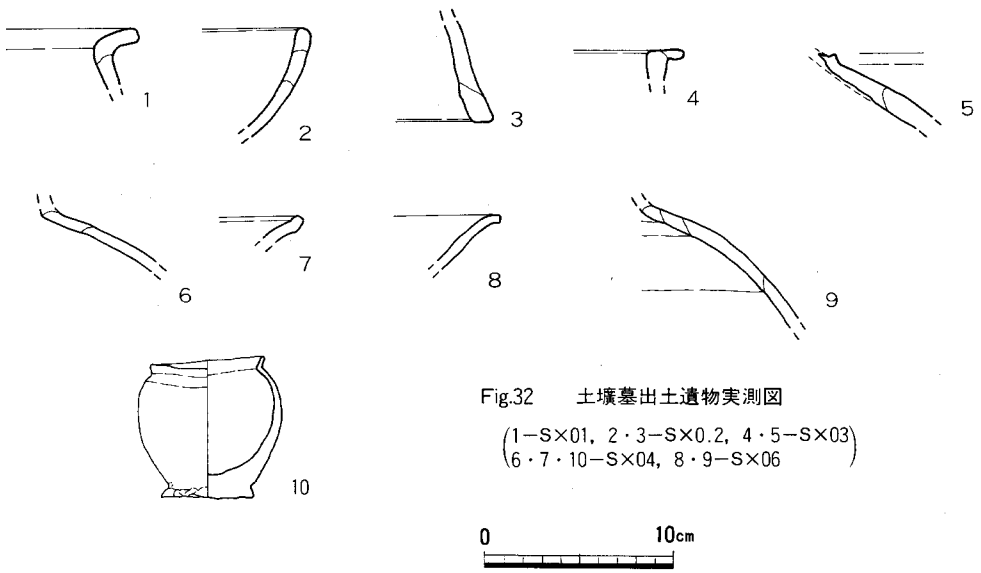


Fig.32　土壙墓出土遺物実測図

（1－S×01，2・3－S×0.2，4・5－S×03
6・7・10－S×04，8・9－S×06）

（３） 竪穴住居址出土遺物

竪穴住居地は計９軒が検出されたが、本来の平面形を遺すものは少なく、出土遺物の中でも土器細片が多い。ここでは当該住居址の時期を示すものを多く掲載し、他は記述にとどめることとする。

ＳＣ01住居址（Fig.34）

壁長が3.5×４ｍをはかる方形住居址で、覆土および中央炉址より遺物が出土した。覆土には内外面荒い刷毛目調整をもつ器台や口縁外端の発達の良好な甕形土器破片や小型投弾および**石製紡錘車**（Fig.37・17）がある。17は径3.8cm、孔径0.3cm、厚さ0.5cmをはかる滑石製である。孔は両面より穿たれる。炉址内では中期後半代の甕形土器片および鋤先状口縁を有する壺細片が出土した。

ＳＣ02住居址（Fig.33・34）

復原直径長が約７ｍ程度と考えられる円形住居址で建替えに伴う多数の主柱穴および覆土中から遺物細片が出土した。柱穴では合計16個から中期中葉とする丹塗り土器片が出土した。土器は口縁外端がよく発達し、口縁下に１条の三角突帯をめぐらす甕形土器や口縁がやや内傾した丹塗り磨研無頸壺や鉢がある。柱穴からはＰ418で**管玉**（Fig.33－32）やP428で**石鏃**（Fig.34－21）などが他に出土した。管玉は長さ1.25cm、径0.45cmをはかる碧玉製である。石鏃はほぼ五角形をなす黒曜石製で基部に近い部分の両面を局部的に研磨する。長さ3.5cm、最大幅1.7cm、厚さ0.7cmをはかる。

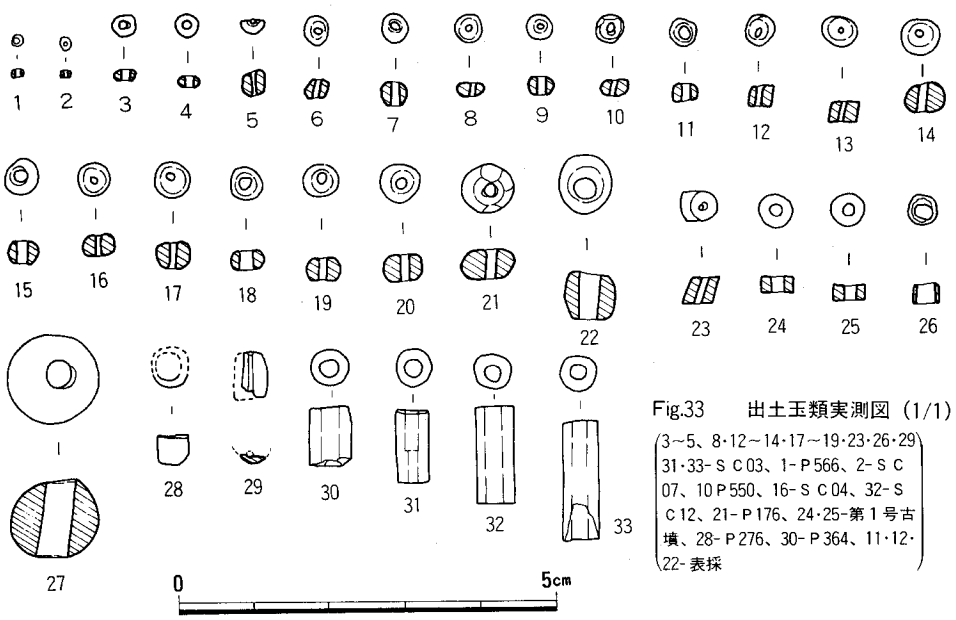


Fig.33　出土玉類実測図（1/1）
（3～5、8・12～14・17～19・23・26・29・31・33－ＳＣ03、1－Ｐ566、2－ＳＣ07、10Ｐ550、16－ＳＣ04、32－ＳＣ12、21－Ｐ176、24・25－第１号古墳、28－Ｐ276、30－Ｐ364、11・12・22－表採）

ＳＣ03住居址（Fig.33・34）

南・東辺長が6.2×7.2mをはかる方形住居址でＳＣ05住居址と重複し、ＳＤ04溝に切られる。覆土中から多くの土器片とともに土・石製品・玉類が出土した。

土器（Fig.34－１～７）　１は口縁が「く」字形に屈曲する甕で内外面板状工具によるナデ調整を施す。２は短い「く」字形口縁を有する甕で内外面ともに刷毛目調整である。３は小形壺で短い口縁が外方に開き端部は上・下とも突出する。口径10.8cmをはかり、器色淡赤褐色を呈し、内外面にナデ調整が残る。４は甕底部で線刻がある。５は短い口縁部がほぼ直立する甕で体部外面に非常に荒い斜めのタタキ痕をのこす。６は口縁直下に１条の三角突帯を付す甕で口縁の外開が大きく淡褐色を呈する。７は直口する鉢である。淡褐色を呈し、内外面ともにナデ調整となる。

石・土製器（Fig.34）　19は滑石礫に縦長の削りを加えた石錘未製品と考えられる。金属器による削りで自然面を残す。長・幅が6.8×1.9、厚さ1.6cmである。20は紡錘形をなし、長・短軸に溝のある石錘である。長・幅が3.1×1.6、厚さ1.4cmである。何れも滑石製である。

玉類（Fig・33）　ガラス小玉13個（３～５・７・８・12～14・17・19・23・26・29）でコバルトブルー色２を除けば他はスカイブルー色を呈する。丸玉１個(27)、淡緑色を呈する碧玉製管玉２個（31・33）であるが丸玉・管玉は床面近くで出土している。

ＳＣ04住居址（Fig.33・34）

壁長西・南が7.5×7.0m推定の方形をなす住居址で覆土中から遺物が出土した。**土器**(Fig.34)では８が内傾する胴部に短く、外反する口縁をもつ甕である。内外面ともに横ナデを施し、淡褐色である。９は口縁端部が丸い「く」字形口縁の甕で、淡褐色を呈し内外面ともにナデ調整である。他には身幅の狭い頁岩製の**石庖丁**、**小石刃**を使用する黒曜石製**突錐**（同図22）や**鉄鏃**先端と茎（同図23・24）がありこれらは接合可能であろう。またスカイブルー色ガラス小玉１（Fig.33・16）もある。

ＳＣ05～08住居址（Fig.33・34）

何れも遺存の悪い住居址である。ＳＣ05住居址では胴部下半に低い三角突帯を有する**壺**(Fig.34・10）やガラス**小玉**（Fig.33－６・15）などがある。SC06住居址では口縁を直線的に外反させ、端部を引出す甕や外面刷毛目調整を施した**器台**（Fig.34－11・12）がある。ＳＣ07住居址では内外面刷毛目調整による**中型壺**破片（Fig.34-13）と体部高4.5cm、刃部残長3.5cmを計る青銅製鋤先・土製有孔円盤・石製紡錘車ガラス**小玉**（Fig.33－９）などが出土した。ＳＣ08住居址は胴下半に低い刻目突帯を有する**壺**・内外面ナデ調整で淡褐色を呈する不安定な**壺**底部片(Fig.34－14・15）や径3.85cm、孔径0.55cm、厚さ0.55cmをはかる滑石製**紡錘車**がある（同図・16)。

竪穴住居址のうちＳＣ03住居址を中心として覆土中に玉類の出土が目立っているが（Fig.33)、他に柱穴（５点）や表面採集（３点）でも発見があり、弥生時代中期後半代と考えられるＳＣ02住居址出土の管玉を除けば時期的に弥生後期に含まれるものが殆どであろう。

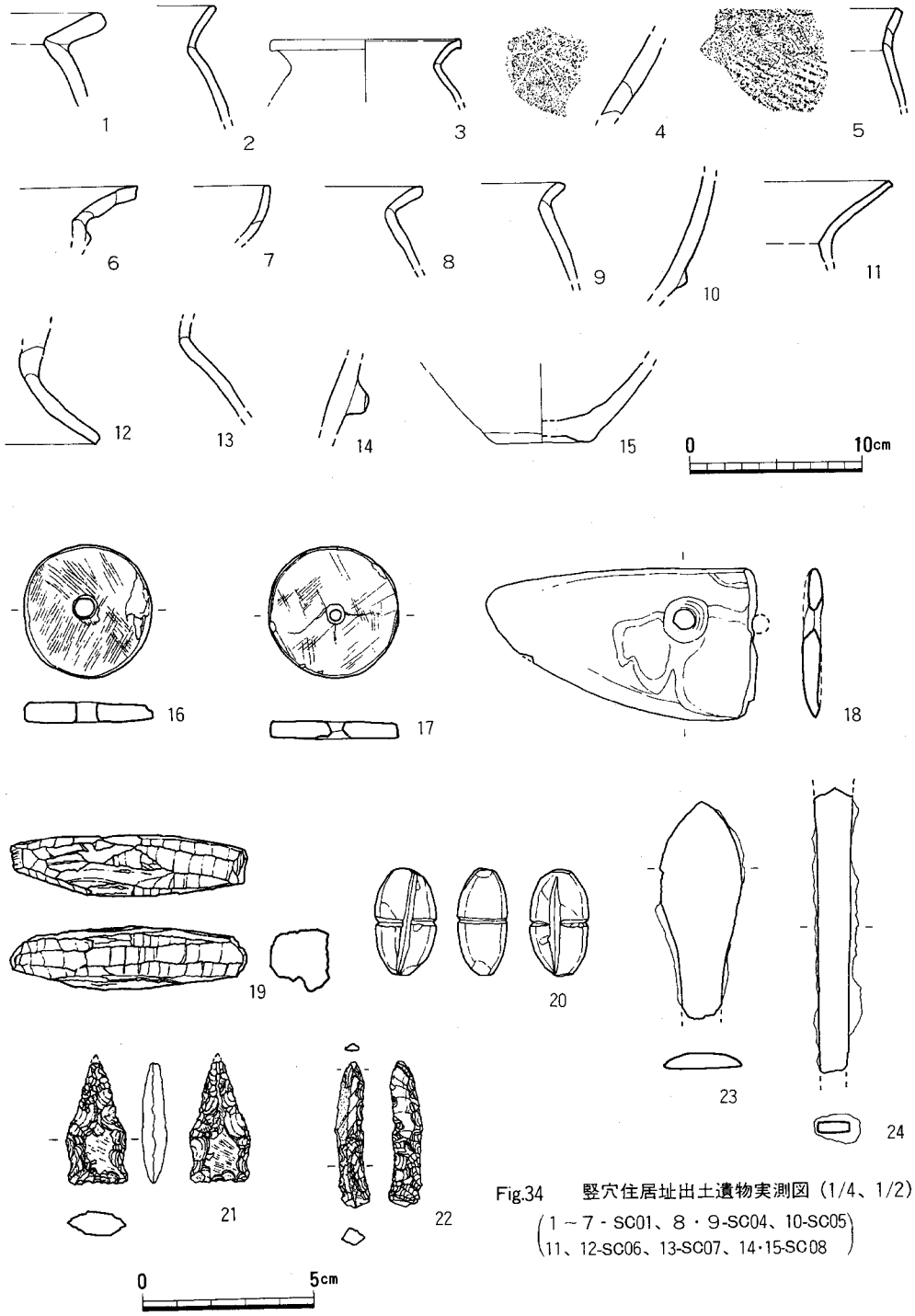


Fig.34　竪穴住居址出土遺物実測図（1/4、1/2）
（1～7・SC01、8・9-SC04、10-SC05
11、12-SC06、13-SC07、14・15-SC08）

（４） 掘立柱建物出土遺物

第６次調査で建物としてまとまるものは22棟（SB01～22）であるが、これらは特に調査区東半部に集中し、規模的に１×１間、１×２間、２×４間以上のものがみられる。また限定された調査区ではあるがその分布は２～３群に区別される可能性が高い。柱掘方内から出土した土器類には殆ど例外なく弥生中期前半～後半代の甕破片が含まれるが、他の遺物についても復原可能な破片が少なく、図化可能なものは僅かである。以下それぞれの建物掘方内出土遺物についてのべる。

ＳＢ01建物

調査区南端部で見付かった１×１間建物で柱穴４個のうち北東側柱穴掘方内より計54点の土器細片が出土した。土器は弥生中期後半の鋤先口縁を有する壺の他に弥生後期における器台端部片・頸部に段状をなす三角突帯を有する壺形土器片が出土した。

ＳＢ02建物（Fig.35・１）

調査区南端にあり１×２間以上の規模で３個の柱穴のうち北東隅柱穴掘方より計166点の土器細片が出土した。土器片には暗赤褐色を呈し、外面横タタキを有する甕形土器の他に頸部に荒い刻目突帯を施す壺がある（１）。内外面ともに淡黄色を呈し、胎土粗く、焼成は軟質である。調整は磨滅のため不明。

ＳＢ03建物（Fig.35・２）

調査区南側にある１×１間建物で３個の柱穴のうち、東側柱穴掘方より土器細片計126点が出土した。土器片は弥生中期後半代の甕形土器片が多く、これに混じて沓形器台片がある。２は器台頭部破片である。いびつなつくりで外面中央より片寄って穿孔がみられる。外面黒色・内面暗褐色を呈し、外面一部に荒いタタキを残し、他はナデている。胎土は粗く、焼成やや軟質である。

ＳＢ04建物

調査区北側にある１×２間建物で柱穴６個のうち南西隅柱穴掘方内より弥生中期前半代と考えられる平坦口縁甕形土器片が出土した。

ＳＢ05建物

調査区北側にある１×２間建物で柱穴６個のうち柱穴掘方４から計64点の土器片が出土した。この中には弥生中期後半代の丹塗り甕形土器片・胴部に「M」字形突帯を有する壺・小形甕形土器の他に口縁上端部が跳上げ状となる後期甕形土器細片もみられる。

ＳＢ06建物

調査区中央南側にある２×４間建物で柱穴８個のうち柱掘方８から99点の土器細片が出土した。土器片は殆どが弥生中期中葉～後半代の細片であるが、中には荒いタタキ調整後に縦に刷

毛目を加えた細片や器形が不詳ながら明らかに土師器と考えられる土器片も含まれる。

ＳＢ07建物（Fig.35・3・4）

調査区東部中央にある１×２間建物で柱掘方４より土器細片計36点が出土した。この中には弥生中期甕形土器片もあるが、３・４の様に壺形土器片がある。３は「コ」字形の低い突帯に右あがりの刻目を有する。外面黒斑・内面黄褐色を呈し、胎土粗、焼成堅緻である。４は胴部最大径よりやや下った位置に頭部の丸い突帯１条を付す壺で外面淡灰色、内面黄褐色を呈し、胎土粗、焼成軟質である。突帯部径27.6cmをはかる。

ＳＢ08建物

調査区南端にある１×２間建物で５個の柱穴のうち柱掘方４から計64点の土器・石製遺物が出土した。この中では弥生中期中葉～後半代の甕形・無頸壺などの破片があるが、他に滑石製の肉薄な有孔円盤片や弥生後期土器に通有の丸味をおびた平底の底部片がある。

ＳＢ09建物（Fig.35・5）

調査区南端にある１×２間建物で柱穴６のうち柱掘方４から土器片計17点が出土した。土器は弥生中期鉢形土器を含むものが殆どであるが他に５がある。５は内傾して「く」字形に曲がる口縁を有する甕である。器面調整は外面縦刷毛後に口縁横ナデで内面は強いナデを施す。器色は淡灰褐色を呈し、胎土粗、焼成はやや軟質である。口径18cm。

ＳＢ10建物

調査区東端にある１×１間以上の建物で柱穴４個のうち柱掘方１から弥生時代中～後期と考えられる土器細片４点が出土した。

ＳＢ11建物

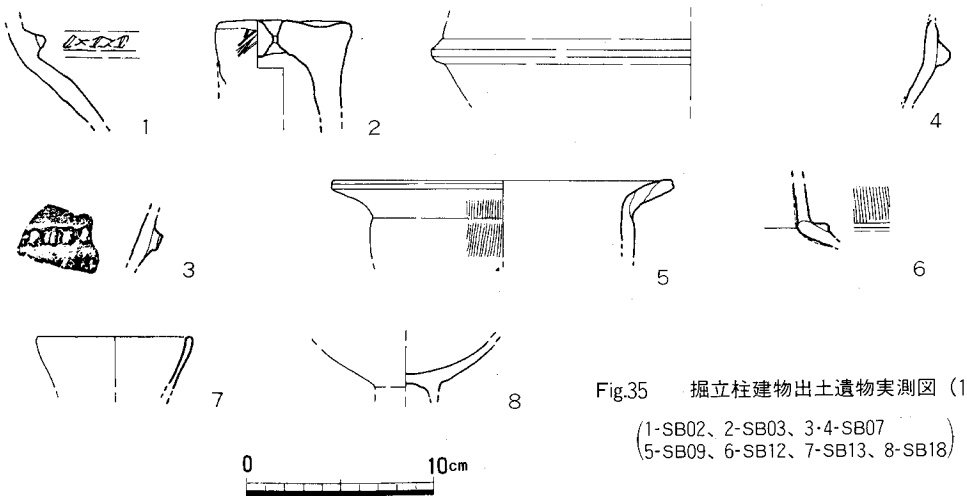


Fig.35　掘立柱建物出土遺物実測図（1/4）

（1-SB02、2-SB03、3･4-SB07
5-SB09、6-SB12、7-SB13、8-SB18）

調査区東端部にある１×１間建物で柱穴４個のうち柱掘方２から弥生後期土器片を主とする計39点が出土した。

ＳＢ12建物（Fig.35・６）

調査東端部にある１×２間建物で柱穴６個のうち柱掘方５から土器細片計35点が出土した。６は直立気味の頸部下端に段状の低い突帯を有する壺である。器面調整には内・外面ともに荒い刷毛目を施す。器色は暗赤褐色を呈し、胎土には粗砂多く、焼成軟質である。

ＳＢ13建物（Fig.35・７）

調査区東端部にある１×１間建物で柱穴４個の全ての柱掘方から計15点の遺物が出土した。土器片は弥生中～後期のものが多いと考えられる。７は小型壺の口縁部か。内弯気味に外反し、端部は若干肥厚する。外面淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成やや軟質である。口径８．２cmをはかる。

ＳＢ14建物

東端にある１×１間建物で柱穴４のうち柱掘方３から弥生中～後期にあたる甕・壺形土器計15点が出土した。

ＳＢ15建物

東端にある１×２間建物で柱掘方３個から弥生中～後期土器細片計18点が出土した。

ＳＢ16建物

東端にある２×３間規模と考えられる建物で柱掘方４個から弥生中期後半～後期に亘る壺・器台片35点が出土した。

ＳＢ17建物

東端にある１×２間以上の建物で柱掘方３個から弥生中～後期土器片計56点が出土した。

ＳＢ18建物（Fig.35・８）

東端にある桁行３間建物で掘方４個から弥生中～後期土器片計50点の他に８の脚付鉢がある。８は器表磨滅するが肉薄で淡灰褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

ＳＢ19建物

東端にある１×１間建物で柱掘方２個から弥生中～後期土器片計21点が出土した。

ＳＢ20建物

北端にある１×１間建物で柱掘方２個から弥生中期後半～後期に亘る土器細片計４６点が出土した。底部には不安定な平底を有する後期通有の破片もある。

ＳＢ21建物

北端にある１×１間建物で柱掘方の全てから弥生中～後期土器片計21点が出土した。

ＳＢ22建物

北端にある１×２間建物と考えられ、柱掘方４個から弥生中～後期土器計57点が出土。

（５） 井戸址出土遺物

第６次調査では50基（ＳＥ01－50）の井戸址を検出した。これらの井戸の形態・構造等については、すでに報告を行なっているので改めて述べることはしない。ここでは井戸址から出土した遺物を、1)土器、2)土製品、3)石器、4)木器に分けて観察する。なお土器については井戸ごとにまとめたが、他は器種ごとにまとめ、出土井戸址についてはTab.2に示した。

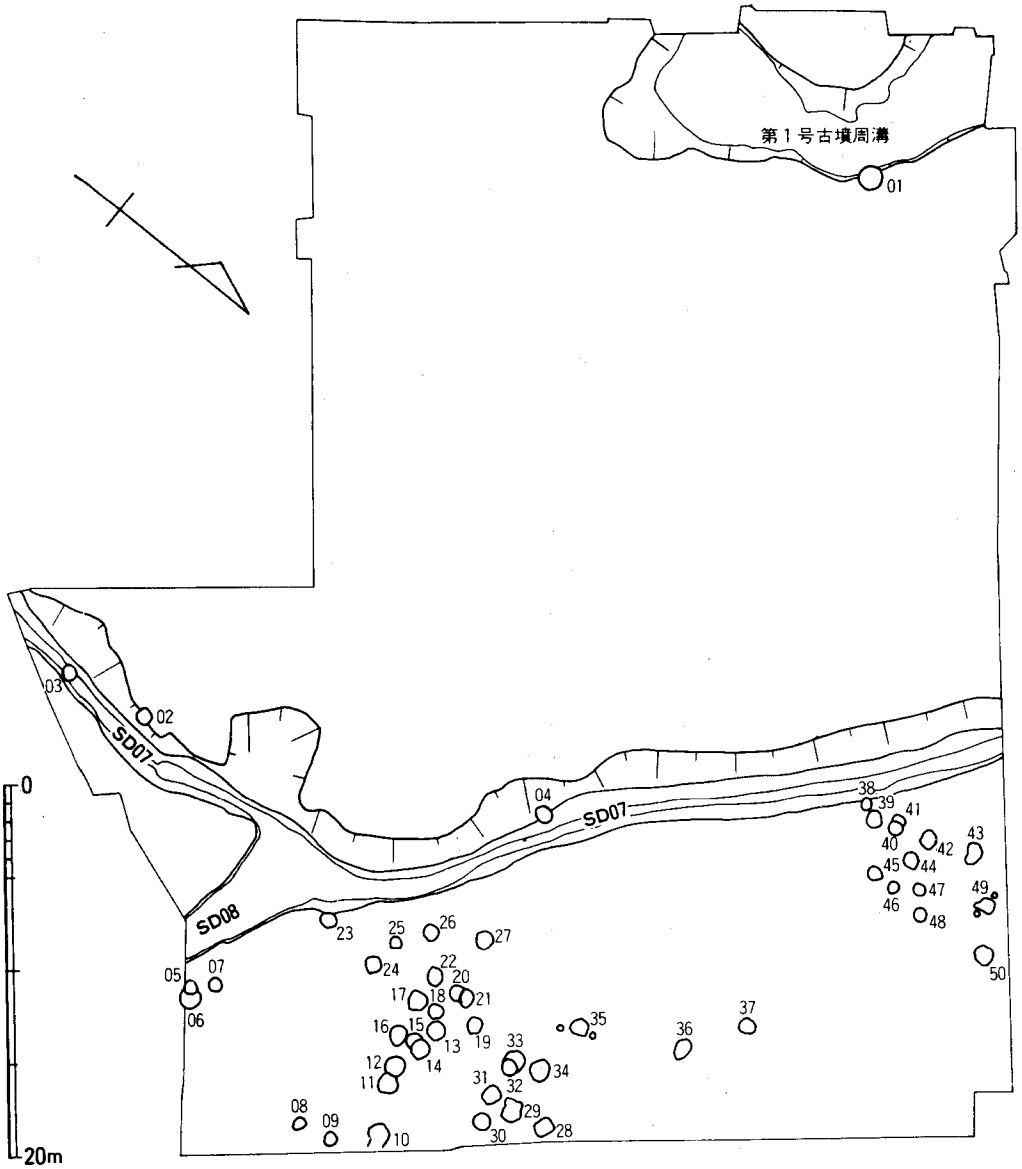


Fig.36　井戸址分布図（1／400）

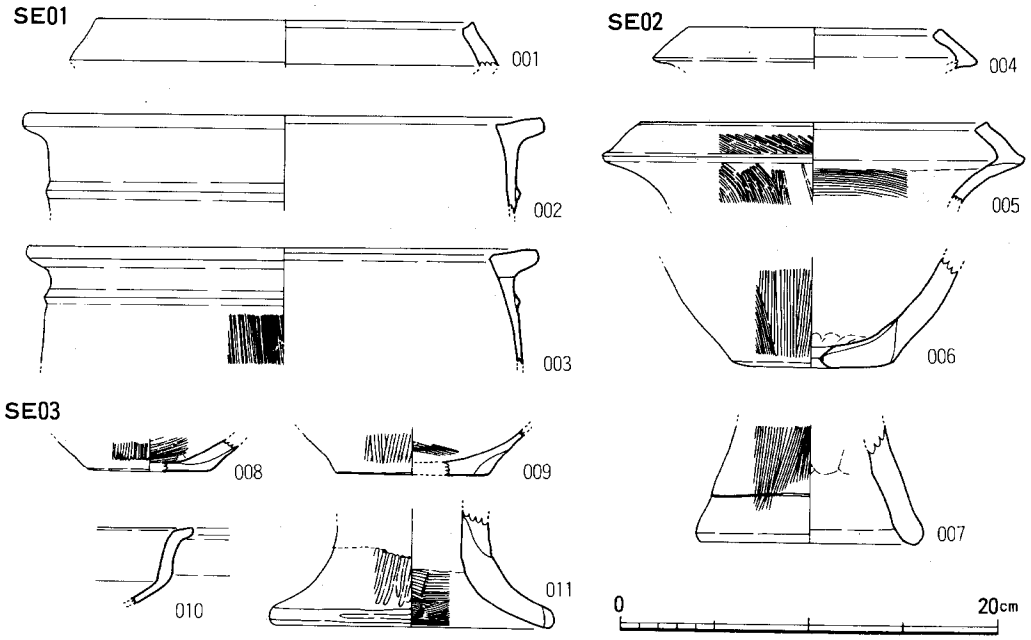


Fig.37　SE01・02・03出土土器実測図（1／4）

1）　土器

ＳＥ01（Fig.36、001－003）　001は複合口縁壺片で、口縁上半部が直線的に内傾する。残存部はナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、黄褐色を呈する。002・003は、上面が内傾する逆Ｌ字状口縁の甕形土器で、口縁下には三角凸帯をめぐらす。001より古く、弥生時代中期に属するものである。001～003のいずれも覆土上層からの出土である。

ＳＥ02（Fig.36、004－007）　004・005は複合口縁壺片である。口縁上半部が直線的に内傾する類のものであるが、005はやや外に膨らむ。調整は004が横ナデ、005の外面はヘラ研磨、内面上半部はナデ、下半部は刷毛目。砂粒を多く混えた胎土で、004が黄褐色、005が黄白色を呈する。005には丹塗りの痕跡がみられる。006は甕形土器片で、底部に穿孔を行なっている。底部の境はやや不明瞭となる。胴部外面刷毛目、内面および底面はナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、赤褐色をなす。007は器台片で、底部近くに一条の沈線をめぐらす。砂粒混りの胎土で、黄褐色を呈する。すべて下層出土。

ＳＥ03（Fig.36、008－011）　008は壺形土器の底部で、胴部との境はわずかに丸みをおびる。胴部外面ヘラ研磨、内面刷毛目、底面はナデ調整。砂粒を混えた胎土で、黄褐色。009は甕形土器の底部で、内底には炭化物が付着する。調整は底面も含め刷毛目。胎土には砂粒を混え、黄褐色～赤褐色を呈する。010は高杯片である。杯上半部は外傾し、口縁部は外に引き出される。内外面ともヘラ研磨。精良な胎土で、淡赤褐色～黄白色。丹塗りの痕跡が認められる。011は器

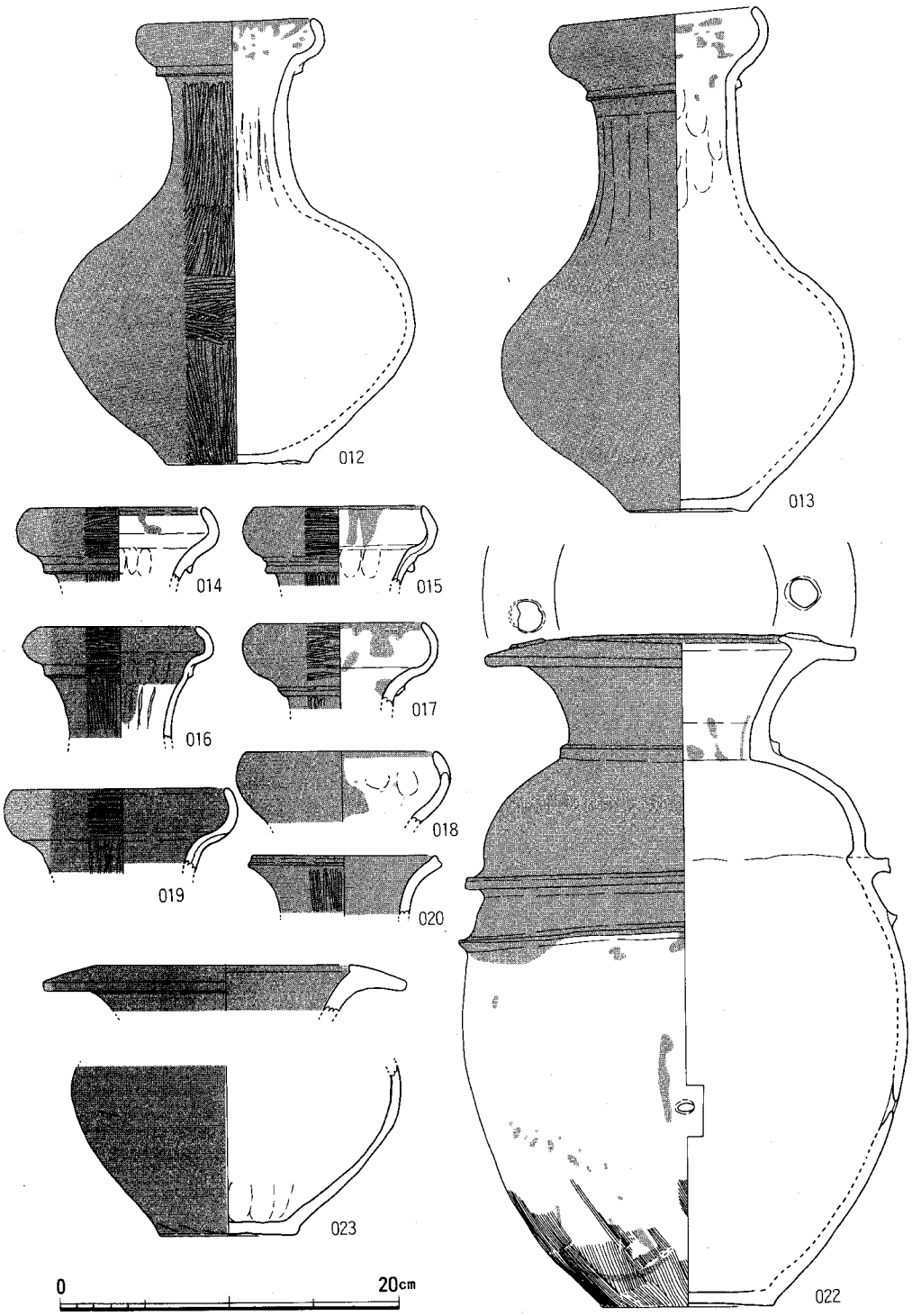


Fig.38　SE04出土土器実測図Ⅰ（1／4）

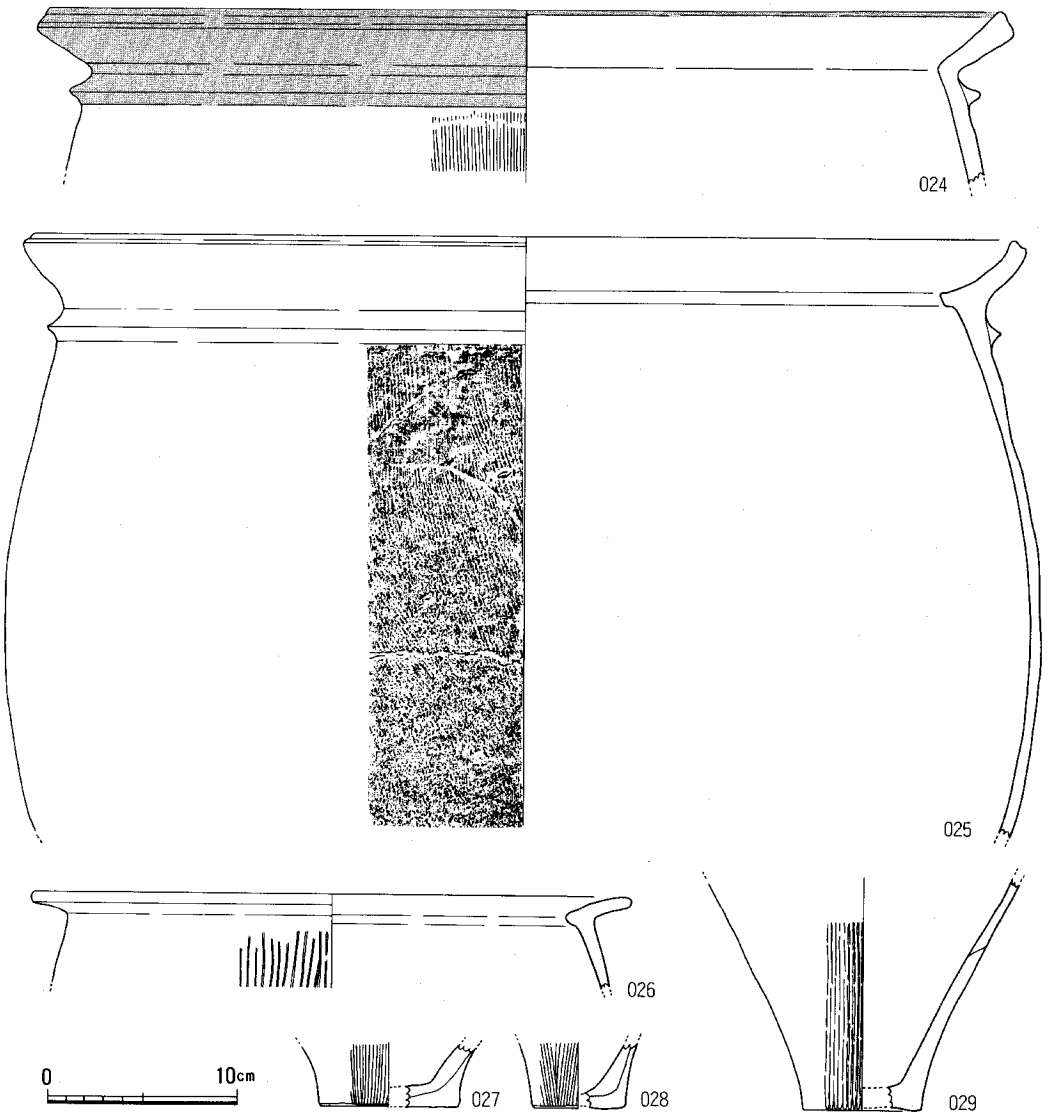


Fig.39　SE04出土土器実測図II（1／4）

台片で、外面ヘラ研磨、内面刷毛目調整を行なう。砂粒を混えた胎土で、おおむね赤褐色を呈する。

ＳＥ04（Fig.36･37）　012～019は袋状口縁壺である。口縁部は丸みをもって内湾し頸部は細長くしまり、また胴部は横に大きく張り、安定した底部へとすぼむ。口縁下に三角凸帯をめぐらすもの（012－017）とないもの（018・019）がみられる。外面の調整はヘラ研磨を行なうものがほとんどであるが、012･018の口縁部は丁寧なナデを行なっている。また013はヘラ研磨を

ナデ消している。内面はナデ調整で、頸部にはしぼり痕が残るものと、013のように指ナデで消すものがある。外面および口唇部に丹塗りを施すが、一部は垂下し、内面や底面に付着する。013では、口縁部上半と胴部最大径付近に二度塗りしている。微砂粒を混えた精良な胎土を用い、焼成良好、内面は淡赤褐色を呈する。012の口径10.0cm、器高26.3cm。013の口径11.5cm、器高29.7cm。013の凸帯下には細縄状のもの(PL.30)が巻き結ばれており、釣瓶として使用された可能性が高い。

020は広口壺であろう。口唇部は横ナデでくぼむ。外面はヘラ研磨調整で、丹塗り。精良な胎土を使用している。021は鋤状口縁をもつ壺形土器である。残存部は横ナデ調整。内外面とも丹塗りで、特に内面には厚く塗られている。胎土は精良。022はいわゆる瓢形土器である。鋤状口縁をもつ壺形土器と、逆L字状口縁の甕形土器が合わさった形態をなす。口縁部上面には円形浮文を2個対称に貼り付ける。器面の調整は横ナデを主とするが、外面胴部最大径以下には刷毛目が残る。口縁部から外面胴上半部にかけては丹塗り。精良な胎土を用い、焼成はきわめて良好、丹塗り部分以外は赤褐色を呈する。口径22.0cm、器高44.0cm。胴部下半に穿孔がある。023はおそらく袋状口縁壺の底部であろう。わずかにあげ底をなす。内外面とも横ナデ調整で、外面は丹塗り。精良な胎土を用い、内面淡褐色をなす。

024・025は口径50cmを越える中型の甕形土器である。024は内面の稜が明確でないくの字状口縁部を、また025はくの字状を呈するが、内湾して下端が内側に突き出す口縁部をもつ。口縁下には三角凸帯をめぐらす。胴部外面は刷毛目調整。024は口唇部から外面にかけて丹塗り。ともに砂粒混りの胎土で、024が黄褐色、025が褐色を呈する。025の外面は煤の付着が著しい。026は内傾する逆L字状口縁をもつ甕形土器である。胴部外面は刷毛目調整。胎土には砂粒を多量に混え、暗赤褐色～暗褐色をなす。027～029は甕形土器の底部で、028・029は締りがよい。外面は刷毛目調整であるが、029の上位は横ナデを行う。028・029の外面は丹塗り。胎土は027・028が砂粒混り、029が精良。色調は027が淡黒褐色、028・029が暗赤褐色。027の内底には炭化物が付着している。

以上述べた土器のうち、012・013・021～024・029は井戸底からの出土である。

ＳＥ05(Fig.38、030)　口径23.0cm、器高40.9cmの複合口縁壺である。口縁上半部は直線的に内傾するがその角度は小さい。下半部との稜線上に刻目を施す。頸部付根と胴部中位には凸帯をめぐらし、胴部凸帯上には刻目を入れる。底部は丸底をなす。口縁下半部から胴部中位にかけて、内外面とも刷毛目調整を行なう他、口縁部刻目下にはヘラ研磨が認められる。他はナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、焼成はやや脆弱、淡赤褐色を呈する。ＳＥ05からの出土遺物はこの１点だけである。

ＳＥ06(Fig.38、031～034)　031・032は複合口縁壺である。031が大きく内傾し、端部が尖るのに対し、032は直線的に内傾するもののその角度は小さい。031は口縁下半部に、032は外面口

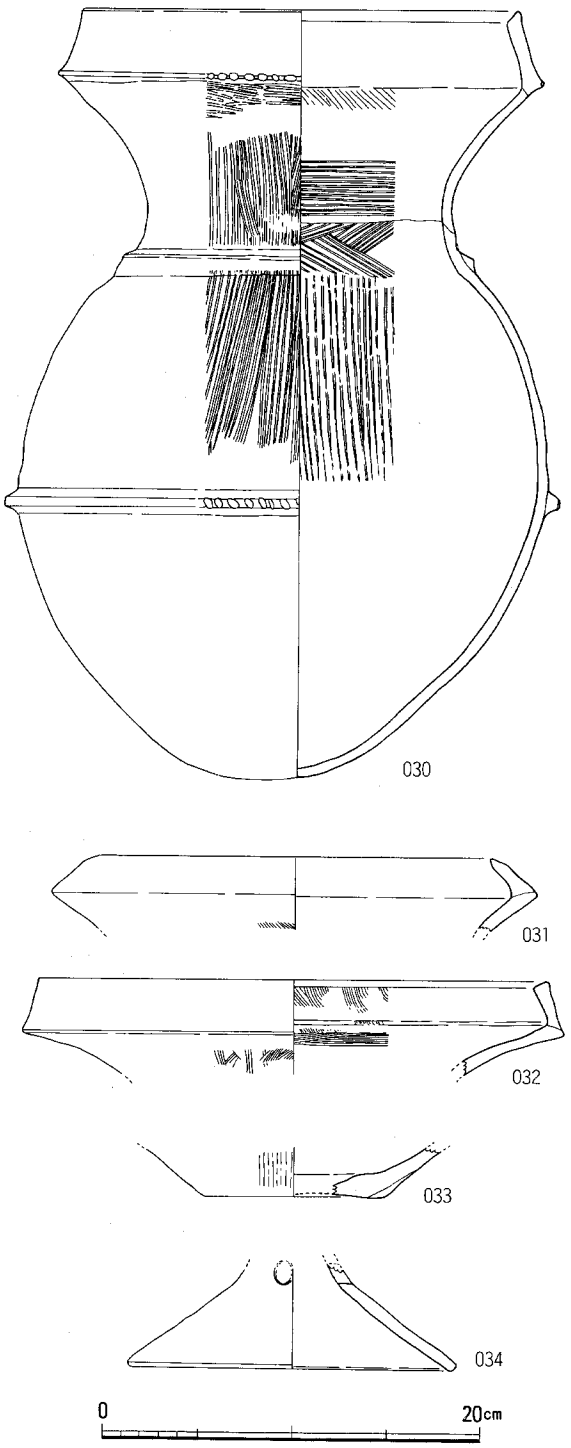


Fig.40　SE05・06出土土器実測図（1／4）

縁下半部と内面に刷毛目調整を行なう。また032は丹の痕跡が認められる。ともに砂粒混りの胎土で、淡赤褐色を主としてなす。033は壺形土器の底部であろう。胴部との境はわずかに丸みをおびる。外面にのみ刷毛目調整。胎土には多量の砂粒を混え、赤褐色を呈する。034は高杯脚部片で、筒部との境に透孔を設ける。ナデ調整。砂粒混りの胎土で、黄褐色を呈する。

ＳＥ07（Fig.39）　035は短頸壺である。頸部は直立し、口縁部がわずかに外反する。胴部はやや下膨らみの扁球形をなし、底部は丸底を呈する。胴部外面はヘラ研磨、内面は刷毛目により調整を行なう。精良な胎土で、黄褐色。口径11.4cm、器高16.1cm。036は広口壺である。外面および口頸部内面はナデで仕上げ、胴部内面は刷毛目調整を行なう。胎土には砂粒を多く混え、明黄褐色。037は注口をもつ壺形土器である。やや下膨れの胴部下半に穿孔し、注口部分を取り付けるものだが、その部分は欠損している。本体の口縁部は緩く外反し、また底部は小さな平底をなす。胴部外面の調整は上半部が刷毛目、下半部がヘラ研磨。精良な胎土を用い、黄褐色を呈する。口径8.6cm、器高9.4cm。

038・039はやや長めの胴部から口縁部が外反する甕形土器である。胴部は張りが小さく、最大径をほぼ中位にもつ。038は小さな平底を呈する。調整は038の場合、胴部中位までが刷毛目、下位が強いヘラナデ、内面が刷毛目で行なう。038の口径22.4cm、器高35.2cm。040は胴部上位に最大径をもつ甕形土器で、口縁部は外反し、口唇は丸くおさめる。底部は小さな平底を作る。胴部外面は叩き、内面は斜刷毛目調整。口径20.4cm、器高28.4cm。041は球形状の胴部から口縁部が短く外反する甕形

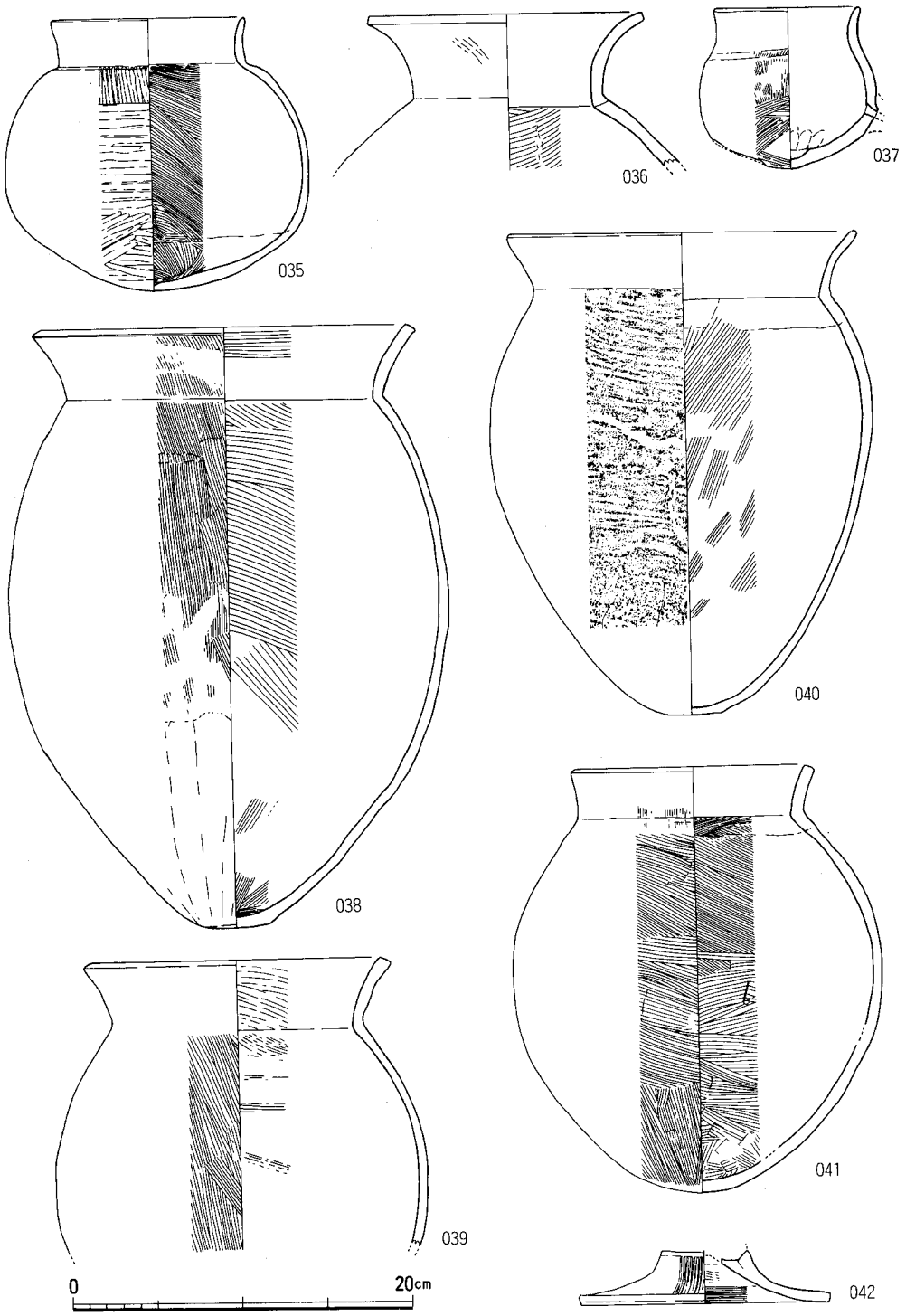


Fig.41　SE07出土土器実測図（1／4）

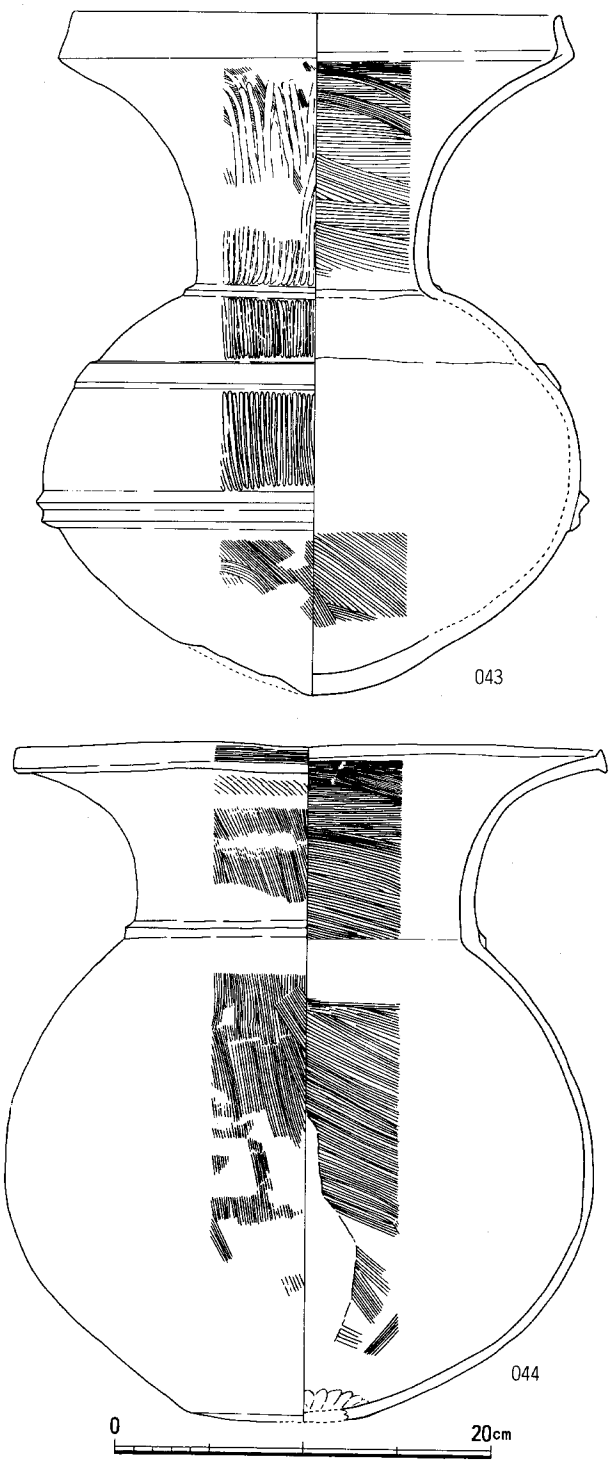


Fig.42　SE09出土土器実測図（1／4）

土器である。底部は丸底をなす。口縁部・底部を除き刷毛目調整。口 径14.4cm、器 高25.1cm。038～041の甕形土器は、いずれも胎土に多量の砂粒を混える。色調は039が褐色、他は黄褐色を主とする。038～040の外面には煤が付着し、039・040には赤変部分も認められる。また038・040の内底には炭化物が付着する。

042は鉢の類の脚台であろう。底部に向かって大きく開く。外面ヘラ研磨、内面刷毛目調整。砂粒混りの胎土で、赤みをおびた黄褐色を呈する。底径14.6cm。

以上述べた土器のうち、035・037・038・041は、井戸底からの出土である。

ＳＥ08　複合口縁壺片などが約50点ほど出土しているが、細片のため実測不可能であった。

ＳＥ09（Fig.42）　043は複合口縁壺である。口縁部は直線的にわずかに内傾し頸部は締まる。胴部はやや下膨れの扁球形をなし、底部は緩い丸底。頸部の付根に三角凸帯、胴部上位に幅広の凸帯、胴最大径部に幅広のM字状凸帯をめぐらす。調整は外面口頸部から胴部上半がヘラ研磨、下半が刷毛目。内面は口頸部と胴部下半に刷毛目。比較的精良な胎土で、淡黄褐色を呈す

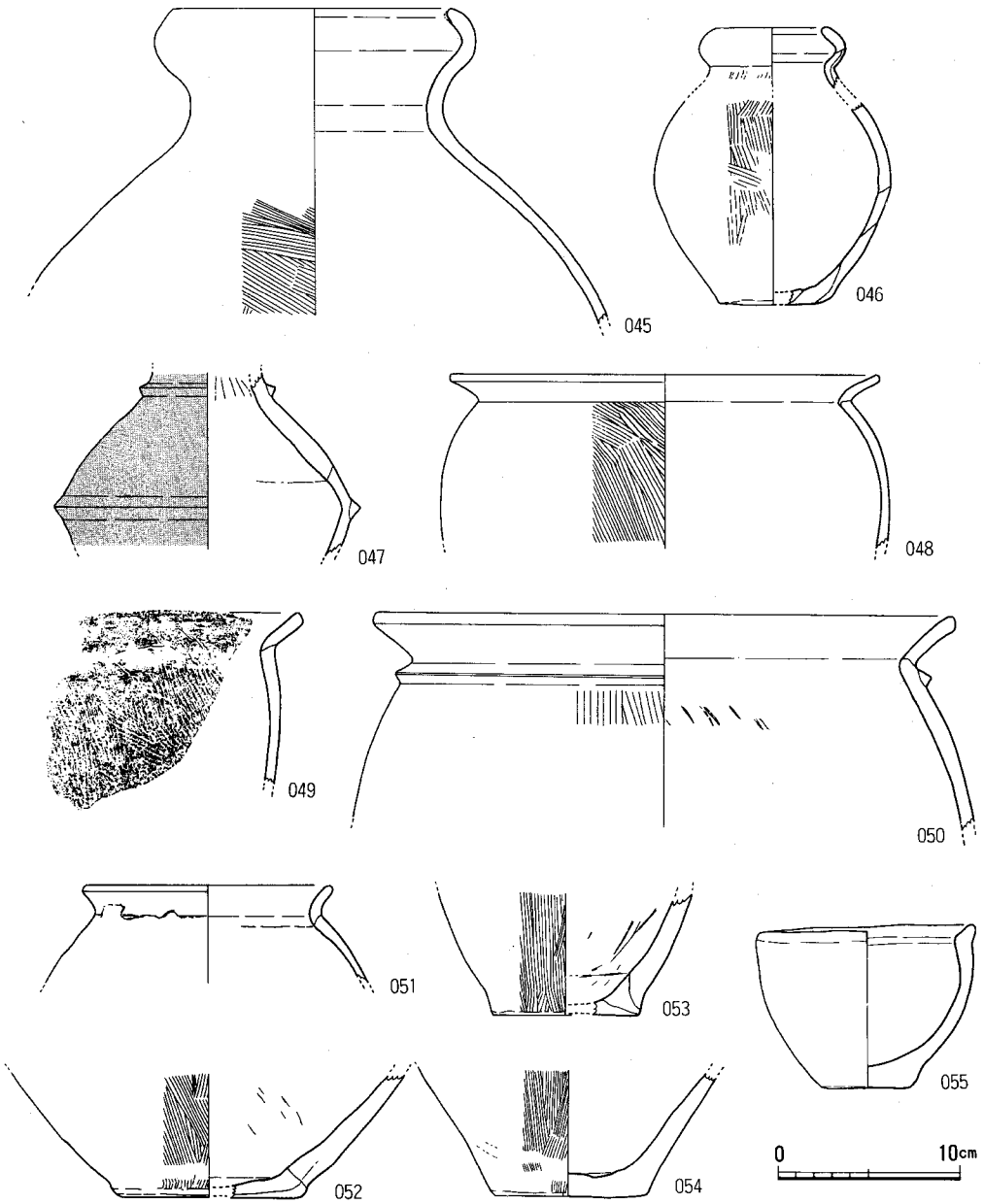


Fig.43　SE10出土土器実測図（1／4）

る。口径25.8cm、器高36.2cm。044は広口壺とでも呼べるものか。口縁部は大きく外反し、端部は上下に引き出される。胴部は球形に近いが垂れ気味である。底部は丸みをおびるものの平底をなす。頸部の付根には三角凸帯をめぐらす。内外面とも刷毛目調整を主として行なう。砂粒

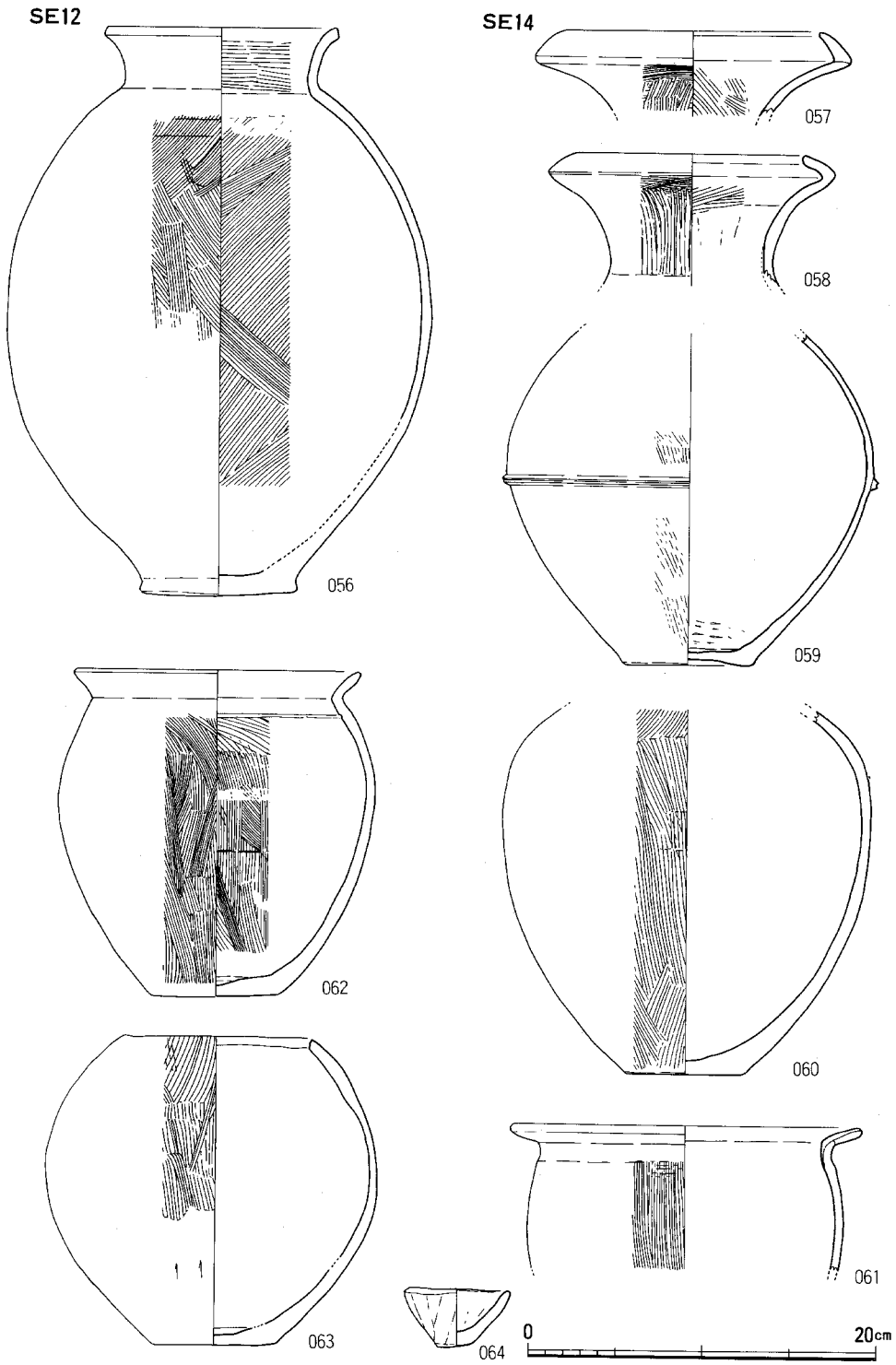


Fig.44　SE12・14出土土器実測図（1／4）

を多く混えた胎土で、黄褐色～淡赤褐色を呈する。口径31.0cm、器高36.1cm。ともに井戸底より15～20cm浮いた状態で出土した。

ＳＥ10 (Fig.43)　045・046は袋状口縁壺である。口縁部は丸く内湾し、頸部は短く、また締りをもたないまま胴部へと開く。045がこの種の壺としては大型に属するのに対し、046は口径5.8cm、器高15.2cmと小型である。胴部外面に一部刷毛目、他はナデ調整。砂粒を混えた胎土を用い、褐色を主とした色調をなす。047も頸部内面にしぼり痕が残るところから、袋状口縁壺と考えられる。頸部の付根と胴部中位に三角凸帯をめぐらす。ナデ調整で、外面丹塗り。胎土には多量の砂粒を混える。052は壺の底部と考えられる。

048～050はくの字状口縁をもつ甕形土器である。いずれもくびれ、内面の稜は不明瞭である。050は口縁下に一条の三角凸帯をめぐらす。胴部外面は刷毛目、他はナデ調整を行なう。051も甕形土器であろう。張りのある胴部から口縁部が短く外反する。調整はナデ。048～051のいずれも胎土には砂粒を混え、主として黄褐色を呈する。049～051の外面には煤が付着する。053・054はこの種の甕の底部であろう。外面は刷毛目、内面はナデで仕上げる。

055は鉢形土器である。ほとんど張りのない胴部から、口縁部が短かく外傾する。しかし場所によっては直立気味になる。全面ナデ調整。多量の石英粒を混え、黄褐色を呈する。口径11.6cm、器高9.6cm。

ＳＥ11 くの字状口縁をもつ甕形土器など弥生土器が少量出土したが、細片のため実測は行なわなかった。

ＳＥ12 (Fig.44、056)　口径13.2cm、器高32.8cmの壺形土器である。胴部は丸みをもった長胴で、最大径を中位にとる。口頸部は短く外反し、また底部はやや外に張る。内外面とも刷毛目調整を主として行なうが、胴部外面下半には板状工具による縦ナデが施される。多量の砂粒を混えた胎土で、焼成良好、灰褐色を呈する。井戸底近くからこの１点だけが出土した。

ＳＥ13　覆土から弥生土器が少量出土したが、細片のため実測しなかった。

ＳＥ14 (Fig.44、057-064)　057・058は複合口縁壺である。口縁部は外面に稜を作るものの丸みをおび、また内傾する角度も大きい。端部は丸くおさめる。また頸部は締まりをみせる。調整は058が頸部外面にヘラ研磨を行なうのに対し、059は刷毛目で仕上げる。057は砂粒混りの胎土で暗灰褐色。058は精良な胎土を用い黄褐色を呈し、また口縁部には丹らしき痕跡が認められる。059・060・063は、壺形土器の口頸部を欠損したものである。059は058と接合する可能性がある。胴部は球状に張り、その最大径部分にM字状凸帯をめぐらす。底部はややあげ底。外面は刷毛目調整の上にヘラ研磨を行なう。内底には爪痕が残る。胎土・色調は058と変りなく、また丹塗りの痕跡もみられる。060はやや肩が張ったもので、外面は刷毛目、内面は板状工具によるナデ調整を行なう。砂粒を混えた胎土で、焼成はきわめて良好。黄褐色をなす。063は口縁部を打ち欠いたものである。外面上半は刷毛目調整、下半と内面は板状工具による丁寧なナデ調

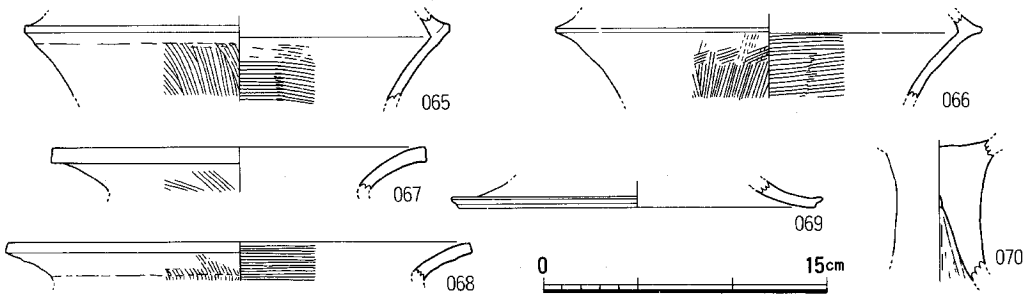


Fig.45　SE16出土土器実測図（1／4）

整を行なう。多量の砂粒を混えた胎土で、黄褐色を呈する。胴部上位には二次焼成による赤変部分がある。

061・062はくの字状口縁をもつ甕形土器である。062は口縁屈曲部内面の稜が比較的明瞭で、胴部の張りは小さく、また底部の境は丸みをおびる。061の外面、062の内外面は主として刷毛目調整。胎土にはともに砂粒を混え、赤褐色を呈する。062は口経16.0cm、器高18.9cm。

064は、口径6.2cm、器高3.4cmの小型の鉢である。外面はヘラナデ、内面は指ナデ調整。微砂混りの胎土で、焼成良好、黄灰色を呈する。

057・061 以外は井戸底よりわずかに浮いた状態で、まとまって出土した。

ＳＥ15　弥生土器が少量出土しているが、細片のため実測は行なわなかった。

ＳＥ16（Fig.45）　065・066は複合口縁壺片である。残存部からすれば、口縁上半部は、外湾しながら内傾するものと考えられる。頸部は締りがない。口頸部は内外面とも刷毛目調整。砂粒混りの胎土で、065が黄灰色、066が淡赤褐色を呈する。

067・068は甕形土器片である。口縁部は大きく開き、端部は角ばる。調整は刷毛目とナデ。ともに胎土には砂粒を混え、067が灰褐色、068が黒褐色を呈する。外面には煤が付着する。

069・070は高杯である。069は脚部片で、端部は上方につまみ出される。070は筒部片であるが、全体に磨滅している。ともに多量の砂粒を混えた胎土で、黄褐色を呈する。

ＳＥ17（Fig.46－48）　071～074は袋状口縁壺である。このうち071・072は、口縁部付根、頸部中位、頸部付根の３カ所にM字状凸帯をめぐらすものである。口径13.5cm前後、器高33.0cm前後と袋状口縁壺としてはひとまわり大きい。外面調整はヘラ研磨で、口縁部が横方向、頸部が凸帯をはさんで縦方向(暗文)、胴部が横方向と磨き分けている。底面および内面はナデ調整であるが、シボリ痕が残るなど、外面に比べ丁寧さを欠く。外面は全面丹塗り。072は口縁内面にも一部丹を塗る。精良な胎土を用い、焼成はきわめて良い。内面は071が褐色、072が淡茶褐色。073は口縁下に三角凸帯を一条めぐらすものである。口縁部下半はやや垂れ下がり気味で、凸帯との間に稜を作る。胴部下半には刷毛目が残るが、ほぼ全体をナデ調整で仕上げる。砂粒を混えた胎土で、焼成はやや不良。丹塗りは認められず、淡黄灰色を呈する。口径10.3cm、器高23.

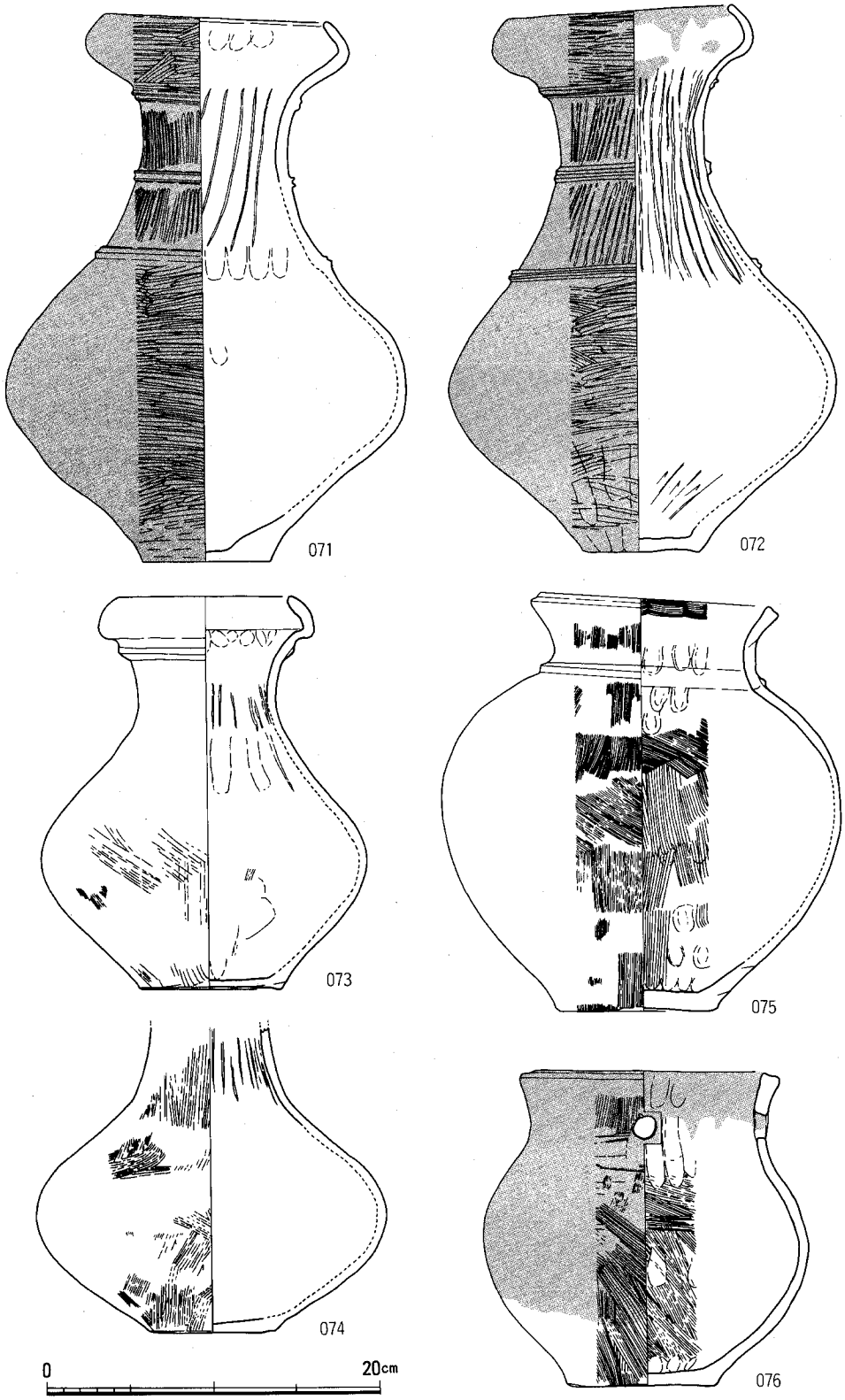


Fig.46　SE17出土土器実測図Ⅰ（1／4）

6cm。074は口縁部を欠くもので、胴部が大きく外に張り出す。器表は磨滅しているが、外面に刷毛目痕が認められる。胎土には砂粒を混え、淡黄褐色を呈する。

075・076は短頸壺の類であろう。胴部から頸部が短く立ち上り、口縁部が外反する。口縁端部は肥厚し、口唇部はナデで中凹みになる。075は頸部付根に三角凸帯をめぐらせ、また最大径を胴部上位にもつ。076は口縁部の外反が小さく、最大径は胴部中位にとる。また頸部には焼成前に穿った径1.5cmほどの円孔があり、釣瓶として使用された可能性をもつ。調整は主として細かい刷毛目で行なう。076の胴部下半を除いた外面と口縁部内面は丹塗り。ともに胎土は精良で、淡黄褐色をなす。075の口径13.8cm、器高25.2cm、076の口径13.7cm、器高19.1cm。

077は瓢形土器である。口縁部を欠くが、ＳＥ04出土のもの（022）と形態的にはほとんど変わる所がない。外面胴下半部は二次焼成を受けており、調整不明。内面は板状工具によるナデ調整の他、指押えが各所に残る。外面上半部は丹塗り。精良な胎土で、淡褐色を呈する。078は無頸壺の類であろう。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。胴部は扁球形。底部は欠損している。胴部外面は細かい刷毛目、内面は板状工具によるナデ調整。粗砂粒を混えた胎土で、淡黄褐色を呈する。079は口縁部が内傾し、端部が肥厚する大型の壺形土器である。最大径は胴部の上位にとる。外面から口縁部内面は指押えの後ナデ調整。胴部内面は板状工具による強いナデ調整を行なう。砂粒を多く混えた胎土で、灰褐色を呈する。口径24.0cm。どことなくしまりのない土器である。080は壺形土器の底部であろう。外面には指ナデ、内面には刷毛目調整を行なう。胎土には多量の砂粒を混え、黒褐色をなす。

081～084は甕形土器である。081は口縁部が丸みをもって外反し、口唇は中凹みする。胴部の張りは小さく、底部は垂直に立つ。外面は板状工具によるナデ、口縁部内面は刷毛目調整。粗砂粒混りの胎土で灰褐色を呈する。口径18.9cm、器高20.5cm。082は口縁部が短く外反するもので、端部は丸くおさめる。胴部は張りがなく、また底部は薄い。胴部外面は刷毛目調整だが、中位部分はナデ消す。内面は刷毛目調整をナデ消している。少量の砂粒を混えた胎土で、赤褐色をなす。外面には煤が付着する他、二次焼成による赤変部が認められる。口径26.6cm、器高29.2cm。083は丸みをもった胴部から口縁部が外方に屈曲するもので、端部はコの字状になる。口縁部内面から胴部外面に丹塗りを行なう。少量の砂粒を混えた胎土で、内面褐色。084はくの字状口縁をもつもので、端部は丸くおさめる。胴部の張りはほとんどみられない。砂粒混りの胎土で、淡褐色を呈する。甕形土器としてはこの他に、井戸側として利用された大型甕がある（前本報Fig.53、本報告PL.19）。上面は内傾するものの、逆L字状に近い口縁部をなし、口縁下に三角凸帯、胴部の下半寄りに二条の台形状凸帯をめぐらす。一部刷毛目がみられるが、大半はナデ調整で仕上げる。焼成は堅緻で、黄褐色～淡赤褐色を呈する。口径64.0cm。胴部凸帯下および口縁部内側張り出し部は打ち欠いている。甕棺を転用したものと考えられる。

085は鉢形土器である。口縁部は内湾気味に肥厚する。外面下半部は刷毛目調整。粗砂粒を混

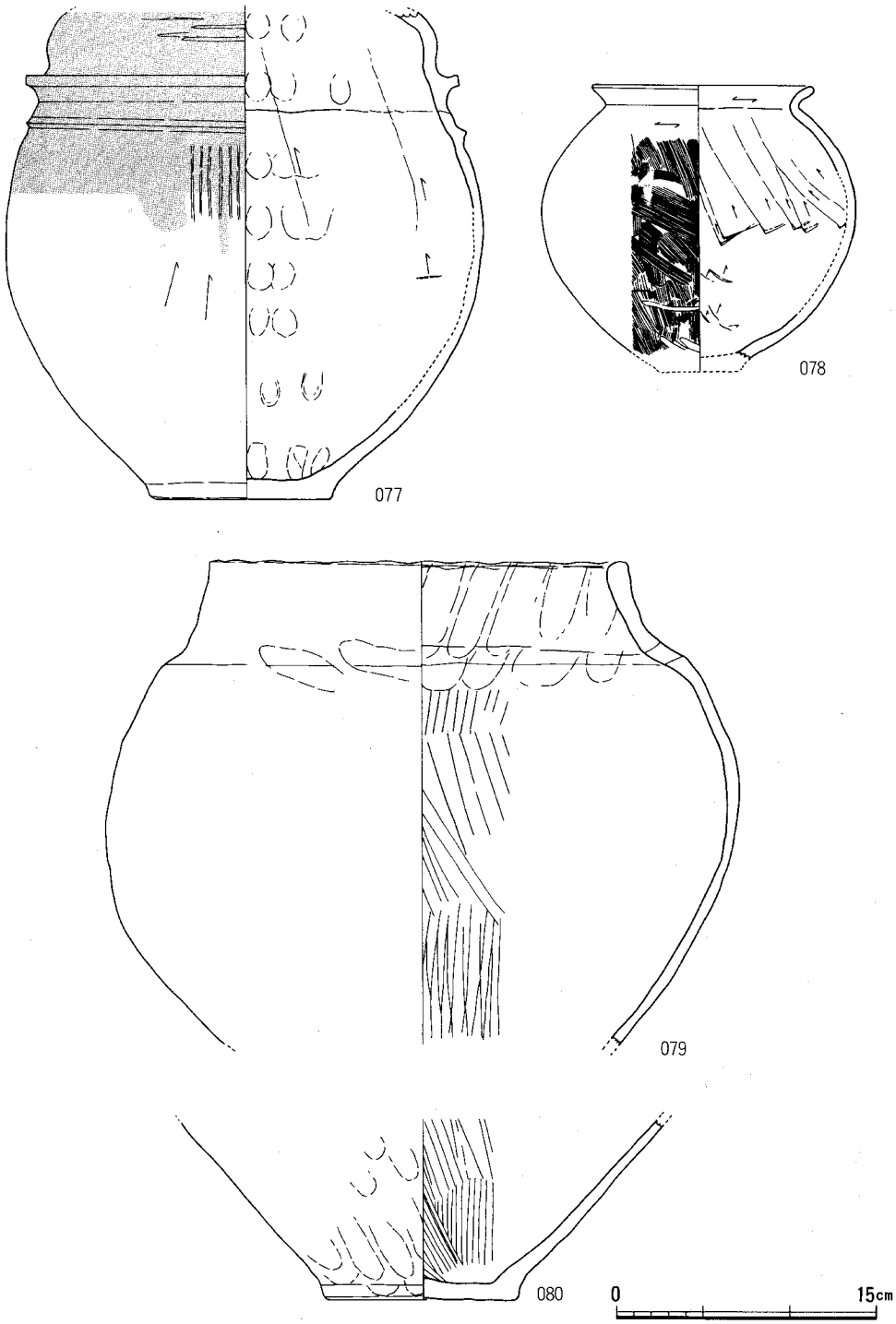


Fig.47　SE17出土土器実測図Ⅱ（1／4）

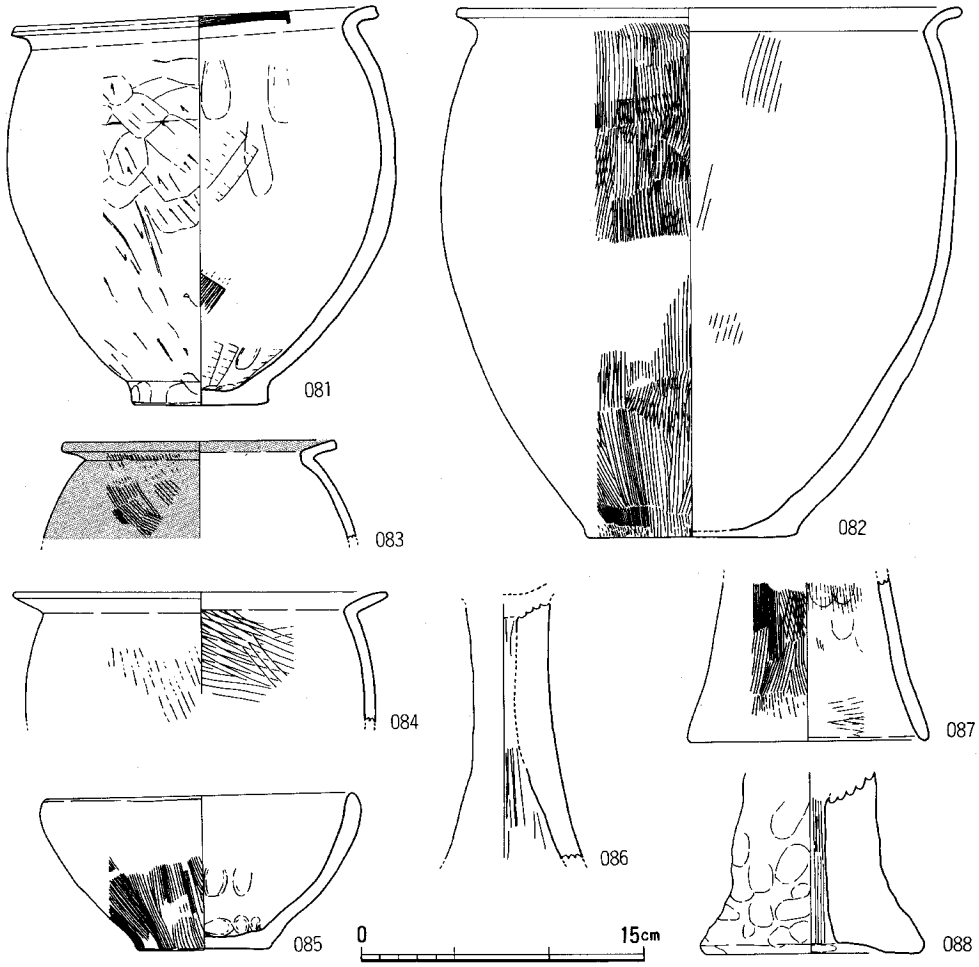


Fig.48　SE17出土土器実測図III（1／4）

えた胎土で、焼成やや不良、灰白色をなす。口径16.2cm、器高8.3cm。086は高杯片で、細長い筒部が残存する。器表は磨滅し調整不明。精良な胎土を用い、淡赤褐色。087は肉薄の器台であろう。内外面とも刷毛目調整を主として行なう。微砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色。088は肉厚の器台である。外面には指押えが残る。胎土には少量の砂粒を混え、黄褐色を呈する。

以上述べた土器は、ＳＥ17の抉れ部分付近から井戸底にかけて出土したものである。そのうち井戸側（大形甕）の下から出土した土器は072～074、井戸側の外にあたる抉れ部分から出土した土器は071・075・076である。

ＳＥ18（Fig.49、089・090）　089は複合口縁壺の細片である。口縁上半部は直線的に内傾し、端部は丸くおさめる。090は薄手の鉢形土器である。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。体部外面は強いナデ調整を行う。少量の砂粒を混えた胎土で、黄灰色を呈する。

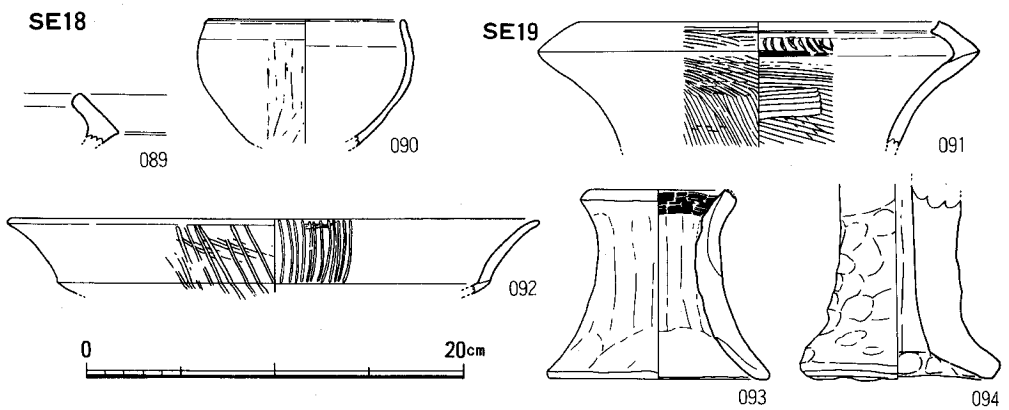


Fig.49　SF18・19出土土器実測図（1／4）

ＳＥ19（Fig.49、091－094）　091は複合口縁壺である。口縁上半部は下半部と１本の稜線で分れ、やや丸みをもって内傾する。端部はナデで凹む。残存部は内外面とも刷毛目調整。ただ口縁上半部内面はナデ調整で、爪痕が連続的に残る。胎土は精良で、明黄褐色を呈する。092は高杯片である。内外面ともヘラ研磨を行なう。内面丹塗り。砂粒混りの胎土で、灰褐色。093・094は器台である。093は受部が小さいもので、受部内面には刷毛目、他はナデ調整を行なう。094は肉厚で、内外面とも指押えによる凹凸が著しい。ともに砂粒を多く混えた胎土で、093は淡黄褐色、094は灰褐色を呈する。094の焼成はあまい。

ＳＥ20（Fig.50・51）　095は袋状口縁壺である。口縁部は丸く内湾するものの、内面は直立する。頸部は短く、最大径を胴部上位にとる。胴部外面は刷毛目調整で、底部にも一部およぶ。多量の砂粒を混えた胎土で、暗赤褐色をなす。口径10.9cm、器高21.6cm。108はこの種の壺のミニチュア品であろうか。頸部は短く、胴部は下膨らみ気味である。外面丹塗り。胎土には砂粒を混え、暗褐色を呈する。口径4.0cm、器高10.0cm。

096～102は複合口縁壺である。096～099は口縁上半部が丸みをもって内傾するもので、その角度も大きい一群である。端部はコの字状をなすが、ナデ調整により中凹みするものもある。外面口縁下半部は刷毛目調整。096は口唇から外面口縁上半部まで丹塗り。100・101は口縁上半部が直線的に内傾する類である。口縁下半部と頸部は内外面とも刷毛目調整。102は口縁上半部が外湾気味に内傾するもので、頸部は長く、胴部は球形状に張る。頸部の付根に三角凸帯を、また胴部中位に刻目を施した台形凸帯をめぐらす。頸部以下は内外面とも主として刷毛目調整。以上述べた複合口縁壺は、胎土に砂粒を混え、焼成良好、096・098が褐色、097・099が黄褐色、100～102が灰褐色を呈する。

103・104は広口壺とでも呼べるものであろうか。104は張りの小さい胴部から、頸部が内傾し、さらに口縁部が外反する。端部は下方にややつまみだされている。外面は刷毛目、内面はナデ調整。頸部外面には接合痕が明瞭に認められる。口径13.5cm、器高25.2cm。胎土には砂粒

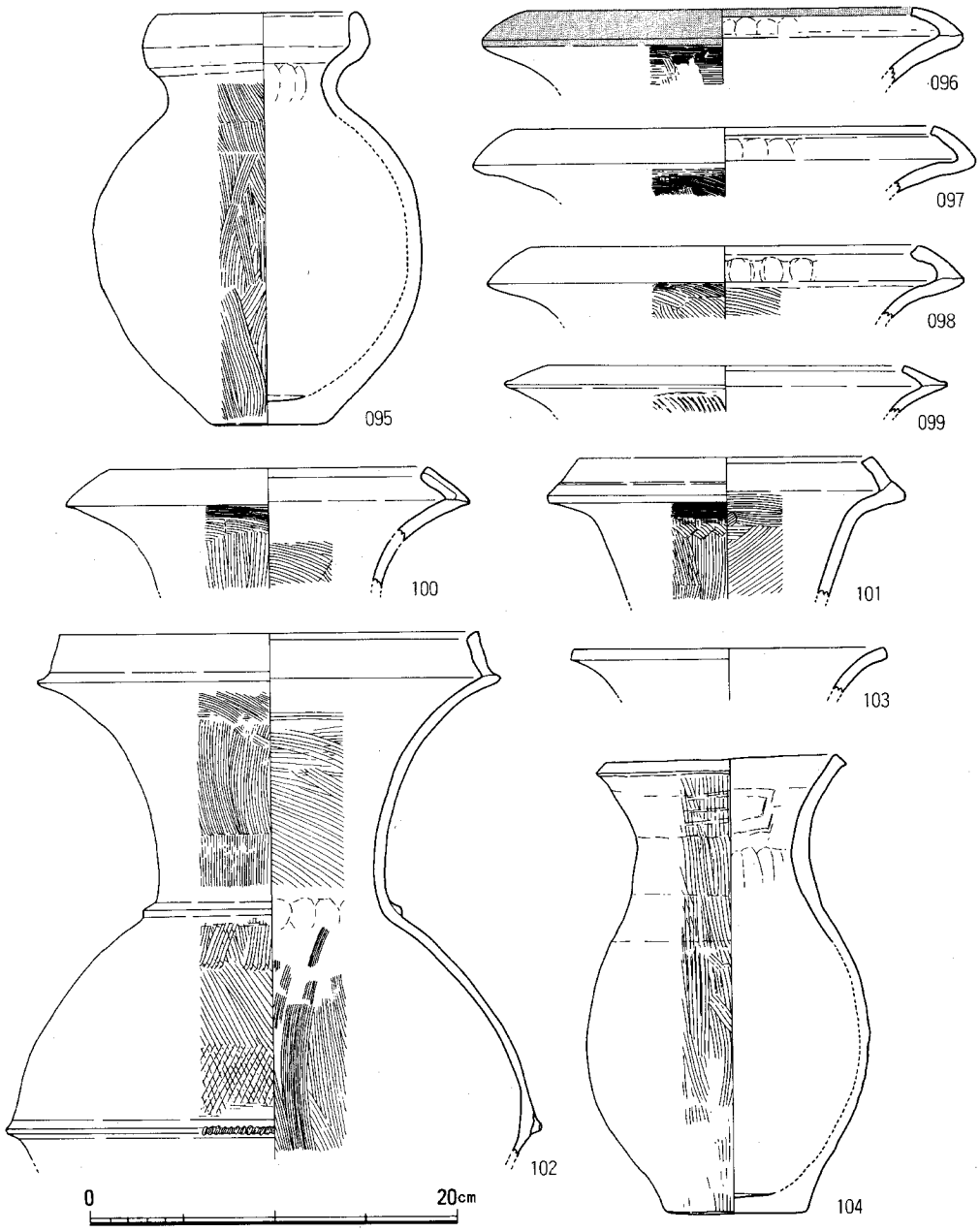


Fig.50　SE20出土土器実測図Ⅰ（1／4）

を多く混え、暗褐色を呈する。内底には炭化物が付着する。

105～107は壺形土器である。105は口縁部を打ち欠いたものである。張りをみせる胴部中位に一条の三角凸帯をめぐらす。底部の境は丸みをおび、すわりもやや不安定である。胴部外面の

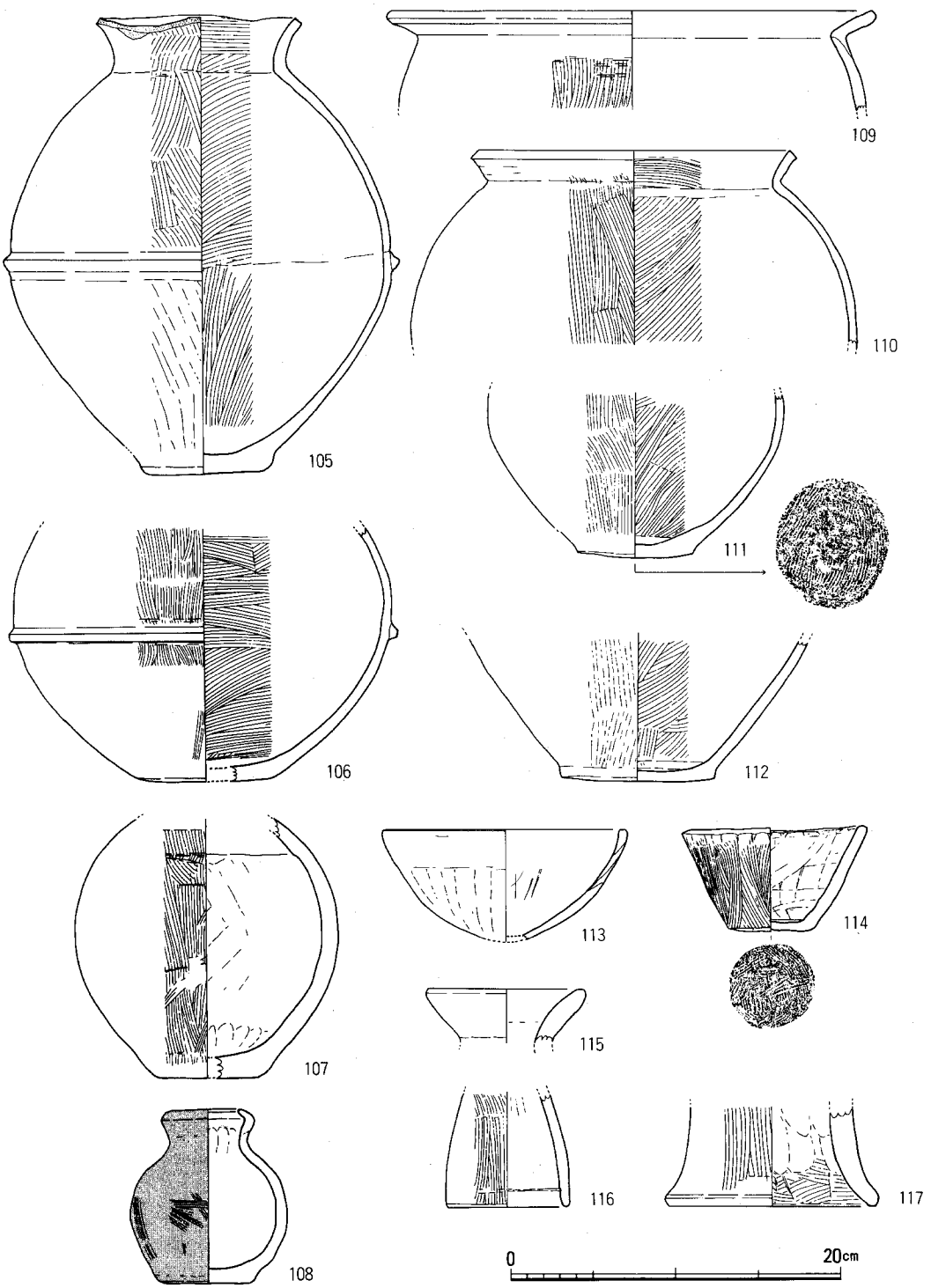


Fig.51　SE20出土土器実測図II（1／4）

凸帯下は板状工具によるナデ、他は刷毛目調整。残高27.8cm。106は扁球形の胴部をもち、その中位に台形状凸帯をめぐらす。底部の境はやや丸みをおびる。主に刷毛目調整で仕上げる。107は先に述べた095の袋状口縁壺の類と考えられ、その胴部形態はほとんど同じである。刷毛目調整は外面にだけみられる。いずれも砂粒を混えた胎土を用い、105・107は黄褐色、106は暗赤褐色を呈する。

108～112は甕形土器である。108はくの字状口縁をなすが、内面の稜は明確でない。110は胴部が大きく張ったもので、口縁部は短く外反し、端部はコの字状になる。111・112は底部片で、底面にまで刷毛目調整を行なう。他の甕形土器も主として刷毛目調整で仕上げる。胎土には砂粒を多く混え、109が赤褐色、110が黄灰色、111・112が黄褐色。110・112の外面には煤が付着し、また112の内底には炭化物がみられる。

113は丸底の鉢形土器である。内外面ともナデ調整。胎土は精良で、暗黄褐色。114は平底の鉢形土器で、体部は直線的に外傾する。外面および底面は刷毛目、内面は板状工具によるナデ調整。砂粒混りの胎土で、褐色を呈する。口径11.3cm、器高6.4cm。

115－117は器台である。115は受部片、116は内湾気味に立つ脚部片、また117は裾が小さく開く脚部片である。外面は刷毛目、内面はナデ調整を主として行う。いずれも胎土に砂粒を混え、115が黄灰色、116が褐色、117が黄褐色を呈する。

以上の土器のうち、095・104・105・108・114は井戸底から出土したものである。

ＳＥ21（Fig.52、118）　上位に最大径をとる張った胴部から、頸部が内傾気味に立ち、口縁部が外傾する壺形土器である。端部はわずかに外へ引き出す。底部は丸みをもった平底である。胴部外面は荒いタッチの刷毛目調整、内面上位はナデ調整、下位は軽いヘラ削りを行う。口頸部はナデ調整で仕上げる。また底面は刷毛目調整の後ナデ。胎土には金雲母が目立つが精良。焼成は良好で、赤みをおびた黄白色を呈する。口径15.2cm、器高28.3cm。井戸底からこの一個体のみが出土した。

ＳＥ22（Fig.52、119－123）　119～121は、先述したＳＥ21の壺形土器（118）と同様の形態をなすものである。119・120の口縁上下端部はそれぞれつまみ出される。また120の口縁部はやや内湾気味に外傾する。121の口縁部は打ち欠きである可能性が高い。調整は、120・121が頸部内面に刷毛目を行う他は118と変りがない。119は胴部外面に刷毛目調整を行った後、上半部と下半部に分けて縦方向のヘラ研磨を行っている。底面は丸みをおびた平底で、刷毛目が残る。胎土には砂粒を混えるが、特に金雲母が目立つ。焼成は良好で、胴部には黒斑が広がる。119が灰白色、120・121が暗灰褐色を呈する。119は口径13.7cm、器高26.3cm。120は口径13.7cm、器高26.9cm。

122は長頸壺である。扁球形の胴部から頸部が細長く立ち上る。口縁部は欠損しているが、打ち欠きによるものかもしれない。底部はやや丸みをおびた平底。外面の頸部と胴部上半はヘラ

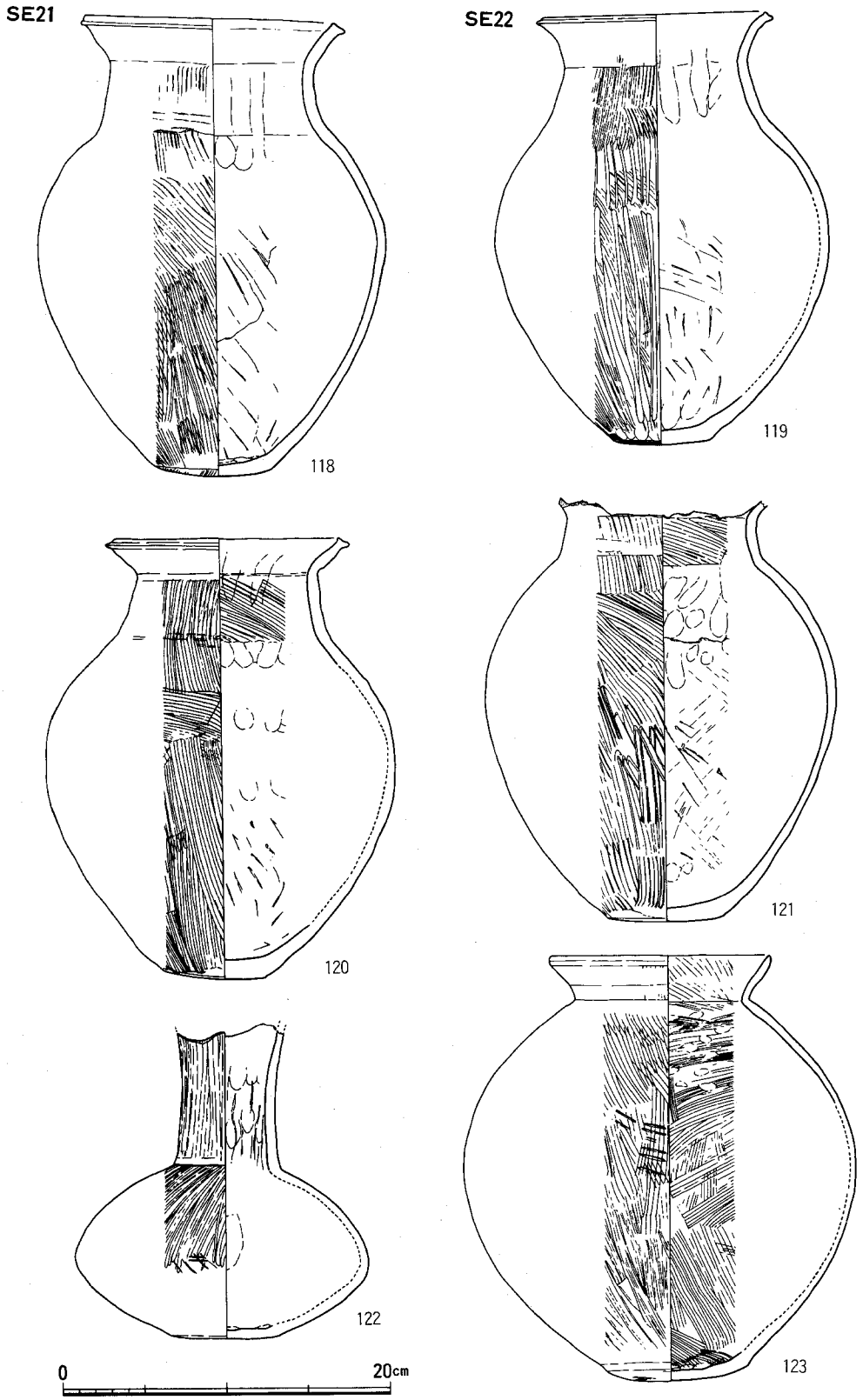


Fig.52　SE21・22出土土器実測図（1／4）

研磨、胴部下半は丁寧な横ナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、灰白色を呈する。残高19.3cm。123は短頸壺の類である。胴部は球形状に張り、口頸部が外反する。端部は丸くおさめる。底部は丸みをおびた平底。外面胴部上半は叩きの後刷毛目、下半は板状工具による強いナデ調整。内面はすべて刷毛目調整で仕上げる。胎土には多量の砂粒を混え、淡黄灰色を呈す。

以上述べた壺形土器5個体は、横置・正置の状態で、井戸底からまとまって出土した。

ＳＥ23（Fig.53、124）　袋状口縁壺の系譜をひくものと考えられるが、全体的にしまりのない形態をなす。口縁部は内傾の角度が小さく、端部は中凹みのコの字状を呈する。頸部は短く直立し、倒卵形状の胴部へ続く。底部は丸みをおびた平底。内外面とも粗い刷毛目調整を主として行うが、雑である。胎土には砂粒を混え、明黄褐色を呈する。口径13.2cm、器高31.2cm。井戸底面から出土。

ＳＥ24　土器も含め出土遺物は一切ない。

ＳＥ25（Fig.53、125－127）　125はくの字状口縁をもつ甕形土器である。内面屈曲部には稜を作らず、また胴部の張りもみられない。胴部外面は刷毛目、内面は軽いヘラ削りを行う。胎土には多量の砂粒を混え、暗褐色。外面全体に煤が付着。126は甕形土器の底部であろう。底面にまで刷毛目調整を行う。外面には煤、内面には炭化物が著しく付着する。127は壺形土器の底部である。底部は丸みをおびた平底で、刷毛目調整。内底には炭化物が付着する。

ＳＥ26（Fig.53、128－131）　小片のみの出土である。128は口縁部上面が内傾するものの逆L字状に近く、端部は丸くおさめる。多量の砂粒を混え、暗赤褐色。129・130は高杯片で、130は鋤状口縁をなす。129の外面は丹塗り。129の胎土は精良で淡赤褐色。130は胎土に砂粒を多く混え、黄褐色を呈する。131は肉厚の器台片である。内外面とも指押えで仕上げる。砂粒混りの胎土で、淡赤褐色を呈する。

ＳＥ27（Fig.53、132－136）　細片のみの出土である。132は外面丹塗りの袋状口縁壺である。胎土には少量の砂粒を含み、内面黄白色。133は複合口縁壺。口縁上半部はやや丸みをもち、内傾の角度も大きい。少量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色。134はくの字状口縁、135は逆L字状口縁をもつ甕形土器である。胎土には少量の砂粒を混え、134が黄灰色、135が淡赤褐色を呈する。136は脚台である。裾部は小さく開き、端部は丸くおさめる。外面はヘラ研磨。少量の砂粒を混えた胎土で、赤褐色を呈する。

ＳＥ28（Fig.53、137－142）　137・138は複合口縁壺である。口縁上半部は137が丸みをもって内傾するのに対し、138はやや外反気味に内傾する。137の外面は刷毛目調整。ともに砂粒混りの胎土で、褐色を主とした器面を呈する。139はくの字状口縁をもつ甕形土器である。内面屈曲部の稜は不明瞭で、口縁端部は丸くおさめる。胴部は内外面とも刷毛目調整。砂粒混りの胎土で、淡黄白色。140は壺形土器、141は甕形土器の底部であろうか。底面との境はやや丸みをおびる。142は高杯脚部片である。裾部は大きく開き、透孔を設ける。残存部はナデ調整。砂粒

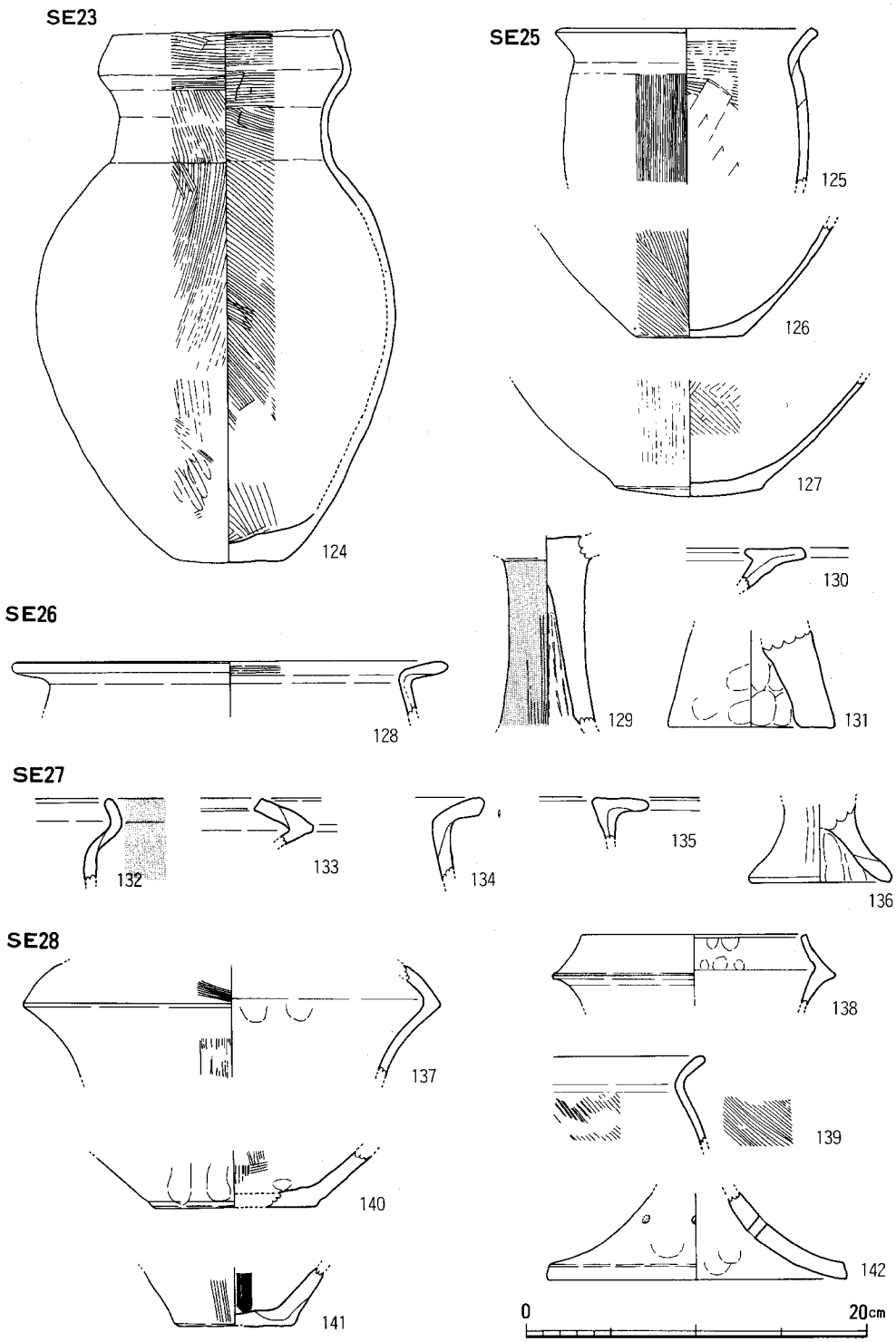


Fig.53　SE23・25・26・27・28出土土器実測図（1／4）

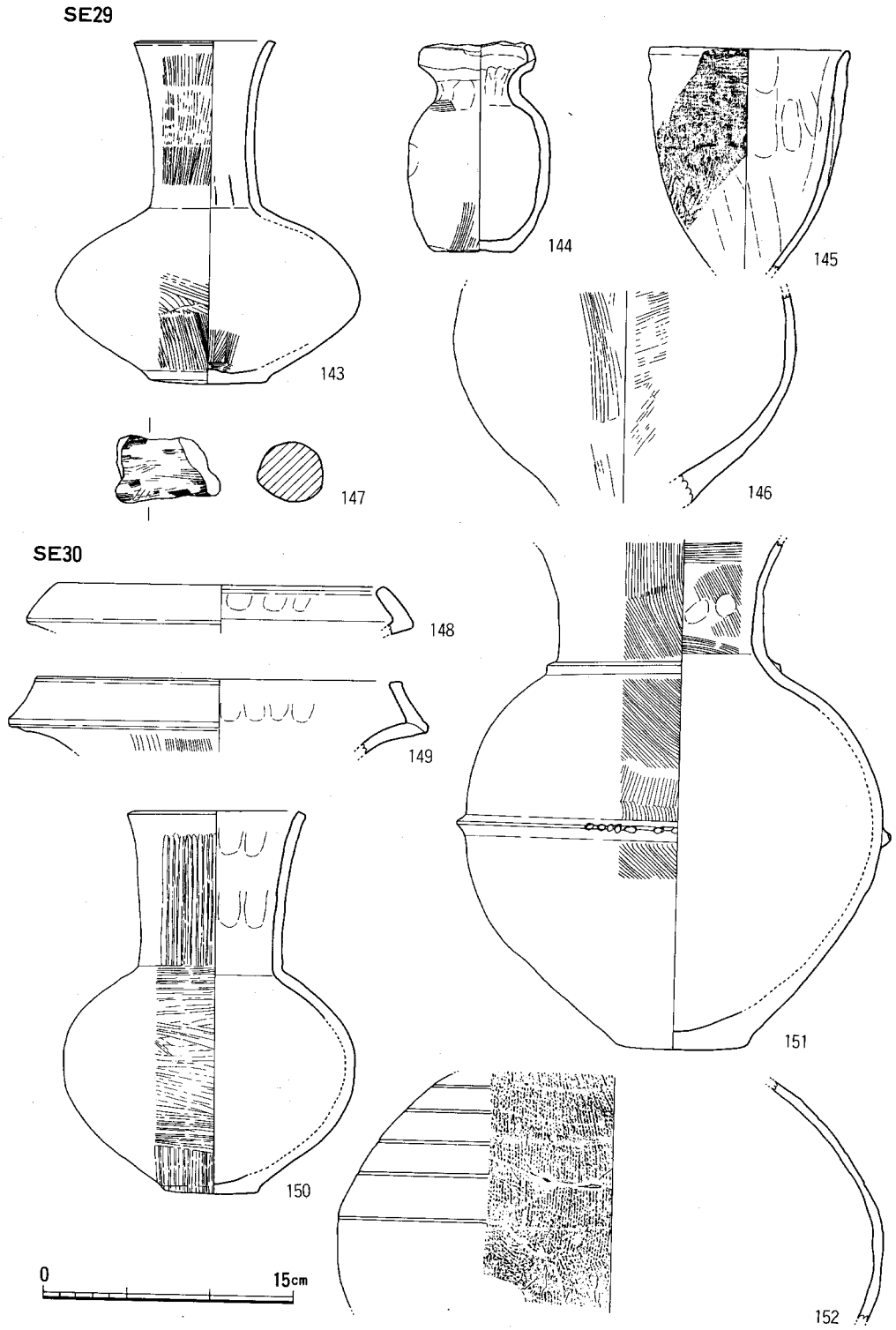


Fig.54　SE29・30出土土器実測図（1／4）

混りの胎土で、淡赤褐色を呈する。

ＳＥ29（Fig.54、143－146）　143は長頸壺である。かなりつぶれた扁球形の胴部から頸部が直立し、口縁部がわずかに外反する。底部は平底であるが、やや丸みをもつ。外面は刷毛目調整で、胴上半部はそれをナデ消す。底面にも不定方向の刷毛目調整を行う。砂粒混りの胎土で、灰色をおびた黄褐色。口径8.6cm、器高20.8cm。144は手捏ねの袋状口縁壺である。口縁部は丸みをもって内湾するが、口縁端部はナデで波打つ。頸部は短く、胴部は張りがない。平底。外面の一部に刷毛目がみられるが、ほとんどナデで仕上げる。砂粒を多く混えた胎土で、灰色がかった黄褐色を呈する。口径6.4cm、器高12.6cm。146も壺形土器の胴部片であろう。内外面とも刷毛目調整を行う。褐色。

145は鉢形土器である。わずかに開く口縁部に最大径をもち、底部に向ってすぼむ。体部上半は叩き、下半はヘラナデ。内面は指ナデで調整する。少量の砂粒を混えた胎土で、暗褐色～灰黒色を呈する。147は把手片であろうか。断面円形を呈し、表面は刷毛目の後ナデ調整を行っている。少量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色と灰黒色の部分に分かれる。

ＳＥ30（Fig.54、148－152）148・149は複合口縁壺である。口縁上半部は148が丸みをもって内傾するのに対し、149は外反気味に内傾する。149の口縁下半部に刷毛目が残る他はナデ調整。ともに砂粒混りの胎土で、黄褐色を呈する。151は複合口縁をなす壺形土器と考えられるが、口縁部を欠損する。頸部は直立気味で、その付根と胴部の最大径部分に三角凸帯をめぐらす。胴部の凸帯上には刻目を施す。底部はやや丸みをおびた平底。口頸部および胴部外面凸帯下まで刷毛目調整。少量の砂粒を混え、黄白色～淡赤褐色を呈する。残高30.9cm。

150は長頸壺である。ＳＥ29の長頸壺（143）に比べ、胴部が丸みをおび、また頸部は直立することなく口縁端部に向い外傾する。頸部そのものもやや太くなる。底部は丸みをもった平底。外面はヘラ研磨、内面はナデ調整で仕上げる。多量の砂粒を混えた胎土で、焼成良好、黄褐色を呈する。口径9.8cm、器高30.0cm。

153は瓦質土器である。大きく横に張った胴部をもつ壺形土器片で、上半部に５本の沈線がめぐる。その間は縦の縄蓆文叩きが行なわれる。下半部は叩きの方向が乱れる。内面は丁寧なナデ調整である。胎土にはϕ0.1mm程度の石英、長石を微量含む。色調は外面灰白～暗灰色、内面灰白色。焼成は軟質である。

以上述べた土器のうち、150・151は井戸底からの出土である。

ＳＥ31（Fig.55）　153～155は複合口縁壺である。153は口縁上半部が丸みをもって内湾するのに対し、154・155は直線的に内傾する。155の頸部は締まりが良い。口縁下半部から頸部にかけて刷毛目調整を行う。154は胎土に多量の砂粒を混え、淡赤褐色。153・155は少量の砂粒を混えた胎土で、黄褐色を呈する。158・159は複合口縁をもつ壺形土器であろう。158の頸部は締まりが良く、その付根に三角凸帯をめぐらす。器表磨滅。159は胴部の中位にやや下向きの三角凸

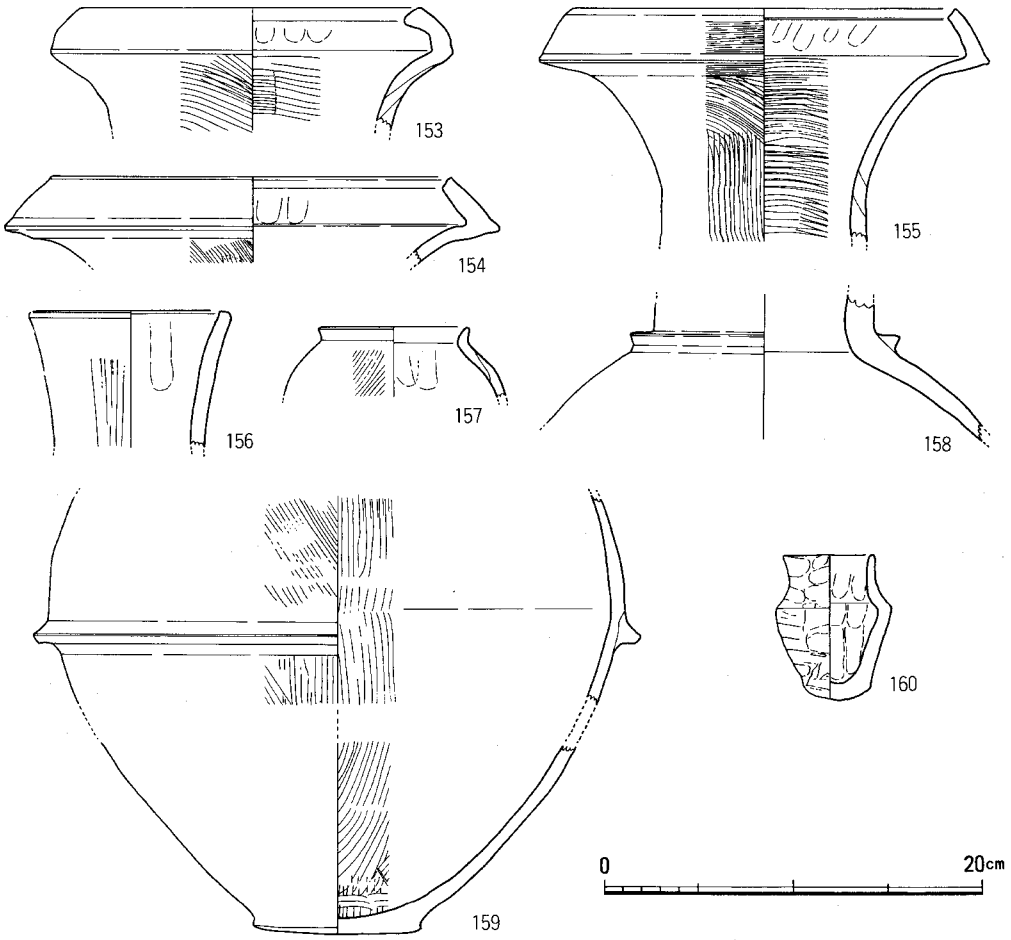


Fig.55　SE31出土土器実測図（1／4）

帯を貼り付けたもので、底部は小さく、丸みをもった平底をなす。内面および外面凸帯下まで刷毛目調整。底面も刷毛目調整である。砂粒を少量混えた胎土で、褐色を主としてなす。

156は長頸壺片である。頸部から口縁端部に向って外反する。頸部外面は刷毛目調整。胎土には砂粒を少量混え、暗黄褐色。157は短頸壺の類であろうか。球形の胴部から、口頸部が短く外反する。胴部外面は刷毛目調整。少量の砂粒を混えた胎土で、暗褐色を呈する。

160はミニチュアの壺形土器である。肩部で稜をなし、口頸部は直立あるいは外傾する。底部は丸みをもった平底。手捏ね土器で、内外面とも指押えによる凹凸が著しい。砂粒を混えた胎土で、黄褐色を主としてなす。口径4.8cm、器高7.7cm。

ＳＥ32（Fig.56、161－169）　出土したのは小破片だけである。161は直口壺の類であろうか。残存部はナデ調整。少量の砂粒を胎土に混え、褐色を主としてなす。167は壺形土器の底部

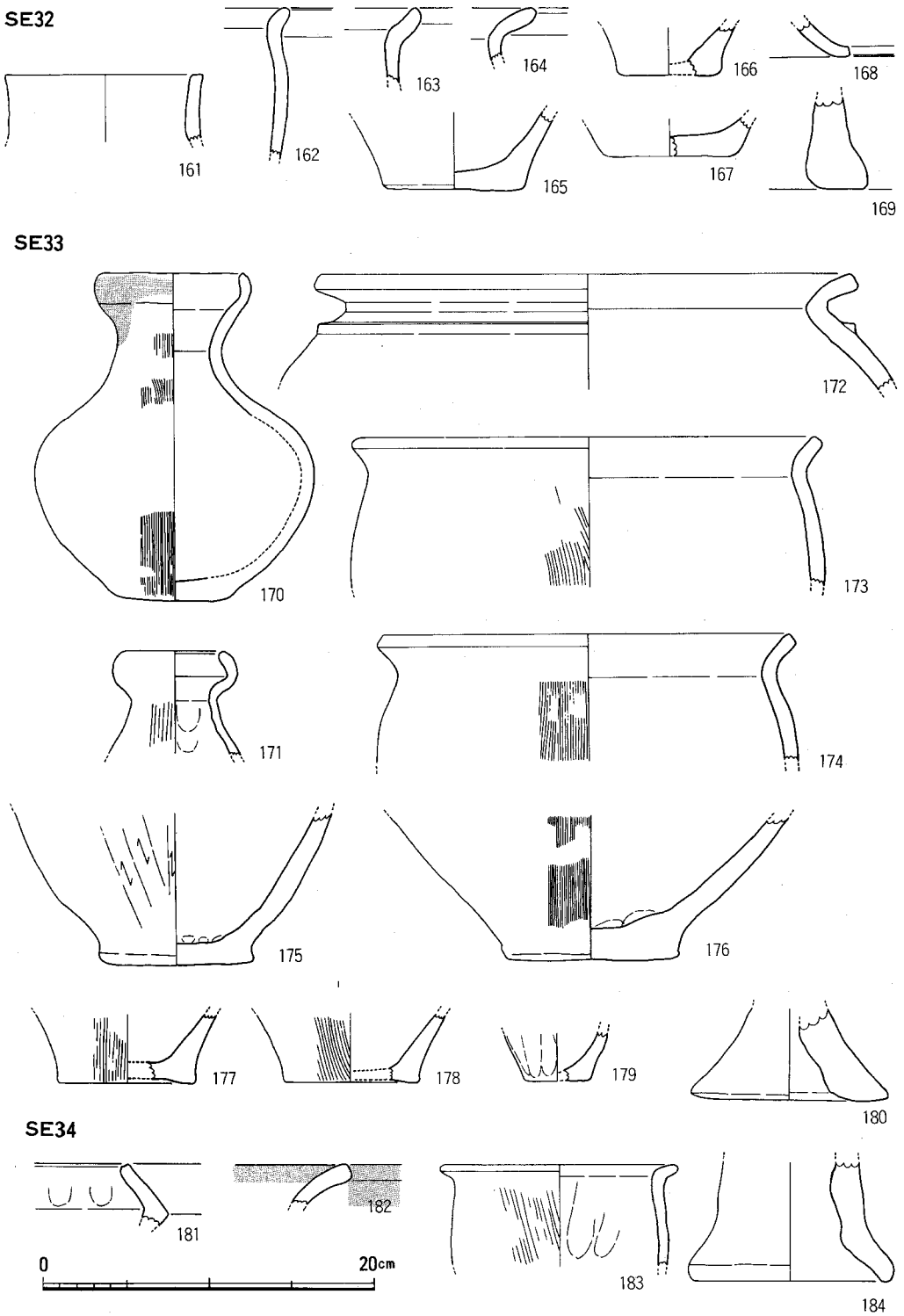


Fig.56　SE32・33・34出土土器実測図（1／4）

であろう。

162～164は甕形土器の口縁部片である。162・163は張りのない胴部から口縁部が丸みをもって外反するもの、164は外反の角度が大きいものである。ともに端部は丸くおさめる。166・167は甕形土器の底部である。いずれの甕形土器も残存部はナデ調整。胎土には砂粒を混え、赤褐色、黄褐色を呈する。

168は高杯脚部片で、胎土は精良、黄白色。169は肉厚の器台片で、ナデ調整。少量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色を呈する。

ＳＥ33（Fig.56、170－176）　170・171は袋状口縁壺である。口縁部は丸みをもち、わずかに内傾して、端部を丸くおさめる。頸部は中位で締り、横に張った胴部へと続く。底部は丸みをおびた平底。全体に磨滅しているが、頸部から胴部外面には刷毛目調整を行ない、さらに胴部上半にはヘラ研磨を施した可能性が強い。内面はナデ調整。口頸部には丹塗りの痕跡が認められる。171の口縁部は丸みをもって内湾する。頸部は口縁下が最も締る。頸部外面刷毛目、他は、ナデ調整。ともに精良な胎土で、170が淡黄褐色、171が暗褐色～灰褐色を呈する。170の口径8.6cm、器高20.0cm。178は壺形土器の底部と考えられる。

172～174は甕形土器である。172は口縁部がくの字状に屈曲し、大きく張った胴部に続く。口縁下には一条の三角凸帯をめぐらす。173・174はくの字状口縁をなすものであるが、内面屈曲部に明瞭な稜線はない。また胴部の張りもほとんどみられない。胴部外面は刷毛目調整。175・177～179は甕形土器の底部である。175は丸みをもった平底を呈し、胴部外面を板状工具によるナデで調整を行なう。177・178はややあげ底気味で、外面は刷毛目調整。179は小型で、内外面ともナデ調整で仕上げる。これらの甕形土器は、いずれも胎土に砂粒を混え、黄褐色あるいは赤褐色を呈する。173の外面には煤が、178の内底には炭化物が付着する。

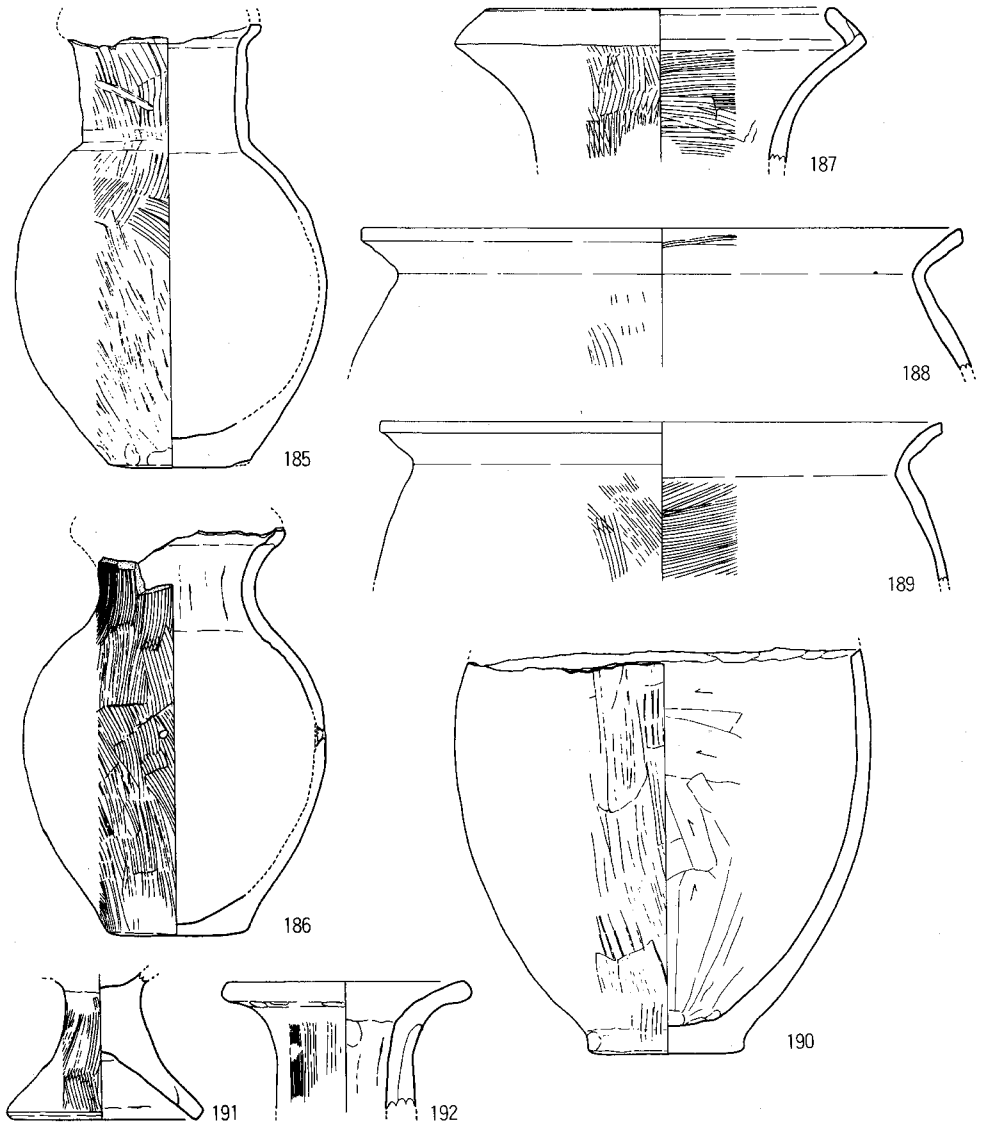
180は肉厚の器台片である。残存部はナデ調整。微砂粒を混えた胎土で、焼成不良、黄褐色～淡赤褐色を呈する。

以上述べた土器のうち、170の袋状口縁壺は横置の状態で井戸底から出土した。

ＳＥ34（Fig.56、181—184）　181は複合口縁壺で、口縁上半部は直線的に内傾する。残存部はナデ調整で仕上げる。少量の砂粒を混えた胎土で、暗褐色。182は広口壺の口縁片である。外面および内面端部付近は丹塗り。胎土は精良。183は甕形土器である。張りのない胴部から口縁部が横に短く引き出される。胴部外面は刷毛目、他はナデ調整。多量の砂粒を混えた胎土で、黄白色。184は器台片である。肉厚で、器表は指押えによる凹凸がみられる。砂粒を少量混えた胎土で、黄褐色を呈する。

ＳＥ35（Fig.57、185—190）　185・186は口縁部を打ち欠くが、残存部からして袋状口縁壺になるものと考えられる。185の口縁部は直立し、また186の頸部は中位で締まる。胴部中位に最大径をとり、底部は平底ながら若干丸みをおびる。185の底は厚い。外面調整は刷毛目で、185

SE35



SE36

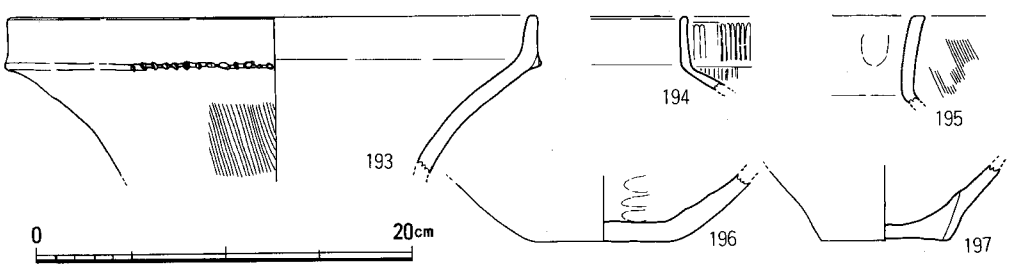


Fig.57　SE35・36出土土器実測図（1／4）

は胴部下半を中心にその上から板状工具によるナデを行なう。内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。ともに胎土には多量の砂粒を混え、焼成良好、185が淡灰白色、186が淡灰褐色を呈する。186の胴部中位には、焼成後、穿孔を行なっている。残高は185が23.7cm、186が21.9cm。187は複合口縁壺である。口縁下半部との間に稜をなして、口縁上半部がやや湾曲して内傾する。端部は丸くおさめる。口縁下半部以下は内外面とも刷毛目調整。多量の砂粒を混えた胎土で、淡灰黒色。

188・189はくの字状口縁をもつ甕形土器である。188が内面屈曲部が丸いのに対し、189は稜を作る。口縁端部はコの字状をなす。188は胴部外面に、189は胴部内外面に刷毛目調整。190も甕形土器であるが、口縁部を打ち欠いている。胴部の張りは小さく、底部は平底。外面は刷毛目の後板状工具によるナデ、内面も板状工具によるナデ調整。これらの甕形土器は胎土に砂粒を少なからず混え、焼成は良好、188・190が赤褐色、189が淡黒褐色を呈する。

191は高杯脚部である。筒部は中実で、裾部は小さく開く。外面は刷毛目、内面はナデ調整。胎土には多量の砂粒を混え、灰白色。192は器台受部片である。外面は刷毛目、内面ナデ調整。多量の砂粒を混えた胎土で暗褐色を呈する。

以上述べた土器のうち、185・186・190はいずれも井戸底から横置の状態で出土した。

ＳＥ36（Fig.57、193—197）　193は複合口縁壺である。口縁上半部は直立し、下半部との境の稜線上に刻目を施す。外面凸帯下は刷毛目、他はナデ調整。194は直口壺片である。口頸部は短く立ち、端部を丸く作る。外面ヘラ研磨。195も直口壺の類であろう。口頸部はわずかに外反する。外面刷毛目、内面ナデ調整。これらの壺形土器は胎土に少量の砂粒を混え、褐色を主とした色調をなす。196・197は甕もしくは壺形土器の底部である。197の胎土は精良。

ＳＥ37（Fig.58、198—204）　198は頸部が細く直立する壺形土器で、楕円状に張った胴部中位に最大径をもつ。底部は丸底。内外面とも刷毛目調整を行ない、その上からナデ消している。胎土には砂粒を多く混え、淡赤褐色。口径12.5cm、器高29.7cm。199・200は直口壺の類である。199は口縁部がわずかに外反するのに対し、200はやや内湾気味になる。胴部は199が扁球状で、外面ヘラ研磨。200は球状で、胴部上半はヘラ研磨、上半から口頸部は刷毛目調整。ともに外面には丹塗りを行なう。底部はやや扁平な丸底。胎土には砂粒を混え、淡赤褐色。199は口径11.2cm、器高12.8cm。200は口径10.1cm、器高10.6cm。

201は甕形土器の口縁部片であろうか。外面には刷毛目調整を行なう。202は高杯杯部片である。杯下半部からほとんど稜を作らないまま上半部が外に開く。残存部は横ナデ調整。203は高杯脚部片で、外面には丹の痕跡が認められる。２点の高杯片は胎土に少量の砂粒を混え、淡赤褐色を呈する。204は甕もしくは壺形土器の底部である。底部は小さな平底を作る。外面ヘラナデ、内面刷毛目とナデ調整。多量の砂粒を混えた胎土で、黄白色を呈する。

以上述べた土器のうち、198～200・204は井戸底から出土したものである。

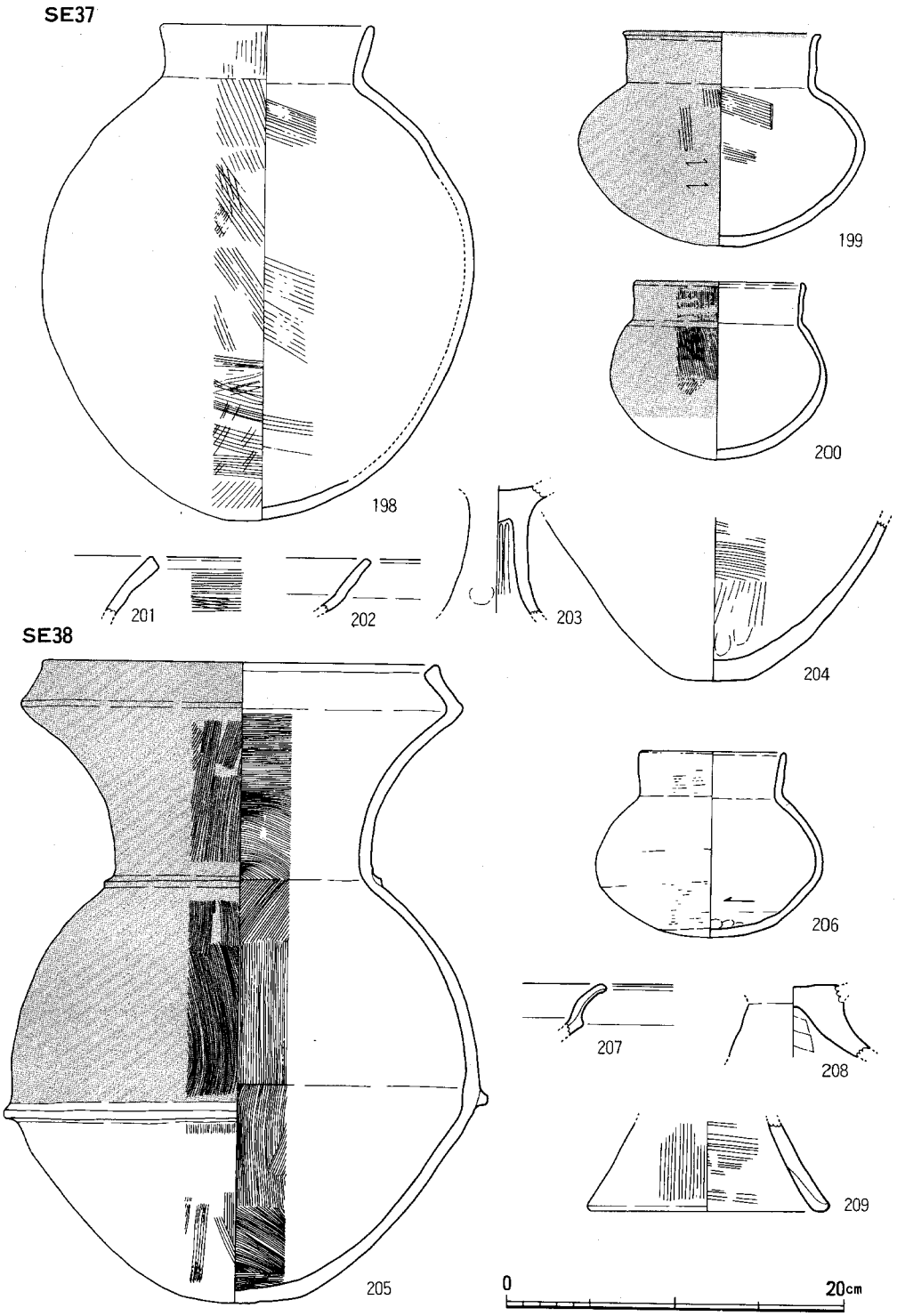


Fig.58　SE37・38出土土器実測図（1／4）

ＳＥ38（Fig.58、205—209）　205は複合口縁壺である。口縁上半部は外反気味に内傾し、頸部は付根で最も締り、そこに三角凸帯をめぐらす。胴部は球形状で、その中位よりやや下がった最大径部分に台形状凸帯を一条めぐらす。底部は扁平な丸底。口縁部以外は刷毛目調整を行なうが、一部ナデ消す。外面頸部から胴部凸帯上までは丹塗り。多量の砂粒を混えた胎土で、丹塗り部分以外は黄褐色を呈する。口径23.0cm、器高38.4cm。206は直口壺の類である。扁球形の胴部から口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。底部は扁平な丸底。外面はヘラ研磨、内面はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、褐色を主とした色調をなす。口径8.4cm、器高11.1cm。207～209は高杯であるが、いずれも細片で全体はうかがうことができない。

ＳＥ39（Fig.59、210—218）　210・211は複合口縁壺である。210は口縁上半部が内湾気味に立つ。211は外湾気味に内傾するもので、頸部は付根で最も締り、そこに一条の三角凸帯をめぐらす。213は複合口縁をもつ壺形土器であろう。頸部付根と胴部中位に三角凸帯をめぐらす。胴部の凸帯は幅広で、刻目を施す。これらの複合口縁壺は内外面とも刷毛目調整後ナデ調整を行なう。213の口頸部は丹塗り。胎土には多量の砂粒を混え、210・211が赤褐色、213が黄灰色を主としてなす。211の口縁部には円孔を設ける。212は短頸壺の口縁部とも考えられるが、細片のため全体は復元できない。

214～218は壺形土器の底部であろう。いずれも丸みをおびた平底を呈する。内外面とも刷毛目調整を行なうが、214の外面はその上にヘラ研磨を、また218の胴部下半はヘラ状工具によるナデ調整を施す。215・216・217は底面も刷毛目調整を行なっている。胎土には砂粒を多く混える。

ＳＥ40（Fig.59、219—221）　219はくの字状口縁の甕形土器である。内面屈曲部には稜を作り、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面と口縁部内面は刷毛目、他はナデ調整。胎土には砂粒を混え、黄褐色。220は小型の甕形土器の底部である。残存部はすべてナデ調整。淡赤褐色。221は高杯の脚部片であろうか。残存部はナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、黄褐色。

ＳＥ41（Fig.59、222）　複合口縁壺である。口縁上半部は内傾し、端部で直立する。下半部との境は肥厚し、頸部は付根付近で締る。胴部は球形状であるが、やや下膨れといった感がある。外面頸部から胴部にかけては刷毛目調整。内面もほぼ同じだが、胴上半部はナデ調整。多量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色～暗褐色を呈する。

ＳＥ42（Fig.60）　223・224は複合口縁壺である。口縁上半部はほぼ直線的に内傾し、端部を丸くおさめるが、下半部との境は丸みをおびる。223の頸部は付根で締るが、凸帯はもたない。223は頸部外面に、224は頸部内外面に刷毛目調整。ともに多量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色を呈する。225は長頸壺である。横に大きく張った胴部から、細長く頸部が立ち上り、外反する。底部は丸みをおびた平底。外面は刷毛目の上にヘラ研磨、内面ナデ調整。砂粒を多量に混えた胎土で、黄褐色。口径6.6cm、器高13.6cm。226は広口壺の類であるが、小破片で口径は確

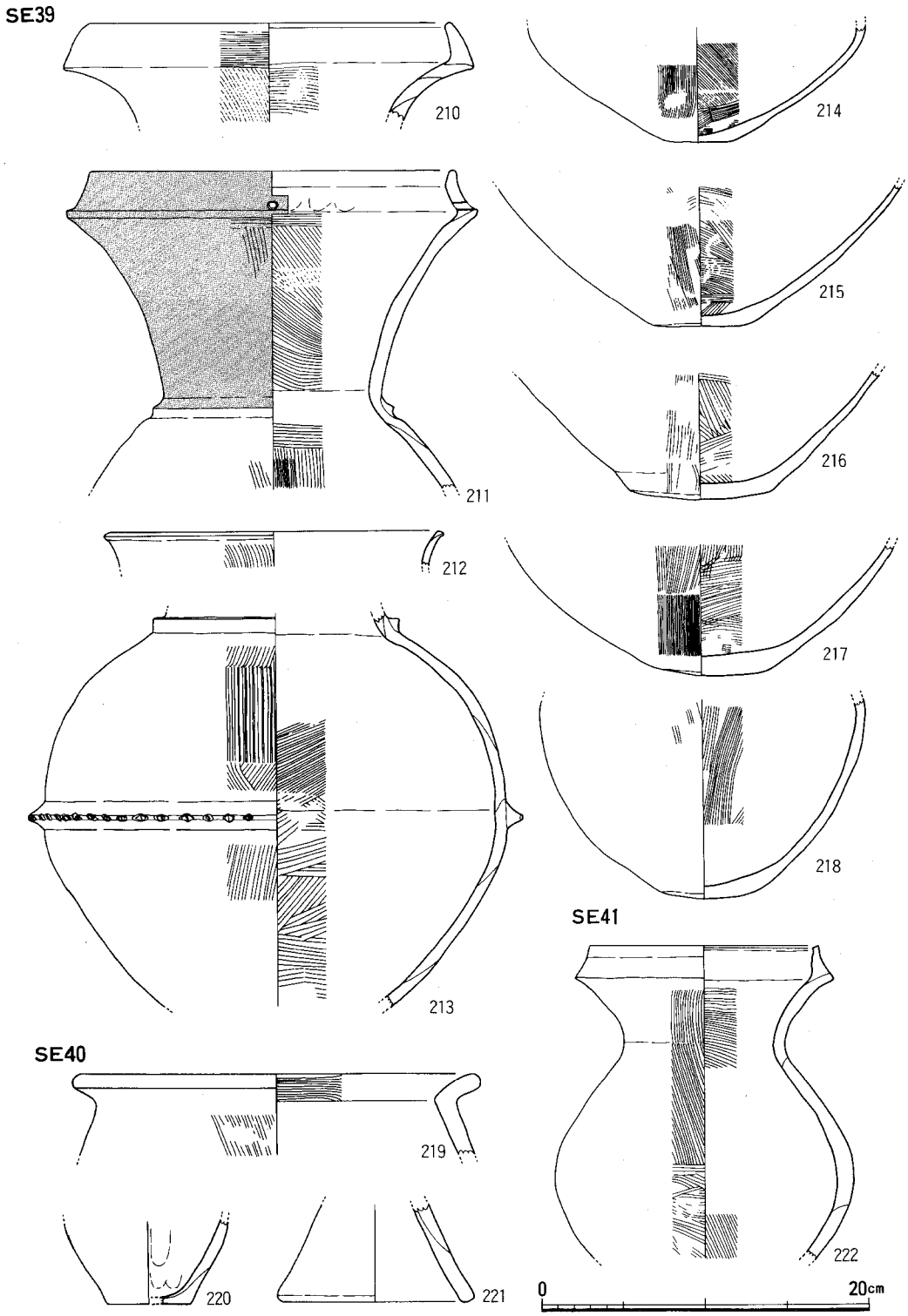


Fig.59　SE39・40出土土器実測図（1／4）

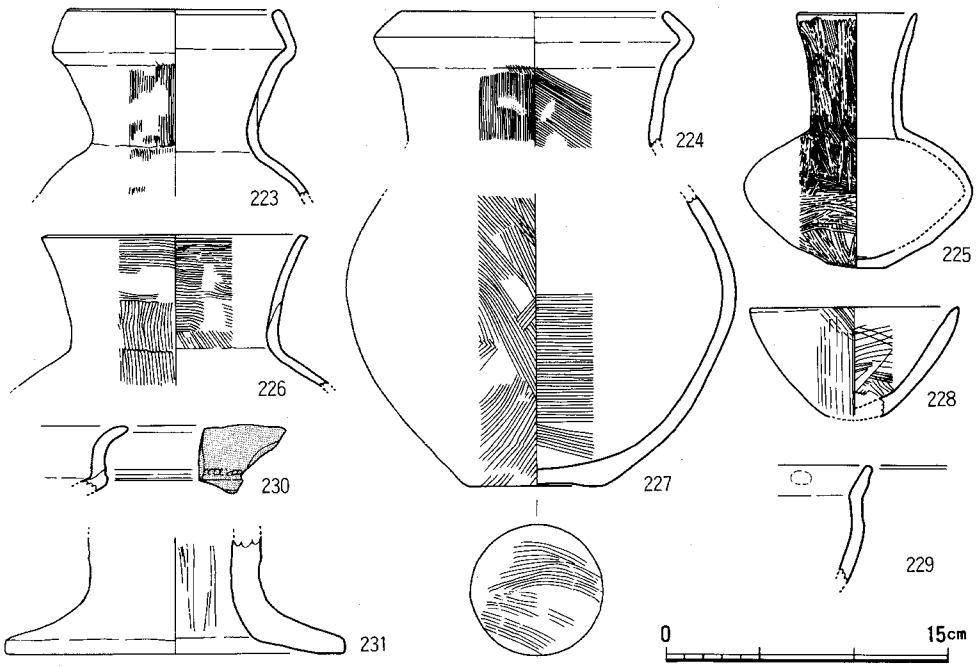


Fig.60　SE42出土土器実測図（1／4）

定できない。内外面とも刷毛目調整。227は壺形土器の口縁部を欠いたものである。内外面および底面に刷毛目調整を行なう。多量の砂粒を混えた胎土で、赤褐色。

228は鉢形土器で、内外面とも刷毛目調整。229は口縁部が外反する鉢形土器片。残存部はナデ調整。230は高杯杯部片で、上半部が一度立ち上り、口縁部が外反する。内面の屈曲部には棒状工具による押圧痕がみられる。残存部は内外面とも丹塗り。胎土には少量の砂粒を混える。231は器台である。底部は横に大きく開く。内外面ともナデ調整。砂粒を多量に混えた胎土で、黄褐色。

以上の土器のうち225・227は井戸底から出土した。

ＳＥ43（Fig.61、232—240）　232～234は複合口縁壺である。口縁上半部はいずれも外反気味に内傾するもので、232・233は端部が直立する。232の頸部は中位で締り、胴部はやや下膨らみの扁球形をなす。底部は丸みをおびた平底。内外面とも刷毛目調整を行なうが、外面胴部下半はナデ消す。また底面も刷毛目調整。口径14.4cm、器高24.8cm。235は横に大きく張った胴部をもつもので、長頸壺の類ではないかと考えられる。底部は小さな平底。外面はヘラ研磨、内面は指押えの後板状工具によるナデ調整。236も壺形土器の口縁部を欠いたものである。底部は丸みをおびた平底。外面および底面は刷毛目の上から板状工具によるナデ調整。内面はナデ調整で仕上げる。以上の壺形土器の胎土には、232が砂粒を多量に混え、他は少量の砂粒を混える。

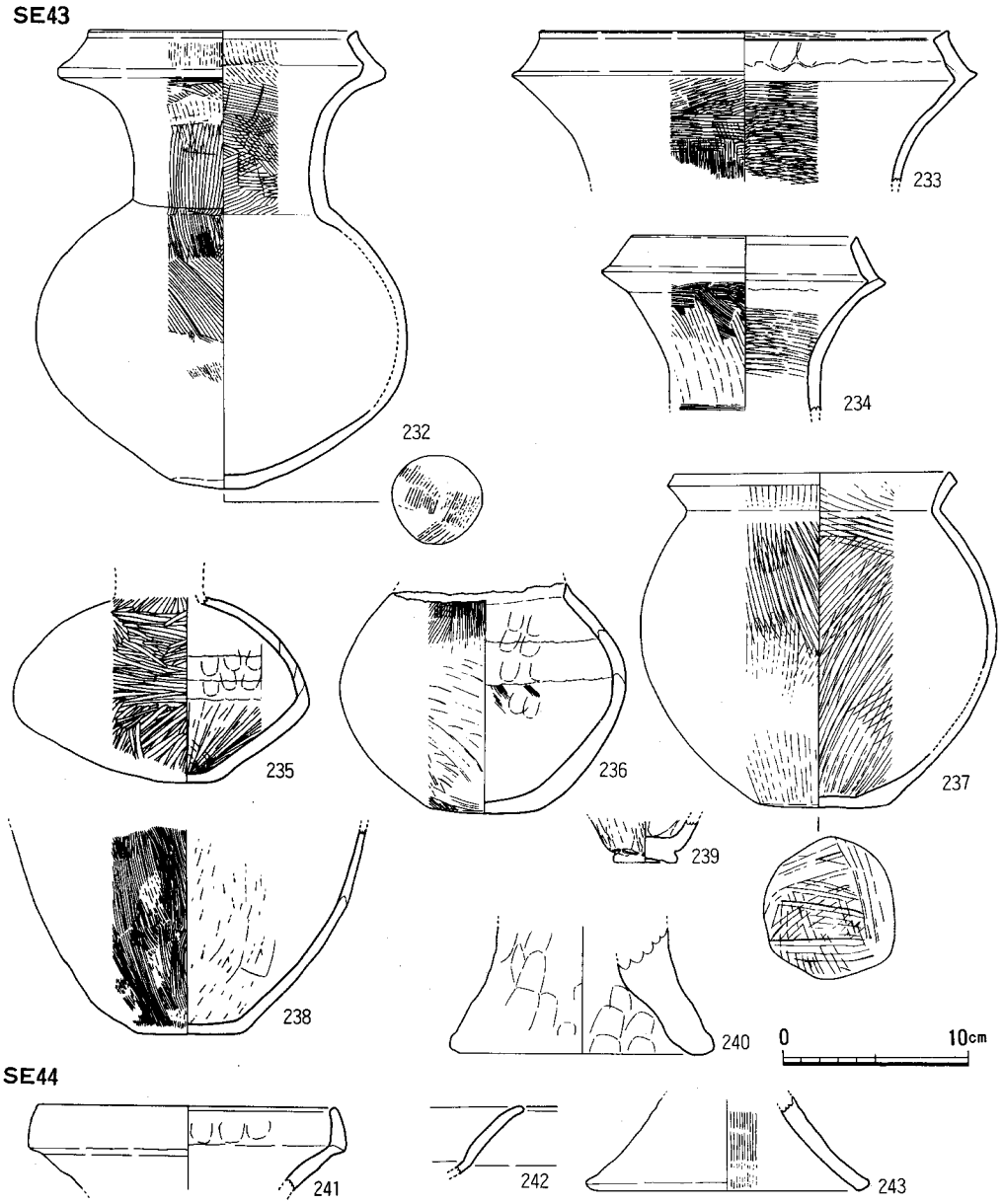


Fig.61　SE43・44出土土器実測図（1／4）

焼成は良好で、232・234・235が淡褐色、233・236が淡灰褐色を呈する。

237はくの字状口縁をなす甕形土器である。口縁端部はやや肥厚する。胴部は球形状で、底部はわずかに丸みをもった平底を呈する。内外面および底面も刷毛目調整を行なうが、外面胴下半部はナデ消す。多量の砂粒を混えた胎土で、赤褐色を呈する。口径14.9cm、器高11.1cm。238も甕形土器の胴下半部である。底部は平底で、外面刷毛目、内面板状工具によるナデ調整を行なう。砂粒を多く混えた胎土で、淡灰褐色。239は手捏ね土器である。甕形土器のミニチュアと

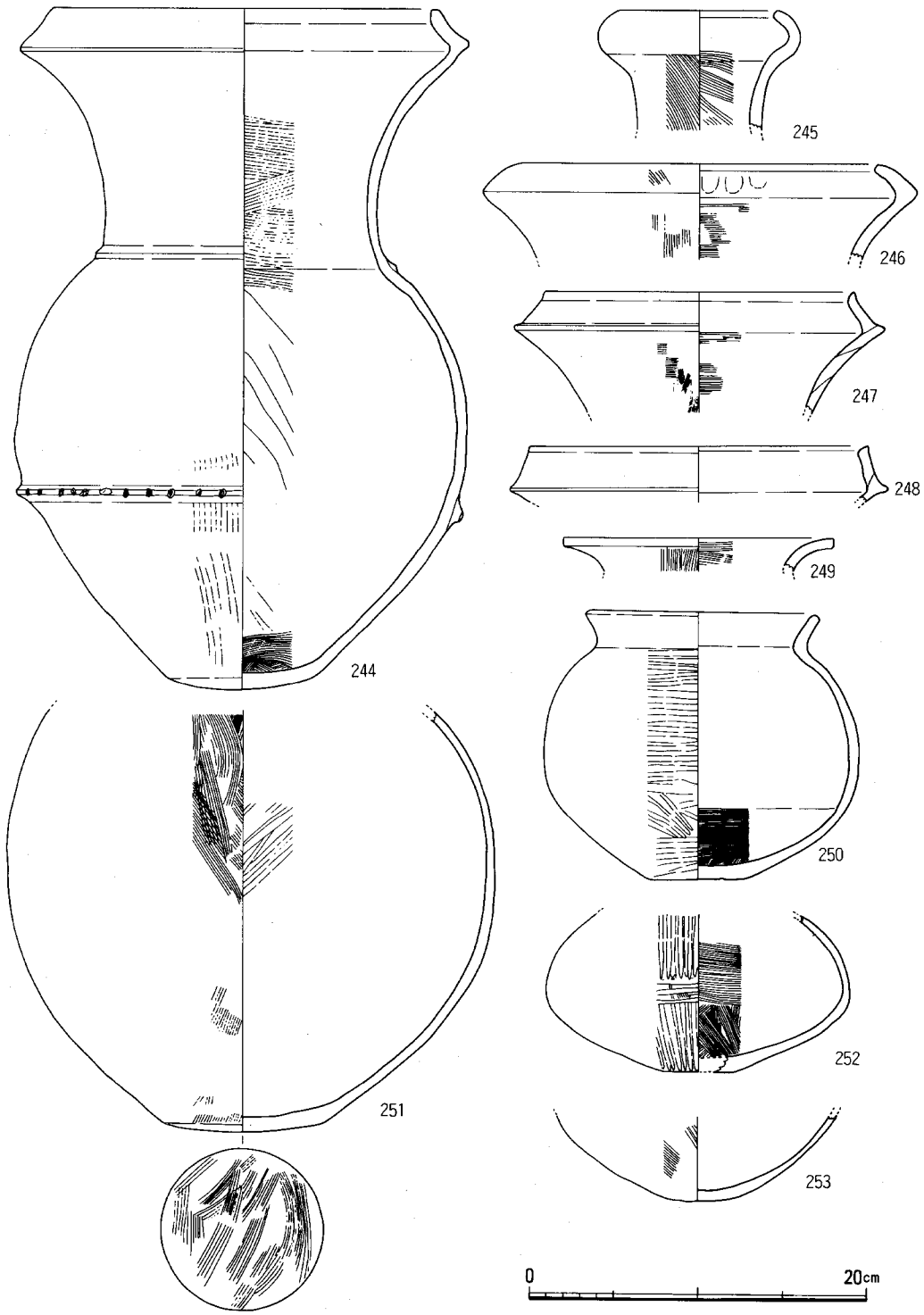


Fig.62　SE45出土土器実測図（1／4）

考えられる。ナデ調整。少量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色。240は肉厚の器台あるいは支脚片である。内外面とも指押えによる器表の凹凸が著しい。淡灰褐色。

以上述べた土器のうち、232・235～238はいずれも井戸底からの出土である。

ＳＥ44（Fig.61、241—243）　小破片のみの出土である。241は複合口縁壺で、口縁上半部は内湾気味に直立し、端部を丸くおさめる。残存部はナデ調整。外面に一部丹塗りの痕跡がある。242・243は高杯である。242の杯上半部は大きく外に開き、内外面とも丹を塗る。ともに少量の砂粒を混えた胎土を用いる。

ＳＥ45（Fig.62）　245は袋状口縁壺である。口縁部は丸く内湾する。頸部は内外面とも刷毛目調整。外面丹塗りの可能性が高い。244・246～248は複合口縁壺である。口縁上半部の作りがそれぞれ異なる。246は丸みをもって内湾するもの。244・247・248はやや外反気味に内傾するものであるが、口縁端部の作りには相違が認められる。244は頸部が中位で締り、付根に三角凸帯をめぐらす。胴部のほぼ中位に最大径をとり、それよりやや下った所に刻目凸帯をめぐらす。底部は丸みをもった平底。口径22.7cm、器高40.5cm。244～248のいずれも胎土には砂粒を多量に混え、246が赤褐色、他が黄褐色を呈する。

249は広口壺の類であろうが、細片のため詳細は不明。250は短頸壺である。扁球状の胴部から口頸部が短く外反し、端部を丸くおさめる。底部は平底。胴部外面はヘラ研磨、内面は刷毛目、他はナデ調整。胎土には少量の砂粒を混え、赤褐色を呈する。口径13.4cm、器高16.1cm。251～253は壺形土器の底部であろう。251は複合口縁壺、252は長頸壺をなすものと考えられる。いずれの底部も丸みをもちながらも、一応平底を呈する。

以上の土器のうち、244・250は井戸底から出土したものである。

ＳＥ46（Fig.63・64）　254～256は広口壺であるが、形態・調整などに差異がある。254は球形の胴部から口頸部が外反するもので、底部は丸底。胴部は内外面とも刷毛目調整。ただし外面の刷毛目はナデ消す。砂粒を多く混えた胎土で、暗褐色。口径14.5cm、器高29.2cm。255は扁球状の胴部から口頸部が直線的に外傾するもので、底部は丸底を呈する。口頸部と胴部外面はヘラ研磨、胴部内面は板状工具によるナデ調整で仕上げる。精良な胎土を用い、淡赤褐色。口径15.8cm、器高27.8cm。256は大きく張った胴部から口縁部が外反する。胴部外面は刷毛目調整の後ナデ、内面は軽いヘラ削り。口頸部はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、黄褐色。

257は複合口縁壺である。口縁上半部は外上方に大きく開く。器表は磨滅するが、残存部はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、暗褐色。258・259は小さな平底をもつ壺形土器である。器表は磨滅しているが、ともに外面にはヘラ研磨が認められる。また258の外面は丹塗り。胎土は258が精良、259が砂粒を多く混える。色調はともに赤褐色～黄褐色を呈する。260は長頸壺の類の胴部片であろうか。大きく横に張った扁球形をなす。内外面とも磨滅し、調整不明。精良な胎土で、淡赤褐色をなす。

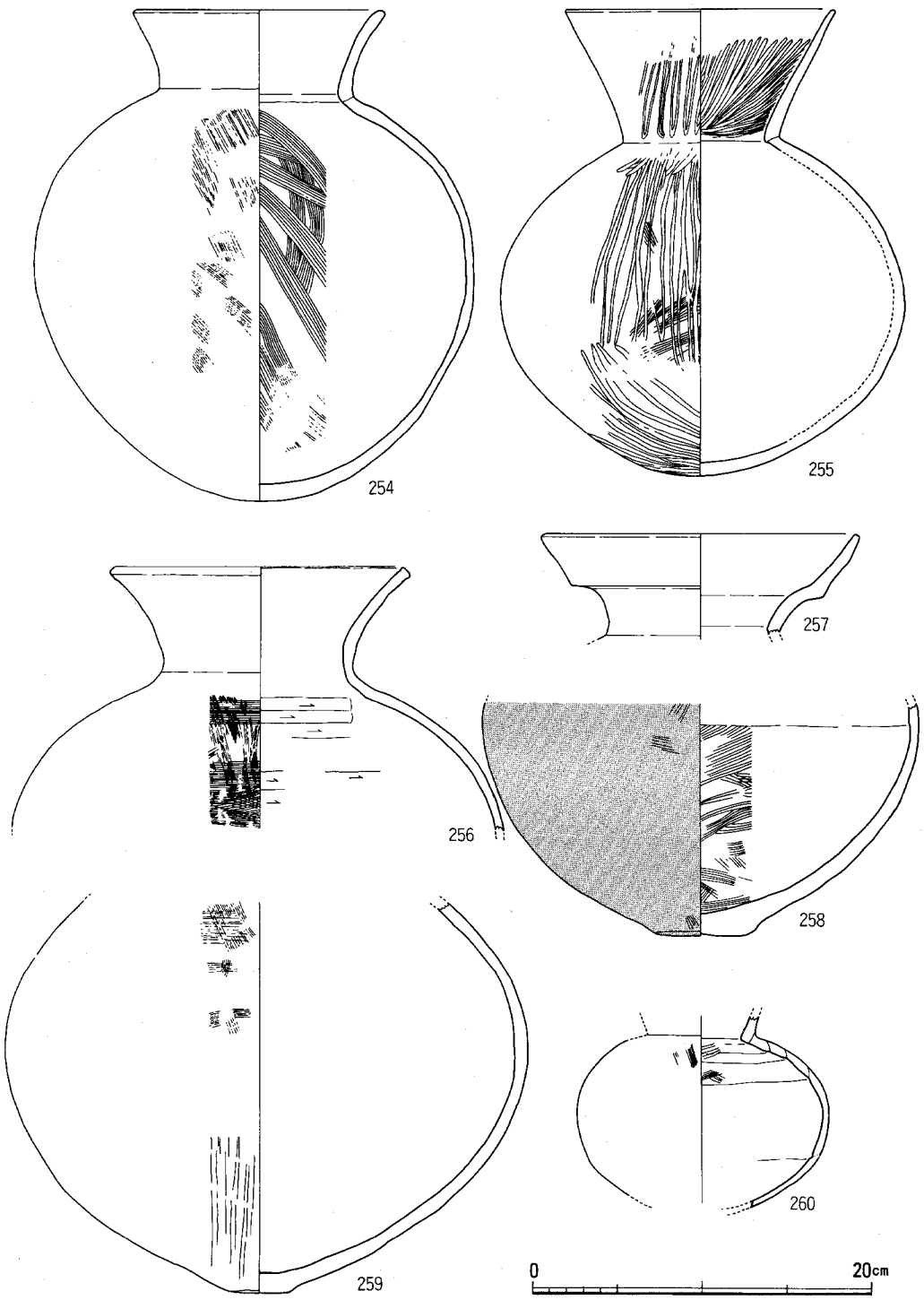


Fig.63　SE46出土土器実測図Ⅰ（1／4）

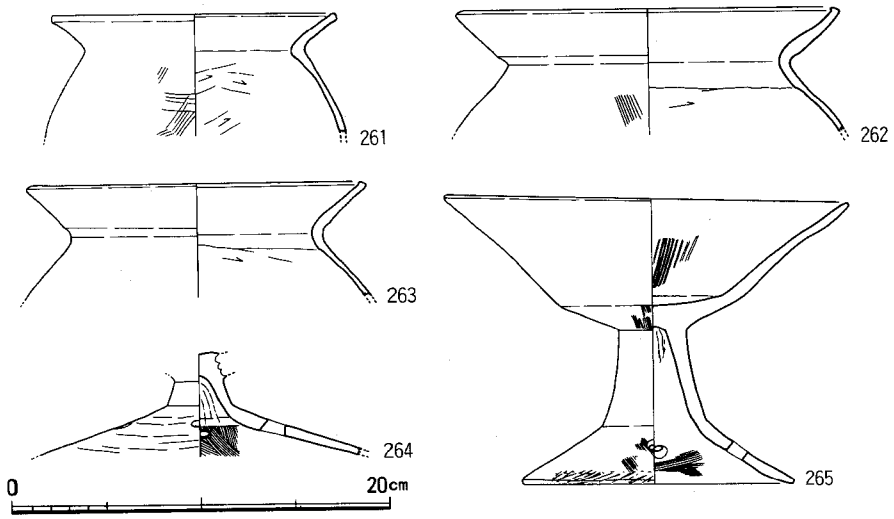


Fig.64　SE46出土土器実測図II（1／4）

261～263は甕形土器である。口縁部は261が直線的に外傾するのに対し、262・263はわずかに内湾気味で、端部はナデつぶす。胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削り、その他はナデ調整であるが、磨滅して不明瞭。砂粒を多く混えた胎土で、262が淡黄褐色、他は褐色を主としてなす。

264・265は高杯である。265は脚裾部が大きく開くもので、その上位に透孔を設ける。265は杯部が深いもので、その上半部は大きく外反する。筒部は直線的に開き、さらに裾部が屈曲して開く。裾部の中位に4ケ所透孔を設ける。最終的にはナデ調整で仕上げているが、外面に刷毛目、また杯部内面には暗文風のヘラ研磨が残る。口径21.6cm、器高15.5cm。ともに精良な胎土を用い、赤褐色を呈する。

ＳＥ47（Fig.65、266）　扁球形の胴部から口頸部が短く外反する短頸壺である。底部は小さいながら平底をなす。外面は磨滅して調整不明。内面口頸部と内底は刷毛目調整。胎土には砂粒を少量混え、淡赤褐色を呈する。口径15.7cm、器高17.5cm。

ＳＥ48（Fig.65、267—270）　267は複合口縁壺である。口縁上半部は直線的に内傾し、外面にはヘラによる斜めの線刻を施す。頸部は中位で最も締る。頸部付根には三角凸帯をめぐらす。胴部は球形状を呈し、そのやや下位に刻目凸帯をめぐらす。底部は丸みをおびた平底。口縁上半部と胴部外面凸帯下がナデ、他は刷毛目調整で仕上げる。砂粒を多量に混えた胎土で、灰褐色。口径24.5cm、器高37.2cm。268は長頸壺の類であろう。横に大きく張った扁球形の胴部から口頸部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。底部は扁平な丸底。外面胴下半部はヘラ研磨、他はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、黄褐色。口径9.3cm、器高11.0cm。269は広口壺である。肩の張った胴部から頸部が直立し、口縁部が外反する。頸部にはヘラによる斜めの線刻がある。全体にナデ調整で仕上げる。砂粒を多く混えた胎土で、黄褐色。丹塗りの痕跡がみられ

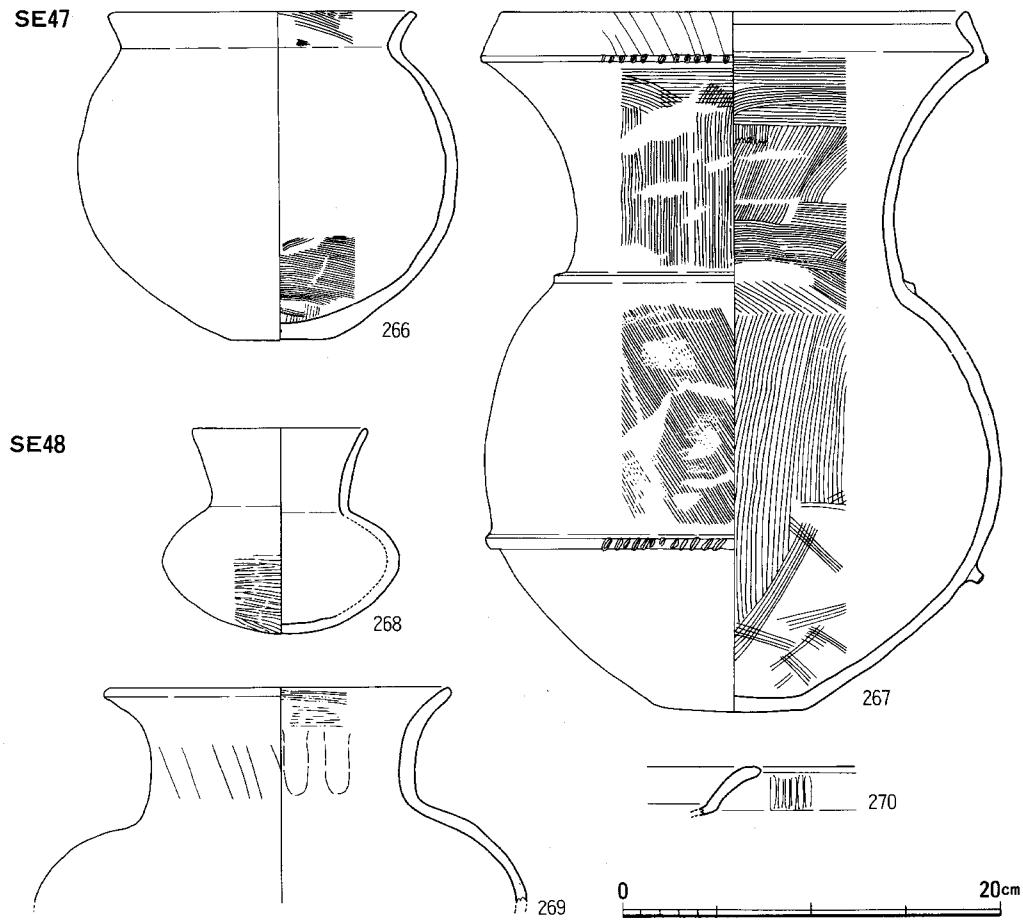


Fig.65　SE47・48出土土器実測図（1／4）

る。270は高杯片で、杯上半部は外反し、端部は横に引き出される。外面ヘラ研磨。267・268は井戸底より出土した。

ＳＥ49(Fig.66)　271～273は複合口縁壺である。口縁上半部は内傾するものの、やや外反する形態をとる。271は頸部付根に三角凸帯、球形状の胴部中位に刻目凸帯をめぐらす。底部は扁平な丸底。273は口縁上半部と下半部の境に刻目を施す。いずれも刷毛目調整をまず行ない、その上をナデ調整で消す部分が多い。砂粒混りの胎土で、褐色を主として呈する。271の口径22.2cm、器高39.4cm。274は広口壺であろう。外反した口縁端部は丸みをおびる。276は短頸壺である。扁球形の胴部から口頸部が短く外反する。底部はわずかに平底状。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、灰褐色。口径10.2cm、器高12.1cm。275は下膨れの胴部をもつ壺形土器である。底部は扁平な丸底。調整は最終的にナデで仕上げているが、内外面とも縦

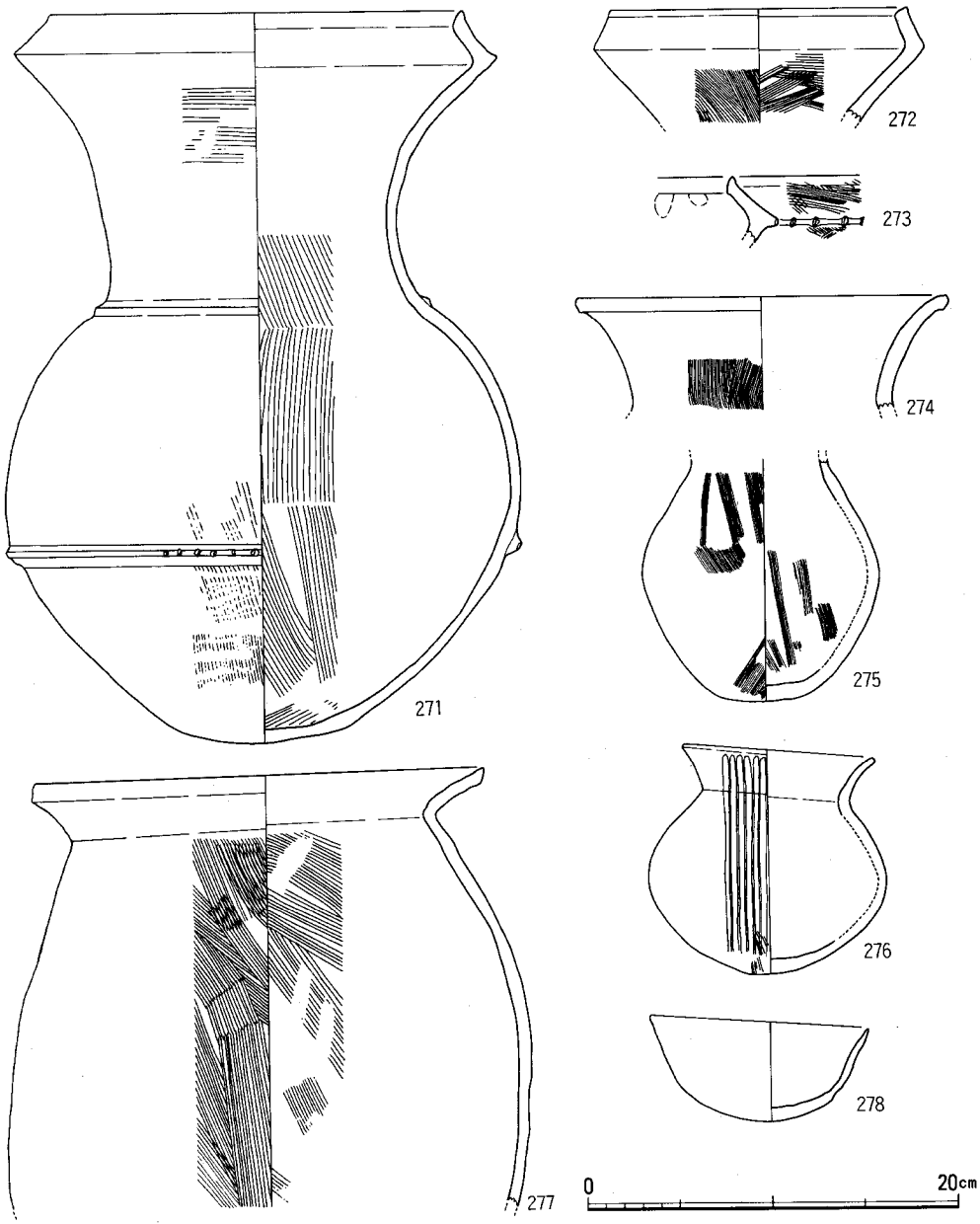


Fig.66　SE49出土土器実測図（1／4）

の刷毛目が部分的に残る。砂粒を少量混えた胎土で、暗褐色を呈する。

277は甕形土器である。口縁部はくの字状に大きく屈曲し、胴部は張りの小さい長胴となる。胴部は内外面とも刷毛目調整。砂粒を多く混えた胎土で、黒褐色。278は鉢形土器である。半球形の体部から口縁部がわずかに外上方に開く。少量の砂粒を混えた胎土で、淡赤褐色。口径11.

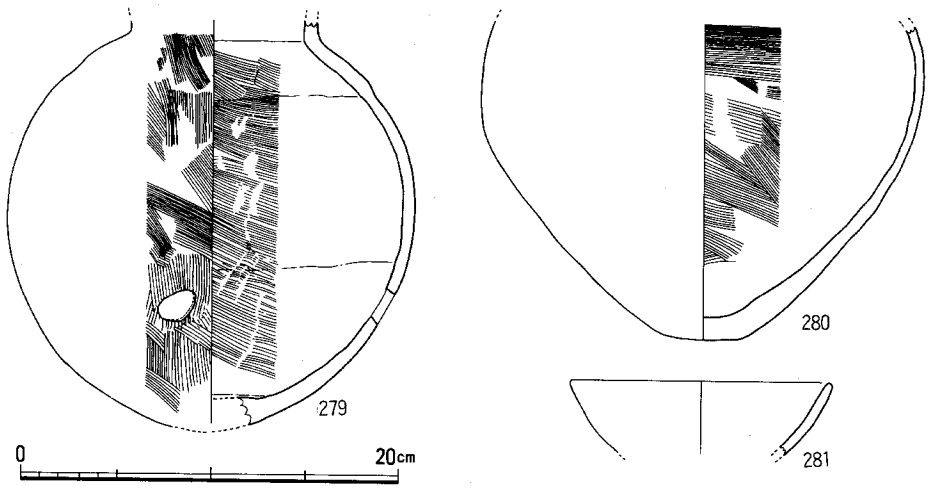


Fig.67　SE50出土土器実測図（1／4）

8cm、器高5.8cm。

以上述べた土器のうち、271・276は井戸底面近くから出土したものである。

ＳＥ50（Fig.67）　279・280は壺形土器であろうか。279は球形の胴部をなす。底部は欠損。残存部は内外面とも刷毛目調整。胴下半部に穿孔を施す。280は底部に向ってすぼまるもので、底部そのものは小さな平底を呈する。外面ナデ、内面刷毛目調整。ともに砂粒を多く混えた胎土で、黄褐色を呈する。281は半球形をなす鉢形土器であろう。胎土には砂粒を多く混え、淡赤褐色を呈する。279・280は井戸底から出土したものである。

2）　土製品

投弾（Fig.68、Ｄ01）　手捏ねで紡錘形に整形したものである。胎土には微砂粒を含み、焼成堅緻。器面は灰黒色から灰褐色をなし、黒斑がみられる。重さ12.6ｇ。ＳＥ43出土。

3）　石器

石庖丁（Fig.68、Ｓ02・03）　S02は頁岩質ホルンフェルス、Ｓ03は安山岩質ホルンフェルスを素材とした半月形状の石庖丁（穂摘具）である。敲打整形後研磨を加え、表裏から穿孔している。刃部は両刃である。Ｓ03は全長12.4cm、幅3.7cm、厚さ0.65cm、現重量48.8ｇ。S02はＳＥ04、Ｓ03はＳＥ16から出土。

石錘（Fig.68、Ｓ04）　滑石変岩を素材としたもので、平面隅丸方形、断面円形に整形する。穿孔は上下から中央部に向って行ない、さらに両側から中央孔に向って穿つ。半欠品。重さ575.8ｇ＋α。ＳＥ35出土。

砥石（Fig.68、Ｓ01）　砂岩質の石材を素材としたもので、研磨により中央部が凹む。ＳＥ01より出土。

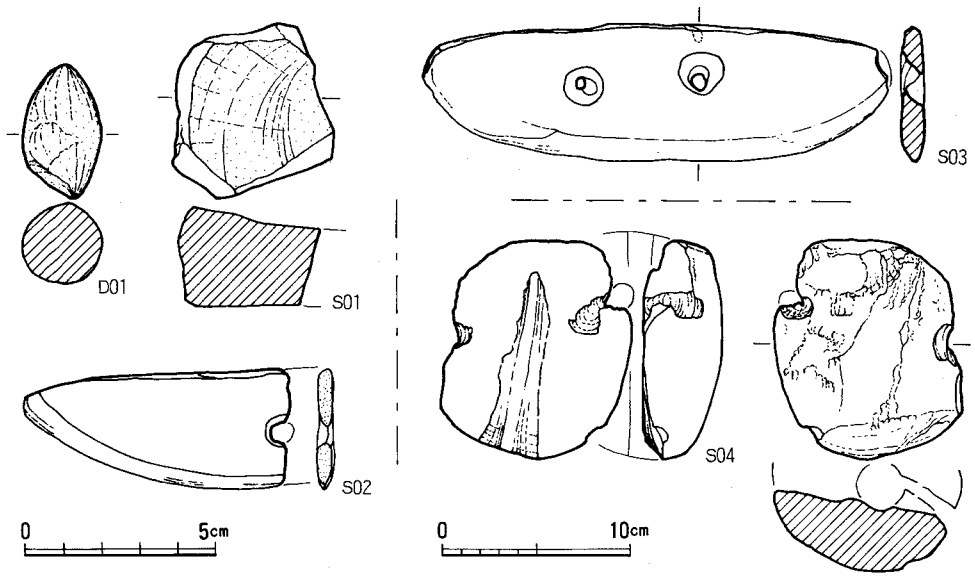


Fig.68　井戸址出土土製品・石器実測図（1/2、1/4）

4）　木器

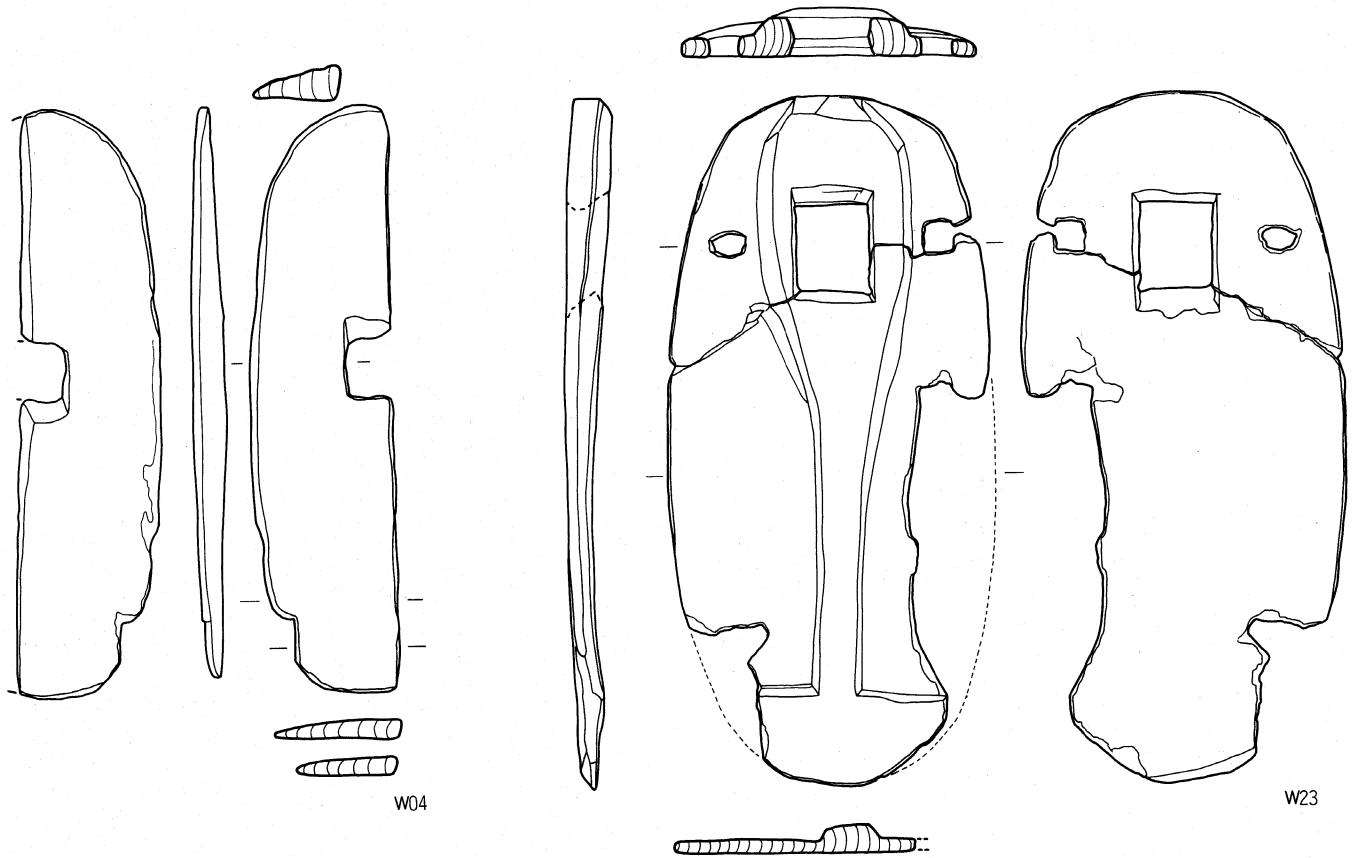
農具

農具としては、平鍬・三又鍬・鍬類組合せ着装具の農耕具類の他に杵が出土している。

平鍬（Fig.69、W04・W23）　W04は柾目取りの板材を素材として、平面長楕円形に整形し、そのほぼ中央に方形柄孔を穿つ。刃部は金属刃（鍛造鉄刃？）を組合せるために段を作り出している。全長31.5cm。樹種はカシ。ＳＥ10出土。W23は柾目取りの板材を素材として、平面長楕円形に整形し、体部の頭部寄り中央に方形柄孔を穿つ。また柾目で裂けるのを防止し、また柄を固定強化するためと考えられる方形小孔を柄孔の両側に穿っている。体部裏面には、鍬に強度をもたすためと考えられる長い隆起部を作り出す。刃部の両側が欠損しているため分かりにくいが、体部表面の状態、体部裏面の隆起部が刃部の所で広がっていることなどからして、鉄刃？を着装していたものと考えられる。全長36.9cm、幅17cm前後。樹種はカシ。ＳＥ17出土。

三又鍬（Fig.70）　W05・W61の２点が明確に三又鍬と認められるものである。２点ともカシの柾目取り板材をその素材としている。W05は半円形に、W61はコの字状に頭部を作り出し、その中央に方形柄孔を穿つ。刃基部は逆Ｖ字状に切り込む。三又のうち中央刃は断面六角形、側刃は五角形に整形する。W05の残存長44cm。ＳＥ10出土。W61の残存長33cm。ＳＥ35出土。

鍬類組合せ着装具（Fig.71、W29・W32）　２点出土したが、ともにカシの板目取りの角材を素材として、鍬柄孔受部の段を作り出している。柄固定のための縄縛痕は、側面が傷んでいるため分らない。W29の全長21.5cm、幅3.1cm。ＳＥ23出土。W32の全長25.2cm、幅4.4cm。ＳＥ31出土。



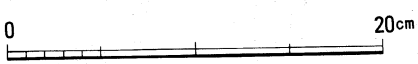


Fig.69　井戸址出土木器実測図Ⅰ（1／4）

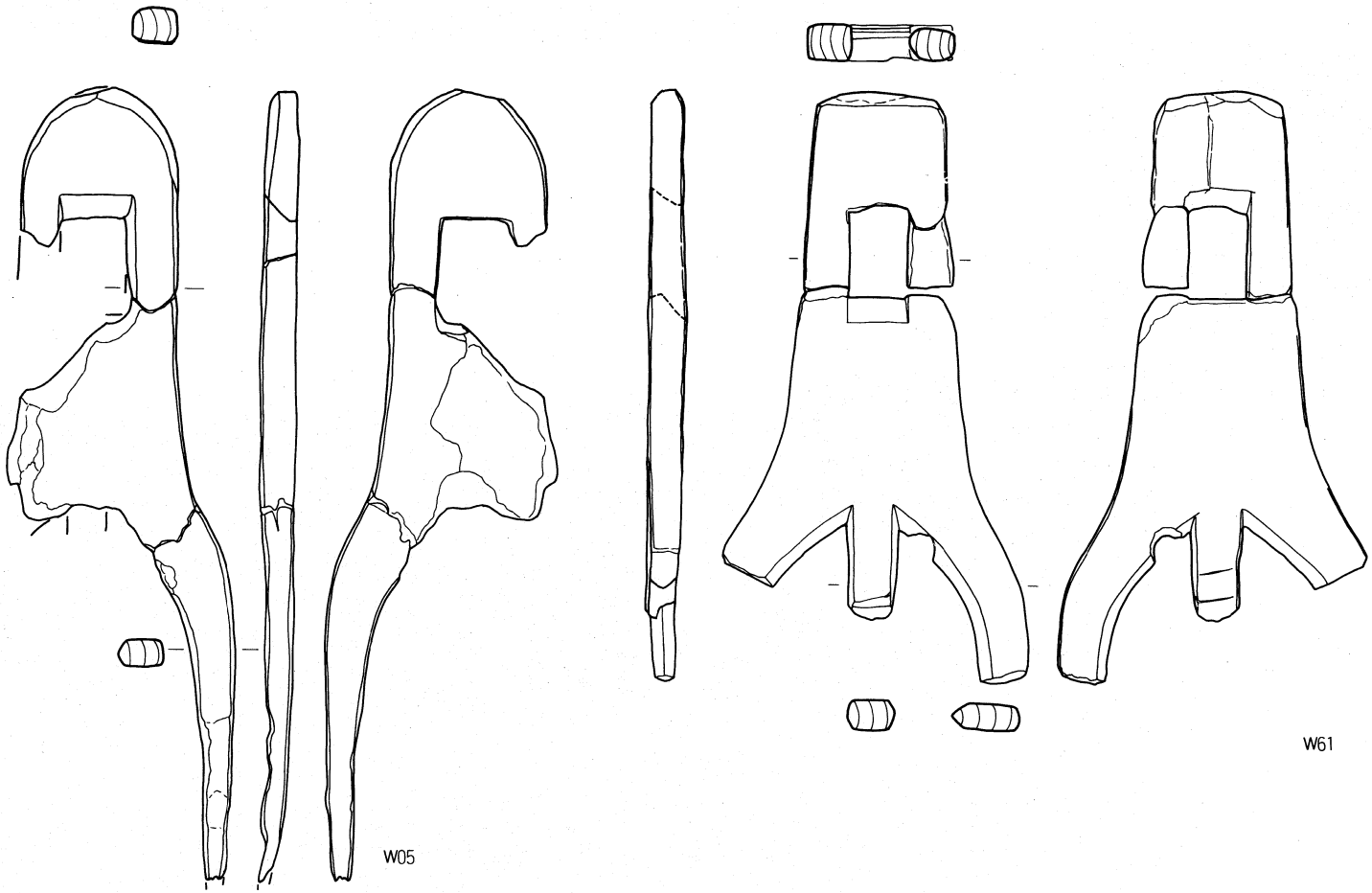


Fig.70　井戸址出土木器実測図II（1／4）

0　20cm

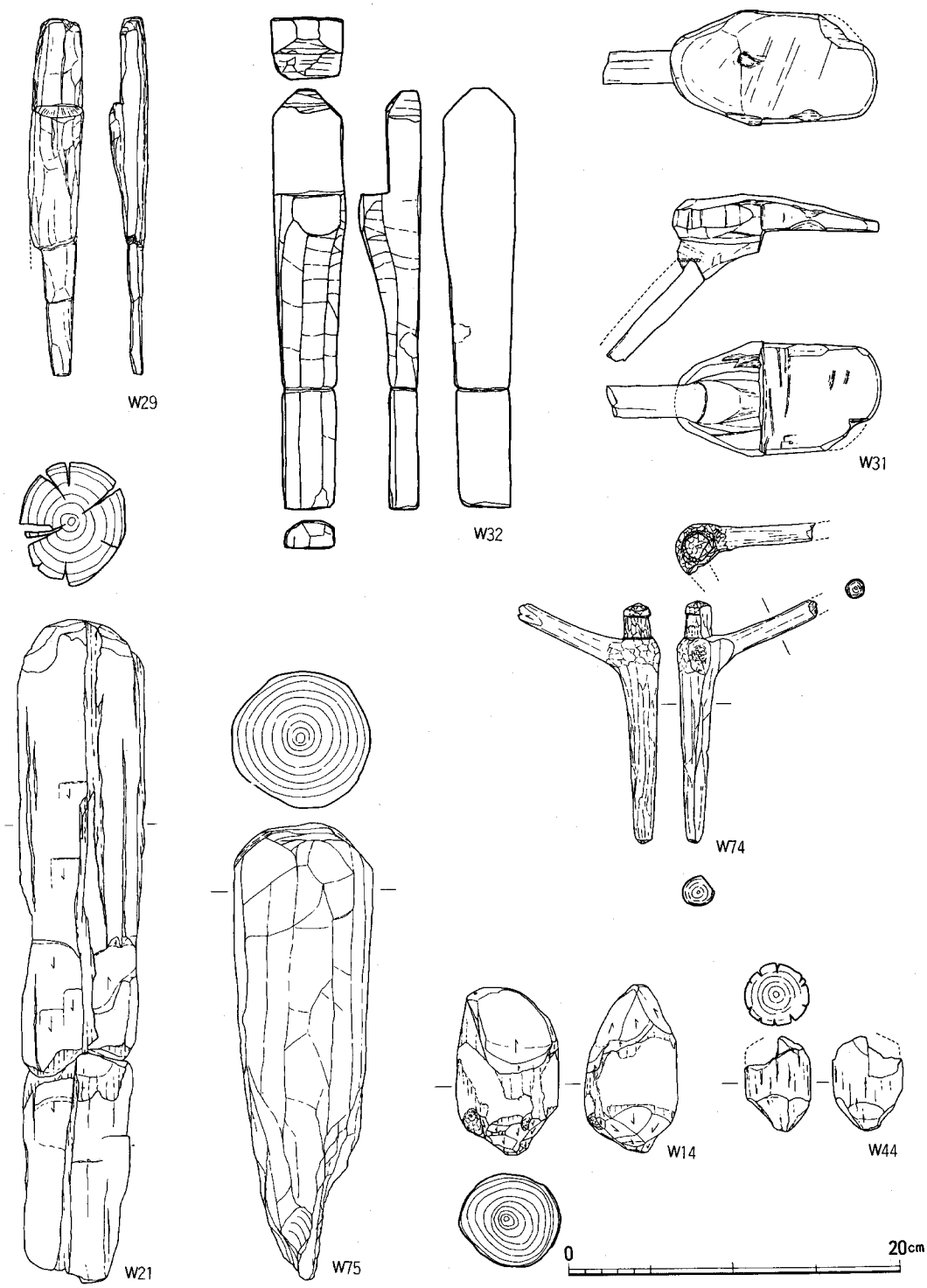


Fig.71　井戸址出土木器実測図III（1／4）

鋤柄？（Fig.71、W31）　幹から枝分れする部分を利用して製作したもので、平面楕円形の組合せ部から、柄部が延びる。組合せ部の上面は先端に向ってやや傾斜し、下面は段を作る。ナスビ形木製品の柄と考えられるが、金属工具の柄の可能性もある。組合せ部の長さ12.5cm、幅7.0cm。ＳＥ27出土。

杵（Fig.71、W21・W75）　２点とも芯持ち丸木を素材とした竪杵の片側搗部で、握部ともう一端の搗部は欠損している。搗部はともに凸レンズ状を呈する。W21の残長40.4cm、径7.5cm。ＳＥ10出土。W75の残長27.8cm、径8.5cm。ＳＥ48出土。

建築材

建築材として考えられるのは、W20・W59・W60・W63などで、この他に井桁として利用されていた枘・枘穴をもつ板材（W55—W58、前報告書Fig.59、本報告書PL.30）もこの部類に入るものであろう。この井桁材については再述しない。

ねずみ返し（Fig.73、W59・W60）　２点とも柾目取りの板材を素材として利用している。ともに残存状態が良くないが、W59は平面円形に整形し、中央部に円形枘穴を穿つ。W60は平面半円形状に整形したと考えられ、弦部分に抉りを設ける。あるいはこの種のものを組合せたものか。この２点は井桁材とともに出土しており、井戸蓋であった可能性もある。ＳＥ33出土。

板材（Fig.73、W63）　スギのナナメ取りの板材で、丸く整形した端部にコの字状の抉りを設ける。残存長67.0cm、幅13.5cm。ＳＥ35出土。

梁材？（Fig.72、W20）　芯持ち丸材を素材としたもので、端部に断面方形の作り出し部分がある。残長33.4cm、径5.7cm。ＳＥ10出土。

その他の木器

糸巻き（Fig.71、W74）　マツの小木の枝分れ部を素材とする。枝分れ直上部と枝分れ下部を切断する。頭部は丁寧な面取り加工によって、俯瞰円形、側面観凸レンズ状に作り出し、枝分れ部との間に糸巻き部を設けている。枝分れ部の端部にも糸巻き部を作り出していたと考えられるが、欠損てしいる。基部端は凸レンズ状をなしている。筒状のものにこの本体を入れ、回転させながら使用したと考えられる。ＳＥ35出土。

網錘（Fig.71、W14・W44）　W14はアワブキの芯持ち材を素材としてしいるが、紐かけ部と他端は欠損している。径6.1cm。ＳＥ10出土。W44はW14に比べ小型で、径3.9cmをはかる。素材および残存状況はW14とほとんど変る所がない。ＳＥ31出土。

匙（Fig.72、W22）　柾目取りの板材を素材とし、柄部は断面方形に、身部は凹レンズ状に整形する。身部の一部が欠損するが、全長33.3cmに復原できる。ＳＥ16出土。

把手付容器（Fig.72、W62）　ヒノキの板目取り板材を素材として、平面長方形の箱形に整形し、内部を刳り抜き身部を作り出したと考えられるが、欠損部が多く全体は復原できない。把手は平面台形に作り出し、中を刳り抜いてコの字状のものとしている。断面は円形をなす。Ｓ

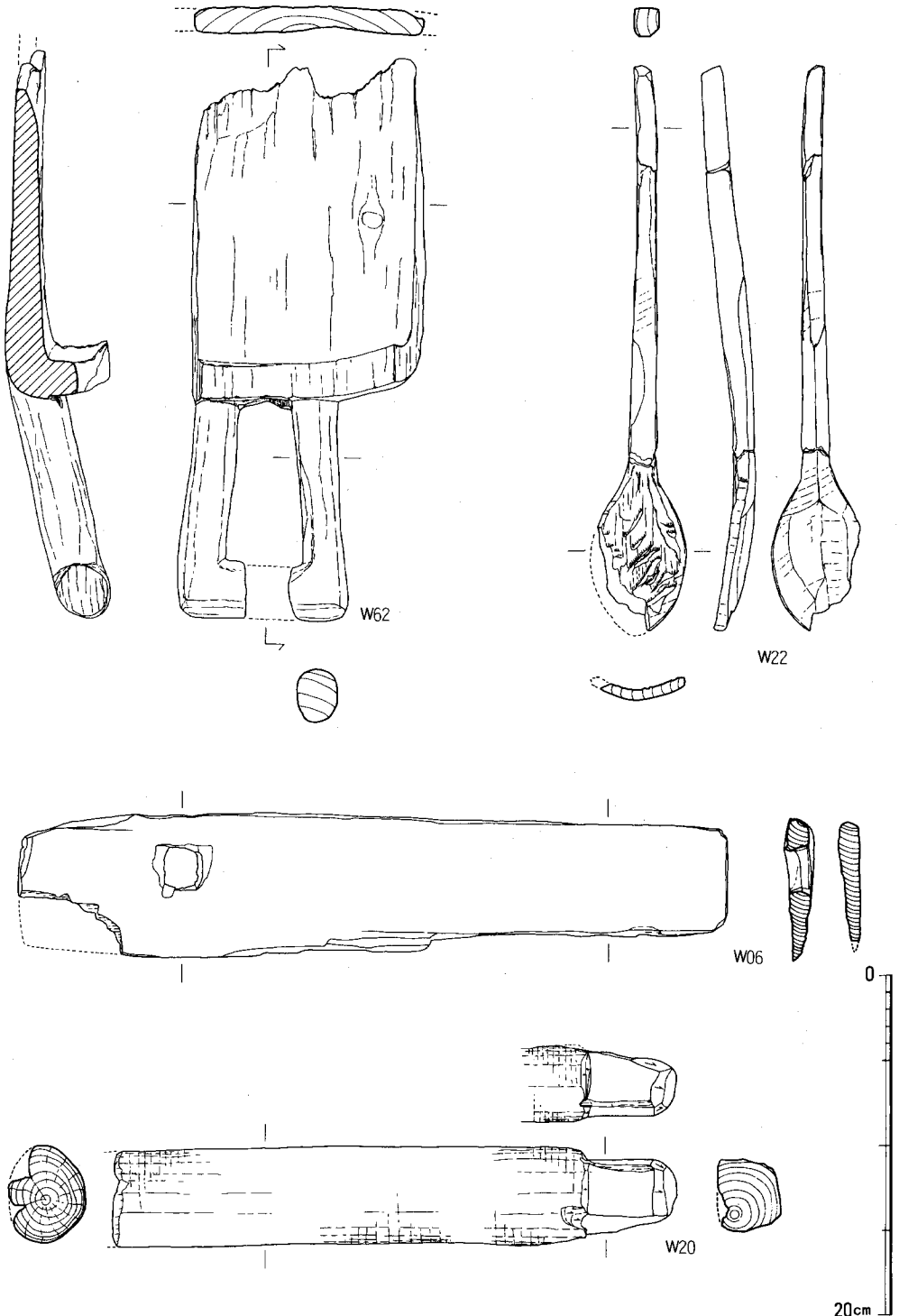


Fig.72　井戸址出土木器実測図Ⅳ（1／4）

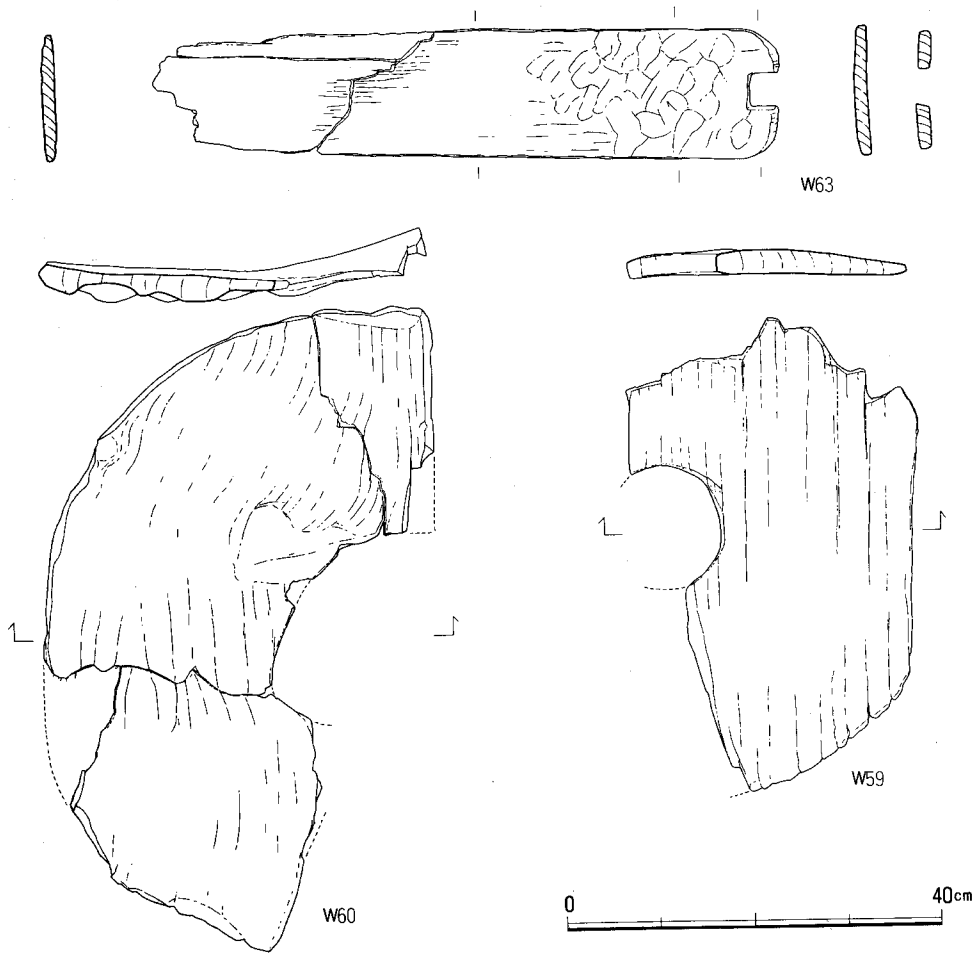


Fig.73　井戸址出土木器実測図Ⅴ（1／8）

E35出土。

板材（Fig.72、W06）　スギの柾目取り板材の一端に、方形の枘孔を穿ったものである。全長41.8cm、幅8.4cm。SE10出土。

用途不明木製品（Fig.74、W15・W16）　W15は芯持ち丸木、W16は芯持ち角材を素材としたものである。2点とも片方端部を鉄斧状工具で平坦に面取りしている。他端は粗い削り加工で、断面V字状に整形している。工作台とも考えられるが、明確な用途は不明。ともにSE10から出土した。

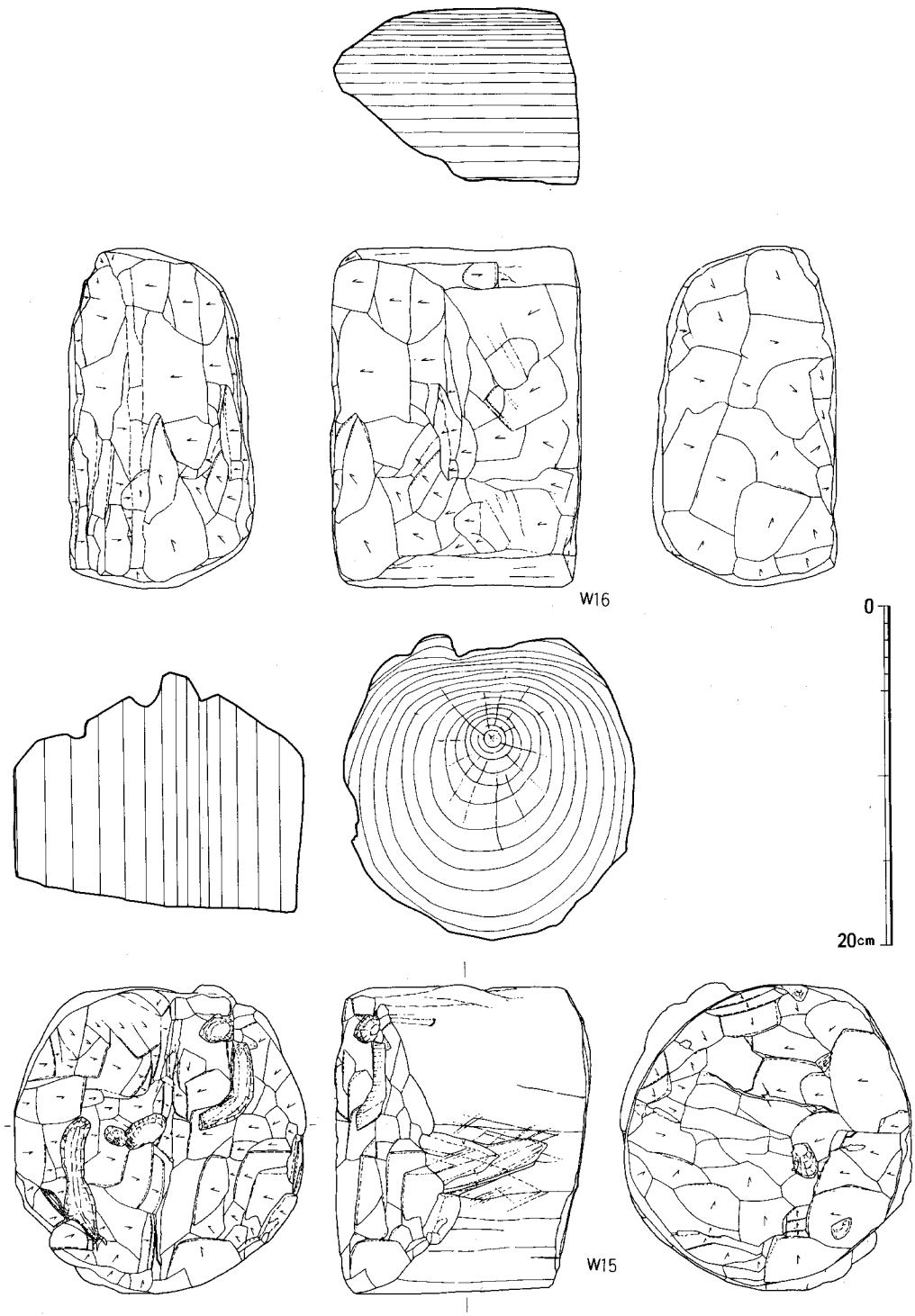


Fig.74　井戸址出土木器実測図Ⅵ（1／4）

No.	出土井戸	器　種	樹種	Fig	PL	No.	出土井戸	器　種	樹種	Fig	PL
W01	ＳＥ02	棒状製品				W40	ＳＥ31	棒状製品(柄？)			
02	ＳＥ04	棒状製品				41		鍬歯？			
03		杭先状製品				42		加工材			
04	ＳＥ10	平鍬	カシ	69	28	43		自然木(鋤の柄？)			
05		三又鍬	カシ	70	28	44		綱錘		71	29
06		有孔板材	スギ	72	30	45	ＳＥ33	三又鍬？			
07		把手付容器片？				46		丸木			
08		又鍬の一部				47		丸木			
09		加工材				48		丸木			
10		加工材				49		加工材			
11		板材				50		加工材			
12		加工材				51		板材			
13		又鍬歯？				52		板材			
14		綱錘	アワブキ？	71	29	53		板材			
15		用途不明木製品	クリ	74		54		板材			
16		用途不明木製品	クスノキ	74		55		井桁材			30
17		杭状製品				56		井桁材			
18		棒状製品	イスノキ			57		井桁材			30
19		板材				58		井桁材			
20		梁材？		72		59		ねずみ返し？		73	
21		杵		71	28	60		ねずみ返し？		73	
22	ＳＥ16	匙		72	29	61	ＳＥ35	三又鍬	カシ	70	28
23	ＳＥ17	平鍬	カシ	69	28	62		把手付容器	ヒノキ	72	30
24		板材？				63		板材	スギ	73	
25		柄？				64		丸木			
26		柱材				65		杭			
27		柱材				66		杭先			
28		加工木				67		鍬頭部			
29	ＳＥ23	鍬類組合せ着装具		71	28	68		板材			
30		加工木				69		鍬？			
31	ＳＥ27	鋤柄？		71	29	70		鍬？			
32	ＳＥ31	鍬類組合せ着装具	カシ	71		71		板材			
33		鍬頭部	カシ			72		加工材			
34		三又鍬局部				73		加工材			
35		鍬頭部				74		糸巻き	マツ	71	29
36		鍬歯？				75	ＳＥ48	杵		71	
37		板材				76	Ｐ 544	礎板	スギ		
38		板材				77	Ｐ 669	礎板	スギ		
39		板材									

Tab. 2　第６次調査出土木製品一覧表

井戸番号	上面規模 (cm)	底面規模 (cm)	深さ (cm)	井戸底標高(m)	出土遺物 土器	土製品・石器	木器	その他	備考
SE01	122×134	92×99	140	4.73	(001-003)	砥石 (S01)			
SE02	86×89	61×68	213	3.73	(004-007)		(W01)		
SE03	80×84	54×60	113	3.72	(008-011)				
SE04	90×96	77×88	203	2.93	壺2、瓢形土器1 (012-029)	石庖丁(S02)	(W02・03)	細縄	
SE05	(80)	(70)	74	3.69	壺1 (030)				SE06を切る
SE06	105	崩壊	100+α	—	(031-034)				SE05に切られる
SE07	70×75	50×52	123	3.06	甕1、壺2、注口土器1 (035-042)				
SE08	61×76	40×42	56	3.62					
SE09	67×77	36	94	3.32	壺2 (043-044)				
SE10	108×120	91×93	241	1.87	甕1 (045-055)		平鍬、三又鍬、網錘 (W04--21)		
SE11	112	41×51	278	1.59					SE12と切り合う
SE12	109×116	80×90	100	3.37	甕1 (056)				SE11と切り合う
SE13	100×102	62×79	137	3.01					
SE14	96	70	200	2.34	甕、壺、埦 (057-064)				SE15を切る
SE15	95×105	80×88	231	2.02					SE14に切られる
SE16	96×113	44	166	2.73	(065-070)	石庖丁(S03)	匙 (W22)		
SE17	100×105	60	224	2.15	壺2 (071-088)		平鍬 (W23-28)	炭化水種子	井戸側に大甕を使用
SE18	88×90	38×67	153	2.89	(089・090)				
SE19	88	50×53	119	3.18	(091-094)				
SE20	90×(100)	60×70	213	2.26	壺3、甕1、埦1 (095-117)				SE21に切られる
SE21	80×97	70	137	3.03	甕1 (118)				SE20を切る
SE22	85×100	52×58	179	2.62	甕3、壺2 (119-123)			種子	
SE23	85×95	53	178	2.60	壺1 (124)		(W29・30)		
SE24	83×92	65	77	3.64					
SE25	60×66	47×55	90	3.38	(125-127)				
SE26	73×87	52×57	144	2.95	(128-131)				
SE27	93×105	31×50	160	2.75	(132-136)		柄 (W31)		
SE28	95×130	74×76	194	2.51	(137-142)				
SE29	102×108	69×73	175	2.57	壺2 (143-147)			種子	
SE30	94×97	61×66	113	3.21	壺2 (148-152)				
SE31	93×108	75×79	209	2.30	(153-160)	石斧	(W32-44)		
SE32	99	70	123	3.13	(161-169)				SE33を切る
SE33	106	83	215	2.20	壺1 (170-180)		(W45-60)	鹿角	井桁材出土 SE32に切られる
SE34	110	95×100	193	2.43	(181-184)				
SE35	95	65×78	183	2.54	壺2、甕1 (185-192)	石錘 (S04)	三又鍬、把手付容器、糸巻き (W61-74)		
SE36	100×122	65×90	52	3.88	(193-197)			種子	
SE37	80×90	55×70	70	3.64	壺3 (198-204)				
SE38	65×67	35×47	92	3.50	壺2 (205-209)				
SE39	90×110	65×78	100	3.37	(210-218)				
SE40	84	65	83	3.52	(219-221)				SE41を切る
SE41	75×83	51×67	112	3.23	(222)			果核	SE42に切られる
SE42	84×94	50×61	139	2.88	壺1 (223-231)			果核	
SE43	80×105	40×50	136	2.92	壺1、甕1 (232-240)	投弾 (D01)			
SE44	82×85	38×48	121	3.12	(241-243)				
SE45	77×90	53	106	3.27	壺2 (244-253)				
SE46	57×62	38×40	97	3.39	甕1、壺1 (254-265)				
SE47	70	51	94	3.37	(266)				
SE48	75×85	70	95	3.35	壺2 (267-270)		(W75)		
SE49	90	42×48	120	3.10	壺2 (271-278)				
SE50	100	43×53	112	3.22	壺1 (279-281)				

Tab. 3　井戸址一覧表

（６） 土壙出土遺物

第６次調査で検出した土壙は15基（ＳＨ01～15）である。調査区全域に分布しており、形態についてもほとんど統一性がない。出土遺物も一部の土壙を除けばきわめて少なく、ＳＨ07のように１点ももたないものもある。以下各土壙ごとの出土土器について観察を行なう。土製品、石器については各器種ごとに一括して後で述べる。なおＳＨ13に敷きつめてあった赤色顔料は、本田光子氏の鑑定によれば、ベンガラの可能性が高いという。

１） 土器

ＳＨ01-04　弥生土器の細片が数点出土しただけで、実測は行なわなかった。

ＳＨ05（Fig. 75、01-05）　01・02は甕形土器である。口縁部は逆L字状をなす。01は口縁下に三角凸帯を一条めぐらす。外面口縁下に刷毛目調整が残るが、ナデ調整で仕上げる。02は口縁上面が内傾する。残存部はナデ調整。ともに胴部に張りがない。砂粒を多く混えた胎土で、赤褐色を呈する。04は甕形土器の底部と考えられる。03は壺形土器の底部であろうか。よく締った平底で、胴部にはシャープな三角凸帯をめぐらす。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で暗褐色。05は器台片である。

ＳＨ06　少量の弥生土器片が出土した。実測は行なわなかったが、中期中頃のものと考えられる。

ＳＨ08・09　弥生土器の細片が出土した。実測は行なっていない。

ＳＨ10（Fig.75、06・07）　06は甕形土器である。張りのない胴部から緩く頸部が屈曲し、口縁部が外反する。内外面とも刷毛目調整を主とする。砂粒を多く混えた胎土で、黒色。07は鉢形土器である。体部上半が直立し、そこから口縁部が外反する。外面刷毛目、内面ナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、黄褐色を呈する。

ＳＨ11（Fig.75、08・09）　08と09は同一個体と考えられる甕形土器である（不接合）。口縁上半部が直線的に内傾し、端部を丸くおさめる複合口縁をなす。胴部はほぼ中位に最大径をとり、底部は胴部との境が丸みをおびるものの平底である。口頸部はナデ、胴部は刷毛目調整を行なうが、磨滅が著しい。砂粒を多く混えた胎土で、黄灰色。

ＳＨ12（Fig.76、10－12）　10・11は甕形土器の胴部～底部片である。10はナデによる小さな平底を作る。11は丸底。10の外面は刷毛目、内面は指押えナデ調整。11の外面は叩きの後刷毛目。内面も刷毛目調整。ともに砂粒を多く混えた胎土で、10が黄褐色～赤褐色、11が暗褐色～黒褐色を呈する。12は台付の鉢形土器である。胴部は扁球状で、口縁部が直線的に外傾する。体部外面は刷毛目、他はナデ調整で仕上げる。砂粒混りの胎土で、暗褐色を呈する。

ＳＨ13　弥生土器の細片が出土しているだけである。実測不可能。

ＳＨ14（Fig.76、13―18）　13・14は甕形土器である。13は球形状の胴部から、口縁部が直線

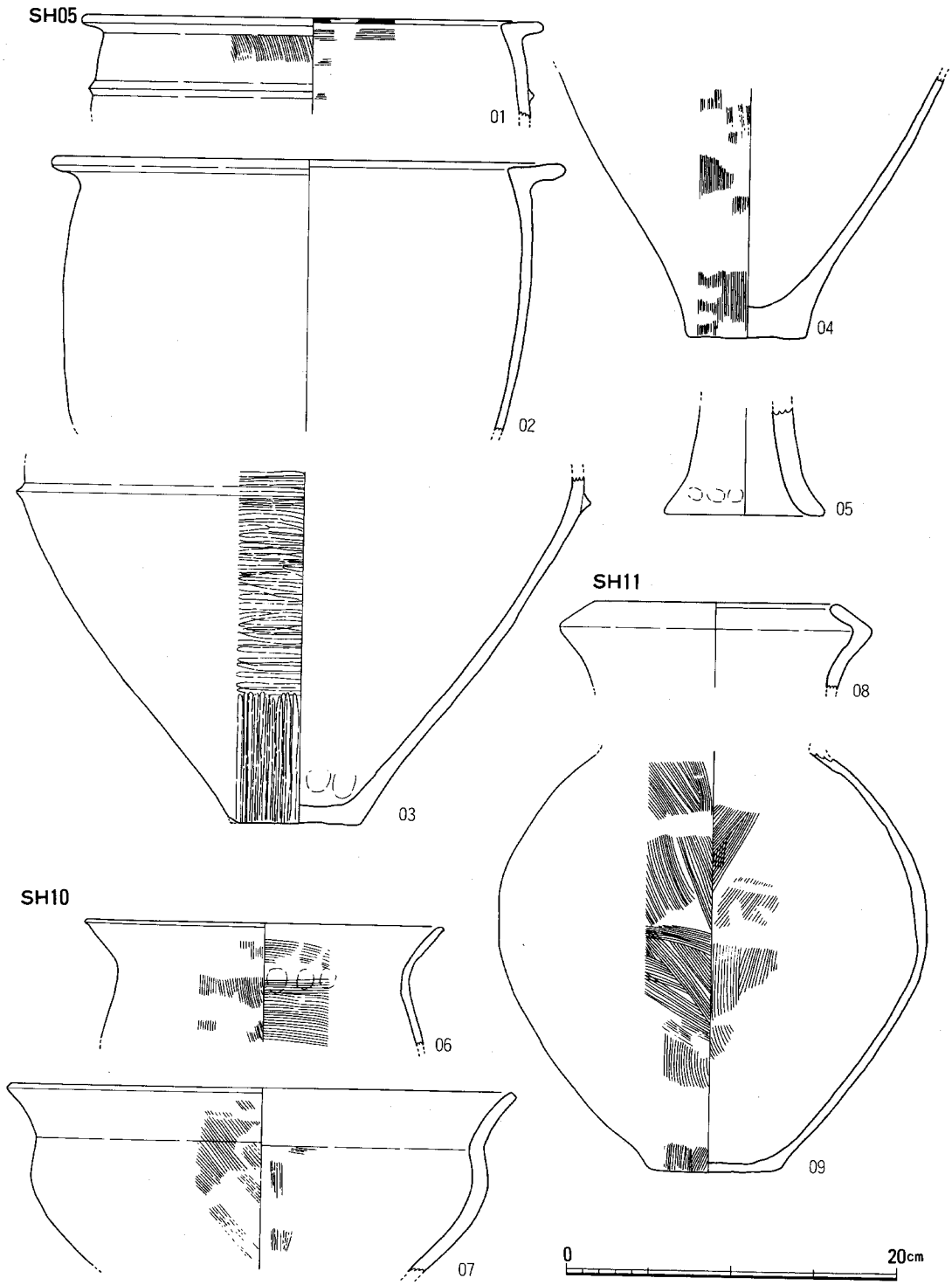


Fig.75　SH 05・10・11出土土器実測図（1／4）

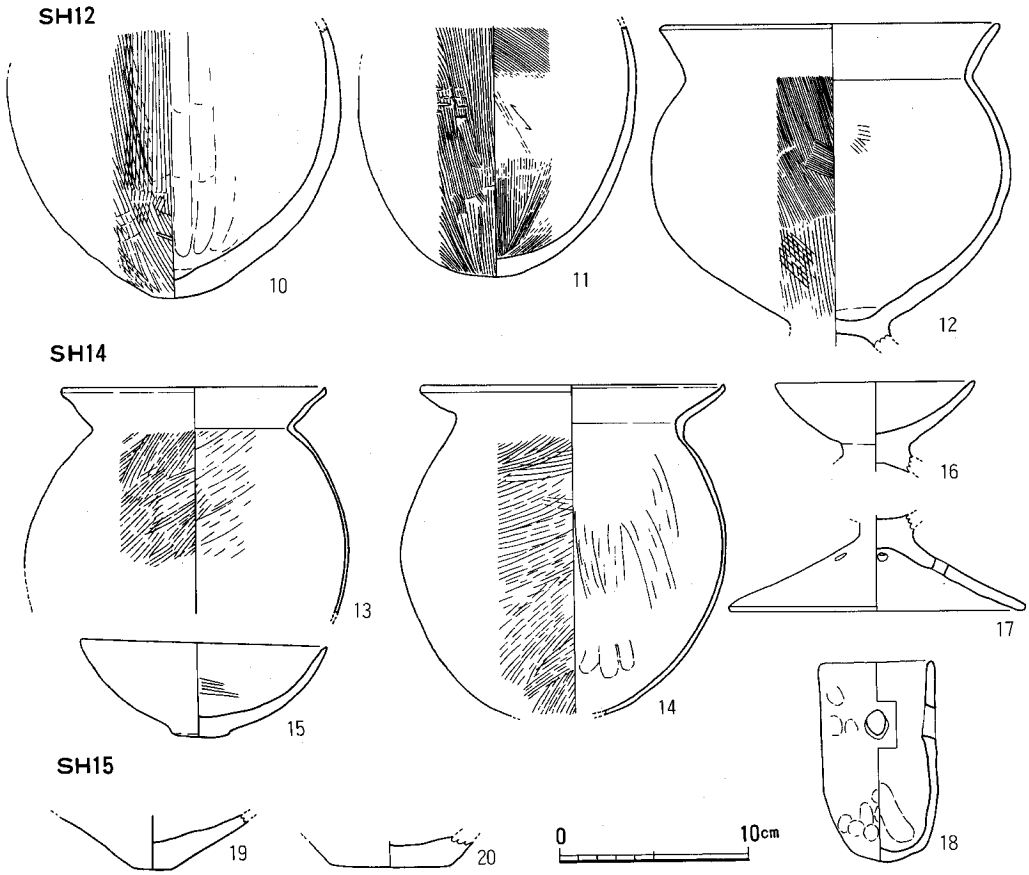


Fig.76　SH12・14・15出土土器実測図（1／4）

的に外傾する。端部はわずかにつまみあげる。14はなで肩の胴部をもち、口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部をつまみあげる。ともに器表が荒れ、14の胴部外面調整は刷毛目か叩きか不明瞭。13は外面刷毛目調整。内面はともにヘラ削り。砂粒の少量混った胎土で、灰褐色を呈する。

15は平底から半球形の体部が開く鉢形土器である。ほぼ全体をナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒を多く混え、茶褐色を呈する。口径13.1cm、器高5.3cm。16は器台であろう。受部は小さな鉢形のものとなる。残存部はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、赤褐色。17は高杯で、裾部が大きく開き、上位に３ケ所透孔を設ける。磨滅して調整不明瞭。砂粒を多く混えた胎土で、赤褐色。18は飯蛸壺である。口縁部は直立し、体部上位に楕円孔を穿つ。調整は指押えナデ。口径5.8cm、器高10.7cm。砂粒を多く混えた胎土で、赤褐色。

ＳＨ15（Fig.76、19･20）　小破片のみの出土である。19は壺形土器の底部である。小さな平底から胴部が開く。20は壺もしくは甕形土器の底部で、平底だが胴部との境は丸みをおびる。

２）　土製品

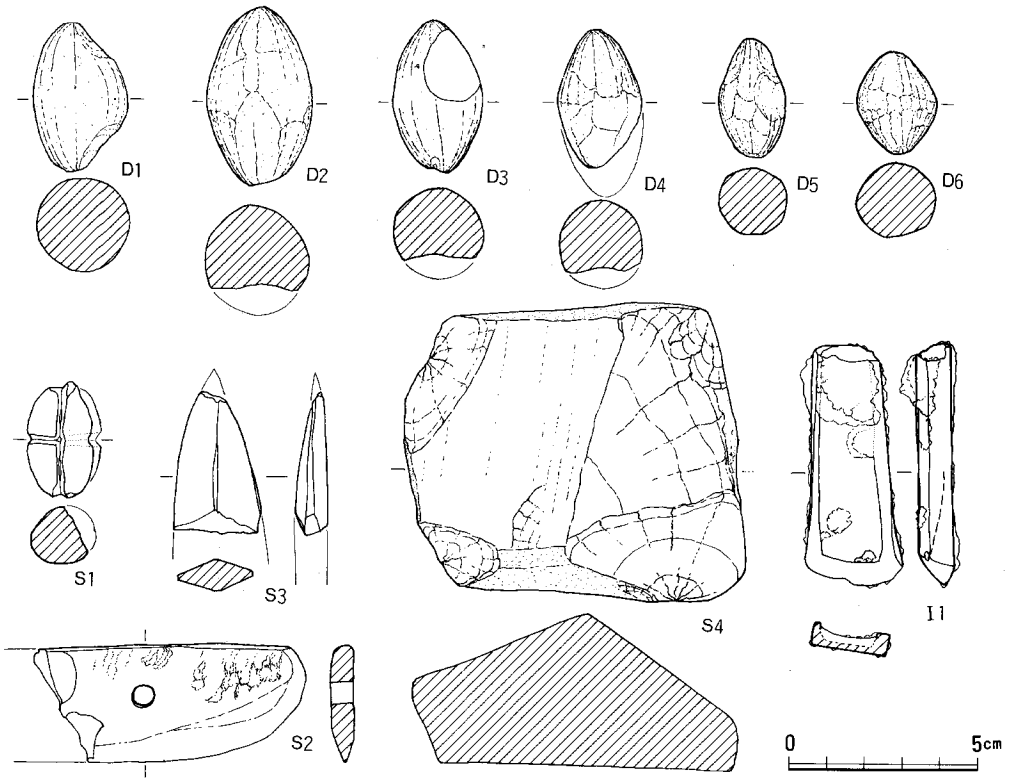


Fig.77　土壙出土土製品・石器・鉄器実測図（1／2）

投弾（Fig.77、D1—D6）　いずれも手捏ねによって紡錘形に整形したものである。胎土に砂粒を混え、焼成堅緻、褐色～灰黒色の色調をなす。重量はD1から19.1g、23.5g＋α、16.45g＋α、10.55g＋α、9.4g、8.75g。D1はSH01、他はSH14から出土。

3）　石器

石庖丁（Fig.77、S2）　安山岩質凝灰岩ホルンフェルスを素材とし、敲打整形後研磨を加え、片側から穿孔している。刃部は両刃。SH11から出土。

石剣（Fig.77、S3）　安山岩質凝灰岩ホルンフェルスを素材とし、敲打整形後、断面菱形に研磨する。刃部を潰しており、石剣の基部かとも考えられる。SH14出土。

石錘（Fig.77、S1）　砂岩を素材として紡錘形に整形し、十字に紐掛溝を掘っている。重量10.2g＋α。SH14出土。

砥石（Fig.77、S4）　砂岩製で、2面の砥ぎ面をもっている。SH14出土。

4）　鉄器

鉄斧（Fig.77、I1）　器長6.4cm、頭部幅1.8cm、刃部幅2.6cmをはかり、柄組合せのための袋部をもつ。刃部は片刃。鋳造品か。現重量42.6g。SH08出土。

（７） 溝状遺構出土遺物

溝状遺構は８条（ＳＤ01～08）が検出されたがこのうち２条（ＳＤ07・08）は近世以降の水利用溝である。

ＳＤ01溝（Fig.78・１・２・11）　１はこ重口縁壺である。口縁部は内傾すると考えられる。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。２は高坏あるいは器台脚部である。器面は内外面ともにナデ調整である。器色明赤褐色を呈し、胎土精良にして密、焼成軟質である。11は土製勾玉である。体部に剝落する部分もあるが良く旧状をとどめている。形態はコンマ形をなし、頭部と体部との境は掻取りによって区別され、頭部端は２個の刻み目を施し、丁字頭を表現する。また体部にも細かい面取りがなされている。色調は淡黄褐～淡赤褐色を呈する。長さ３cm、最大厚0.9cmをはかる。

ＳＤ02溝（Fig.79・３・４）　３は短く外方に開く口縁を有する甕である。口縁端部は上下がやや肥厚する。器面は外面が縦刷毛目調整後に横ナデ、内面横刷毛を施す。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。４は器肉の厚い、不安定な平底を有する甕である。胴部は底部より外開気味に立ち上がり、その後直立気味に変化する。器面調整は外面で斜めの刷毛目調整後に底部のみナデ、内面は細かい刷毛目調整である。また底部内面に指おさえがみられる。器色淡褐色を呈し、胎土やや粗、焼成軟質である。底径4.5cm、残存高9.85cmである。他に直立する頸部に緩く外反する口縁を有し、中位が段をなす古式土師器と考えられる壺形土器があり、少なくとも弥生後期後半以降の所産と考えられる。

ＳＤ03溝（Fig.79・５）　５は胴部と底部との境が不明瞭な壺底部である。底部外端付近が肥厚し、外面に細かい刷毛目調整、内面にナデを施す。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。他には覆土の中・下層で外面にタタキをもつ直口壺や器台脚部下端部に斜行する刻目を施すものがあって弥生時代後期に下る時期に比定できる。

ＳＤ04溝（Fig.79・６～８、PL.12）　６は短い外反する須恵器甕である。口縁端部は肥厚し、やや下垂する。口縁部ナデ調整以外は内外面ともにヘラ削りを残す。器色は青灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。７は杯部を欠く須恵器長脚高坏である。外面の柱状部にカキ目を施し、この後に中位に沈線２条をめぐらす。内面はナデ調整後のしぼりが柱状部に残る。器色青灰を呈し、胎土密、焼成堅緻である。残存高12.45cmである。８は須恵器平瓶である。口縁および胴部上半部を欠失する。体部は下半部に回転ヘラ削り痕を残し、他は横・斜め（右上がり）方向のナデ調整である。轆轤回転は逆時計まわりである。器色は内外面ともに青灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。胴部最大径18.1cm、底部径9.4cm、残存高10.15cmをはかる。

ＳＤ05溝　埋土から弥生時代中期以降の土器片19点が出土したが、時期を絞れない。

ＳＤ06溝（Fig.79・９）　９は所謂越州窯産青磁碗である。底部外端は丸味をおびる。外面体

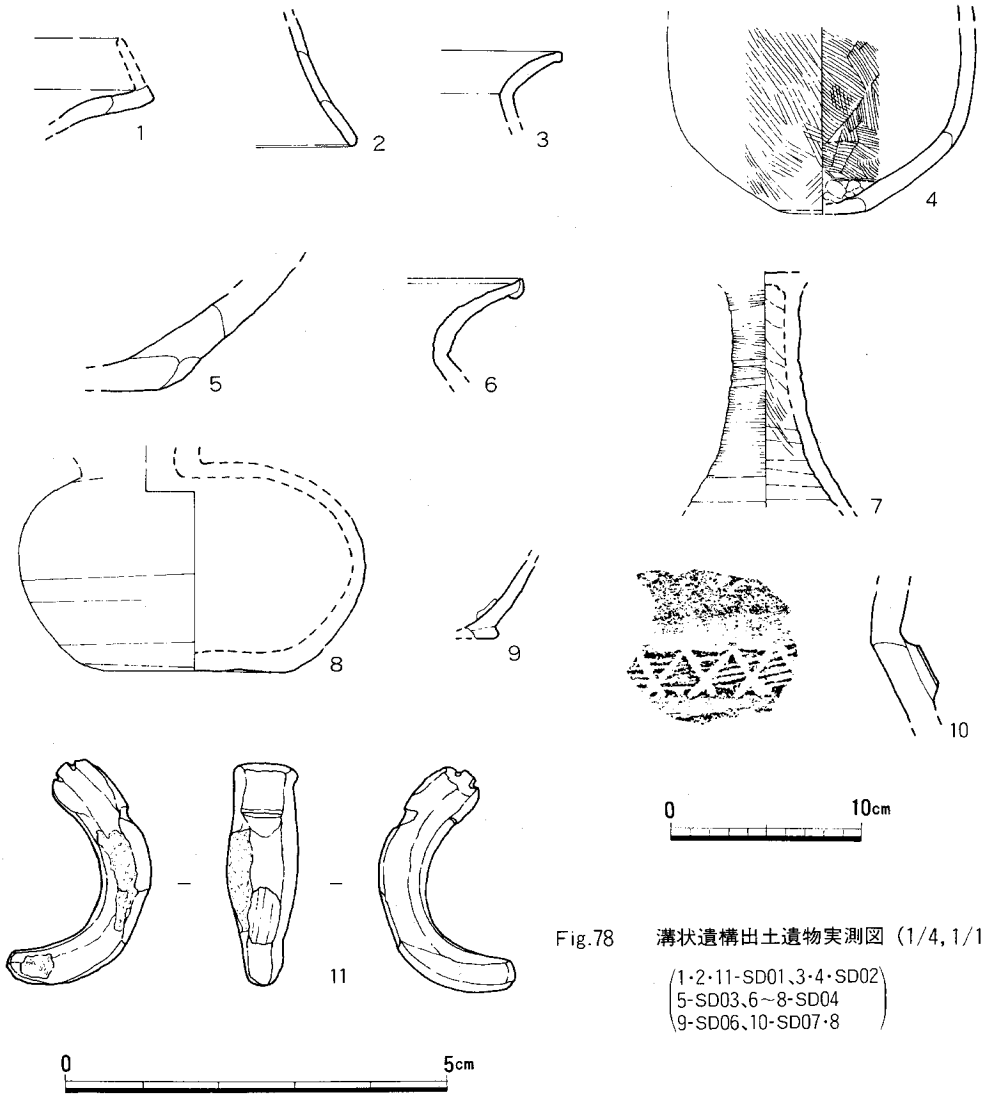


Fig.78　溝状遺構出土遺物実測図（1/4, 1/1）
（1・2・11-SD01、3・4・SD02
5-SD03、6～8-SD04
9-SD06、10-SD07・8）

部にヘラ削りを加える。器は内外面ともに淡黄緑色釉を薄くかけ、底部外端から外底は露胎となる。内面は細かい貫入がみられ、内底部付近に白色を呈する目跡がみられる。また外底部には糸切り離し痕を残す。生地はやや赤味をおびた淡灰色を呈し、焼成はやや軟質である。他に須恵器類を含まないので詳細な時期比定は困難である。

ＳＤ07・08溝（Fig.79・10、PL14）　近世以降の溝で相互に連絡する。10は大型甕頸部破片である。低い台状の突帯上面に荒い刷毛目調整を施し、この上から更に×印の連続する文様を付す。またガラス鎔滓（PL.14）と考えられるコバルト・ブルー色の小塊が出土し、これが原材と考えられる小玉類が竪穴住居址覆土中にみられる。

（８） 方形周溝遺構出土遺物 (Fig.79、PL.14)

調査区南西部に位置し、北辺・西辺部長で5.5m、幅が0.8～1m、深さ0.1mを計る方形をなす溝状遺構で、東辺の北隅にブリッジをもちＳＤ01溝に切られる。周溝内からは少量の土器類が出土した。１は中型甕である。ほぼ直線的に外開する口縁部は端部強い横ナデによってやや下方に突出する。器面調整は不明である。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。復原口径9.2cmをはかる。２は頸部から屈曲して外開する甕口縁である。器面調整は外面横ナデ、内面口縁横刷毛目、これ以下の胴部は斜め刷毛目調整後横ナデを施す。器色淡白褐色、胎土密、焼成軟質である。３は端部を欠く二重口縁壺である。端部に右あがりの細長い刻目を施す。口縁はかなり内傾するものと思われる。器色淡白色を呈し、胎土密、焼成は軟質である。４・５は口縁内傾度の著しい二重口縁壺である。４は反転部との境界外面が鋭く突出する。また口縁端部は丸みをもつ。器面調整は内外面ともに横ナデである。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。５は頸部との境が突出せず、丸くおさめる。器色は淡赤褐色を呈し、胎土やや粗、焼成堅緻である。６は壺である。頸部につまみ出しと考えられる１条の三角突帯を付す。器面は突帯部上・下に縦方向の細かい刷毛目調整、内面ナデ調整を施す。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成はやや軟質である。７は高坏である。坏部は脚上端部から直線的に外開する。器面は剝落が著しく、坏部内面にナデを残す。脚上端部径5.2cmをはかる。器色は淡褐～淡赤褐色を呈し、胎土やや粗、焼成は軟質である。

本遺構は前記のように第２次調査で検出された環溝遺構の北約６ｍに位置し、規模的に約半分ではあるが同様の形状をなし一連の関係が考えられる。また墳墓と考える場合明確な主体部を欠失する。何れにせよ時期的には出土遺物から弥生後期後半を前後するものと考えられる。

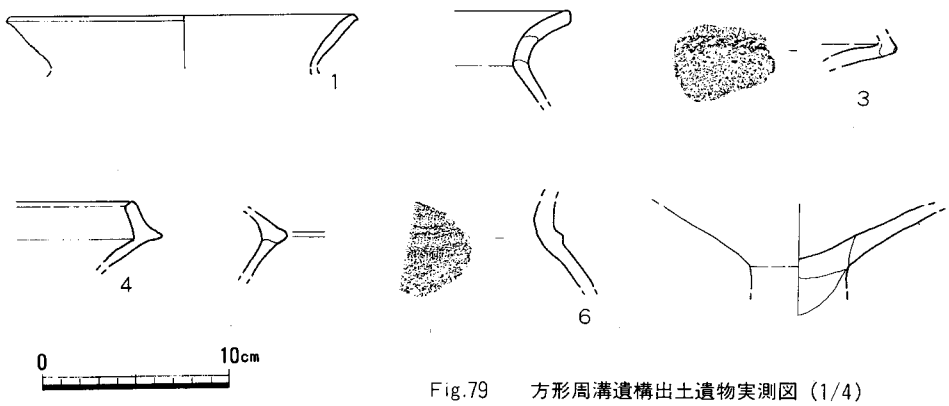


Fig.79　方形周溝遺構出土遺物実測図（1/4）

（９） 第１号古墳

第１号古墳は主体部が調査区内に含まれずその内容を詳にできないが、調査では幅５ｍ、壁高50～60cmを残し、外縁の立あがりは急である。周溝埋土は大きく上・下２層に区別され、上層（黒褐色土）では弥生中期中葉～古墳時代後期に至る土器類、石製収穫具・工具類が多量に包含され、下層では古式土師器類が多く出土した。以下では出土品の若干を示し説明を加える。

須恵器（Fig.80）

須恵器は全て上層出土であり、高坏・蓋坏・大甕などである。

甕（１・８）　１は口縁端部断面形を「コ」字形に仕あげ、外面に２条沈線を施す。口縁下には横ナデ後に長さ４～4.5cm程度の斜行沈線を付す。器色黒灰色。口径30cm。８は肩部の張る甕で胴部は外面格子目叩き後に下半部で横ナデ調整、内面あて具痕（青海波文）を残す。口縁部内外面は横ナデ調整。内外面ともに淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径22.3cm、胴部最大径42.5cm、器高46.5cmをはかる。

蓋坏（２～６）　２は坏身である。立あがりは高く、やや内傾気味で端部は沈線状に窪む。体部削りは全体に及び、他は全て横ナデ調整。器色黒灰色を呈し、焼成堅緻。口径11.5cmをはかる。３はかえりを持つ坏蓋である。天井部には僅かにヘラ削りがみられ、丸味をおびる。外面黒灰～暗灰色を呈し、焼成堅緻、胎土は非常に密。口径10.3cm、器高3.2cm。４は天井部の約⅔にヘラ削りを残す坏蓋である。口縁端部内面は痕跡的に沈線を残す。器色暗灰～淡灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻。口径13.2cm、器高5.1cm。５・６は同様の特徴を有する坏蓋である。天井部の上半にヘラ削りを施し、口縁端部は中央が窪み、外方に薄くひき出される。５は暗灰色を呈し、胎土に細砂を混入し密、焼成堅緻である。口径13.5cm、器高5.2cm。６はやや緑色をおびた淡灰色を呈し、胎土に細砂を若干混入し、焼成やや軟質である。口径12.65cm、器高5.3cmをはかる。

高坏（７）　裾部がふんばり気味に開く短脚に残い反転気味の口縁を有する坏をのせる。坏部口縁端部内面は沈線状に窪み、脚立端付近は肥厚して段をなす。外面は横ナデ調整で、坏体部外面に回転ヘラ削りを残す。また坏部内面にあて具痕がみられる。器色は淡灰色を呈し、胎土密、焼成やや軟質である。口方向のナデ調整。器色は外面赤褐色、内面黒灰色を呈し、胎土に石英細砂の混入多く、焼成は堅緻である。口径15.4cm、器高22.8cm、底径3.8cmをはかる。

土師器（Fig.81）

甕（３・４・５）いづれも周溝下層出土である。３は口縁部が急激に外方に開く甕である。器色は外面淡褐色、内面淡褐色を呈し、胎土に粗砂の混入多し。焼成堅緻。器面調整は外面口頸部下に荒い縦ハケ目、体部内面に横ヘラ削りを残し、他は全て横ナデを施す。口径16cm、４は球状胴部に端部が若干外方に開く直立気味の口縁を有する。器色は外面赤褐色、内面黒灰色

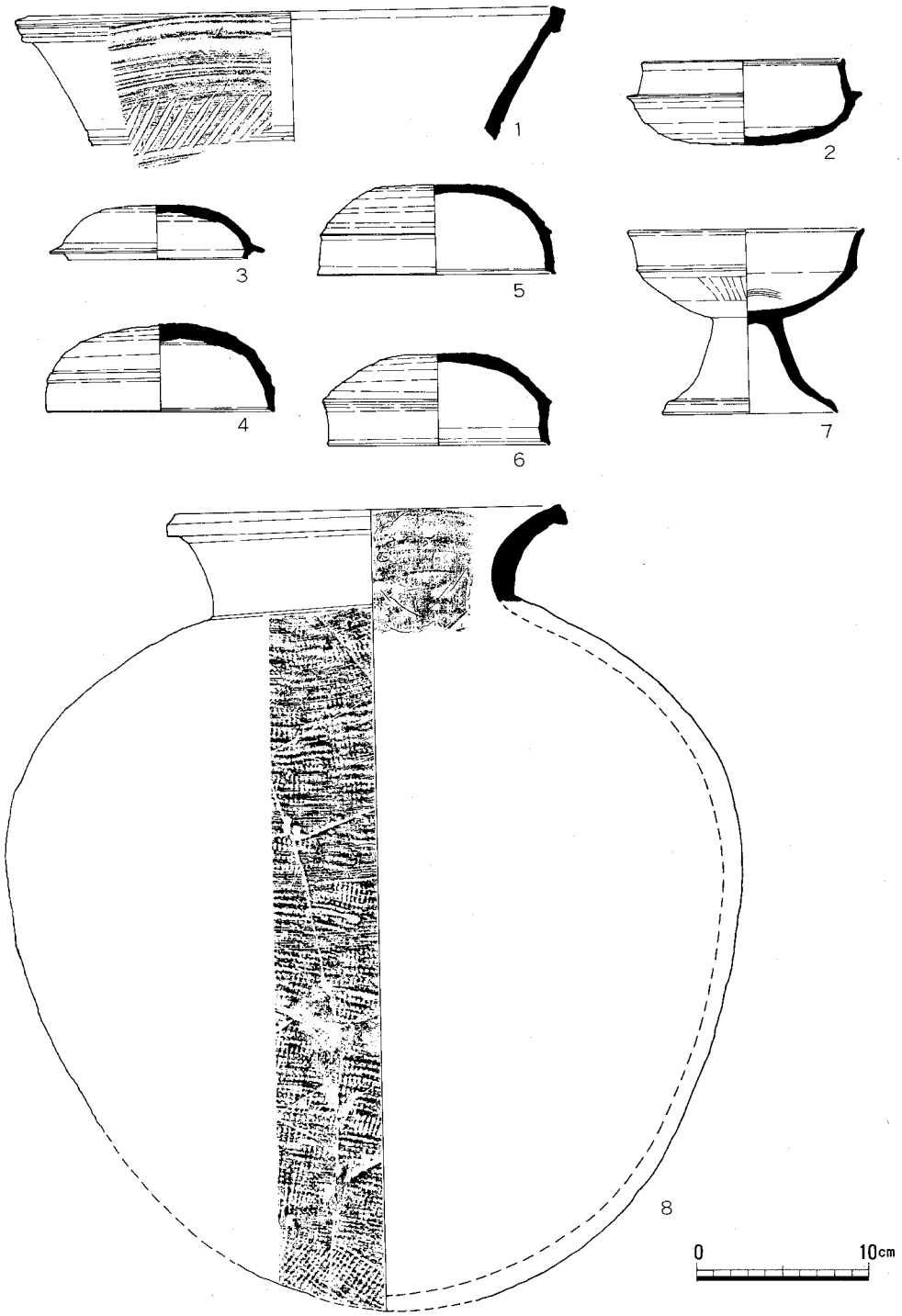


Fig.80　第１号古墳出土遺物実測図１（1/4）

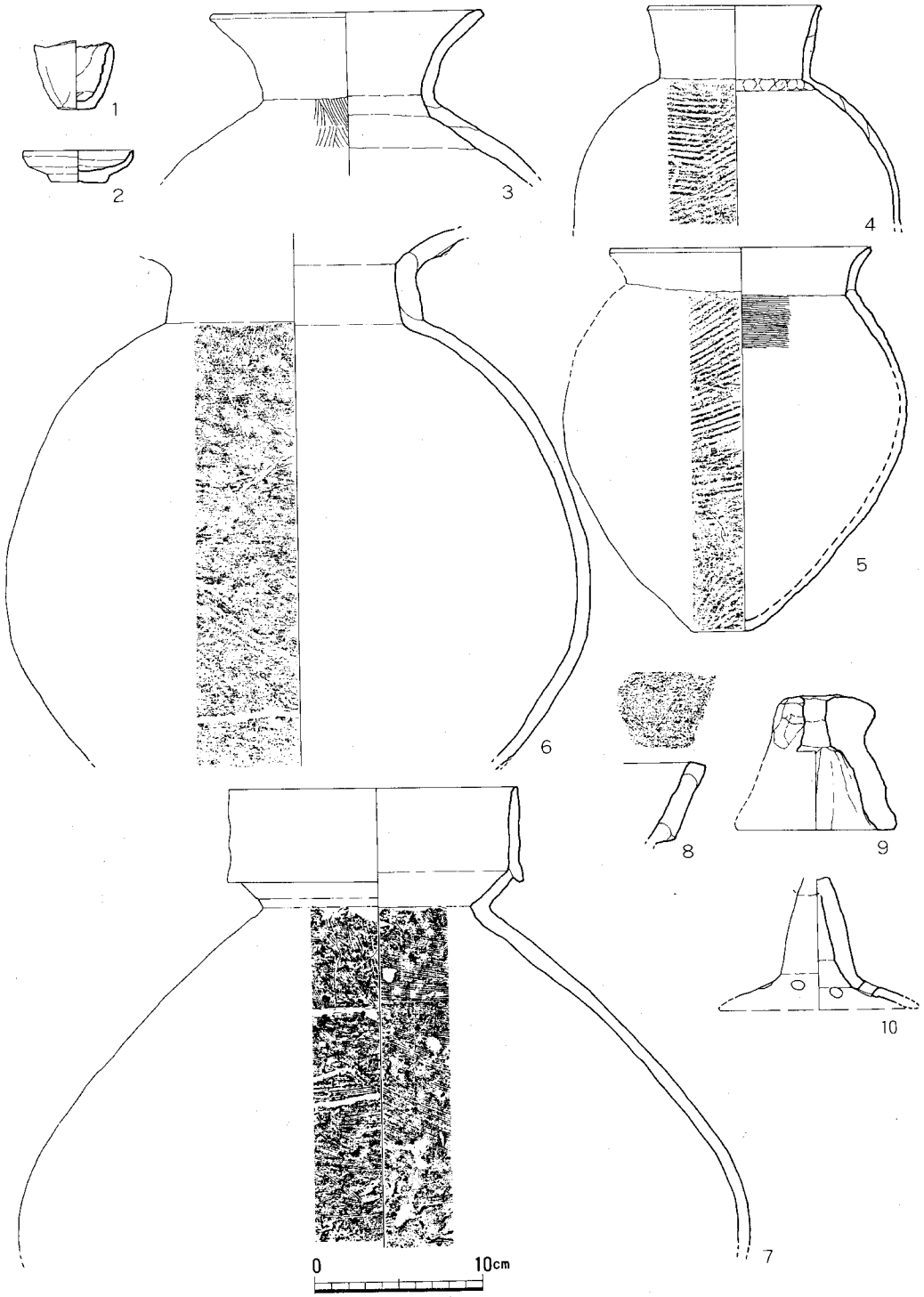


Fig.81　第１号古墳出土遺物実測図２(1/4)

を呈し、胎土に石英粗砂を多く混入し、焼成堅緻である。器面調整は外面に荒いタタキ、内面頸部に指押え、同体部は細かい刷毛目を残す。口径10.5cm。5は短い外方に開く口縁を有し、体部長胴で底部は小さな平底をなす。底部外面は殆ど黒斑で占められる。口縁部内外面は横ナデ調整。体部外面は斜めの荒いタタキを施し、下半部に横ナデを残す。内面は細かい刷毛目調整後不定ある。頭部は指おさが著しく、脚部内面はナデ調整。器色淡赤褐色を呈し、胎土に石英粗砂を多量に混入。焼成堅緻。底部9.2cm、器高8cmをはかる。

壺（6・7・8）　6は球状胴部に低い直立する頸部を有し、口縁部は端部が剝落しているが二重口縁となろう。器表面は磨滅が著しいが体部上端部近くに波長の短い波状文をめぐらし、これ以下は右下り方向の荒いタタキを施す。内面は頸部付近に不定方向のナデ調整がのこる。器色は外面暗赤褐色、内面淡黄褐色を呈し、底部近くに大黒斑がある。胎土に石英粗砂を多く混入し、焼成はやや軟質である。頸部径15.4cm、胴部最大径32.4cmをはかる。7は胴部下半を失う二重口縁壺で、口縁は直立し、頸部が非常にしまっている。全体に器壁肉薄である。外面は接触面が0.8cm程度の工具を使用した斜め（胴上半部）あるいは横（胴下半部）方向の細かい刷毛目調整を施し、この後胴上半部は工具による不定方向のナデ調整。体部内面は細かい刷毛目調整で、同口縁は横方向のミガキを加える。胎土に石英細砂を非常に多く混入するが焼成は堅緻。口径16.6cm、胴部最大径43.6cmをはかる。8は口縁外面に山形の波状文を施す。器色は外面黒斑で内面黄褐色を呈する。胎土に石英・雲母片を多く含み、焼成はやや軟質である。

高坏（10）　周溝下層の出土である。坏部を欠くが脚はよくしまり、裾部は開く。脚裾部に細かい縦刷毛目、内面に荒い縦刷毛目調整。また柱状部内面はヘラ削り。器色は赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。透し孔は4個である。

その他（1・2・9）　1は手捏ねの鉢形土器である。底部はやや丸味をおび、器色淡黄褐色を呈し、焼成軟質である。2は円盤状の底部をもつ皿形土器である。器色は淡黄褐色を呈し、胎土砂質で、焼成堅緻である。口径6.3cm、器高1.9cmをはかる。9は器台で径15.6cm、器高10.65cm、脚径10cmをはかる。

石製品・土製品・玉（Fig.82・83・33）

石庖丁（Fig.83-1～12、Fig.84-2・3）　石庖丁は図示した以外かなりの出土量がある。形態的には外弯刃半月形のものと杏仁形のものとがあり、また石材の上では頁岩・粘板岩・砂岩といった堆積岩系統のもの（1～4・11・Fig.84-3）と数量的には同数かあるいはこれを凌ぐ小豆色輝緑凝灰岩製のもの（5～10・12）とがある。また刃部の研出しは堆積岩質のものが両面よりゆるやかになされるのに対して凝灰岩製のものでは稜線が明らかになり、刃部の幅がせまく、紐通し孔も凝灰岩製のものは若干孔間が他に比して狭くなっている。また穿孔時の敲打痕も凝灰岩製のものが顕著に残っている。また未製品と考えられるもの(Fig.84-2・3)は何れも頁岩製で破損しているが周辺部に打剝調整を加える段階のもので集落内生産品と考えて良か

ろう。また小豆色凝灰岩製の石庖丁は立岩遺跡からの搬入品であろう。

石鎌（Fig.84-1）　先端を欠損するが、内弯刃で基部下端に打剝による抉りを有する。刃部は左右非対称に研出される。現存長17.8cm、基部幅4.6cm、厚さ1.2cmをはかる。頁岩製。

磨石(11)　長円形の転礫を使用した磨石である。礫側辺部に丁寧な敲打を加え把持を容易にする調整がなされている。下端部は中央に細かい敲打痕を残し他は使用による摩耗のため滑面となり、光沢を放っている。全長14.1cmで、握り部分長径5.9cm、短径4.8cm、最大幅5.1cm、研摩面長さ7.6cm、幅4.8cmをはかる。砂岩製。類品は甘木市茶臼塚古墳採集品があり、古墳時代に降る所産の可能性がある。

石錘（4）　紡錘形に整形後に長軸に沿って全周に幅2～1㎜程度の溝を刻む。長軸長1.85cm、短軸長1.25cmをはかる。滑石製。

紡錘車（8）　上面の孔部付近が若干隆起する土製紡錘車である。上面暗赤褐色を呈し、下面黒褐色である。胎土に石英砂多数混入し、焼成は軟質である。径4.3×4.2cm、孔径5.7cm。上層出土。

土製品（5・6・7・9）　何れも土器片利用のものである。5は周辺部両面からの研磨によってほぼ円形をなしており、端部は丸い。全体に磨滅が著しい。表・裏面ともに暗褐色を呈し、胎土に石英粗砂を多く混入する。焼成は軟弱である。径2.7×2.65cm、厚さ4～5㎜、孔径2.5㎜をはかる。弥生式土器片か。6は周辺部に研磨が行き届かず、両面からの剝離によって整形したままである。上面に細かい刷毛目調整を残し、甕形土器破片利用のものであろう。上面暗褐色を呈し、下面は淡黄褐色となる。胎土には微砂を多く含み密で、焼成堅緻である。径2.5cm、器厚5㎜、孔径4.5㎜をはかる。弥生式土器片利用であろう。7は器壁の厚い大形土器片利用の土製円盤である。周縁部の整形は表裏からの剝離により、その後若干の磨きをかけている。上面は黒斑のある部位にあたり、下面は赤褐色を呈する。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は堅緻である。径5.85cm、器厚1.15cmをはかる。9は前の5・6と同様に土器片利用の有孔円盤である。周縁部は打剝整形後に若干の磨きをかける。上面は淡黄褐色を呈し、裏面暗褐色である。胎土に石英粗砂の混入多くやや粗である。焼成堅緻。径3.6×3.4cm、器厚0.5cmをはかる。弥生式土器片利用。

投弾（10）　紡錘形を呈する通常サイズの投弾である。器面全体の半分を黒斑が占め、他は赤褐色となる。長軸3.8cm、短軸2.0cmをはかる。

玉（Fig.33　24・25）　24・25とも滑石製小玉である。24は完形で径が4×3.5㎜、孔径1.5㎜をはかる。25は一端を欠損するが径が4.5×4㎜、孔径1.8㎜程度である。これらは古墳期の所産であろう。

第1号古墳周溝では前記の様にパンケース200箱の多量の遺物が出土したが紙面の都合から残りのものは図に供し得ず別の機会に譲りたい。

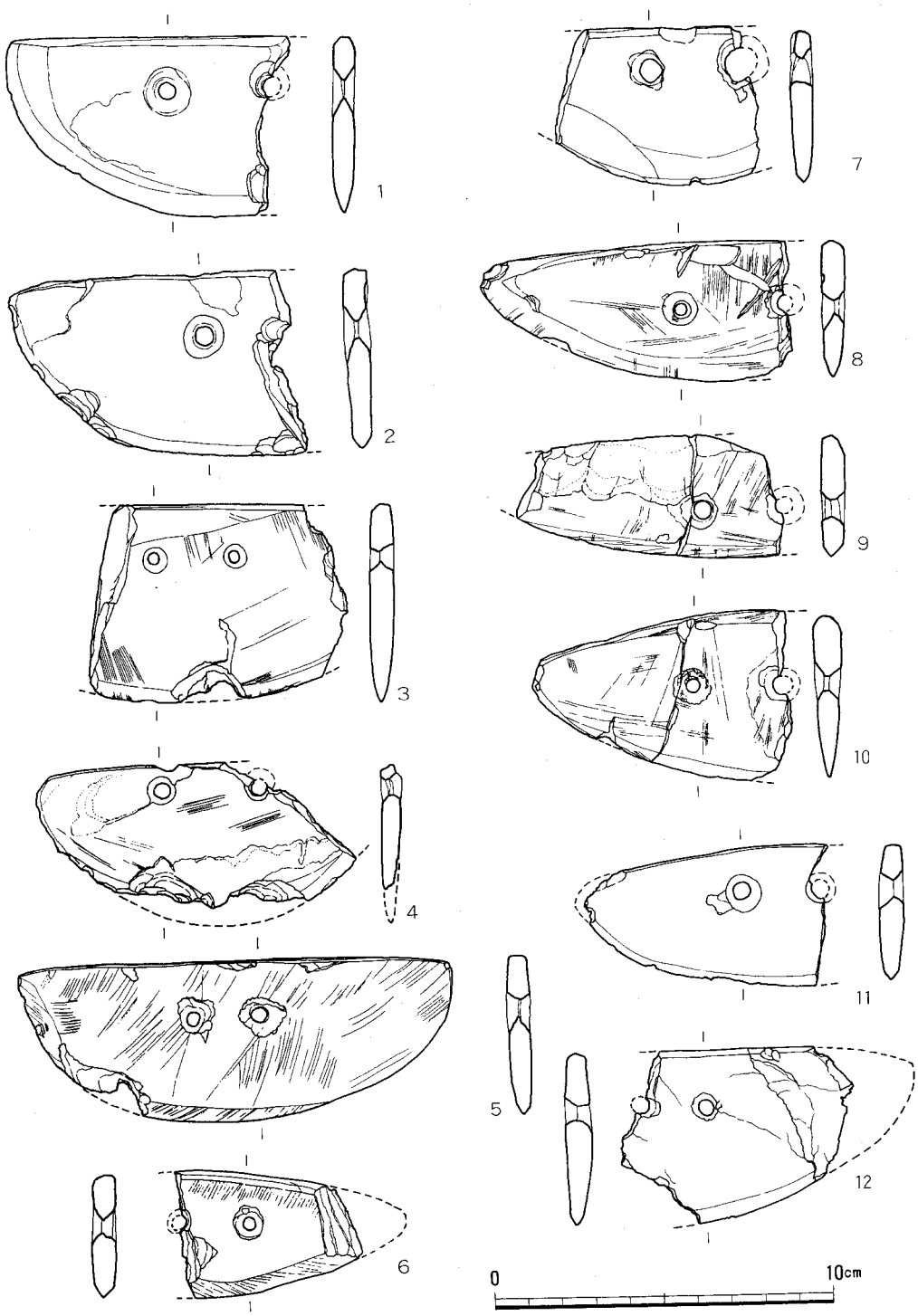


Fig.82　第１号古墳出土遺物実測図３（1/2）

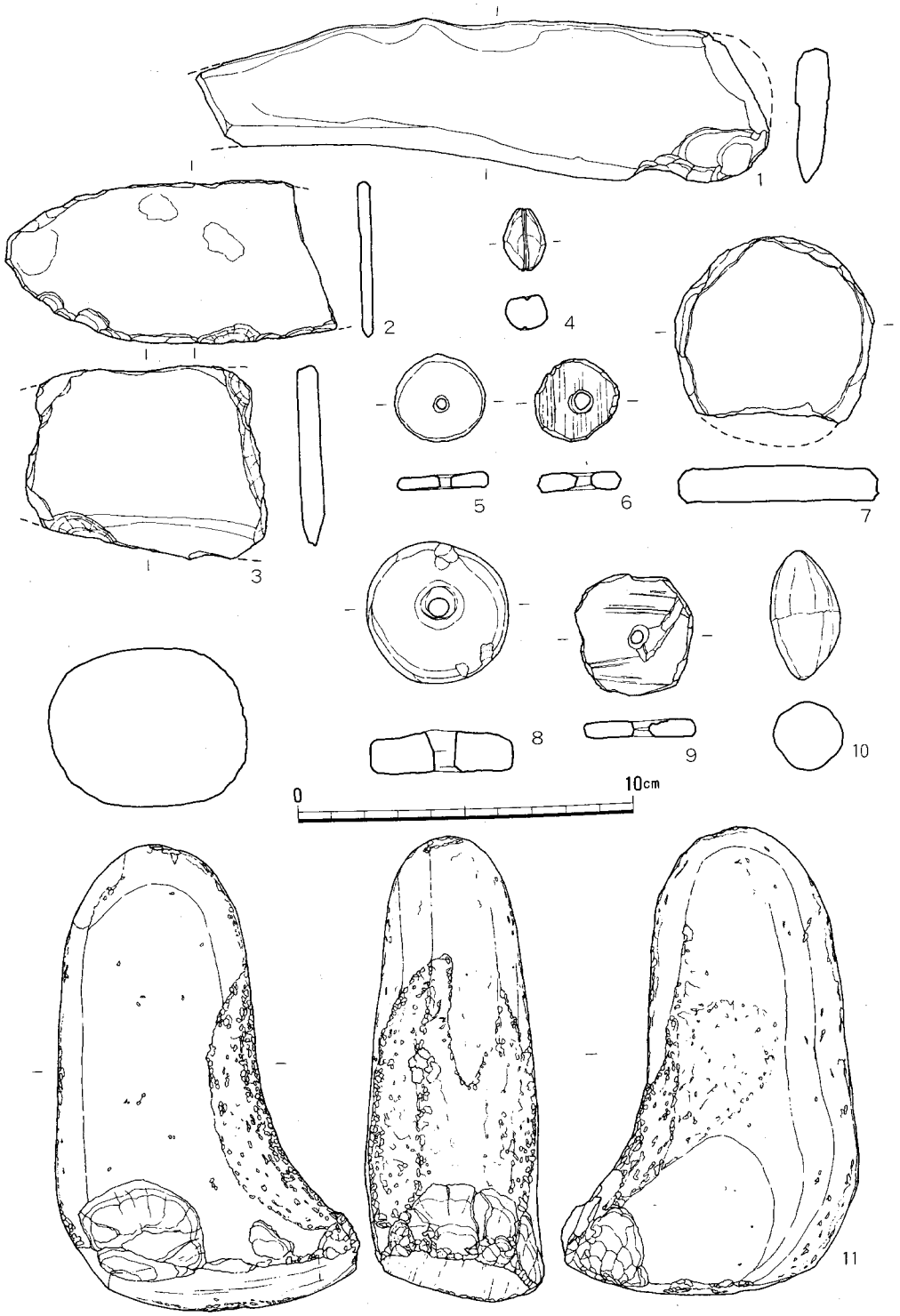


Fig.83　第１号古墳出土遺物実測図４（1/2）

補遺（Fig,84）

第１号古墳周溝内出土の遺物類のうち下層土師器についてはFig,81に一部を示したがこれにもれたものについて追加報告したい。

器台（１）　脚部を欠失し坏部のみをのこす。口縁端部は小さく外方にひき出される。全体に整美な感じをうける。器面調整はナデが残る。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成やや軟質。口径5.1cm、頸部径3.15cmをはかる。

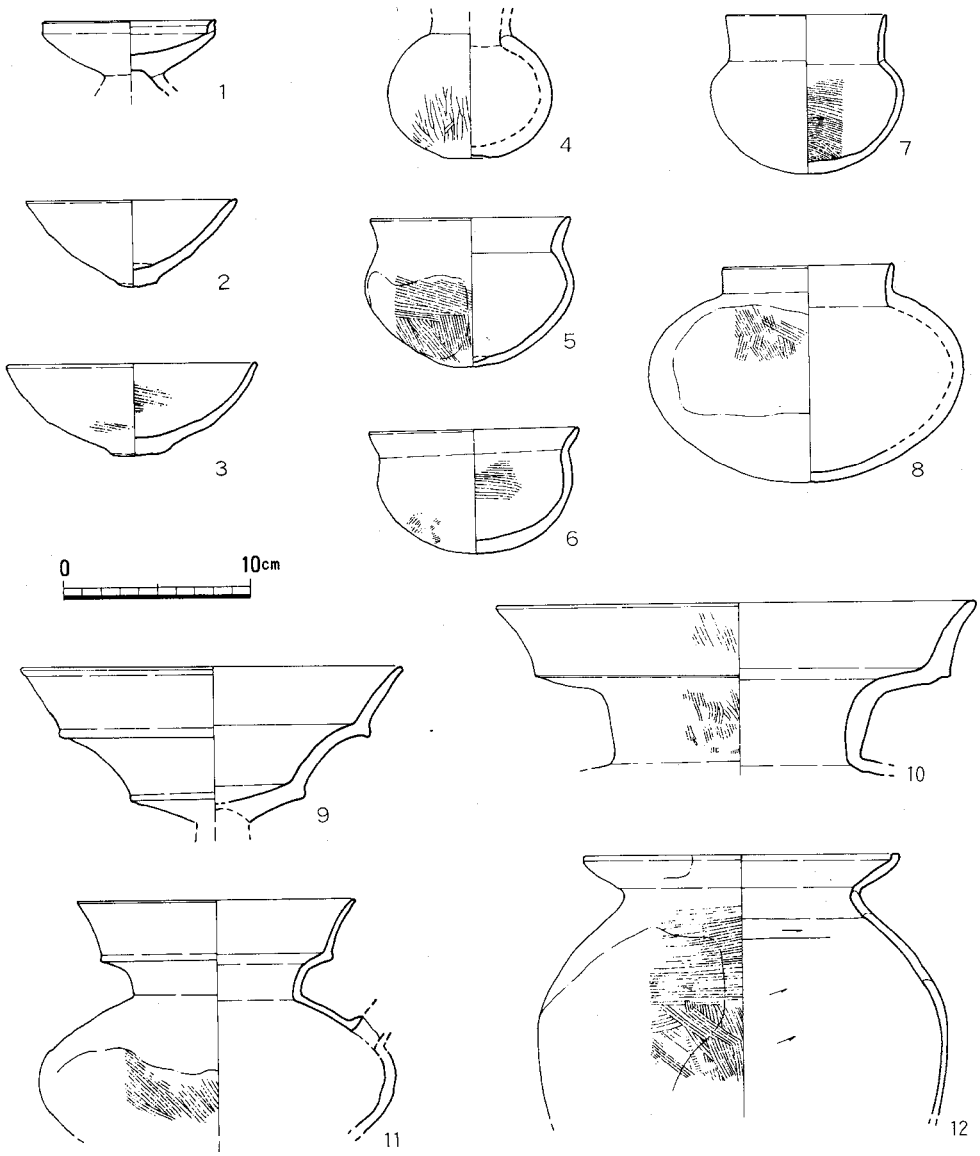


Fig.84　第Ｉ号古墳出土遺物実測図５（1/4）

鉢（2．3） 何れも底部が小さい不安定な平底をなす鉢である。 2は底より若干内弯気味に外方に伸び、口縁はやや尖る。内外面ともにナデ調整を加え、底部内面は指頭痕を残し少し窪む。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。口径11.55cm、器高4.55cm、底部径2cmをはかる。 3は2に比して緩く開き底部もやや大きくなる。体部内外面に細い斜めの刷毛目調整がのこし、他はナデである。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻。口径13.25cm、器高4.85cm、底部径2.8cmをはかる。

小型壺（4～7） 何れも丸底をなす小型壺である。4は口縁部を欠失するが、立あがりからあまり外方に開かない形態となろう。胴部は器壁が厚く、重心の低い半球状となる。底部外面はややくぼむ。器面調整は外面胴部下半ヘラ磨きを加え、他は指によるおさえナデによる。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。胴部最大径8.7cm、残存器高6.9cmである。 5は肩が張り、短い肥厚する外開きの口縁部を有する。底部内面は指頭によるおさえで丸く窪む。器面調整は外面下半に刷毛目を施す以外はナデによる。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。口径10.5cmをはかる。 6は同様に外反する短い口縁となり、胴部は肩が張らない。内外面ともに刷毛目調整後ナデを施すが外面のものは刷毛目が細かい。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径11.1cm、器高6.55cmをはかる。 7は肩が張り、ほぼ直立する口縁部をもつ。胴部内面に細かい刷毛目調整を残す外はナデを施す。器壁の薄い精良な仕あげである。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径8.6cm、胴部径10.3cm、器高8.5cmをはかる。

中型壺（8） 半球状の胴部に直立する短い口縁を有する壺である。器壁は全体によく調整され均一である。器面調整は胴上部に縦刷毛目を残すが他はナデによる。器色淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。胴部中位に大黒斑を残す。口径9.18cm頸部径9.15cm、胴部最大径14.8cm、器高11.45cmをはかる。

高坏（9） 坏部のみを残す。後の二重口縁壺と類似する形態をなす。反転する屈曲部は端部が丸味をもっており、口縁部は鋭く直線的に外方にひらく。器面は全体に剥離が著しく調整は部分的ながら観察され、内外面ともにヘラミガキをほどこす。なお脚部は細い円筒状となると考えられる。器色淡赤褐色を呈し、胎土精良にこて密、焼成はやや軟質である。口径21.5cm、頸部径2.85cm、残存高8.4cmである。

大型壺（10） 短い頸部にラッパ状に開く外開きの口縁を有する。器壁厚く、外面に斜め刷目毛を施す。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径25.7cm、頸部径13.4cm、残存高10.2cmをはかる。

注口を有する頸（11） 半球状胴部に外反する複合口縁を有する。器色淡白色、焼成軟質である。口径14.8cmをはかる。

甕（12） 口縁は内弯気味に外反する。淡灰褐色を呈し、焼成堅緻。口径16.8cmである。

4．おわりに

比恵遺跡群第6次調査は既に『遺構編』において検出各遺構出土の遺物類に説明を加えたが、今回『遺物編』で出土遺物実測図を示し、之による可能な限りの時期比定を試みた。

ところで前記の様に第6次調査地点は近代の削平で遺構面が著しく失われた結果、遺構は痕跡的に旧状をとどめるものが多く、確実な共伴資料は少ない。この為埋土内遺物によってその上限を知り得るだけのものも多く、強いて時期決定をしなかった。以下では墓地、生活遺構の順に記述を進めることとする。

弥生時代墓地はこれまでの調査でも北西0.5kmの第4次調査（中期後半甕棺墓12基）、南西0.5kmの第3・8次調査（中期初頭～後葉甕棺墓13基など）や東～東南0.4kmの第1次調査例では遺跡群内に数十基からなる群を形成して点在する様相を呈し、時期的には弥生中期初頭が初源と考えられる。

第6次調査では墓域に含まれる埋葬施設は甕棺墓44基以上、木棺墓3基である。甕棺墓は時期的に中期前葉～後期初頭に亘り、5期に区別されよう。各期の構成は第1期（中期前葉）6基（ＳＫ01・02・15・17・28・31）、第2期（中期中葉）3基（ＳＫ05・23・43）、第3期（中期後葉）14基（ＳＫ09・10・12・13・16・18・20・25・30・37～41）、第4期（中期末）14基（ＳＫ03・04・06～08・14・21・22・24・29・32～34・42）、第5期（後期初頭）2基（ＳＫ27・36）となろう。墓域は東西17m以上、南北20m以上の南北に長い形態をとり、ＳＫ01→ＳＫ07を結ぶ線がほぼ北側限界となる。これによって各期の分布を見ると第1期では墓域中央部に東西に墓壙軸をとり、南北に連なる。各個はほぼ4mの間隔をとり、この線上にあるＳＸ03も墓壙埋土内土器の上限とＳＫ16より時期的に遡る点で同時期に営まれたと考え得る。次に第2期は散発的で特徴的分布を見出し難いが、続く第3・4期がこの墓地の主要な形成時期である。この両期は分布の上で東縁部を主として北端部全域に亘っている。また墓壙掘方は東縁部では殆ど例外なく東側からなされ、第4期は3期の墓域をほぼ踏襲するといえる。これらの分布状態から考えると墓地の旧地形は第1期墓地を最高所として東・西に暖く傾斜する低い小丘陵であった可能性がある。またＳＸ03西側の第1号古墳周溝内の石材は近年の西区吉武高木遺跡における中期初頭木棺墓の「標石」の存在を考えれば類似する内容である可能性を否定できない。[註1] 更にＳＫ28出土細形銅剣付着の絹布は弥生中期前葉の国産絹としては最古資料の1つとして認識されたが、その後さきの吉武高木・大石遺跡[註2]や有田遺跡[註3]の追跡調査によって前期末～中期初頭に遡る国産絹布が見出され、中期段階では他地域例を含めて既にかなりの一般的使用がなされたものと考えられる。

生活遺構では竪穴住居址9軒のうち中期後半代と考えられるＳＣ02以外は弥生後期かこれ以降の所産であろう。また溝状遺構では全体に弥生中期後半代の土器類を含むが、時期的に明ら

かなものはＳＤ01－方形周溝遺構を切る点で後期後半以降、ＳＤ04－６世紀後半代、ＳＤ06－奈良末～平安初期などである。

調査区東半部を中心に、分布する掘立柱建物群（22棟）では殆どの掘立埋土内に後期土器細片が確実に含まれ、後述する井戸址とは時期的に併行する関係にあると考えられる。また建物規模では１×１、１×２間程度の身舎建物が多く、柱掘方の切合いが無い中でほぼ３群で数回の建替えがなされている。

井戸址は調査区西端にあるＳＥ01を除けば他の全ては東半部にあり、計50基となる。ここで井戸底面に投入された土器類を中心として時期比定の可能な井戸址を区別すると、本遺跡の井戸址は初源が弥生中期末、終焉が布留期に至るほぼ５期に亘るといえる。第１期（中期末）３基（ＳＥ04・17・26）、第２期（後期前葉）21基（ＳＥ01～03・06・12・14・15・18・～20・23・25・27～32・34・35・42）、第４期（後期後葉）19基（ＳＥ05・07・09・16・21・22・36～41・43～46・47～50）、第５期（布留期）１基（ＳＥ46）であり、他は出土々器が覆土内であるが、極めて少量であるため時期決定が困難であるものである。

井戸址は構造上殆どが素掘り井筒であるが、ＳＥ17の様に大型甕を井戸側として使用する例があり、同様な事例は比恵第７次調査や板付遺跡井戸址でも知られている。

また他に井戸の上部施設と思われるものがＳＥ33・35・49にある。ＳＥ33には上面に井桁に組まれ使用された可能性のある枘材があり、ＳＥ35・49のものは井筒を挟んで相対する柱穴である。これは弥生後期住居址に通有の２主柱による覆屋（おおいや）か或は揚水施設としての「釣瓶」保持柱の何れかであろう。

井戸址底面には祭祀行為として投入された丹塗り壺・甕などが時期的に推移するが、他にＳＥ04出土の丹塗袋状口縁壺に細縄を巻く例があり、釣瓶機能をもつものもある。

また出土遺物のうちＳＥ30（後期中葉）の弥生時代土器に伴って胴部に縄蓆文を施し、これに数条の横沈線を加えた瓦質土器があり、更に在地系甕形土器に共伴する壺類には山陽－瀬戸内地方の流入品のある事が特筆される。

比恵遺跡群第６次調査はこれまで述べた様に多くの新しい成果を私たちに提供したといえる。しかし弥生～古墳時代に至るこの広大な「比恵ムラ」の全体像を知るにはあまりにも小さく、個別遺構から喚起された諸々の問題点に肉迫するにはまだ多くの内容が必要であり、これからの調査成果に期待したい。

（註１）「吉武高木－弥生時代埋葬遺跡の調査概要－」『福岡市埋葬蔵文化財調査報告書第143集』福岡市教育委員会 1986年

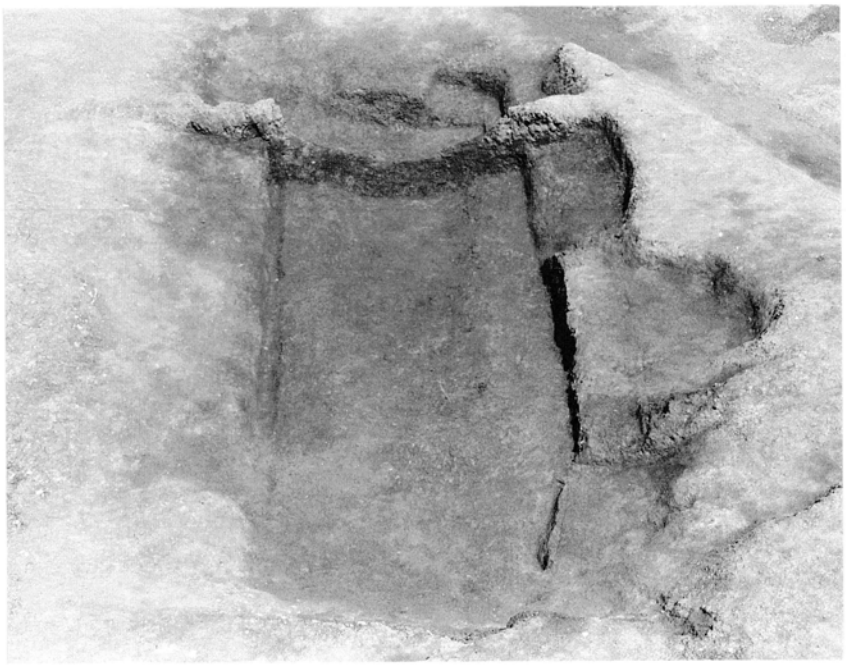
（註２）上掲書

（註３）森貞次郎「有田甕棺遺跡と甕棺と銅戈」『有田遺跡』1968年

図　　版
(PLATES)

上：甕棺墓地全景（東より）
下：甕棺墓地全景（北より）

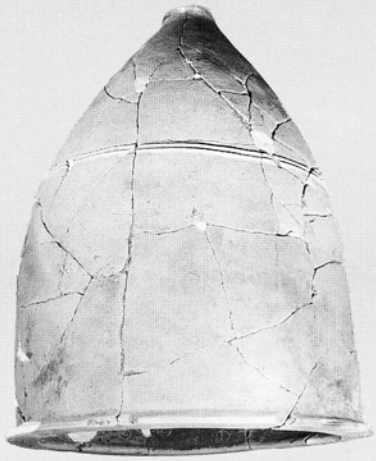
1



2

1、井戸址全景（南より）
2、SX03土壙墓（西より）

1



3

2

4

1. ＳＫ01甕棺上棺
2. ＳＫ01甕棺下棺
3. ＳＫ02甕棺上棺
4. ＳＫ02甕棺下棺

ＳＫ01・02甕棺

1

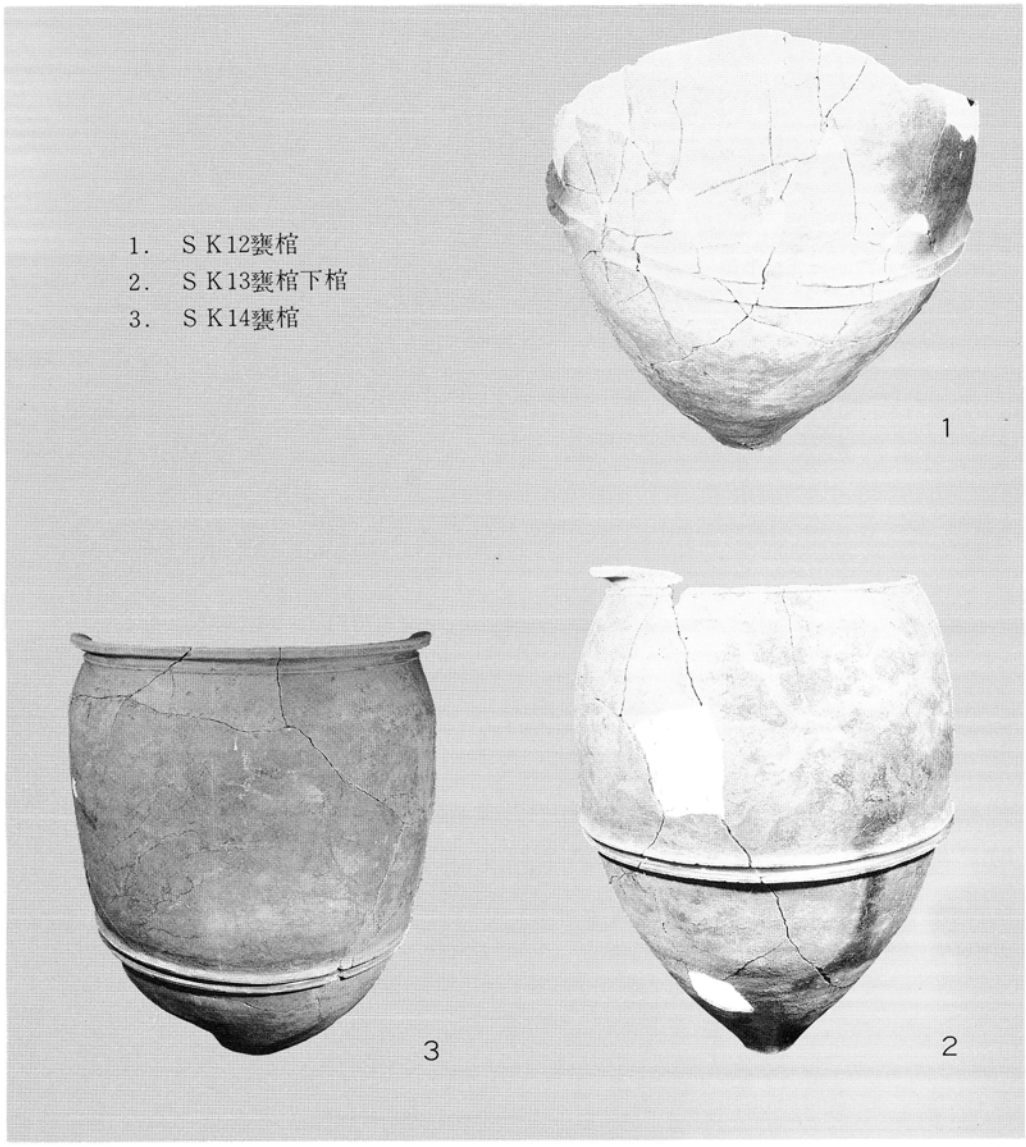
3

1. ＳＫ05甕棺上棺
2. ＳＫ08甕棺下棺
3. ＳＫ09甕棺上棺
4. ＳＫ10甕棺

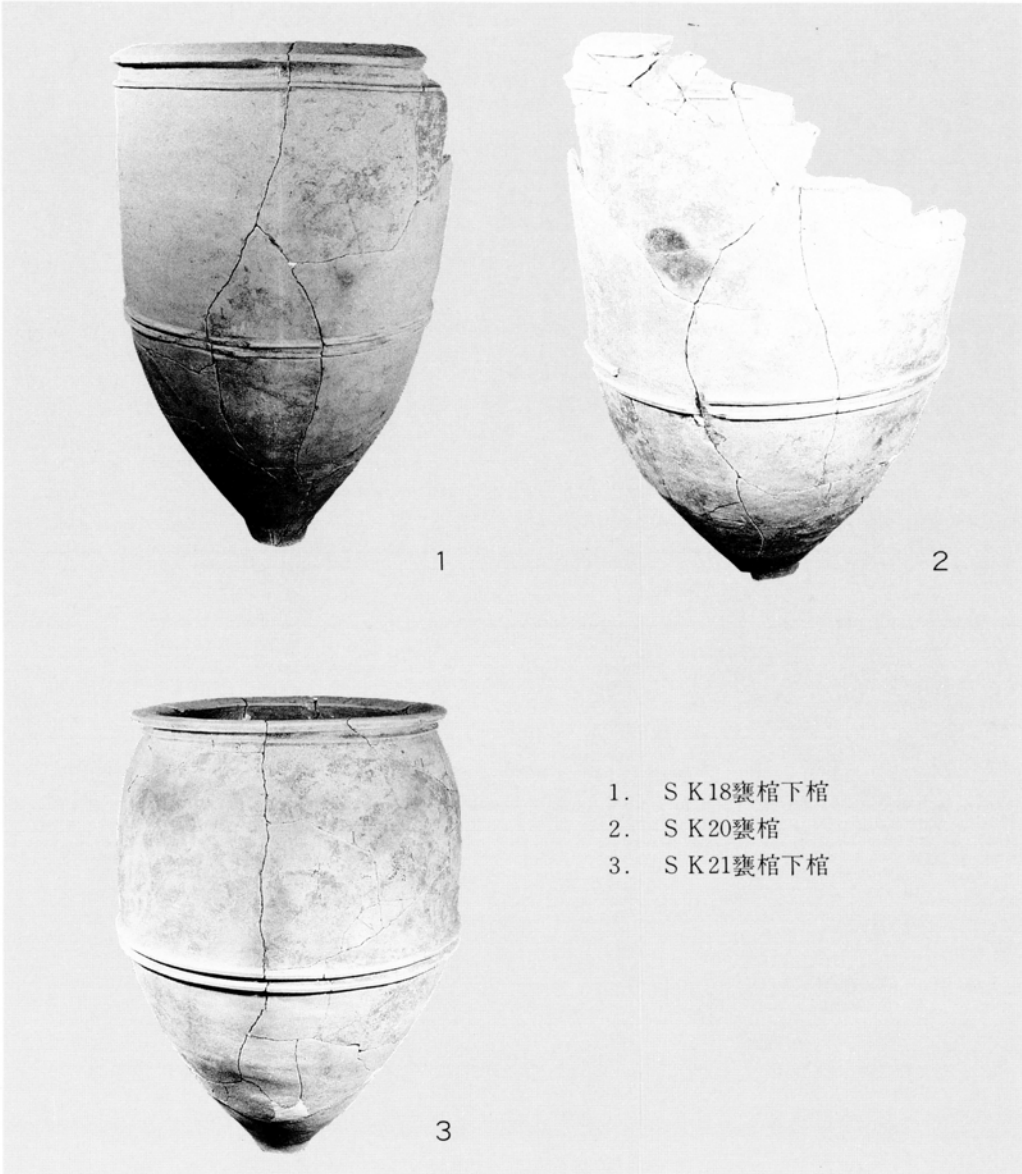
2

4

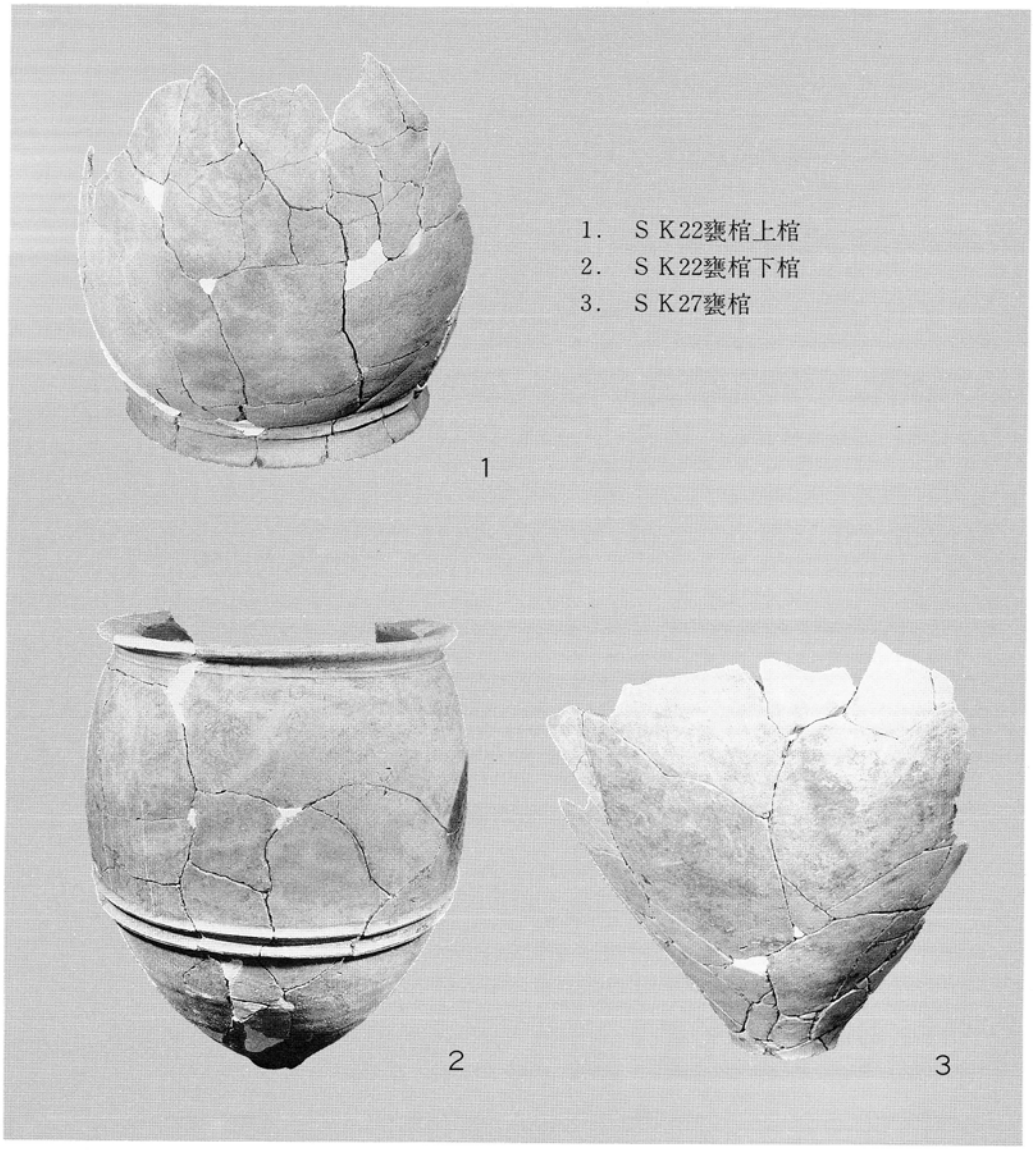
ＳＫ05･08･09･010甕棺



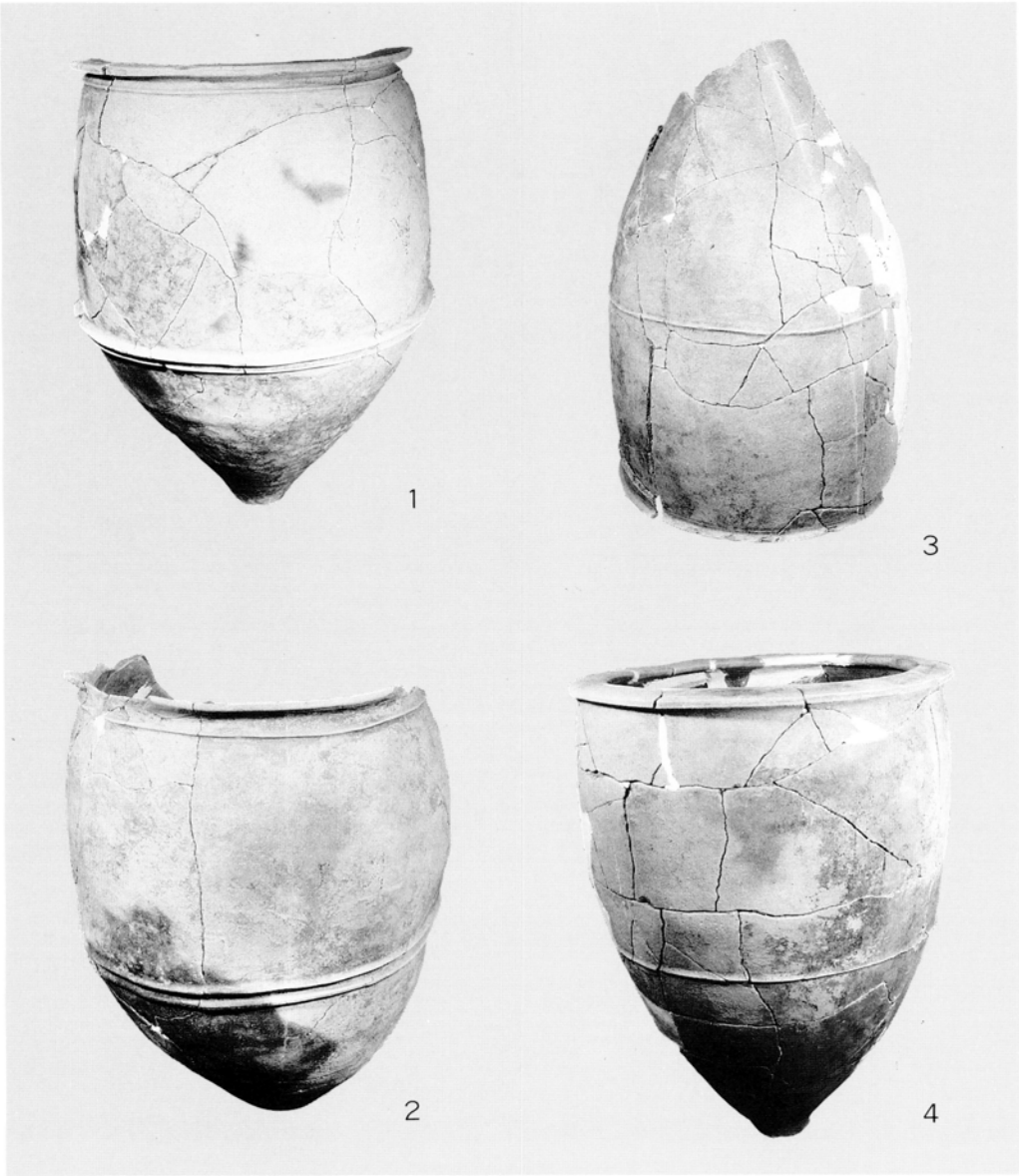
ＳＫ12･13･14甕棺



ＳＫ18･20･21甕棺

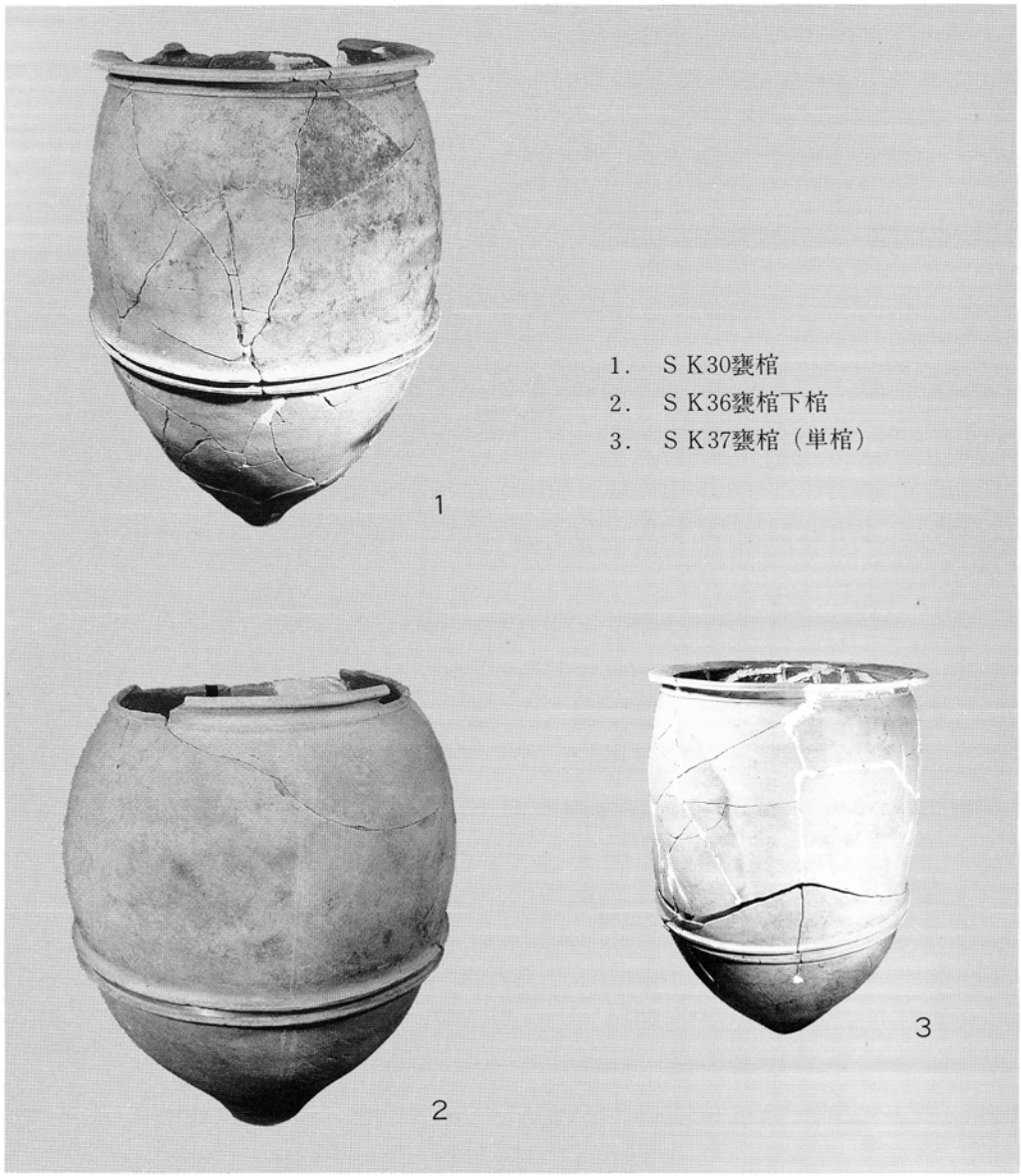


ＳＫ22・27甕棺



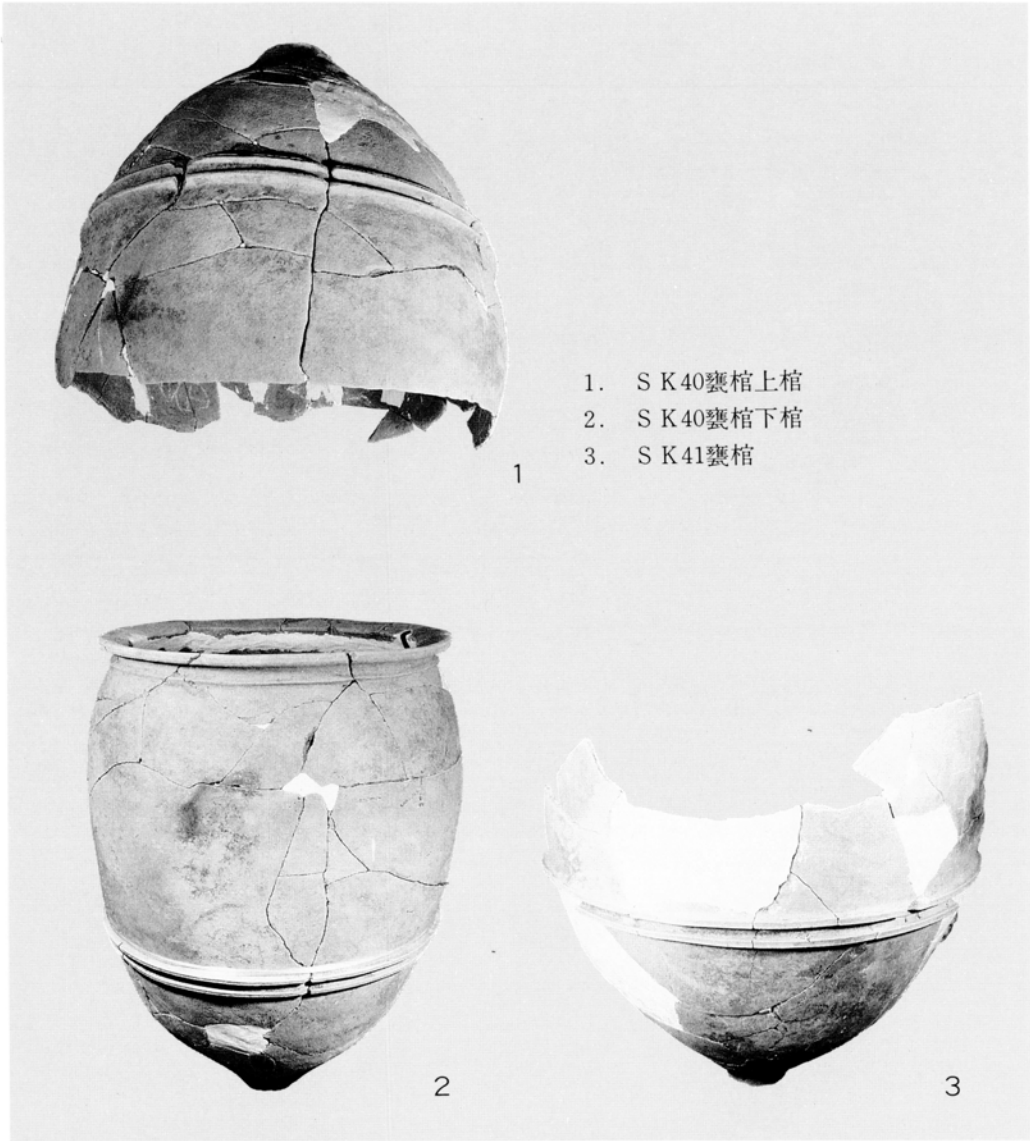
ＳＫ25･28･29甕棺

1.　ＳＫ25甕棺下棺
2.　ＳＫ29甕棺
3.　ＳＫ28甕棺上棺
4.　ＳＫ28甕棺下棺



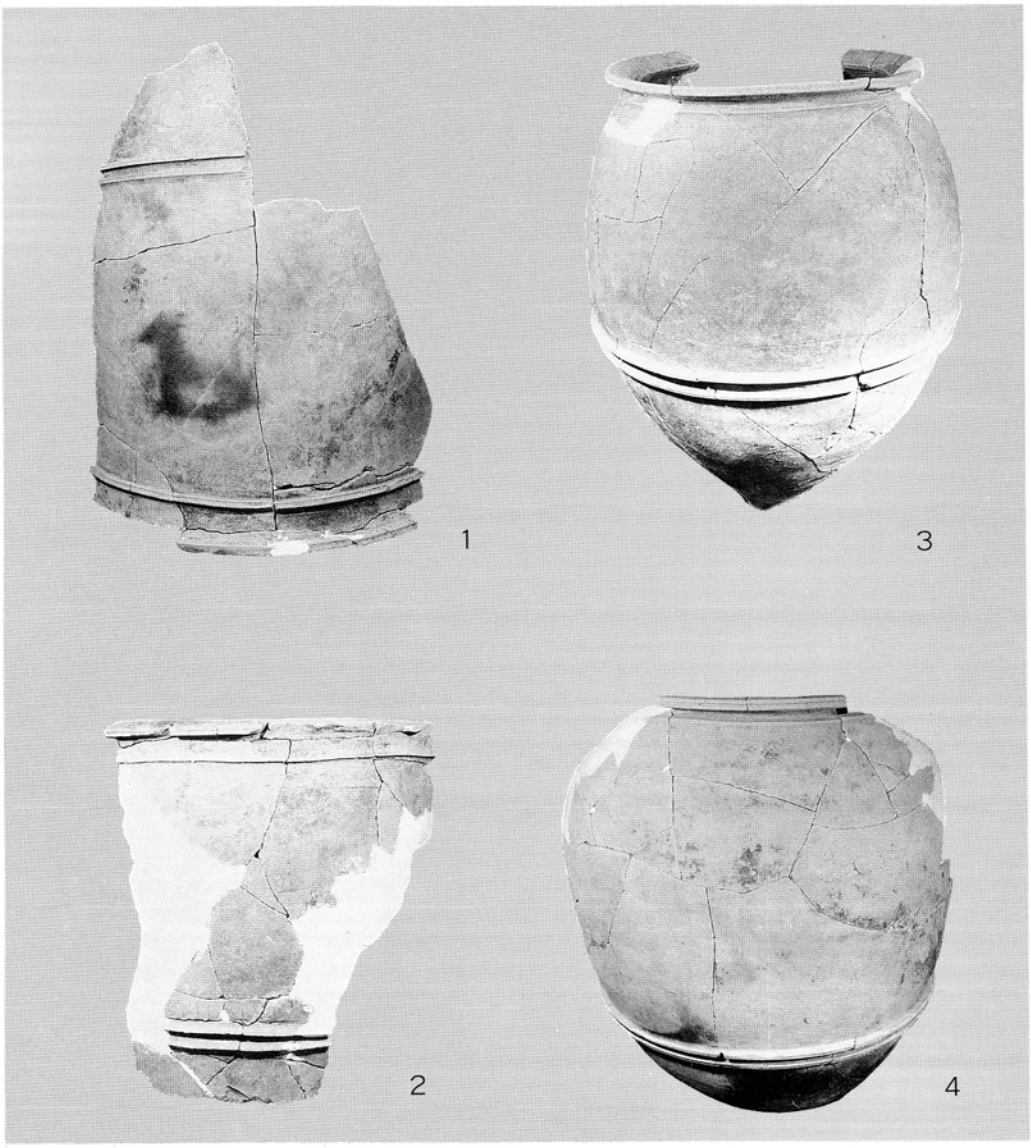
1. ＳＫ30甕棺
2. ＳＫ36甕棺下棺
3. ＳＫ37甕棺（単棺）

ＳＫ30･36･37甕棺



1. ＳＫ40甕棺上棺
2. ＳＫ40甕棺下棺
3. ＳＫ41甕棺

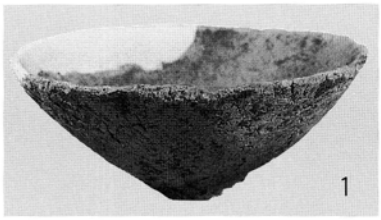
ＳＫ40･41甕棺

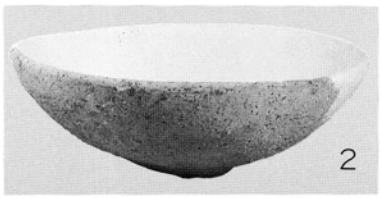


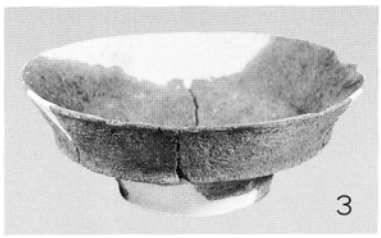
ＳＫ42･43甕棺

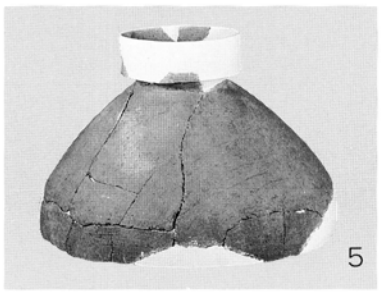
1.　ＳＫ43甕棺上棺
2.　ＳＫ43甕棺下棺
3.　ＳＫ42甕棺
4.　ＳＫ42甕棺

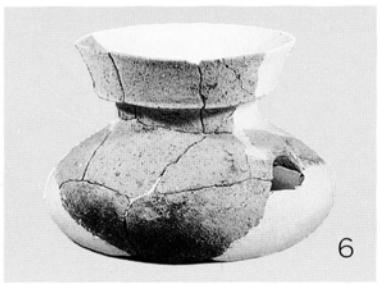
第１号古墳出土土器ほか（７－ＳＤ04、12－ＳＸ04、他は第１号古墳）

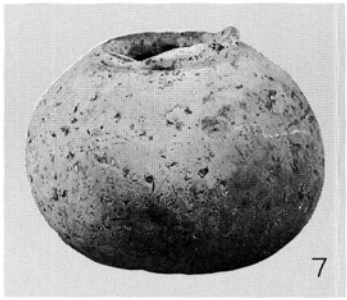


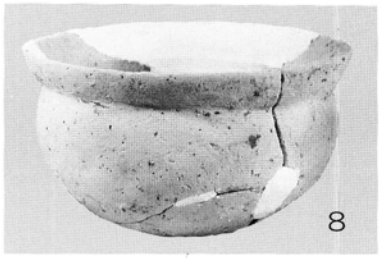


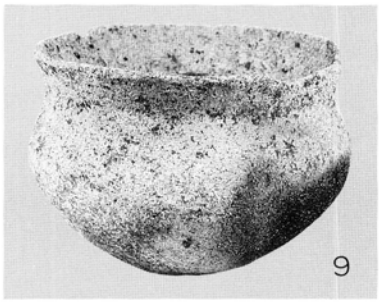


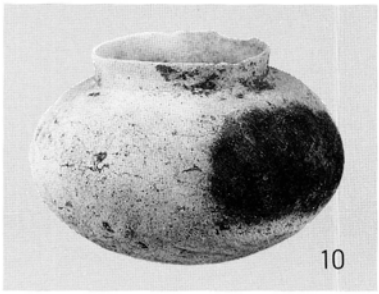


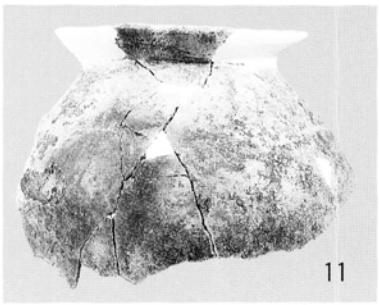


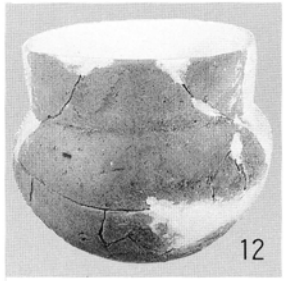




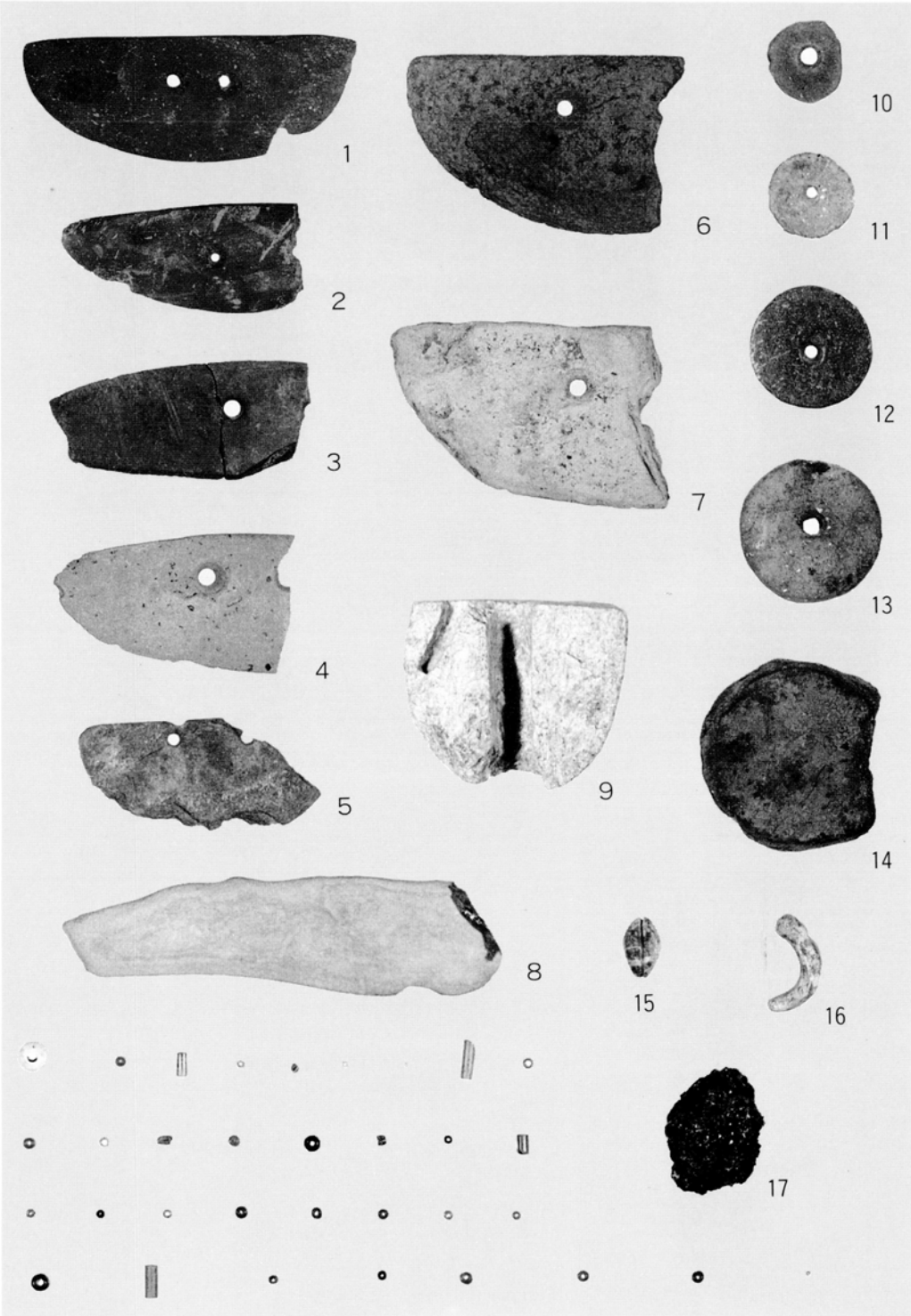








第１号古墳出土土器



第１号古墳出土石器・土製品・玉類（１～12･14･15（第１号古墳）、13－ＳＣ01
16－方形周溝、17－ＳＤ06、他は住居址、柱穴群）

012

013

022

030

井戸址出土土器 I

035

037

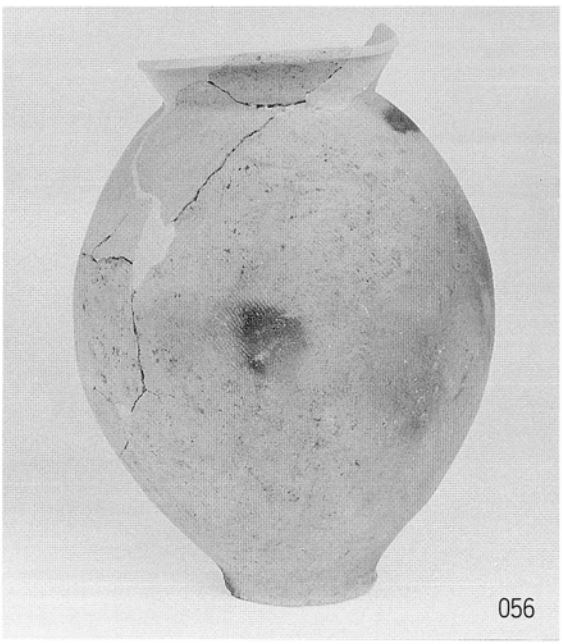
038

040

039

041

井戸址出土土器II



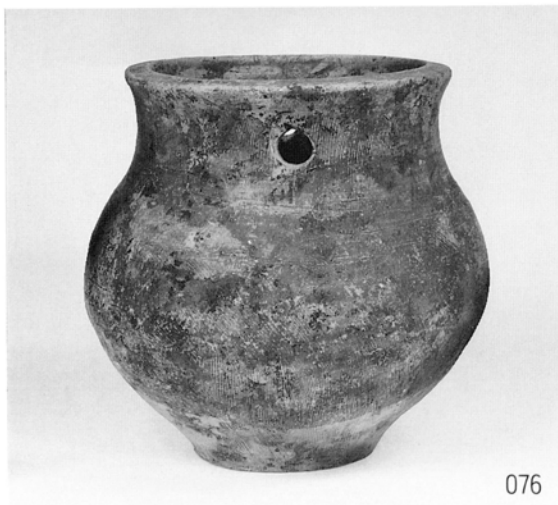
井戸址出土土器Ⅲ

071

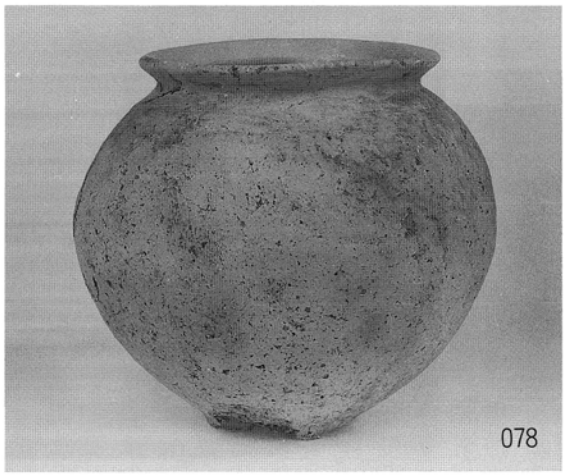
072

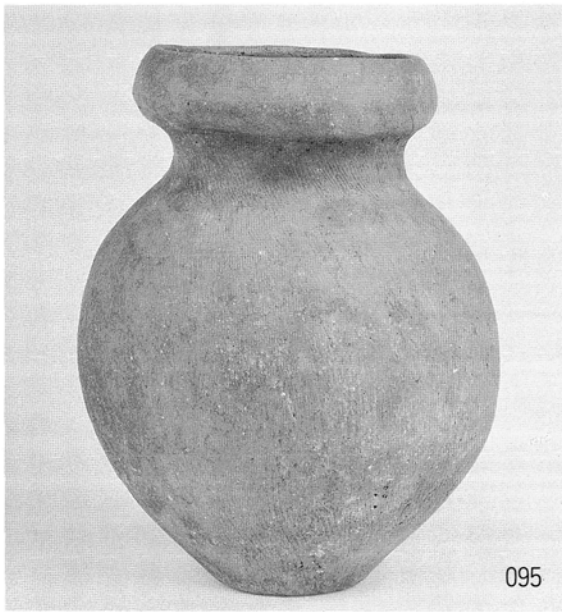
073

075


076

077



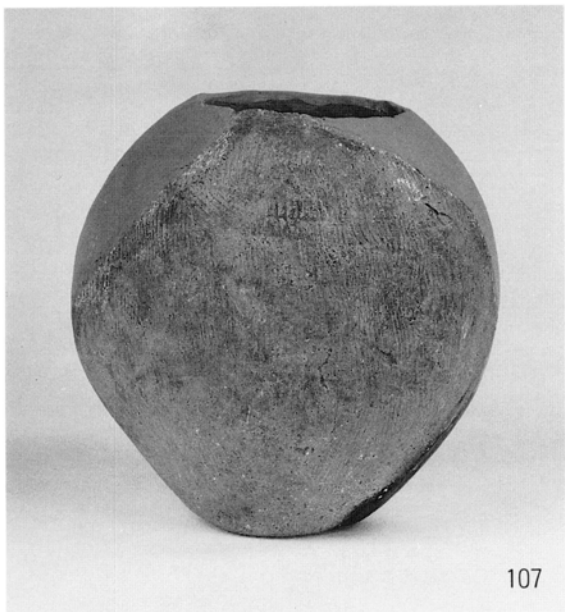


井戸址出土土器Ⅴ

102

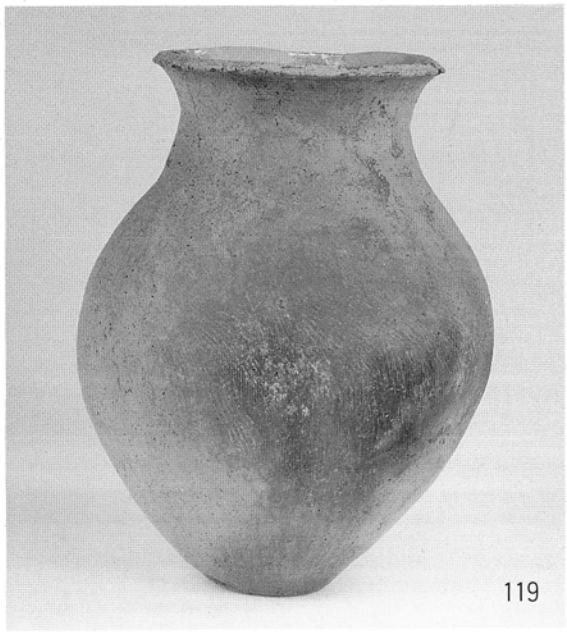
104

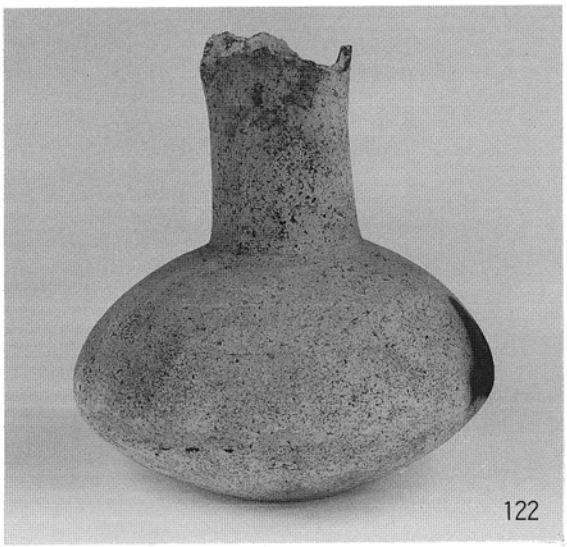
105


107

114

井戸址出土土器Ⅵ

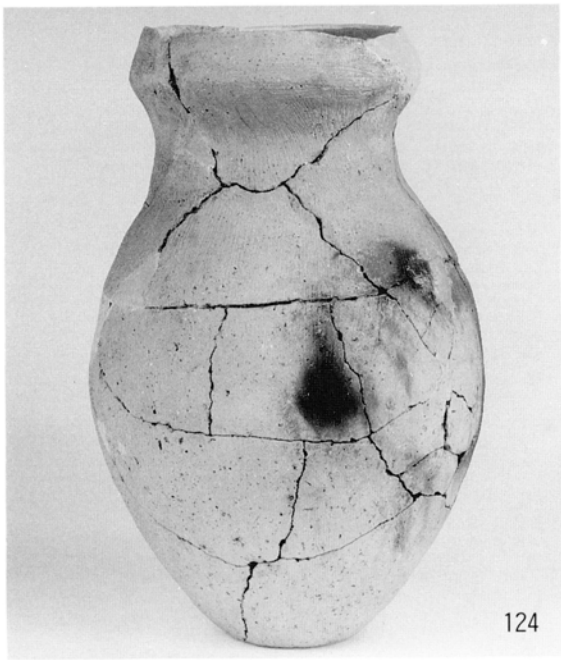


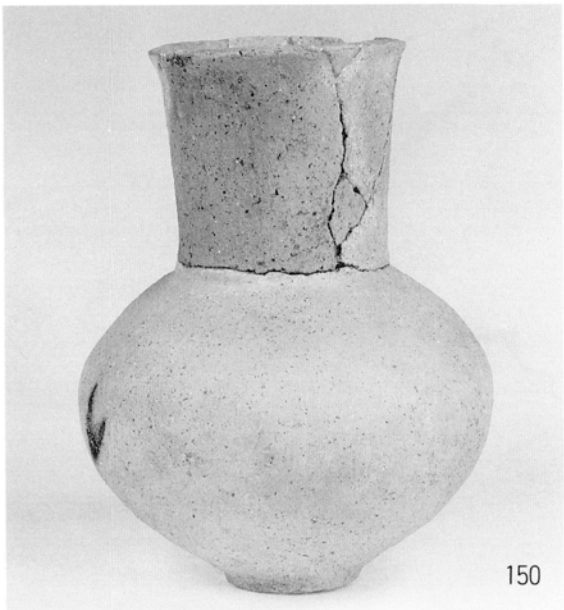


井戸址出土土器Ⅶ

144

143


124

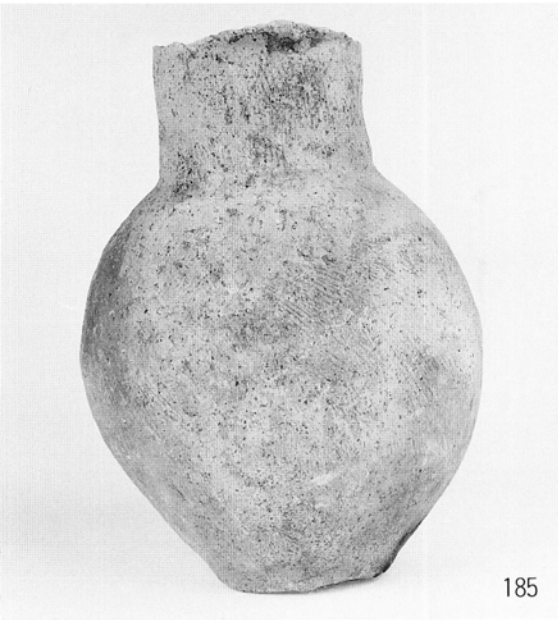

150

152

151

160

170

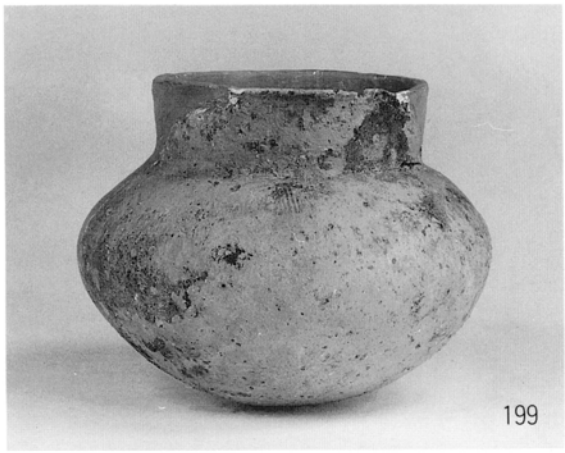

185

186

190

188

井戸址出土土器Ⅸ


199

200

205

206

225

213

井戸址出土土器X

232

235

236

237

250

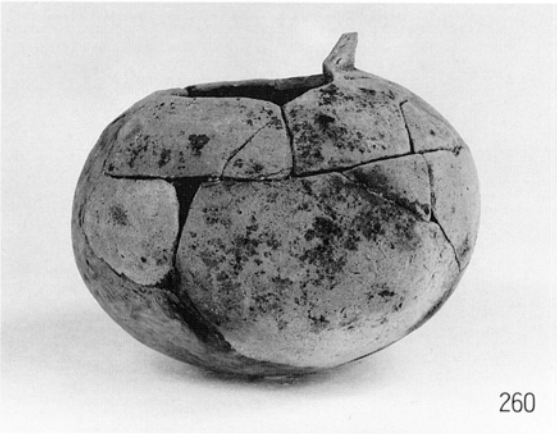
244

252

254

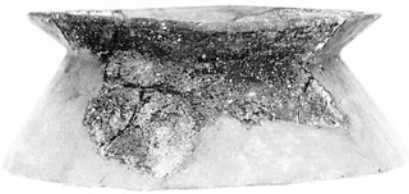
255

256



260

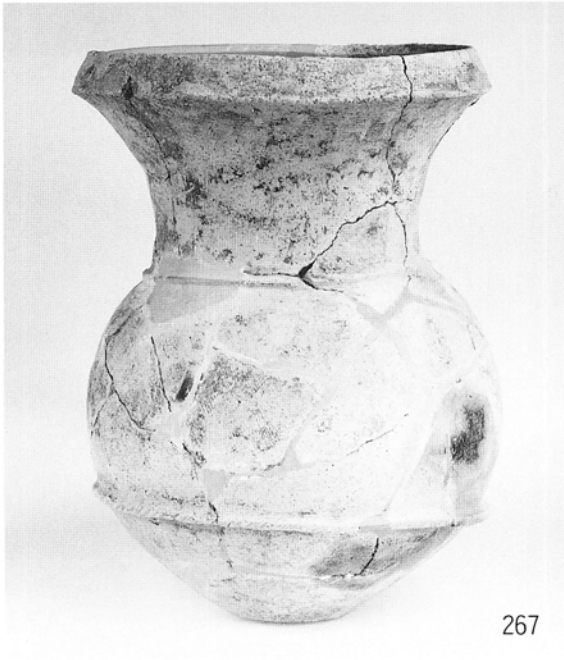
265



261

266

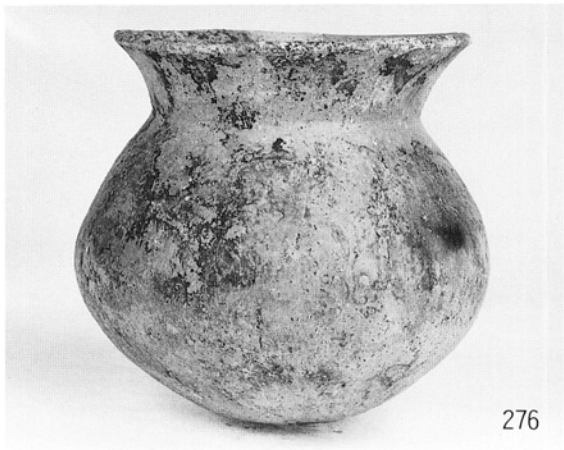
井戸址出土土器XII


267

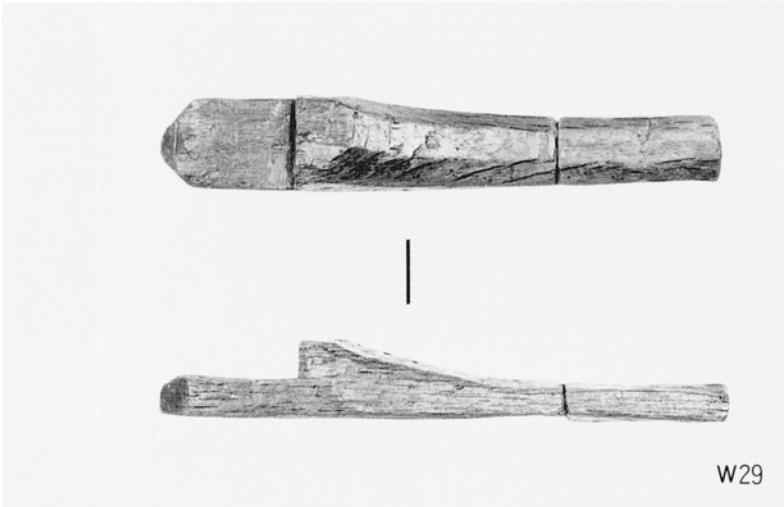
271

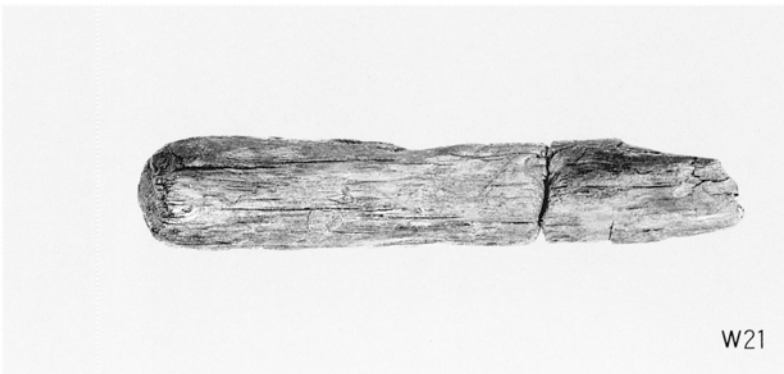
268

275

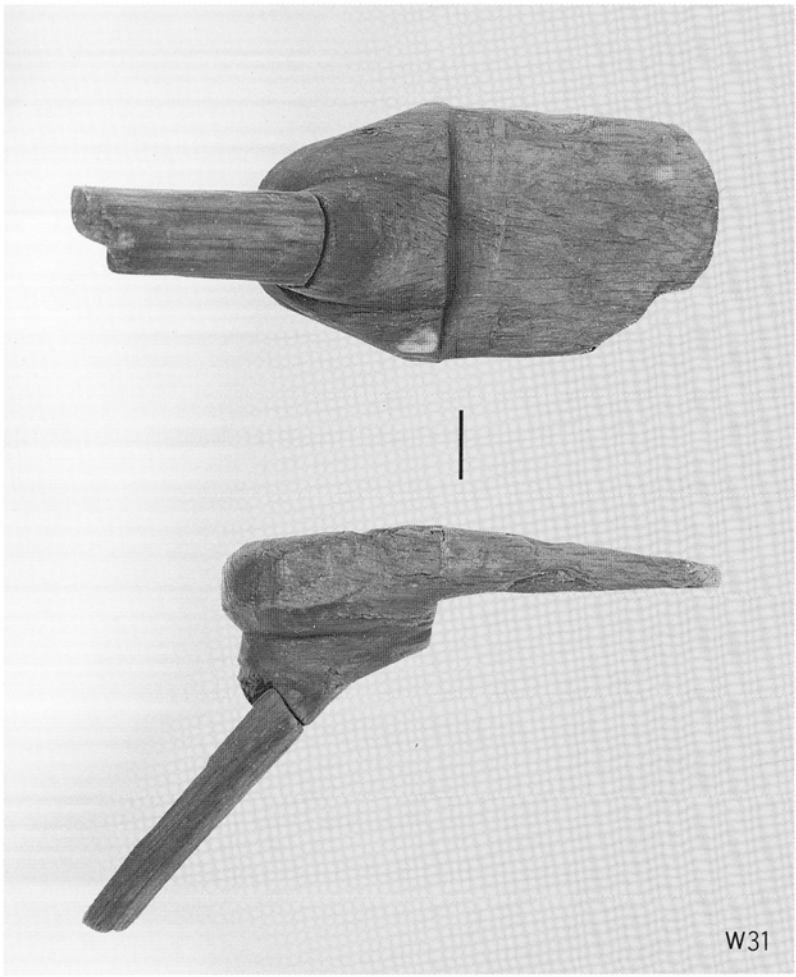

276

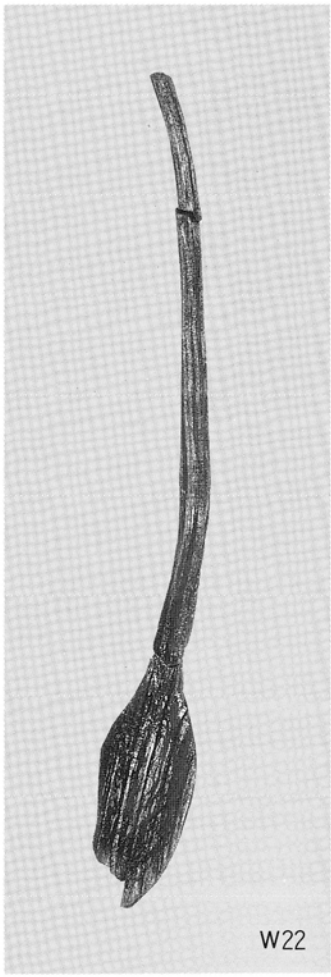
279





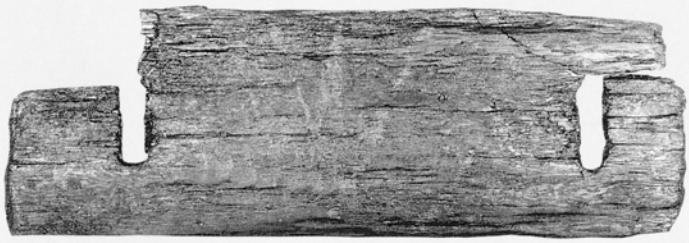
井戸址出土木器 I



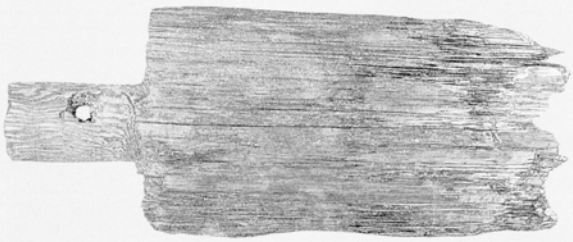


井戸址出土木器II

W62



W55



W57

W6

SE04出土土器013に巻きついていた細縄

井戸址出土木器III

福 岡 市 博 多 区

比　恵　遺　跡

—第６次調査・遺構編—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集

１９８６年３月３１日

発 行　　福 岡 市 教 育 委 員 会
印 刷　　株式会社西日本新聞印刷